

CLANNAD～終わりになき坂道～

琥珀兔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

願いの叶うこの街は少年にとっては苦痛だった。

普段からとある事情で遅刻常習犯、過去に賞は無くとも罰は少々受けてきた少年は校内では有名な『不良トリオ』として知られていた。

くだらなくも充実した日常を愛する少年『榊原幸希（さかきばらこうき）』は、叶わぬ恋慕をその胸に懐いている。

同じクラスの委員長『藤林椋』の双子の姉『藤林杏』

彼女に思いを寄せる少年は、それが叶わぬ恋だということを知っている。

少年と杏の共通の友達である『岡崎朋也』に恋をしている杏は、少年の思いになど気がついていない。

信頼できる友人と、それに恋している少女への想いに挟まれる少年。

彼は、その想いを成就させることが出来るのか。

それとも、他の女性に安らぎを求めるのか。

当たり前にありふれた出来事と、たまに起きる不思議な出来事を体験しながら彼はどんな選択をするのだろうか。

目次

第一回：やがて失われる輝き | 1

第二回：突然降りかかるモノ | 27

第三回：一方通行な想い | 52

第四回：妥協できない想いと打球の行方 | 78

第五回：風の少女 | 105

第六回：桜並木の少女 | 128

第七回：冷たい空の下の小さな温室 | 153

第八回：片思いの味 | 179

第九回：図書室ラプソディー | 209

第十回：本当に欲しいもの | 235

第十一回：卑怯者でいこう | 259

第十二回：悪戯の結果 | 286

第十三回：三人の想い | 315

第十四回：浮彫 | 348

第十五回：定まり、変わる朝 | 375

第十六回：臆病な少女 | 402

第十七回：初めての…… | 428

第十八回：こどものじかん | 455

第十九回：露見と告解 | 478

第二十回：君が好きだから | 502

第二十一回：停学明けの午睡 | 525

第一回：やがて失われる輝き

この街に住んで十数年。

楽しいことや嬉しいことなんてのは掃いて捨てる程転がっているが、同じぐらい辛いことや悲しいことも溢れている。

世の中っていうのはそう言った幸福と不幸のさじ加減まで平等なのかと聞かれたら、俺は間違いなく「そんな事はない」と言い切れるだろう。

一方的な不幸ってのはやっぱり存在していて、それは唐突に降り注ぐ雨のように心に打ち付けてくるんだ。

——ならば幸福とは？

問われたところで模範解答なんてもんは無くて、俺には答えることは出来ない。

広大な世界に人という種は際限なく増えては減っていくのを繰り返しているのだ。一人一人の幸福の定義なんてみんな違って、だからこそ他人同士は寄り添いあうんだらう。

人は一人で生きていく事は確かに出来るだろう。

でも、それはただ生きていくだけに過ぎない。

横になっていた炬燵から、蝸牛からナメクジへと退化するようにもぞもぞと収まっていた体を這いずり出す。怠惰な姿と思えばそうだろう間違いない。

「ヒイヒイヒイ……！」

俺を目覚めさせた不快な鳴き声がまたも鳴り響いてきた。

どうやらこの発生源は廊下かららしい。他にもドタドタと大人数の乱暴な足音が床を踏み鳴らしていたりする。

いい加減不愉快だから外に出て注意でもすることにするか。

小さなワンルームの部屋から出て廊下での騒ぎに目を向ける。

「なーにやってんだよお前ら……？」

見ればウチの高校のラグビー部が数人で一人の男をもみくちやにしていた。

誤解があると困るので詳しく説明しよう。ラグビー部の奴らはユニフォームを来ていない男をボールに見立てて、スクラムしたり後方にパスをしたりしていた。一人一人をこんなにホイホイ投げる事が出来るこいつらは、きつと全国まで行つていい試合をしてくるに違いない。将来有望である。

しみじみと公開処刑のような玉遊びを眺めていたら、ボールと目が合ってしまった。

「さ、榊原あ！ 見てないで助けてくれよ！」

「え？ お前、これ一緒に遊んでるだけじゃないのか？」

「んなわけないでしょ！ どう見てもリンチされてるじゃん僕！」

なんとボール役の奴は口が聞けたのだ。驚きである。

きつと俺を眠りから開放した不屈き者はこいつだろう。そうに決まっている。

「お前のせいで折角いい心地で寝てたのに、目が覚めちまったじゃないか。罰としてそのままボールになつてろバカ原」

「アンタ血も涙もないツスねえ！」

ボール改めバカ原こと『春原陽平』は涙を流しながら悲愴な表情で俺に恨み言を言ってきた。失礼な、俺だって怪我をすれば血を流すし、玉ねぎの微塵切りをすれば涙も流す。人を鋼鉄超人みたいに言いやがって。

俺の介入によつて一時止まっていたラグビー部の遊びは、背を向けて部屋に戻つた事で再開された。

情けない断末魔が再び廊下に響き渡つたが、心配はないだろう。あれで春原つて男はかなり頑丈に出来てるし、ここの寮母である美佐枝さんが騒音に耐えかねて殴り込んでくるだろう。

部屋——春原の部屋に戻つた俺は、炬燵から急に出た事で冷えた体を温め直すべくまた炬燵に戻つてぬくぬくだからける事にした。

廊下では相変わらず春原が引き攣つた声をリズムよく上げている。

「岡崎いー！ 見てないで助けてくれよ！ 榊原は酷い奴だ！」

「面倒なんで断わる」

「ううえー!?!」

炬燵の中に深く身を沈めて、肩まで毛布を被ってテーブルに突っ伏していたら、新たな来客があつたのだらう。

再度 SOS を要請した春原の救助はやっぱりなされることはなかった。分かっていることだが、つくづく不幸がよく似合う男だな。

ぬるま湯のような空間で怠けていると、またも廊下で「トライ!!」って決め台詞が聞こえた途端女性の怒号が飛んできた。

「あんた達！ いい加減にしなさいーい！」

この声は寮母の美佐枝さんだな。相変わらず快活なお方だ。

現場に居ないから分からないけど、美佐枝さんの声が聞こえた瞬間に男達の逃げるような足音が聞こえてきたので、きつと蜘蛛の子を散らすように逃げていったのだらう。

騒がしいバカ騒ぎは嫌いじゃないし、むしろ積極的に場を荒らすのが得意なんだが今は寝起きって事もあって正直動くだけでも面倒だ。

この季節、涼しいかかったり暖かかったりとわけの分からん気候だから貝のように殻に籠るのが一番だ。

「嗚呼、なんとも心地よいだらけ日和なんだ」

「勝手に人ん家でくつろがないでくれますかねえ！」

「よお榊原、相変わらず緩みきった顔してんな」

至福の時に浸っていたら部屋扉が開いて、家主……というのは精神的に忌避したい春原と、その共通の友人である岡崎が入ってきた。

常時緩みきっている俺にとつては岡崎の言葉は褒め言葉に近い。よつてこれは罵倒ではなく、緩んだ表情を崩さずに二人を迎え入れる。

「俺が引き締まった顔をした時……それは世界の終わりが来た時だ」

「今ここで春原の世界を終わらせたならその顔見れるか？」

「ちよつと！ 勝手に人の命を差し出すような真似しないでよ！」

「まあ中に入れよ、小さくて汚い場所だけど……ま、ゆつくりして行つてくれや」

「僕の部屋だよ！」

いつものようにくだらない会話を繰り広げる。

俺達三人はとある事をきつかけに知り合うようになった友人である。

それが何か、と言えば色々と紆余曲折あつた末のこの関係なので、説明するには少々時間がかかってしまう。

俺達はこの街、あの学校では爪弾きにされている厄介者だ。だからこうやって似た者

同士でよりあって弱さを補っている……のかもしれない。

小さな炬燵に男が三人寄り合うとうこの状況は、なんともおぞましい事か。

「おい春原、狭いからそのボトム・リムをパージしてくれない？」

「僕の体はVな機動戦士じゃないよ！」

「初めましてだな、ガ○ダム!!」

横になっていた春原が飛び起きで反応する。流石は春原だ、多少の無茶なボケにも突っ込んでくれる。そして岡崎。お前のそれはちよつとキャラと違うだろ。

「それにしても、今日はまた派手にやられたなバカ原。今回は何が原因だ？」

「僕が部屋でボンバヘツを聴いてたら、いきなり怒鳴り込んできたんだよ。くそーラグビー部め」

「文句言うなら相手に聞こえるように言えよ。……クソー！ ラグビー部め!!」

「ちよつとー!!」

『今の言った奴誰だー!!?』

ドンツ、と壁を叩いた大きな音がしてきた。

口の横に手を当ててメガホン替わりに叫んだ岡崎は、春原の扱いにかけてこいつ以上の逸材は居ないかもしれない。

「ヒィヒィヒィ！」

ラグビー部の怒声に怯えて体を震わせている春原が、てに持っていたポテ○ングを岡崎に突きつける。

「お願いだから余計な事しないでくれる!？」

「なんだよお前、ビビってんのか?」

芋菓子突きつけた所で脅しの材料にはなりはしない。

岡崎は怯むことなく怯える春原をいじくり倒す。

この二人の漫才は見てて面白い。ぞんざいな物言いをしながらも優しさが潜んでいるのを俺は知っているから、こう、一人で居る時の陰鬱な気持ちりが吹き飛んでいい心地になるんだ。

炬燵に潜りながら二人のやり取りを眺める。

——この街には、なんでもないものが沢山転がっている。

夜も深くなりいつまでも春原の住む学生寮に居るのも嫌になったので、岡崎と二人で外に出た。

夜風は冷たく吹き荒び道行く人達の肌を刺さる。

都会から見たら田舎なこの街では空に満天の星が輝いて、こんな夜も悪くはないな、

と思わせる時が多々あったりする。

「それじゃ俺はこっちだから」

いつもの分かれ道に差し掛かった時、岡崎は自分の家がある方向を指差してそう言った。

その表情は少し翳りが指していて、家に帰るのが嫌なのだろうという思いがふと脳裏によぎった。

「あいよ、じゃあまた明日の昼頃に学校で」

「おう、じゃあな」

複雑な家庭環境にしていることを知ってはいるが、俺が岡崎に出来ることなんて本当にごく僅かで頼りない。

だからせめて友人として何でもないように、俺は気にしてないような素振りで小さくなっていく背中を見送る。

誰だつて人には知られたくない、指摘されたくない事実や過去があるんだ。それが後ろめたいものであればより一層傷は深い。

岡崎を見送った俺は、帰りたいくもない自分の家に向かって足を進める。

その足取りは重く、足輪で拘束でもされているようだ。

夜遅くまで春原の部屋に入り浸るのは、家に帰りたくないからだ。それは俺も岡崎と

同じ理由だ。ただし違うのは、俺が帰らないとあの人は死んでしまうから。

一人で生きることが出来ないあの人を、俺は死ぬまで面倒を見なくてはいけない。それは俺がこの世に生まれてきた瞬間に植えつけられた呪いのような物で、存在理由と言ってもいい代物だ。

しばらく歩くと二階建ての古アパートに着いた。

築何十年なのかも分からないボロいアパートが俺の住む家。ここに家族が一人一緒に住んでいる。

「ただいま帰りました……」

錆び付いた扉を金属が軋む音を立てながらに開いて中に入る。

これから数時間。

俺にとって何よりも辛い時間が始まる——。

「結局さあ、榊原ってなんでいつも傷だらけなのさ？」

「男は敷居を跨げば七人の敵あり……って言うだろ。俺にはその三倍はいるんだよ」

「マジで!？」

学校内での昼下がりに、さつき起きた春原に質問された俺は適当なことを言つて煙に巻いた。

岡崎はさつき飯を食いにどっかへ出かけてしまった。

昼休みだというのに俺は春原の相手をなんでしているのか。

馬鹿らしく思つて椅子に座つたまま窓枠に背中を預け、開けっ放しの窓から上体を出してみる。自然と上を向く形になって、太陽の日差しが眼球に突き刺さつた。が、ここでへこたれる俺ではない。

眩しくて目を開けてらんないので瞼を閉じて目を細くし難を逃れる。

ふと、誰かの近づいてくる足跡が聞こえてくる。

「あ、あの榊原くん」

「んあ……?」

誰だろう。この学校で俺に話しかけてくる奴なんてのは滅多に居ない。

俺こと『榊原幸希』と、岡崎と春原の三人合わせて『不良トリオ』として避けられていたのに。

体を起こして元の体勢に戻ると視界に入ったのは一人の少女だった。なる程、こいつだつたら話しかけてくるだろうな。

「どうしたんだ藤林妹? トイレの場所でも分かんないのか?」

「え？ あ、あの……違います……」

「うわー、ここまでナチュラルにセクハラする奴、僕初めて見たよ。ちよつと引くね」

お茶目なジョークに戸惑つて顔を赤くし俯いたこの少女は『藤林椋』と言つて、クラスで委員長なんて面倒な事を引き受けている生贄さんだ。

机に突つ伏したまま春原がこつちを向いてなんか失礼な事を言つてるけど、この際無視する。後でラグビー部員にある事無い事言いふらして制裁してもらおう。

「冗談は置いといて、なんか用でもあんのか？」

「あれ？ 僕のこと無視？ ねえ」

「榊原くん……今日も遅刻です」

「そうだな、それが？」

「ちよつと榊原、聞こえてる……？ もういいよ……」

「私、クラス委員長なので、そういうのは注意したほうがいいのかと思つて」

おどおどしながら歯切れ悪く言つてはいるが、度胸はあるんだな。もしかして姉譲りなのか？

顔を赤くしながらも時折こつちを盗み見て様子を伺つている姿は、クラスの男子にさりげなく人気があるいい証拠になっている。実際、遠巻きに藤林妹の事を見ている奴が今だつて居る。

しかし遅刻……かあ、確かに多いけどしたくてしてるわけじゃあないんだよな。

「そっか、わざわざご苦労様。今後、出来れば遅刻はしないよう前向きに検討するよ」

「あ、あの……ちゃんと学校には来てくださいね？」

「わかったわかった、来るよ」

「それじゃあ、明日遅刻しないか占いで見てみましょう」

どうして占いになる。

藤林妹がポケットから取り出したのは普通の市販で打っているトランプだった。

ただたどしい手つきでトランプをシャッフルしている藤林妹を眺める。と、失敗してトランプを床に落としてしまった。

「あーあ、待ってる今拾って……」

床に散らばったトランプを拾おうと椅子に座ったまま身を屈めて腕を伸ばした。

その時頭上より藤林妹の声が降ってきた。

「榊原くん、明日入院します……」

「おい……」

どういう事だ？

今ので何を占ったんだよ。遅刻をするかしないかの占いじゃなかったのか。それがなんで入院なんて結果を生み出すんだ。

「なんで遅刻じゃなくて入院になるんだよ？」

「明日は登校中に素敵な女性と衝突して、色々あって……入院しちゃうって出てます。榊原君、気をつけてくださいいね」

「そんな物騒なこと言われたのはお前が初めてだよ……」

今までいろんな奴に恨まれて絡まれたり襲われたりしてきたけど、入院するほどの危機に陥ったことは一度もなかった。

もしかしたら……この占いが的中するなんてことは。いやありえないだろう、そんなのはオカルトの領域だ。

現実つてのにはそんな不思議展開なんてものは起きない。幽霊の正体は枯れ尾花だし、UFOはプラズマ発光現象の見間違いだ。夢を見るのは子供の頃に卒業するのだ。

なんてオカルト好きの人達を敵に回すような事を考えていると、床に散らばったトランプを拾い終わった藤林妹が、風邪でも引いているのだろうか顔を赤くしながら口を開いた。

「榊原君……！」

「うおっ、な、なんだ？」

彼女からはおよそらしからぬ大きな音量に驚いて素っ頓狂な返事を返す。

振り絞るようなその声は何かを訴えようとしていて、なんだか必死なようにも聞こえ

た。その証拠に彼女の透き通るような瞳はうつすらと潤んでおり、言わんとしている事の重要性を物語っていた。

「も、もしよかつたら明日……いい、いっしょ……一緒に——！」

「——コラー——!!」

直後。藤林妹の言葉を遮る様にして聞こえてきたのは、空気を切り裂くような凜とした怒声だった。

いったい何が起きたのだろう、と思つて声の聞こえてきた方を見ると、眼前に物凄い勢いで何かが飛来してきた。

「んなっ……!!? あぶなっ!!」

殆ど反射的に顔を横に振つて飛んできた物を回避する。

顔の横を通り過ぎる時耳元で暴風のような風圧と音が聞こえて、思わず俺は背中から冷や汗を流した。

俺はいつの間にか殺し屋に狙われるようになったんだ、と理不尽な暴挙に怒りを覚えて飛んできた方向を睨む。

「あんた、何あたしの妹を虐めてんのよ?」

——そいつは、深緑の合間にある小川の流水のように、煌びやかな長髪をたなびかせていた。

「幸希っ！ 掠があたしの妹だつて知つて泣かすなんて、いい度胸してんじゃない！」
藤林妹と同じ顔をして、いや若干目が強気な正確を表すように釣り上がっているが殆ど同じな顔が、瞳が俺を捉えている。

怒気のある強い足取りで近づいてきた。
感のある強い足取りで近づいてきた。

彼女の名前を……俺は知っている。

「——杏!? なんちゅーモンを投げてくれるんだ！ 危うく頭部と胴体がお別れするところだったじゃないか！」

「自業自得よ。あんたが掠を虐めるからでしょ」

そう言つて妹の横に並び立つて腕を組み仁王立ちする姉。

彼女の名前は『藤林杏』

苗字と言動から分かるように、杏の横で驚いた表情をしている藤林妹の双子の姉である。

「はあ？ なんで俺が藤林妹を虐めなくちやいけないんだよ」

「なんでつて、現に今掠は泣いて——」

「お、お姉ちゃん！ 違ふよ、誤解だよ。榊原君は何もしてないよ。それに、な、泣いてないよっ」

泣いている、と言おうとした杏を遮るようにして藤林妹が身を乗り出してきた。目にはやはりまだ涙の後が残っているが、彼女が違うと言っているのだ。信じてもらいたい。

割り込むように入ってきた藤林妹を見て杏がきよとんとした表情をする。誤解が解けたのだろうか。

状況を理解するために俺と藤林妹の顔を交互に見て、一時考えるように首を傾げた。

「あれ？ もしかして、勘違い……だつたりする？」

「ああ勘違いだ。短絡的すぎるぞお前」

「あ、あははー、ちよつと早とちりしちゃたみたい。ごめんねー幸希」

「早とちりで殺人未遂されちゃたまつたもんじゃねえよ……」

乾いた笑い声を上げながら頭を掻く杏だが、全然誤魔化せてない。むしろ俺じゃなかったら悪化してるところだ。

でも、自然とそのわざとらしい笑顔に目が留まってしまふ。

紫陽花のような色の長髪に、すらりとしたラインの顔と、控えめながらも可愛らしい口元。スツとした鼻のラインと、その両端に添えられた快活そうな双眸。

俺は——この少女に一年前から恋をしている。

出会いこそ平凡なものだったが、今でも瞳を閉じれば鮮明にその情景を思い起こすこ

とが出来る。

同じクラスだった杏は、今の妹と同じようによく話しかけてきた。

当時、春原とは知り合いだったもののまだ岡崎とは出会ってなかった頃、俺は今より少し荒れていた。尖ったナイフのように近づくもの皆傷つけていた時期だ。思い出すだけで恥ずかしいが、それも杏のお陰で今ではいい思い出となっている。

クラスでも一際浮いた存在だった俺はよく人目のつかない屋上でサボっていた。

空を見上げて流れる雲を眺めながら、痛む体を労わっていた時に杏は来たのだ。思えば、あれがなかったら俺は今も屋上で一人腐っているか、学校を辞めて働いていたかもしれない。

頭上に立った杏は俺を見下ろして、ムツと山のような形の口を開いてこう言ったんだ。

『ここは立ち入り禁止なんだから、さっさと出なさい!』

って言うって有無も言わず俺を引きずって行ったんだよな。

懐かしくも恥ずかしい思い出だ。

それ以降、何でか俺を気にかけてよく話すようになっていた。

嫌々ながらも話しているうちに、岡崎と知り合って心に余裕が出来た頃、気がつけば俺はあいつの事を好きになっていた。

目の前でふんぞり返っている杏は、ジッと眺めている俺を見て訝しんだ表情を浮かべる。

「なによ、誤ったんだからもう良いでしょ。大体、掠と何してたのよ?」

「何って……トランプ占い?」

藤林妹の方を見てそう答えた。それ以外に言いようがなかった。

俺の答えを聞くと杏は自体を把握したらしく、愉快そうに笑い出して俺の肩をバンバンと叩きだした。痛えよ、でも許そう。

「で? 占いの結果はどうだったの?」

「藤林妹によれば、明日俺は素敵な女性と衝突して入院するらしい」

「あつははは! なにそれ、凄いやああなたにお似合いね」

失礼な。入院がお似合いなんてのは病弱キャラだけだろ。俺のどこが病弱に見えるんだ……あ、でも毎回傷だらけだからそう思われても仕方ないか。

馬鹿笑いする杏をおろおろとしながら宥めようと、藤林妹は差し出そうとした両の手を中空で右に左に行き来させてはどうしようかと悩んでいる仕草をしている。

「お、お姉ちゃんそんなこと言ったら駄目だよお。榊原君が可哀想だよ……それに占いだから、まだ当たるとは決まってるじゃない」

「何言ってるのよ掠、あなたの占いは殆ど当たるとはじゃない。ま、もし入院したら掠をお見

舞いに行かせてあげるから、楽しみに待ってなさいな」

「そこは杏じゃないのかよ。勝手に藤林妹の予定を決めんなよ、可哀想だろ俺なんかの見舞なんて。まだそうだとはい決まってるじゃないけどな」

他人事のように言う杏に文句を言っつて、あわよくば本当に入院した時の可能性を臭わしてみると、何故か藤林妹の表情が鬩りを見せた。

まさか、こんな俺でも人に拒否されたことに傷ついてしまったのだろうか。いや、都合のいい思い込みもい所だな。そんな事はありえない。クラス一の嫌われ者の俺にそんな事を思う権利なんてのはありはしないのだから。

卑屈な俺の思考なんて知らない杏は、浮かない顔をする椋を見てまたも少し眉が釣り上がる。

「ねえ幸希、あんた何であたしの事は『杏』って呼ぶのに、椋の事は『藤林妹』なんてまどろっこしい他人行儀な呼び方すんの？」

「他人行儀って、藤林妹とは知り合ってまだ日が浅いし、それに俺は滅多に人を名前前で呼び捨てなんかしないんだ」

それだから杏の事は呼び捨てにするんだけどな。でもこの女、俺の好意を一切気がついてないから……。

逆に、藤林妹は何か気付いたのかハツとして俺を見る。

もしかしたら分かったのかも知れない。でも、当の本人はそんなことには気がつかずに絶えず俺を咎めるような目つきで見ている。

「あなたの持論なんかあつて無いようなもんでしょ？ いいから、これからはちゃんと

『掠』つて呼びなさい！ もう『藤林妹』つて呼び方禁止！」

「そ、そんな無理やり……榊原君……むり、しなくて良いからね……？」

「いや、言つて無理やりだけど、良いのか？ 俺が呼び捨てなんかして」

問題はそれである。

惚れた女の言うことだからと何でも快諾するほど俺は簡単な人間ではない。ちゃんと相手方の同意が無いかぎりその命令を受けるのはありえない。

見れば藤林妹は頬を染めながらも、なんとも感情の読めない複雑な表情をしている。

これは、葛藤と言つていいのだろうか。

「わ、私は……さか、榊原君が、良いなら……そう、呼んで欲しい……な」

掠れるような声。

この言葉を言うのにどれだけの勇気を消耗したんだろう。既に憔悴したような顔をして

手したただでさえあるかどうか分からない俺への高感度が暴落してしまうかもしれない。

ない。

だから――

「……分かった。それじゃあ今日から掠つて呼ばせてもらうよ」

「……………はいっ！」

嬉しそうに、紫陽花の花が咲いたような笑顔を浮かべる。

姉と同じ顔をしているせいか、不覚にもその表情に心を乱された。

杏だったら俺には見せてはくれない表情。

俺ではない人に見せる表情……。

その事実を思い出して、俺の心は暗闇につかまれたような寒気を覚えた。

俺の心情など分からない能天気な女は、それまた何も考えずに聞きたくも無い言葉を

訊ねてきた。

「そういうえば、春原はここで馬鹿みたいに寝てるけど……その、朋也はどうしたの？

つもあんたら一緒にいるでしょ？」

そわそわと、本人はさりげなく言ってるつもりなんだろうけどわざとらしく聞いてき

た。

嗚呼、これだからこの世界は不幸なんだ。不平等に降り注いで俺を闇に突き落として

くれる。

もう杏がどんな顔をしているかなんて、見なくても分かっている。どうせ恋する乙女のように、とんでもなく可愛らしい表情をしているんだろう。俺には一切見せたことの無い顔を。

いつ聞いても慣れない。

まるで地面が一瞬で消失したみたいに、足元から脳天にかけて浮遊感と落下する時特有の内臓がせり上がる気持ち悪さがこみ上げてくる。

それから俺はどんな返答をしたのか覚えてない。

ただ、後から俺に無視されてふてくされて寝てた春原曰く、死人のような顔をしていたらしい。

「委員長が心配そうにしてたぞ」とは春原談。でもきつと、杏には気分が悪くなったとしか思われてないんだろう。

物語の主人公になってみたい。

何の不自由の無い頭の悪そうなラブコメの主人公になりたい。

あいつらは特に何をしなくてもヒロインに思いを寄せられて、しかもそれに気がつかない。そんな残酷な仕打ちをしても、決してヒロインは主人公のことを嫌わず積極的に

アプローチをするんだ。物語が最終話になっても決着のつかないハーレム展開に、彼女達はどんな思いを抱くのだろうか。

叶う事の無い絶望なのか、それとも作者のかけた呪縛に囚われたまま主人公を思い続けるのだろうか。

俺が主人公なら全員をもれなく余すことなく恋人にするのに。

でも、それは物語だから許される事。

現実には時間があつて、年を重ねれば世間体つてもんがのしかかってくる。結婚出来るのは絶対に一人だけ。その相手にすら相手にされなかつたら、後は孤独に、孤高だと言ひ張つて強がるしかない。

なんて不平。

ジクジクと痛む体に鞭打ちながら歩く道がやけに長い。

気分転換に向かつた中庭にはいつになつたら到着するんだろう。

情けない奴だ。男相手なら喧嘩で負けることなんて無いんだろうけど、女にはそんな力関係は通用しない。強い男が好き、抱いてつ、なんて言つて惚れてくれるなら安いんだ。

ありえない夢想をしながら、一步一步着実に歩を進めていくと、ようやく目的の中庭に到着した。

校舎を挟んだ間にあるこの空間は、両サイドの圧迫がありながらも開けた空間を演出しており、杏に屋上を禁止された俺のお気に入りのスポットになっている。

特に、中央付近にある大木を中心に囲うような円形のベンチが気に入っている。あそこは頭上の木が太陽を遮ってちょうどいい感じに日陰を作ってくれるので、眩しさに煩わされることなく横になれる。

早速寝転がろうとベンチに近づくと、二つの人影を見つけた。

それは仲良さそうに寄り添っており、俺から見たら恋人同士にも見えた。くそ、滅べよ。

どうせ一睨みすれば逃げていくだろう、と思つてそっち側に回つて相手を確認しようとしたら、

「それじゃあ、まずは演劇部の部室にでも行つてみるよ」

なんて聞き覚えのある男の声が聞こえた。

その男は――

「岡崎……?」

「あれっ、こんな所でどうしたんだ榊原?」

間抜けながらもちよつときつめな整った顔立ちをしていて、その横には、

「お知り合いですか、岡崎さん?」

なんか小動物っぽい少女と一緒に座っていた。

この時、俺はある考えを思いつく。

それは、この少女——古川渚と岡崎をくつつけてしまおうという。
杏の気持ちを踏みにじる悪魔のような悪手だった。

第二回：突然降りかかるモノ

この街では一番の進学校に在籍する俺こと榊原幸希は、同じ学年の藤林杏に叶わぬ恋をしている。

快活で男勝りな彼女は竹を割ったような性格で、俺が気兼ねなく会話出来る数少ない友人だ。

彼女の言動に俺の感情は左右されて、天にも登れば地の底に落ちる時もある。

そんな彼女を相手に、なぜ「叶わぬ」なんて表現をするのかと言えば、それは彼女が俺ではなく他の人物に淡い想いを抱いているからである。

その憎き羨ましい相手は残酷にも俺の友人——岡崎朋也だった。

どういうわけだか杏は岡崎の事が好きらしい。直接聞いたわけではないから確証なんてはないが、八割がた間違っではないだろう。

だって、俺は今まで杏の事をずっと見てきたから、あいつが恋する乙女な表情を岡崎の前でしているのは明らかだ。二百円賭けてもいい。

岡崎と春原を交えた四人で話しているときにも、僅かにその表情が変わるのを俺は今まで見逃したことはなかった。その度、俺は言いようのない感情が湧き上がるのを感じ

ていた。

だからといって岡崎が嫌いなわけではない。むしろ数少ない信頼の置ける友人だと俺は思っている。

なぜなら、俺とあいつ……それとついでに春原は似た者同士だから。

どういうわけか、恨むって気持ちにはなれないんだ。だからこそ、俺は自分を責めることでその嫉妬をやり過ごしている。

でも、そんな先の見えないトンネルのような道程に一筋の光明が差し込んだ。

「紹介する、こいつは古河渚って俺達と同じ三年だ。でもダブってるから年上」

「お、岡崎さん……は、初めまして古河渚です」

そう、この岡崎に紹介された少女『古河渚』と岡崎をくつつけてしまえば良いんだ。

そしたら杏が恋慕してる相手を奪われ失意している時に、俺が慰めてやれば良いんだ。……ちよつとシミュレーションしてみよう。

『悪いな杏。俺、渚と付き合ってるから』

『ごめんなさい。朋也くんは私とえっちなこともしちゃってます』

『そ、そんな……朋也……ううう……』

泣き崩れる杏。

岡崎と古河が二人寄り添って遠くへと去っていく。やがて、フェードアウト。

そして颯爽登場の俺。エフェクトとかバンバンかけてキラキラな感じになってる。

『もう泣くなよ杏……いや、違うか。もっと泣け、泣いて泣いて、涙が枯れたら……その時は俺がずっと隣に居てやるよ』

『幸希……好きっ！ 抱いて!!』

ガバチョツと杏が涙しながら俺に抱きついてくる。それを俺が華麗に抱きとめる。

こうして俺は杏と一緒に、この長い長い坂道を歩き始めた。

——完。

……いける！

やばいぞこれ、すごいぞこれ。

一発逆転の大どんでん返した。これまでの苦悩が一瞬で吹き飛ぶような最高の手段だ。

こんなチャンスをみすみす逃すような事はしちやならない。そうだ、岡崎にはこういう小動物がお似合いだ。そうに決まってる。

「俺は榊原幸希だ。岡崎と同じクラスだ、よろしく」

「はい、榊原さんですね、よろしくお願いします」

無難な挨拶をすると古河はニコツと小さく笑った。

「儂ながらも可愛らしいその笑顔は、見る人を暖かい気持ちにさせるような類のものだった。」

しかし、

「ダブってるって、なんか悪さでもしたのか？ 凄いな、人は見掛けによらないとはこの事か」

関心したようにそう言うと、古河は焦ったように手をブンブンと振っていた。

「ち、違います！ 私、そんな悪いことしていません。ちよつと長く休んでいただけです」

「そうなのか？ それは悪かった」

「そうなのかきつと体が悪いのか、あまり変なこと言つて興奮させるのはよしとこう。」

「これからこの子には岡崎の相手役としてしっかり勤めてもらわなくてはいけないからな。」

二人に見えないように含み笑いをしていると、岡崎が俺を見てそう言えば、と口を開いた。

「そう言えば、お前こんな所に何しに来たんだ？ もう昼休みも終わるだろうに」

「なに、ちよつとここのベンチで一眠りしようかと思つたんだよ。そしたらお前らが居

たからな、邪魔して悪かった、俺はもう行くよ」

長居は無用だ。俺は腰掛けていたベンチから立ち上がり、そのまま背を向けてこの場を後にする。

途中、背中からなんか古河と岡崎の二人がなんか言つてたのが聞こえたが、聞かなかったことにして先を急いだ。植え付けた誤解は、誤解のまま進んだほうがあいつらも勘違いからも意識し始めるかも知れないからな。

さつきまで死にたくなるような気分だったが、今はとても気分が良い。空気は美味しいし、空は美しい。嗚呼、なんて素晴らしいきかな我が人生。

感情とは時に器となる肉体を凌駕した力を宿す事が稀にある。

それは震えるような怒りに燃えた時。それは凍えるような悲しみに慟哭した時。それは飛び上がるような歓喜に胸を打った時。

そして——あらゆる価値観を覆すような恋をした時。

とても脆い人の肉体はどんな事にも動じない鋼の肉体に進化し、海上を駆け抜けたり、上空を飛行したり、灼熱の溶岩の中を遊泳したり、様々な事を可能としてしまうのではという錯覚にさえ陥る程だ。

そう、人とは感情を動かす事でいくらでも強くなる事の出来る種族なのだ。だからこそ、俺は強い。

そう……こうして今地に伏している工業高校の連中を見下ろしている俺は、杏に惚れている限り誰にも負けないだろう。

話の顛末はこうだった。

——遡ること数時間前。

俺は岡崎と別れたあとと不真面目にも空き教室で惰眠を貪って授業をサボり、よく眠っていた時にそれは突然やって来た。

耳を劈くエンジン音。重低音の効いたその音は聞いた瞬間にバイクの排気音だと分かった。

男の子ってのは高校生ぐらいになると、大半がバイクが好きになって乗れもしないのに知識ばかり蓄える無駄な生き物だ。当然、その中にも免許を取得して本物にあり付ける奴も居るだろう。

ただ、俺はその免許を持っていない部類で知識と技量だけしか持ち合わせていなかった。

外では変わらずバイクのアクセルを吹き鳴らす音が五月蠅いぐらいに鳴っている。実際、嫌がらせなんだろう。断続的にアクセルを開けては空吹かしをして聞いたことの

あるメロディを奏でている。

「つたく、そんなサーブिसしたら春原が喜んじやうだろうが」

そう独りごちて俺はバイクのせいで吹き飛んだ眠気を名残惜しく感じながら、旧校舎の空き教室を後にした。

目指すのは音のする方。恐らくは校庭だろう。正門から入ったなら、その先に続きバイクが走り回れるような所は校庭ぐらいしかうちの高校にはない。

廊下に出て、人がいないのを左右を見て確認すると、俺は思い切つて地を蹴り風のように走り出した。

今ここにいるのが四階だから、一階の校庭に出るには少し時間がかかつてしまう。

内心、野次馬根性で見に行くようなもんだが、万が一杏に被害が及んだらと思うとその足を緩める事は出来なかった。はやる気持ちを抑え走りながらも、廊下の窓から校庭の状況を確認してみる。この棟の位置が校庭から見える所で良かった。

外ではやはり、といった感じにバイクが二台校庭を我が道の如く走っていた。

一つ予想と違ったのはバイクの種類がMTではなくATであった事。俗にビツクスカーターと呼ばれる種類の、50ccのバイクをそのまま大きくしたような形のバイクと、小型特殊の枠内に収まるスクーターの二台だった。

ビツクスカーターの方に二人、小さい方に一人乗っている為、計三人が校庭を走り荒

らしていた。

アクセルを巧みに扱いながら蛇行走行をしたり、同じところをぐるぐると回って砂塵を巻き起こしたりとはた迷惑な行為を繰り返している。

それを見て俺はさらに走る速度を早くした。部活をやめて二年ぐらいが経っているせいか、思うように足が動かないがまあ許容範囲だろう。そのうち慣れるはずだ。

「くそっ、でも、楽ってわけじゃ……っ、ないんだよなあ！」

ぜいぜい息が上がって酸素を多く欲するが、思うように肺へと届いてくれない。

校舎の三階に降りて来た時、窓を見ると一人の少女が校庭に出ていくのを発見した。あれはなんの冗談だろうか。まさか話し合いであいつらが納得して帰るとでも思っているのかあの女は。

尚更急がなくなっちゃと思つて視線を外そうとした時、春原が楽しそうに野次馬観戦しているのを見つけた。その横には岡崎も居た。ついでに古河も。

何を言つてるのかこっからじゃ聞こえないが、どうせあいつの事だろくな事を言つてるに決まつてる。

仕方ないから三階のここからでも声をかけようかと、一旦足を止めて廊下の窓を開き上体を乗り出した。

「おーいっ！ すのは……………っ!? あれって……………杏……………だよなっ！」

視界に飛び込んできたのは他でもない、藤林杏その人だった。

この俺が杏を見紛う筈がない。正真正銘、あれは杏だ。ただ、信じられないことにあいつはどういうわけか、あいつまでもが校庭に乗り込もうとしている。

なんでだ。あいつがこういうことに首を突っ込みそうな人だということとは分かるが、多分それより先に教師の対応を伺うはずだ。妹も居るんだ、そうそう無謀な事はしなはずなんだが。

原因を探るべく校庭の不良三名を見てみると、さつきまで居なかったものが一つ増えていた。……正確には、一匹増えていた。

「なんじゃありや……うり坊か？　なんでこんな所に」

不良が乗り回すバイクが円を描いて走る中央に、どうしてだか猪の子供であるうり坊が立ち往生していた。

確証は無いが、きつとあれが杏を突き動かす原因になつてるんだろうな。今は掠が必死に杏を止めてるけど、あの調子じやいつ突貫するか分かったもんじやない。

急がないと間に合わない。こうなつたら、ここから飛び降りてショートカットするか……。

でも俺が乱入したら高確率どころか、絶対に停学をくらっちゃう。

出来ればそれは避けたい。どうしよ……。

キヨロキヨロと俺は何か探せる物はないだろうかと思つて辺りを見回してみた。何か遠距離で投げられる物でも、なんでも良い。

「……………おっ!？」

気がついたときにはあたしの体は勝手に動いていた。

いつもならこんな馬鹿らしいことしないんだと思うけど、それでもあの馬鹿共も中央に居るボタンを見つげちゃったあたしには見て見ぬふりなんて出来なかった。

あの子はあたしの大切なペットなんだから。

手に持った辞典を強く握る。これをあいつらにぶん投げれば、多分ボタンが逃げる隙ぐらいは出来るはずだ。その後の事なんか知ったこっちゃないわ。

「だっ、だめだよお姉ちゃん危ないよっ!」

校庭に乗り込もうとしたあたしを止めたのは妹の掠だった。

掠は顔を悲しそうに歪めながら必死にあたしにしがみついていた。この子にはボタンが見えなかったの？

「離して掠っ、ボタンを助けてあげなくちゃ! これ投げるだけだからっ!」

「駄目だよっ危ないよ! 私もボタンを助けていけど、お姉ちゃんが危ない目に遭うの

も嫌だよ」

そっか、やっぱりこの子にもボタンは見えてたんだ。それなのにあたしの心配もするなんて、相変わらず優しい子。でも、それでもあたしはやらなきや。

その時、あたしと掠がいる所より離れた場所からなにやらおかしな歓声のような女子の声が聞こえてきた。

なんだろうと思つて見てみると、女の子が一人校庭に向かつて歩いているところだった。なんでそれで歓声が沸くのさ？

女生徒は悠然とした立ち振る舞いで姿勢正しく真つ直ぐに校庭目指して歩いてきた。ここからじゃ横顔しか見れないから誰なのかもよく分からないけど、美人なのは間違いないなかつた。

透き通るような長い銀髪に、迷いなんて微塵も感じられない真つ直ぐな眼差し。形の良い鼻のラインに、艶やかな唇は、女のあたしから見ても美人だと思う。きつと男子からも人気が高いだろう。同性の女子からしかラブレターを貰ったことのないあたしとは天と地の差があるように思える。あれっ、なんでだろう……今あたし落ち込んでる？ 「つてそうじゃない！ あたしはボタンを助けないと！」

「えっ？ そうじゃないって、急にどうしたのお姉ちゃん？」

急に声を上げてしまったもんだから掠が驚いてしまった。関係ないけど、この子の

焦った表情つて最高に可愛いわよね。幸希にからかわれてる時のこの子は凄くいい顔で狼狽えてたりするもの。だからつて、あいつを許す訳じゃないけどね。罪は罪で、ちやんと罰を与えてあげなきゃいけないしね。

つと、思考が逸れてしまったけど、早くボタンを助けないと……！

あたしは前に立ちほだかる椋から、隙を見て脱出をする。

「きやつ……」

「ごめんね、椋………っ!?!」

その時、誰かが突風のように走り抜けたのを感じた。

一瞬の出来事にあたしの体は咄嗟だったから強張ってしまって動けなかった。遅れて耳元で風が吹いてあたしの髪を揺らしていた。

ようやくその走り抜けた失礼な相手が見えたのは、おかしな格好の背中だけだった。

あれつて……コスプレつてやつよね？

ちよつと遠目になつちやつたから細かくは見えないけど、あれつてきつとそうよね。そうに違いないわ。だって、旧校舎側から来たつて事は生徒の筈なのに制服着てないし。

今にも杏が乱入しそうなのを目の当たりにした俺は危険を感じて急ぐことにしていた。

そんでもってすったもんだの末に見つけたのが、旧演劇部室にあった某仮面を付けた正義のヒーローの変身スーツ一着だった。なんでこんなもんがここにあるんだ。

細かいことを考えてもしょうがない。今はこれを着れば俺だってことは分からないと思うから、とにかく早く着替えなくちゃ。

「ラ○ダー……変！ 身！ とうっ！」

決め台詞を言って刹那のうちに着替えを終える俺。少年の心を持ち続けていれば、こういう芸当なんか朝飯前なのだ。

制服を脱ぎ捨てピチピチのタイツに足を通し胸当てを付け、ブーツを履いて手袋を装着。そして、最後に仮面を被ってさあ完成。

この旧演劇部室に一人の変身ヒーローが誕生した瞬間だった。

「この沸き上がってくる力は……!?!」

両手の平を見てそう呟く。思い込みの力とは恐ろしいものだ。雰囲気によっているとか思えないが、微妙にノリノリな自分が少し恥ずかしい。

仮面を被った事で顔を隠すことが出来るようになった俺は、すぐさま廊下へと飛び出して勢いをそのままに開かれっぱなしの窓から外へと身を投げ打った。

水平に勢いよく飛んだ後、すぐに下方向へと重力が作用して俺の体は斜め下へと線を描いて落ちてゆく。

落下時独特の何とも言えない胃の腑がこみ上げるような気色の悪い感覚に襲われ、危険性を訴えるように脳髓が寒気を覚えた。そのせいか意識が軽く薄れ、視界の端から光がチラついてフラッシュアウトしそうにもなった。

でも、これしか……このルートしか最短の道は無かった。四階だと危ないけど、三階ぐらいならちゃんを受身を取れば大丈夫なはず。

今までも何回かこんなことはあった。今回もきつと大丈夫なはずだ。

実際の時間にしては二秒と少しぐらいなんだろうけど、体感時間にしては十秒は引き伸ばされているような感じがした。緩やかに、だけど確実に地面が近づいていき俺の体が恐怖で粟立った。——あと一メートル。

バンツと重いものを地面に叩きつけた時のような音がして俺の体は地面に叩きつけられた。……いや、正確には転がり落ちた。

始めに着いた両足を着いた瞬間に蹴り出し、力を横方向へと逃がして俺の体は受身をとりながらゴロゴロと転がった。

判断としては間違っていないかった。現に俺の体は足の裏が少し痺れるぐらいで、他には何ともなかったから。

それに、校庭にも間に合いそうだ。

俺のいる場所から杏のいるところまで距離にしておよそ五メートル。野次馬達は不良と銀髪の少女に釘付けになって、俺の事など誰も見ていない。好都合だ。

銀髪の少女がなぜ不良どもに向かっているのか知らないが、そんなことよりも俺は杏がああ場面に突っ込む原因を取り除かなくては。

俺はその場で四つん這いになって、尻を天に喧嘩を売るように空高くあげた。

「——位置について、よーい……ドンッ！」

クラウドチングスタートの構えからロケットのように走り出す。

ゴールはうり坊。コースは……どこでもいい、とにかく最短コースだ。

再び風となった俺は持ち前の足でグングン群衆を縫うように追い抜いていく。途中、掠ともめてた杏の横を通ってついでに髪の毛の匂いなんか臭いじやおうかと思つて鼻を利かせてみたが、仮面を被っているせいでホコリの匂いしかなかった。ガッテム！

「お、おい！ なんだあれ!？」

「うおっ……！ ありや仮面ライオンじゃねえかよ！」

「しかも平成だぜ！ ありゃク○ガだよ」

「俺としてはア○ゾンの方が良かったな……」

「というか何しに来たんだ？ ヒーローごっこでもしようつてののか？」

「ごちゃごちゃ五月蠅い野次馬共が何かを言っているのが聞こえてくる。くそう、いいじゃねえかよクウ〇でも。カッコイイじゃん。」

とうとう校庭まで踏み入れた俺は、不良に向かって歩いていく銀髪の少女を追い抜き、バイクを乗り回す悪の組織の構成員にまでたどり着いた。この時、銀髪の少女が驚いた顔をしていたのを、視界の端に捉えていた。

ここで問題が発生した。このままの速度で奴らを無視してラグビーみたいになり坊を拾って逃げるつもりだったんだけど、肝心のうり坊が不良の手に渡ってしまったのだ。

嫌がるうり坊を不良の一人。なんか銀蠅とか金蠅とか呼ばれそうな髪型の男が、嗜虐的な笑みを浮かべて胸に抱いていた。……好きな小動物？

「なんだてめえは!？」

不良の一人が俺に気がついてバイクの足を止めた。

なんつー安っぽいセリフだ。目立ちたいならもっとキャラを立たせて……いや、よそう。

俺は毅然とした態度で仁王立ちし、右手を天高く上げ握りこんだ拳から人差し指を出して、ピシッと連中に突きつけてやった。

そして、こう言った。

「近くのスーパーではしらたきが一つ85円！二十分歩けば二つで150円のしらたきがあります、さあ、君はどつちで買う!?」

「えっ? ちよ、ちよつと待てよ! もう一回、ちゃんと聞こえなかったからもうい——」

「——もう遅い! 先手必勝!!」

悩んでいるうちに爆走して駆け寄り、一人乗りの方に飛び蹴りをかます。

「ぼへえああ!!」

なんつつてるのか分からない雄叫びをあげながら男は昏倒した。

ついでに抱えていたうり坊を抱きとめることは忘れない。

「なっ………てめっ………!」

「ふざけっ………!?!」

「さあそんなしらたきですが! さて、糸こんにやくとしらたきは何が違うのでしょうか!?!」

「えっ………そりや、作りか——」

両手を同時に振りかぶって混乱している二人に思いつ切り叩き込む。無駄に鍛えた腕力任せに殴ったので、拳からメキメキと相手の骨が軋む音が響いてきた。

息の掠れるようなうめき声が男達から漏れ、やがて眼球がぐるりと回って白目を剥き

気絶した。

突然すぐには答えられない質問をして相手に隙を作って攻撃する。これぞ面倒短縮術。

これが聞かないのはよっぽどの馬鹿か、とんでもなく冷静な奴ぐらいだ。

「ぶひっ、ぶひっ……」

「おお、可愛いなこいつ。愛い奴愛い奴」

なんか懐いてくるうり坊を撫でてみると、嬉しそうに顔を綻ばせ堪能している。

さて……。俺の周りに倒れている男共を見下ろす。やってしまった……。つい勢いに身を任せて倒してしまった。バレたら停学かもしれん。

地に伏したこいつらは、きっと工業高校の連中だろう。バイクに学校名の書かれたステッカーが貼ってあるし……。馬鹿だろこいつら。

呆れてぼーっとしていると、背後から忍び寄る控えめな足音が聞こえてきた。

「おまえ……。いつたい誰なんだ？」

凜とした声が耳に語りかけてきた。

ハツとなつて振り返ると、そこには不思議そうな顔をしたさつき銀髪の少女が俺を見ていた。

透き通るようなまつすぐな眼差しは、何人たりとも侵すことの出来ない聖域のように

も思えて。

「……………蜜柑と伊予柑とサバ缶の中で柑橘系はどれでしょう!？」

「えっ、それならふた——」

「——さよならっ!」

隙をついて俺は森の方へと逃げ出した。

あのまま律儀に答えてたら教師達が押し寄せて俺の正体がバレてしまう。そんなの凄く恥ずかしくて死んじまう。きつと春原はバカ笑いで俺を指差すし、岡崎は岡崎で春原を止めながらも笑うだろう。それに杏にバレたら俺は死ぬ。

うり坊を抱き抱えたまま俺は森の中へと突入した。ある程度奥に進んだ後、うり坊を逃がしてやり服を着替え……ようとして着替えを演劇部室に置いてきたのを思い出した。……嗚呼、詰んだ。

仕方ないから森の中で放課後を待つことにした。それしか方法無いし。

時間が経って放課後になった。

そこで俺はとんでもない事実気がついた。

「……………授業中に行けば人目につかないかもしれないかもしれなかったじゃん……………」

いつも春原をバカ呼ばわりしてた俺もまた馬鹿の仲間だったわけで、軽く凹んだ。トボトボと……でも人目にはつかないよう細心の注意を払って俺は旧校舎にまで潜入を果たした。

長かった。物陰に隠れたり、石を明後日の方向に投げて視線を逸らさせたり、ダンボールに隠れて進んだり、やたらと困難が待ち受けていた。それらを全部回避した俺は、きつと優秀な作業員になれるかもしれない。

体力も消費してへばった俺は、蒸れた仮面を外して顔面に涼しい風を受け廊下を静かに歩きながら演劇部の教室に、ドアが空いてたからそのまま入った。

……………ん？ ドア、空いてんじゃん。

「あれっ……………？ 榊原？」

「榊原さんが、なんかかつこいい服を着ていますっ。ヒーローみたいですよ」
……………」

結局、岡崎と古河にはバレてしまった。

「あはははははっ……………!!」

「はあ……………死にたい……………」

「岡崎さん、駄目ですよそんなに笑っては……榊原さんが可哀想です」

俺の格好を見て岡崎はバカ笑いしていた。

想像通りだけど、やっぱりムカつく。それでもつて死にたい……。

古河は俺を可哀想に思つて岡崎を止めてくれてるが、今はその誠意さえ痛いです。泣きたい時に優しくされると、余計に泣きたくなる心理とよく似ている。

「つはあはあ……あー笑つた。それで？ さっきの乱入者はやっぱり榊原だったわけね」

「やっぱりつて、もしかしてお前俺だつて分かつてたのか？」

一頻り笑つて満足した岡崎は、目尻に浮かんだ涙を拭つてそう言つた。

「あたり前だろ、あんなやり方で相手をやる奴なんか、俺はお前しか知らねえよ」

「クソツ、付き合ひの長さがアダになつたか……」

「大体、なんであそこに乱入したんだ？ 俺もあの坂上智代に加勢しようかと思つたけど、お前は次問題起こしたら停学だろ？」

そつか、岡崎はあの少女……坂上智代つて言うのか、彼女に加勢しようとして……。それじゃあうり坊は見えなかつたのか。

正直に言つても良いけど、うり坊を助ける為つて言つたらまた面倒くさそうな気がするので誤魔化すことにしよう。

「そりやまあ……つい、な。それより、なんでお前らこんな潰れた部室に来てたんだ？ シツポリやらかすつもりだったのか？」

「んなことするかつ！ ……古河が演劇部に入ろうとしてここに来たんだよ。生憎、随分前に廃部になったらしいけどな」

「岡崎さん。シツポリ……ってなんですか？」

古河が俺の発言の中に理解できない言語を岡崎に聞いていた。岡崎は困ったように狼狽えて、恨みがましく俺をひと睨みしている。無視無視。

しかし、演劇部か……部活をやりたいだなんて、というか岡崎が部活に関わろうとしていることの方が俺には不思議でならない。あれだけ部活って単語にすら嫌悪感のよいうなものを抱いていたのに。……案外、古河とは本当に良く似合いそうな気がしてきた。

俺なんか余計なちよつかいをかけなくてもくつつきそうだ。でも、油断は大敵だ。いつ杏が岡崎に告白するか分かったもんじやない。

ふう、と一息ついて俺はあれこれ説明している岡崎と、それを聞いている古河に向かつて口を開く。

「俺、これから着替えたいから、悪いんだがちよつとの間出てつてくれないか？」

「そうか、いや、俺ももう行くからいいよ」

「それでは榊原さん、さようなら」

二人して教室を後にする。……仲、いいじゃん。

一人寂しく着替えを始めた俺は仮面をそこらに放り投げて、隅に置いてあった制服を引つ張り出した。

あのうり坊は無事住処に戻れただろうか。どうしてあの場所に来ていたのかは分からないけど、杏はあのうり坊を可愛がってたりしたのかな。

それに、あの坂上智代とか言ったかあの銀髪の子は。俺を未確認生物のように見ていたが、なんかあの子どもどこかで見たことがあるんだよな。ナンパってわけじゃないが、本当にどこかで見た覚えがある。記憶の片隅に、どうしてかカビのようにこびり付いている。

手袋を外して仮面のある場所に投げ捨てる。ラバー製だったせいで、なんか手がゴム臭い。

ブーツを脱いで捨て、ピッチピチの下半身タイツを脱ぎ捨てる。動き回ったせいで汗をかいていた俺の下半身は、通気性が良くなって涼しい気持ちに包まれた。なんかこう、自由ってのはこういうことなのかなんて柄にもなく思ってしまった。

「さて、制服制服……」

下半身パンツで胸当てをしたまま制服を取り出した。傍から見れば変質者のそれだ。

——そう思ってしまったのがいけなかったのか。

ガラツと無機質な扉の空く音が俺の後ろ、背中側から聞こえてきた。

その瞬間、俺のゴールデンボーイがヒュツとなつて縮み上がったのを、今でも忘れない。

「ぶひっ、ぶひっ〜！」

気がつけばさつきけのうり坊が俺の足元に居て、すりすりと頭を擦りつけてきた。

きつと扉が少し空いてたのかも知れない。うり坊が一人でこの教室の扉を開けることなんて出来やしないんだから。でも、なんでここに？

「うらー！ ボタンー!?」

廊下からとつても聞き覚えのある声が聞こえてきた。というか、すつごく聞こえる距離が近い。

明らかに走っている音が聞こえてすぐ、キュツと上履きの擦れた音がして……俺は恐る恐る振り返った。

「つたくボタンつたらー、駄目でしょ勝手に入ってきち………っ!?」

「……………」

沈黙。

目線が合つて、相手の目線が下に下がって、また合つて。

まるで刻が止まったかのようだった。

二人と一匹の時間が永遠を刻み、想い遥かに飛んで行き、いつまでもこうしていたいとさえ変態思考な俺は思ってしまった。

「……………あ……………あん、た……………」

しかし。

——神は人類に時間という枷を与えた。

「な、なに……………その格好……………」

——停まる事を、神様は決して許さないのだ。

俺は決意を固め、大きく息を吸った。

「……………ここで問題！ 夢のような現実と、現実のような夢、君はどっちを——」

「……………アホみたいな事言ってるんじゃないわよ——！！」

「オ○シデイアンツツ……………！！」

岩のように硬い杏の辞典が投擲され、俺の頬に突き刺さった。

最後に、顔を真っ赤にして取り乱す杏を見れた事を——俺は後悔しない。

第三回：一方通行な想い

人生に不幸は付き物だ。

それは往々にして当たり前前に、思いがけない時にこそ現れて非情な現実を突き付けてくる。

楽しみにしていた遠足を明日に控えた小学生が、誕生日を迎えた朝の少女が、人生を賭したファンのライブに向かう青年が、デートの待ち合わせをしている恋する乙女が。楽しみを待ち遠しく感じる人々に対して、残酷な程に平等な不幸はやってくる。

きつと神様という奴は人間の苦しみ悲しむ哀咽の声が大好物なのだ。
だから——今も神様は天上世界で愉悦に浸っていることだろう。

「——説明してもらおうわよっ!?!」

時はおそらく夕方頃。

学生の身分である勉学を投げ出し一日の予定を健やかに過ぎた後に訪れた放課後。太陽が西に傾き、空が茜色に色づき始め、年頃の少年少女が二人っきりの教室へ差し込

む夕日が美しく色めくこの空間で。惚れた女の為に勝手にコスプレをして校内に乱入してきた不良共を、バツタバツタとなぎ倒した最高にिकासナイスガイな高校生こと俺『榊原幸希』は、ただいまそのライダーな仮面を被っていた事が惚れた女である『藤林杏』にばれてしまい説教＋質問攻めにあっていた。

何故説教なのか。それは俺が演劇部の空き教室で着替えていた時に、さつき不良共から助けたり坊が乱入、追いかけてきた杏が闖入、俺殴られるの三段階不幸に見舞われたからである。

服をパージしている途中であつた為に裸体を見た杏は俺の錯乱作戦に聞く耳など持たず、問答無用で殴ってきたのだ。

「説明？ それは俺が俺である為の証明をせよ、という事でいいのか？」

「おちよくつてんのアンタ？ そんなに辞典の味が恋しいの？」

「すいませんでした調子に乗りました。せめて服を着させて下さい」

平伏である。四つん這いになって両手は相手に差し出す。もちろん手のひらは上に向けて。

怒れる杏の前に無条件降伏をした俺は、春原や岡崎が見たらさぞ大笑いすることだろう。

いくら何でも杏の辞典投擲は威力が天元突破しているから俺でも怖い。

「うっ……さっさと着替えなさい！ 四十秒以内で！」

「お前はどこの賊かよ。女より石が欲しいのか？」

「十、九、八……………」

俺が裸なのを思い出した杏は恥ずかしそうに頬を赤く染めてそっぽを向いた。

ふざけたら切れた。鬼のようだ。でもそこがまた可愛い。結婚したい。

これ以上ふざけると本当に辞典が飛んでくるので、肅々と着替えを高速で始める。

着替えている間、杏は目のやり場に困って俺に背を向けたまま教室内をキョロキョロとしていた。なんかもう、背後が無防備だから尻でも撫でてやりたい。黄金の手を持つ加藤鷲さん直伝の御業を繰り出したい。

血迷うこときっかり四十秒以内に着替えを終えた。

「で？ 説明って、いったい何を説明すればいいんだ？」

「んなの決まってるでしょ。何でアンタがその服を着てんのよ、って事を説明しなきゃって言うてるの」

「いや今初めて聞いたんだけど、言ってるっておかしくね？」

「いちいち揚げ足を取ろうとするな！」

なんかテンションのふり幅がどういう訳だか凄くて……。

しかし、あんまり調子に乗ると本当に杏の俺に対する高感度が下がってしまう。幸希

恐慌が訪れてしまう。核の冬が到来してしまう。

「いやなに、俺の通う神聖かつ素晴らしい学び舎が害虫共に侵略されてたんでな、速やかに撤退願ったのだ」

「まともに授業を受けてないアンタが神聖だの素晴らしいだの言うな。……はあ」

呆れた表情でため息を吐く杏。その吐息どこで売ってるの？ 言い値で買いますよ。

「あのねえ、学校で暴力なんか働いたらアンタの場合、教師にばれた瞬間に即効で停学よて・い・が・く！ 幸いそのおかしなコスプレのお陰で誰がやったのかは分かってないけど、今や校内じゃアンタの話題で持ちきりよ」

「おお、俺の話題って、どんな？」

やっぱりあれか。颯爽と現れた謎の正義のヒーローかつこい！ ってな話題か？

参ったな。俺が好きなのは杏だけであって、他の女子にはあまり興味が行かないんだけど。

「……聞きたい？」

「何もつたいぶってるんだよ、いいから教えてくれ」

「男子からは『目立ちたがり屋の卑怯者』女子からは『坂上智代の邪魔をした糞虫』って呼ばれてたわよ」

「……世界は不平等だ」

じゃああれか、俺がやったことはただのお邪魔虫だったってことかよ。いくらなんでも言いすぎだろ、広めた男は惨殺だな。女子は仕方ない……ん？

「坂上智代って誰だ？」

「アンタが乱入するよりちよつと前に不良共に向かつて行った女の子よ」

両腕を組んでそう言った杏の言葉を聞いて、俺はあの時の記憶を振り返ってみた。

三階からのスカイダイビングをして、そのまま杏と椋の横を走り去って……そういえば居たな銀髪の女が。

一度思い出せば後は芋蔓式だ。忘れもしないあの美しくたなびいた銀髪の少女。

俺の登場に予想外だという表情をしていて、敵をやつつけた後、俺に質問をしてきた少女。

なんらかの決意を秘めた強い瞳が俺を映していて、不覚にも杏以外の女にドキッしてしまったのを思い出す。あれは忘れたい過去だ。俺は杏一筋。

「そういえば居たなそんな女が。でも女だぞ。むしろその坂上が奴らにいたぶられる前によかったと思うのが普通じゃないのか？」

「あたしだって詳しくは知らないわよ。でも、後輩の子に聞いたら、なんでもめつぽう強いらしいわよ」

「……なんか、春原が聞いたらそいつに挑戦を叩き付けそうな女だな」

立っているのも何なので、教室内にある椅子を適当に二つ引つ張り出して、その内一つを杏に差し出す。

そんなに長く話が続くとは思わなかったけど、なんだか長くなりそうなので椅子に座ることを進める。気遣いが出る俺って最高だな。惚れていいぞ杏。

「ほら、座りなよ。立ちっぱなしってのも何だろ」

「ここはアンタの家でも部屋でもないでしょうが。なんで我が物顔なのよ」
裏目だった。

おかしいな、些細な気遣いの積み重ねがやがて恋愛に発展するってゲームで学んだのに。現実では通用しないって事なのか。

杏は冷めた目で俺を一瞥すると、ふうと一息吐いて椅子に座った。

その時、杏の足元でブヒブヒ鳴いていたうり坊を抱き上げて膝の上に乗せた。羨ましい、今だけでいいから俺と体を交換して欲しい。もしくは中国四千年の歴史を持つ泉に入りたい。うり坊になるなんて限定的な泉があるのならという話ならな。

「さつきから気になってたんだけど、そのうり坊お前のペットか何か？」

「この子？　そうよ、可愛いでしょ名前は『ボタン』って言うの」

「まさか……………食うつもりなのか？」

「え？　なーに？」

「……………何でもありません」

にこやかに返答した杏だった。残念ながら目が笑ってなかった。

名前とそのうり坊を見れば誰だつて食用だと思っちゃうだろうが。いったい何を思つてのネーミングなのか問い詰めた。子一時間問い詰めた。

でも、やっぱり俺が思つたとおりこのうり坊は杏のペットだったんだな。よかつた。あのまま俺が行かなかつたら多分強情な杏の事だから勇ましくあの不良共の群れに突入していたかもしれない。

どれだけこいつの投擲術が優れていようと、所詮はお遊びの延長線上。ギャグの範疇だ。最初の一人を倒せても、その後の二人には通用しなかつただろう。

男女差別をするわけではないが、どこまで言つても最後には性別の壁というやつは現れるんだ。そりゃ素人の男と武道を学んだ女が戦つたら、当然のように女が勝つだろうが、杏は武道なんざこれっぽっちも習つていない。ちよつと運動神経が良いだけの女の子なんだ。勝てるわけがない。

あれこれと考へながら呆けて杏を見ていると、視線に気がついたのか目が合った。

紫水晶アメジストのような瞳には俺の姿が映っている。でも、本当の意味で彼女は俺なんか見えないだろう。

「そっういえば、まだお礼言つてなかつたわね」

「お礼？ なんの？」

「この子を助けてくれたお礼よ。ありがと。アンタが行ってくれなかったら、あたしが突入してた所だったし」

「あ……いや、別にいいよ礼なんか。俺はただ……」

お前に好かれたくて……。

下心ありきの行動だったし、きつと打算的なことも考えていた。

杏の心を岡崎から俺の方へと向かせる為にやったことだ。こんなに真つ直ぐに感謝をされると俺がいたたまれない気持ちになってしまう。

らしくもない俺の態度に理解できない杏は不思議そうな顔をして首を傾げるが、そんな可愛い仕草も今は俺の胸を締め付けるだけだった。

一度気分が落ちると俺の場合急転直下していく傾向なのか、さつきまでの有頂天はどこへやら、すっかりネガティブな俺が出てきてしまった。

「でさ、あんたこの後暇？ どうせ暇でしょ、あつたとしてもどうせ春原の部屋でだらけるだけでしょ？」

「そりや確かにやる事なんか無いけど、それがどうかしたのか？」

椅子に座った状態から体を前のめりにして質問する杏の胸が、うり坊事ボタンを覆いかぶさるようになってのしかかっていた。……登頂してえ。

この後の予定って、何でそんな事を聞くんだ？　もしかして……と微妙に期待をするものの、ネガティブ状態の俺にはそんな都合の良い解釈はあまり意味が無い。どうせ雑用だの何だのと便利屋の如く使いっぱにされるに決まっている。

騙されないぞ。俺は甘い罠にはかからない賢い男なんだ。ふらふらと着いて行って美人局なんて局面にはならないように常にイメトレを繰り返しているんだ。

自分に都合の良い展開なんてものはそう簡単に訪れないんだ。

「放課後……一緒に帰らない？」

「はい喜んで」

男って……ホント単純。

結論から言って、甘い誘いってのはやっぱり何らかの裏がある事を再び思い知らされた。

「さ、さか、榊原君つ……よろしくお願いしますっ」

「ああ、うん。はいよろしく……。椋」

杏のハニートラップにまんまとかかった愚かな男である俺は、ルンルン気分待ち合わせの昇降口に行ったら、本命である杏と……どうしてだか妹の椋が一緒に居た。

その光景を見た瞬間の俺の衝撃は計り知れないだろう。

僅かな希望に全身全霊を賭した俺の気持ちは霧散し、変わりに特大の落雷が落ちてきたのだから。

「遅いわよ幸希。さっ、早く行きましょ」

裏切りの味を噛み締めて硬直している俺なんかお構いなしの杏が、腰に手を当てて偉そうにそうに言うのと隣でモジモジしている椋を連れ立って歩き出した。

何がどうなってるのか、全然まったく理解が出来ない。

確か俺は杏に頬を染めて照れくさそうな顔をして甘えるような声で俺を誘ってきたはず。……おっと、それは脳内での事だった。

「ちよ、ちよつと待ってくれ。説明を要求する！」

「椋とあたしが一緒に帰る。アンタはオマケ。はい、説明終了！」

「お、お姉ちゃん……」

……………ジーザス。

「これから色々と町を歩き回るけど、女二人でなんて物騒でしょ？ だからアンタはポディーガード役として付き添いになってもらいたいのよ」

「ごめんなさい榊原君、お姉ちゃんったら一度言ったら聞かないから。迷惑……ですよね？」

申し訳なきような表情で謝る椋の顔を見ると、俺もそこまで強く言えない。

想い人である杏の妹だし、何より彼女にはなんの罪も無い。勝手に俺が舞い上がっていただけなんだから。

「椋が謝らなくてもいいよ、どうせ予定なんて何も無いんだから。それに、杏が横暴なのは今に始まった事じゃないし」

「よかった、でも本当にごめんなさい。私もさつきお姉ちゃんに聞いたから止められなくて」

口癖なのか再度謝る椋がそう言って儂げに微笑んだ。

思えば、この少女とこうしてちゃんと話をするのは始めてかもしれない。

クラス委員長として模範を示す椋と、片や校内きつての不良生徒である俺。最近こそ授業には出るようになったものの、それまではたいした会話なんてものは無かった。たまにやる事が無くて教室でだらけている俺に椋の方から話しかけてくる程度だ。間違っても俺から何かしらのアプローチをするような事は無かった。

普通あの学校の生徒なら俺や春原岡崎に話しかけるなんてのはして来ないのだが、どうしてだかこの少女は懲りずに声をかけてくるのだ。

去年、姉である杏と同じクラスだった事から、その時の話でも椋にしていたのだろうか。そうだとしたら納得はいく。そうでもない限りこんな大人しい子な優等生

が俺に関わってくる事なんかあり得ない。

仕方ないので杏に従って三人で町で遊びながら帰る事になった。

「あ、ねえねえあそこのゲームセンター行くわよ」

「おいもうなんかもうとにかくおい」

「なこよっ」

俺と椋が並びそれを先導するようにして先進む杏に、いい加減言いたい事があるので呼び止める事にした。

約一名を除いて親しい友人には優しい俺も、これには少々物申したい。

第一に、なんで放課後の寄り道なのに、こんなにも俺は買い物袋を持たなくちゃいけないんだ。これじゃあ本当にまるつきり荷物持ちの便利屋じゃないか。

「さつきから行くとこ行くとこが放課後にちよつと寄り道つてレベルじゃねえぞ。映画館だったり、クレープはまだしも地元にも有名なデートスポットだったり挙句このゲーセン！ 夕日もどっぷり夜になりそうじゃねえか！」

「あら、ゲーセンは放課後の寄り道にびつたりなスポットじゃない。良いでしょ別に」
ああもう畜生可愛いなそのきよとんとした顔。

両手に持った袋が杏のじゃなければ放り投げて抱きしめたいぐらいだぜ。でも、思ってるだけで小心者な俺にはそんなこと出来ないけどな。

「重いですよねそれ、私も半分持ちます」

本日三度目の掠からの救いの手が差し伸べられた。

杏の買い物……他にも同じぐらい掠の物もある……が始まり、映画を見てまたグッズやその他で荷物が増え、三人で行つても何が楽しいのかデートスポットに行つて土産を買つたり（しかも杏は到着するなりはぐれた。かなり必死になつて探したら怒られた）ゲーセンのUFOキャッチャーで取つたプライズだつたりと、もうかなりの量だ。

何事も腹八分目が丁度いいというのは至言だろう。あらゆるもの全てが過剰摂取をすれば良いというわけではない。薬だつて、飲み過ぎれば毒にだつてなるのだ。

「大丈夫だ。この程度もてないんじゃないだろうか？」

「そんな、私、それぐらいで榊原君の事を情けないなんて……思いません」

両手を胸の前でギュツと握つて力説された。

始め掠との距離も若干開いていたんだが、いろんな所に振り回されていく内に会話も何とかするようになり、いつの間にか六十センチほどの距離まで縮まっていた。

内気な彼女からしたらこれはかなりの勇気を必要としただろう。

杏は終始あの調子だからあまりまともな会話が出来なかつたが、代わりに掠がその相手を担つてくれた。

……もしかしたら、杏より先にこの子と会つていたら……なんてありえない事を

考えて、すぐにシャツトアウトした。

「そっか、ありがとな棕」

「いえ……私は。あの、突然聞くのも失礼だと思われるかもしれませんが、前から思っていたのですけど榊原君は——なんでいつも傷だらけなんですか？」

「……………毎晩血の滲むような特訓をしてるんだよ」

「と、特訓ですか…………？」

「棕—— ちょっとこれ見て——」

ちようど良い所で遠くにいた杏が棕を呼んだ。

「なにーお姉ちゃん!? ……ご、ごめんなさい榊原君、お姉ちゃんが読んでるからちよつと行つてきます」

申し訳なさそうな顔をして棕はそそくさと杏の所へと向かつて行つた。

一人残された俺はふうと、ため息を吐いて近くにあつたベンチに腰を下ろした。

こようやつて一人座つて辺りを観察していると、さまざま電子音を奏でる機械や人の笑い声など、色んな音がここには溢れ返っている。明滅を繰り返すモニターや照明、それに呼応するように踊らされる人や、恋人同士で仲睦まじく腕を組んでUFOキヤツチャーをしているカップル。それと、何やら怪しい蒼い光を発している筐体を指さして話している杏と棕。

みんなが俺にとってはどこか他人事のように見えて。包み込むようなネオンライトが、俺は駄目だと仲間外れにするようにチカチカと輝いているのが、また胸に深く突き刺さる。

もうすぐ夜がやってくる。

一日の中で、俺にとって一番嫌な時間が今日もまたやってきてしまう。

椋がいるから正確には違うんだが、せつかく杏とのデート擬きをしているというのに夜が近づくにつれてそんな感情もなりを潜めてしまった。

今頃あの二人は、またいつもの部屋でのんびり自堕落ながらも充実した時間を送っているのだろうか。

藤林椋は双子の姉である杏に呼ばれた時、少なからず杏に対してタイミングが悪いと思ってしまった。

普段から尊敬すべき、敬愛すべき双子の姉である杏が本日の放課後に急に現れて「今から幸希と一緒に帰るわよ」と言われた時は、もしかしたら今ここでこうしている自分は夢の住人なのは、と信じられない衝撃の事実を受け止められないでいた。

同じクラスの男の子で、世間的に見て校内の大半の生徒から見えていわゆる「不良」と

蔑まれる幸希は、椋にとつてはそう思えないでいた。

彼の存在を知ったのは去年の事だった。

当時、椋と杏は別々のクラスであったが、度々杏が心配して昼休みなどによく顔を出していた。椋としては姉が訪ねて来てくれるのは嬉しい限りだったのだが、それを傍目に見ていた男子生徒などからはよく杏の事を材料にからかわれていた。

普段から引つ込み思案な彼女はそれを強く言い返せなく、いつも杏が見咎めて制裁を加えていた。

この男子生徒というのは椋の事を想っていた為に、気を惹きたくてやっていたらしいが、それは彼女にとつては裏目であった。

毎度訪れる杏であったが、それもいつしかたまに来ない日などが増えてきたのを、椋は今でもよく覚えている。

今日は来るのだろうか、と恒例となつている杏の訪問を待つていた椋は、その昼休みは一人でいる椋を見かねたクラスメイトの友人が食事に誘い一緒に過ごした。

その日の夜。一体杏に何があつたのか心配になつていた椋は、風呂上りの杏に今日はどうしたのかを訪ねた。

「ごめんね椋、今日はちよつと生意気なクラスの男子が屋上に居たから注意してたのよ。本当にごめん！」

後になってその生意気な男子が『榊原幸希』だと知った。

それから、杏は度々教室に現れなかった。

制裁をくらった男子生徒がまたもそれを材料にからかってきたが、椋はそれ以上に気になる事が出来た。

「お姉ちゃん最近教室に来なくなっただけど、どうかしたの？」

杏が訪れなくなってから数日、何か用事でも出来たのか、とにかく日常になりつつあった杏の訪問がなくなってきたのが気になった椋は、ついにその疑問を投げかけてみた。

もしかしたら自分と同じクラス委員長を務める彼女に、大事な作業でもあるのだろうかと思っていたのだが、それは杏の発言によって全くの勘違いだと気付かされた。

二人が住む家のリビングで、ソファに身を委ねていた杏が起き上がり、とても楽しそうな表情を見せる。

「最近、面白い奴がいるのよ。それがもうホント馬鹿馬鹿しくて、あのね——」

語りだした内容は、杏が在籍するクラスで「不良」と呼ばれている校内でも有名な問題児の三人だった。

髪が金色の馬鹿担当。一見クールな印象を覚えるツツコミ担当。そして、場をひつちやかめつつやかに掻き回す担当の人。

その三人の話は棕の耳にも届いていた。

元運動部の問題児三人。それは元々この町の進学校には普通の入試では入学できないが、スポーツ推薦という枠で入学した三人の事。

元バスケット部の『岡崎朋也』

元サッカー部の『春原陽平』と『榊原幸希』

その三人と最近をよく話すと杏は言っていた。その時棕は、彼女の世話焼きな性格が出てきたんだろうと思つた。

——それから数日後、棕は幸希と思わぬ出会いをするのだった。

「お待ちせお姉ちゃん。どうしたの急に」

「……棕。アンタさ、幸希の事……好きなんだよね？」

「う、うえっ!? い、いきなりどうしたの……私が榊原君を、だなんて」

棕にとつて夢のような時間も終わりに差し掛かってきたゲームセンターで杏に呼ばれ何の用かと思えば、突然の質問に心臓は張り裂けそうなくらい鼓動を強くしていた。

占いゲームの筐体が立つ場所で、真面目な表情を浮かべる杏はいつもの冗談で言つて

いるわけではないと物語っている。

でも、どうして急にそんなことを——。

「お願い……ちゃんと答えて」

言い逃れの出来そうな余地は無かった。気弱な性格の椋は、突き刺すような杏の真剣な眼差しから目を逸らすことさえ出来ないでいる。

雑音鳴り響くゲームセンターの中でする会話とも思えないが、杏にはちゃんとした理由と、少しばかりの寂しさがあった。

幸希と知り合つて約一年。杏なりに上手く付き合つてきた気の合う友人が、妹の思い人だというのは長年付き合つてきただけあつてすぐにわかつた。二年生の頃、いつからか自宅でもよく幸希の話を聞いてきたし、同じクラスになった今では嬉しそうな表情で惚けているのをよくリビンングで目撃していた。

その事については何も悪いことなどない。むしろ男性が苦手な部類の椋が恋をしたのだ、姉としては応援しなくてはいけなときえ思っている。

しかし、それについてなんの相談もしてきてくれないことに、杏は少なからず疎外感から寂しさを感じていた。

だからこの放課後デートのようなものを無理やりセッティングして、椋の反応を見て限りなく確証に近い疑念を確定させたのだ。

結論からして、藤林椋は榊原幸希に恋をしている。

質問に対しての答えを催促した杏の瞳には、顔を真っ赤にして慌てふためく椋の姿が映っている。

知られてない、とは思わなかった。が、このタイミングでそれを振りかざしてくるとは思ってもみなかった椋は、どういえばいいのかわからず思考は混乱するばかりだった。

どうせなら家に帰ってから訊いて欲しかった。

開放的なこの空間で、しかも離れているとはいえ意中の人がいるこの場でその答えを発する為の勇気が彼女にはたりない。

時間にしてそれは三分ほど続いた――。

いつまで経っても答える様子のない椋に、痺れを切らした杏は嘆息した。

「これだけは言いたくなかったけど、これを知らずして先には進めないから……。」
「まあ良いわ……。でもね、これだけは聴いて……幸希、多分だけど好きな人いるわよ」
「……………えっ」

後頭部を鈍器で殴られたような鈍痛が響いた気がした。

黙っていればきつと姉は呆れて、その後諦めて優しく励ましてくれると思っていたのに。

そうは、ならなかった。

杏の放つ残酷な現実は今も続く。

「確証はないわよ。でも、アイツの言動とかたまに読んでる似合わない恋愛雑誌とかを総合して考えると、それが一番ありそうなのよ」

「そんな……でもっ、榊原君が……そう言つてたわけじゃないんだよね？」

「あれっ、気になるの？ さつきあたしが幸希が好きか聞いた時には答えなかったのに」
意地悪そうな笑顔を浮かべて、反射的に食いついた椋の揚げ足を取りにかかると。

自分はハメられたのだとその時になつて椋はわかつた。好きな人が居るなんていうのは単なる口実で、本当は意気地がない自分の本音を聞き出すための方便なんだと。そう思い込むことで自分の受けたショックを緩和させる。

一瞬、地の底まで自由落下した感情は天より垂れてきた糸によつて救われた。

こうなつた以上、杏に本当の事を言わなければ、何も始まらないのだと椋は己が持つる全てを賭して覚悟を決めた。

「……うん、わたし……榊原くんの事、好き……だよ……」

震える手足を抑え込み、極度の緊張から掠れそうになる声を振り絞つて言った。

冷や汗とか、動機とか、その他諸々異常を来しているけど、それ以上にこの言葉を伝えるのは難しく苦しかった。

「その言葉が聞きたかったのよ、ごめんね椋、無理に言わせちゃって」

「ううん、私こそ今まで相談しなくてごめんなさい。お姉ちゃんにも、好きな人がいるから……邪魔になるかと思っただけなんかに相談しなくて」

「ホツと一息ついて落ち着いた椋が発した何気ないその言葉に、今度は杏が狼狽える番だった。

「うえ?! あたしに好きな人がいるって、そ、そんなわけないじゃない! 何をいきなり言ってるのよこの子はっ」

「隠さなくても良いよ。私、誰の事なのか大体わかってるよ」

突然の不意打ちをくらい顔面が一気に加熱し沸騰した杏は、無防備だったこともあり先ほどの椋以上に顔が紅潮していた。

対して椋の方は杏の混乱具合を見て落ち着きを取戻し、せっかくなので反撃を試みた。

「私と同じクラスの人だよね?」

「ち……違う……」

「よく学校を遅刻するよね?」

「遅刻ぐらい……誰だってするわよ……」

「名前の中に『お』と『と』が入るよね?」

「……………うん」

絶え止まぬ機関銃のような質問攻めに流石の杏も滅多打ちにあい、最後には認めてしまった。

これだけの事を正確に言い当てたとすると、本当に掠は自分の想い人を知っているのかも。と、えも言えぬやきもきとした感情が心を塗りつぶしてゆく。

「妹の言うとおり、自分は今恋をしている。告白するつもりは、今のところないけれど、いつか……その時が訪れたら、後悔しないよう思いを伝えたい。そして、出来れば上手く行く事を……」

想いを寄せる人の顔を想像の中で浮かび上げ、赤面する。

妹の本心を聞き出す為の計画が、いつのまにか自分の本心すらも明かされてしまいミイラ取りがミイラになってしまった気分の杏だった。

「それじゃあ私、お姉ちゃんの応援するから、お姉ちゃんも……その、私のこと手伝ってくれると、嬉しい……な」

「その台詞。自分を除いて本当はあたしが言うつもりだったのに、まんまと掠にしてやられちゃったわね」

「えへへ、ちよつとは成長したかな?」

「そうね、この調子で行きましょう。あたしも出来る限り幸希との中が進展するように手

伝うわ」

「ありがとう、お姉ちゃん」

かくして、協定を結び協力関係になった双子姉妹は仲良く手を結び、その思いが成就するのを夢見る。

だが、それは一方的な感情が生んだ仮の協力関係。

恋愛とは、双方の想いが一致してようやくスタートラインにつく事が出来るのだ。今の片思いのままでは、まだ本戦を控えた予選程度。本当に大変なのは、これからなのでから。

『岡崎朋也』に恋する『藤林杏』

『藤林杏』に恋する『榊原幸希』

『榊原幸希』に恋する『藤林椋』

想いは決して交わらず。感情の通った線は混線し、やがて過剰に膨らんだ感情は行き場を無くし苦悩するしかない。

お互いいつまでも振り向かない、目の合うことの無い相手を見続ける悲しき連鎖。

叶わないということが、どれだけ辛いのか——彼女達はまだ知らない。

そう、いつまでも……俺の想いは身を結ばないんだ。

話を聞いてしまったのは偶然だった。

いつまで経つても戻ってくる様子の無い二人を待ちきれなくて、迎えに行つたその場所まで目にして耳にしたのは、

「うえ!? あたしに好きな人がいるって、そ、そんなわけないじゃない! 何をいきなり言つてんのよこの子はっ」

思つてもみなかった杏の想い人の話——。

そこから、先の掠がした質問の答えを聞いた瞬間。俺はトイレに向かつて走つていった。

手に持っていた彼女らの荷物を手放して、一目散に逃げ込んだ。

男子トイレには一人先客がいたが関係ない。俺の存在に気が付き顔を見た瞬間怯えていたが、無視して個室に飛び込んだ。

わかつてた。そんなことはもうとづくにわかつてたんだ。杏の好きな人が『お』かぎき『と』もやだつて事はどうの昔にわかつていた事だ……けど。

「これは、思つていたのと……突きつけられたのじゃ、威力が違い過ぎるだろ……」

悲嘆する事しか出来ず、行き場のない俺の感情は行き詰まり懊悩し続けるしかない。

初恋は実らないなんて言葉は敗者の負け惜しみだと決めつけていたが、今ほどそれがよくわかる。

でもだからって諦める事なんか出来ない。

負けず嫌いなのはサッカーをやっていた時からの名残だろう。

俺は——どうしたって杏の事が好きなんだ。

加減頭は駄目だつて理解してくれないと困る。

■はそんなことお構いなしなんだろうが、俺が後で治療しないと痕になつて残つてしまう。そしたら、今日の掠みたいに指摘されてしまう。それだけは勘弁して欲しい。

と言つた所で聞く耳なんか持つてないけど……………。

——地獄は空が白むまで続いた。

世界は夜に終わつて、朝に始まる。

一日で完結した完全な仕組みが出来上がったら、人間という種族はきつと淘汰され絶滅するだろう。

感情という無用の長物を抱えているせいで種の繁栄に支障をきたしてしまふからだ。きつと、人間は人類の存続が危ぶまれていると気が付いた時にはもう、後戻り出来ないところまで来てしまつているかもしれない。

いつそのことみんな滅んでしまえばいいときえ今は思える。

失恋の痛みに傷ついている俺は自暴自棄になつていられるのかもしれない。

なんかもう、全てがどうでもよくなつてきた。目の前に全人類が消滅するボタンがあつたら迷わず押すかもしれない。あ、でも杏がいなくなるのは嫌だから、杏以外全員

がいなくなれば俺の勝ちなんじゃ……。

「はあ……………阿呆か」

逆に考えると、杏以外の全人類がいなくならない限り俺と杏は結ばれないということだ。そりや望みが薄すぎる。自己嫌悪も程々にしなくては。

ふと、気まぐれに空を見上げると、この世の何よりも高い位置に君臨する青く澄んだ大空が変わらずにあつて、穢れを知らない無垢な色の雲が優雅に、気持ちよさそうに漂つていて、思わず羨ましい気持ちちが芽生えた。

悠然と咲き誇る桜の木が風に揺られ、花びらを散し青空に装飾を施していく。空は、世界はこんなにも広大なのに、俺は小さな事でいつまでも悩んでいる。

通学路に立つ俺の脚はさつきから一步も動いていないのだ。

率直に申して、学校に行きたくない。

「昨日の今日で、杏と椋の顔は見れないよなあ……………」

よし、今日はサボろう。サボタージユだ。

そうと決まったらいつものたまり場兼休憩所の、春原の部屋にでも行くか。

善は急げと言う。このサボりは俺にとつてのジャステイス。よつて、急ぎ足で学生寮へと向かつて桜舞う道程を進みながら、現状を振り返つてみる。

杏が椋に対して岡崎が好きだと言つたも同然な事を言つたので、きつとあの仲の良い

双子姉妹は協力して岡崎にアプローチをしていくかもしれない。そうなった場合、岡崎の気持ちがお血迷って杏に向いてしまう可能性だってある。というか、杏が岡崎に告白したらその事実だけで俺は死ぬる。

命を大事にする為にも、岡崎には早く恋人を作ってもらわなくてはならない。

現在、候補として俺が認知しているのは古河渚という小動物しか居ない。でも、この少女は岡崎にはピッタリだと思っている。明確な理由を列挙出来るわけじゃないが、予感のような、それが一番しっくりくるという感じがしたのだ。

だから、俺は杏が岡崎に告白するよりも先に、あの二人をカップルにしてしまえば良いんだ。

なんだ、当初とあんまり計画に変更はないじゃんか。しいて言うなら、杏がいつ行動を起こすか分からないという一点のみだ。

「春原、お茶」

「僕はいつからアンタのお茶汲みになったのさ!？」

学生寮に到着し春原の部屋に来て早々の第一声にお気に召さなかったらしい。

ベッドの上で寝転んで漫画を読んでいた春原が飛び起きて、いつもの面白い顔をしな

がらツツコんできた。

「そんな風に思うわけないだろ、春原は俺の奴隷じゃん」

「友達を奴隷扱いする奴の言う事を聞くわけないだろ！」

「朝っぱらから五月蠅いぞ。ここは学生寮なんだからもう少し静かにしようぜ」

「原因はアンタツスけどねえ！」

お決まりのやり取りも終わった所で、喚いている春原を無視していつもの炬燵に潜り込む。

こいつと知り合って二年が経つが、あの時はこれほど顔を合わせるとは思ってもみなかった。

電源の入っていない炬燵に身を任せ、乱雑に散らばっている周辺の漫画を手にとって読み始める。あつ、この漫画この前も読んだ奴だ。

「はあ……：そういうえば二年生の坂上智代って女子、榊原は知ってるか？」
俺を糾弾することを諦めた春原はそう言ってきた。

その名前は最近耳にした事もあつて覚えていた。一度忘れてたけど、杏のおかげで思い出したのもよく覚えている。

「あれだろ、銀髪の美人な女子だったら知ってるぞ」

「そうそう、その坂上智代なだけだし……ああ、今思い出してもムカムカする」

話題を振ってきた張本人が虫の居所が悪そうに顔を顰め肩を震わせていた。

何かあったのだろうか。あったとしたら、多分昨日なんだろうけど、生憎その時俺は違う事をしてたからこいつが何をしていたかは分からない。

普段からいつも一緒に居るわけじゃない俺達は、それぞれ好きなように行動しているから、大体の事が事後報告のような形になってしまう。

基本的に一人での行動が好きで俺としては、この岡崎や春原との付き合い方は好ましく思っているから気にしないが、そのせいで面白い場面を見逃してしまうのはちよつと悔しい。

「なんだよ、因縁でもつけて返り討ちにあったのか？」

「……もしかして岡崎から聞いてた？」

マジかよ。

くそつ、そんなの絶対に面白いに決まってるじゃんか。なんであの時の俺はこいつの後を着けなかったんだ。……あ、杏と一緒に居たんだった。

しかめっ面が一転、ばつの悪そうな表情になる春原を見て思う。

この男は俺からしたら雑魚だけど、元運動部だったこともあって身体能力は良いはず。にも拘らず女子に敗退したというのはどういう事だろう。そんなに強かったのだろうか、坂上智代という女子は。

「岡崎からは名前程度しか聞いてなかったな。それにしても、お前本当に負けたの？」
「うっ……ま、負けてないって！ あの時は相手の力量を確かめる為に手加減してたからね、まあサーベルってやつさ」

「すぐにわかる嘘を吐くなよみつともない。それと、サーベルじゃなくてサークルだからな、物騒だろサーベルじゃ」

正確にはサービスだと思うが、面白いからどんどん間違った英語知識を植え付けてやろう。去年からの教育の賜物があつてか、春原はたまにおかしな横文字を引用する。それを岡崎が正して、また俺が間違った教育をするのが一環になっている。

春原は俺と目を合わせず明後日の方向を向きながら、苦し紛れの言い訳をしているが、絶対にそれは嘘だ。きつと本当にコテンパンにされたんだろう。

詳しい話が良く知りたいので、読んでいた漫画を床に置いて、うぐぐと唸っている春原に体を向け問うてみる。

「何者なんだ？ その坂上智代って女は」

「……岡崎から訊いた話じゃ、昔この町では結構腕を鳴らしてた奴らしいよ。僕はそんなの認めないけどね、きつと女の色香を武器にしたに違いないよ」

「お前って、清々しいぐらいにゲスい考えをしてるな」

「ゲスってゆーなっ！」

俺の評価に不満の声を上げる春原を無視して、坂上智代の話を振り返って考えてみる。

記憶が確かに作動しているのなら、俺はこの少女と会った事が……もしかしたらあつたかもしれないし、無いかもしれない。あるとすれば、春原が言っていた昔この町で暴れてたつてことぐらい。

出会うとしたら、この時期。俺が一年生か二年生の頃だ。

最も自暴自棄になっていた刻。

何もかもが嫌になって、でも完全に逃げる事が出来ない世界の狭量さに嘆いていた時期だ……。

「ま、僕もこのまま終わる人間じゃないけどね。今日もアイツにリゾンベだー！」
(リベンジ……な)

都合の悪いことは引きずらない性格の春原は、拳を高く突き上げて間違つた英語でそう宣言した。

この点は彼の美点とも言えるだろうが、同時に悪い点でもあるから諸刃の剣なのだ。

春原陽平という人間は、良い所を覆すほどの弱点を多く持つ、何とも愉快な友人である。

「聞き手に回つてたから分からなかったが、そもそもなんでお前、その女子に因縁吹つか

けてるわけ？ ナンパしてフラれたのか？」

「確かに顔と体は良い感じだったけど、中身が僕の好みじゃないね。幸希はあの場に居なかつたから知らないだろうけど、話ぐらいは聞いただろ？ ほら、昨日の他校の連中が乗り込んできた話」

「……ああ、そういうえばあつたなそんな事も。それが？」

嫌なことを思い出してしまった。

そういうえば、春原もあの場に居たのだった。

「あの時僕も観戦してたんだけど、いきなりあの荒っぽい女が他校の奴らに向かつて行つたんだよ」

「……………へー」

「で、一緒に見てた岡崎が加勢しようとしたんだけど……その時、来たんだよ『奴』が」
神妙な面持ちで話を続ける春原。

だが俺はそれどころじゃなかつた。

コスプレをして乱入し場を乱した俺は、杏から訊く限りじゃ最低な評価を下されたらしいからな。

岡崎にはもう知られてしまったけど、ここで馬鹿面をしている春原はまだその事実を知らない。知られたら記憶が無くなるまでコイツの頭を殴打しなくてはならない。他

にも口封じをする方法はあるんだけど、それ以上に春原に笑われる方が俺には悔しい。

黙ったまま思案している俺を見て、どうやら春原は真剣に聴いていると勘違いしているのだろう。表情がいつしか得意気なものに変わっていった。

「なんと！ 仮面ラ○ダー○ウガのコスプレをした奴が乱入してきたんだよっ！」

「うんうん……」

「僕も驚いたよ。まさかそんな馬鹿みたいな奴が居るなんて、とんだ勘違い野郎だよね。しかも、喧嘩の仕方が卑怯でえげつない！ なんか面白いから『目立ちたがり屋の卑怯者』って噂を広めといたよ」

「……………」

まさかこんな所に犯人がいたとは。

飛んで火に入る夏の虫とはこういう事を言うのだろうか。噂の出所を探すまでも無かった。

何も知らない哀れな春原は調子に乗ってきたのか、挙句の果てには音量を上げて笑い声混じりにまくし立てる。

「あははははっ、今頃そいつ、学校で肩ロースが狭い思いをしてるはずだよっ！ あははははははっ！」

「……………オーケイ分かった。言い残す遺言はそれで構わないな？」

「はははははっ……えっ?」

「——喰らえ! 震天裂空斬光旋風滅碎神罰割殺撃!!」

「ぎゃばああああ——!!」

無事諸悪の根源である春原陽平を駆除することに成功した俺は公園に来ていた。

怒りの感情が赴くまま陽平を攻撃し意識を手放してから数分、漫画を読んで時間を潰していたら徐に目を覚ました春原は前後の記憶を失っていた。目が覚めた瞬間に俺がなぜこの部屋にいるのか驚いていたが、持ち前の頭の軽さでそんな細かいことはすぐにどうでもよくなり、いそいそと学校へ登校していった。なんでも、借りを返さなくてはいけない荒っぽい女がいるかららしい。

当然、そうなると俺は部屋に一人になるのだが、寮生でもないのに一人で入り浸っているところを寮母である相楽美佐枝に見つかりと厄介な事になるのを十分知っていた為、仕方なく公園に来た次第である。

今頃学校では授業が始まっていて、春原は坂上に振り返りにされてどこかで寝ているのだろう。

園内の一角にあるベンチに腰掛け一息吐くと、位置的に公園内の殆どが見渡せるよう

になった。

朝の散歩をしている老夫婦や、小さな子供とその母親が楽しそうに遊具で遊んでいる一方で……：……どういいうわけだか、平日の筈なのに小学生が野球をしていた……：……のは別にいい。きつと創立記念日か振替休日とかなんだ。だが……：……どうしてそんな小学生の集まりに——大人がいるんだ？

「よーし小僧共、かかつてこい！」

俺ぐらいの年の不良が更生に失敗してそのまま大きくなつたような風貌の大人は、啞え煙草をしながら金属バットを相手ピッチャーに掲げていた。というか、小学生相手に何偉そうな事言ってるんだあのおっさんは。

あれじゃあ餓鬼共もムカツとくるだろう、と思つたがそんなことは無かつた。子供達は慣れてる様子で、むしろそれが心地良いのか楽しそうに破顔して笑つているのもチラホラいたりした。

せつかくだからこの集団を観察することにする。

まず大人げなさそうなおっさんが見るからにバッター。そしてキャッチャーが一人、審判は無し。ピッチャーが一人と、その他外野……：……実質ボール拾い要因が数人。

結構広さのあるこの公園で野球をするなら丁度良いぐらいの人数だった。きつといつもこの公園で遊んでいる経験から来ているのだろう。

「やれー！ 今日こそアツキーを打ち取るんだ！」

「はっ、やれるもんならやってみな！ てめえらに負ける俺じゃあねえんだよ」

外野に居る少年達の内一人がピッチャーの少年に向かつて激励し、おっさんがそれを受け取って挑発で返答した。不敵な笑顔を浮かべてバットを構えるおっさんの姿は堂に入っていて、それだけで経験者なのではと思った。

ふと視線を外して他の人を見てみると、皆一様に微笑ましいものを見るように見守っていた。

まるで、この町に受け入れられているような印象を抱いた。

ピッチャーが綺麗なフォームで構え投げる態勢に入った。リトルリーグにでも入っているのか、本格的な投球フォームを崩さずバッターに対して横向きに大きく体を開き、豪快に腕を振るった。

小学生にしてはなかなかの速球は、キャッチャーに向かつて一直線に走った。正々堂々完璧に勝つ。そんな念が込められているような小細工無しの真っ直ぐな球は、バッターのストライクゾーンに吸い込まれる。

「へっ……もらったあああああ!!」

勝利を確信した雄叫びを上げながら、おっさんは勢いよく金属バットを振るった。

瞬間、カキーンと突き抜けるような快音が鳴り響き、少年が投げた球は天高くまで跳

ね上がった。野球少年達は反射的に打ちあがった球を見上げ、残念そうな顔を浮かべるが、それはすぐに嬉しそうな表情に塗り替わっていった。

「よっしゃ、後ろに行つた！ ファールだつ！」

「ちつ、少し躊躇つちまつたか。あんまり飛ばすとまた窓割つちまうから、思わず手加減しちまつたぜ」

「おいおい、また」ってなんだよ、また」って。あのおっさんは過去にも何回か窓を割つた経験があるのか？

おっさんの言動に呆れながらも、打つた球の行方が気になつて目で追つてみると、気がつけば俺の頭上から真つ逆さまに落下してきた。嘘だろおい、マジで俺の所に落ちて来てんじゃねえか。こりや避けるしか……。

「あつ！ にいちやーん！ そのボールキャッチしてえー！」

「おいずりいぞてめえ！ それじゃアウトになつて俺の負けになつちまうじゃねえか。おいそこのおめえ！ いいか!? 絶対に、とるんじや、あ、ねえーぞお！」

思いがけない所で思いがけない選択を迫られてしまった。少年には頼られ、おっさんにはお笑い芸人の振りみたいな感じに、しかも最後の方は歌舞伎役者のような動き付きで止められた。

どうしよう。別にこのまま避けても良いんだが、そしたら少年達にはがっかりされて

しまう……つて、あれ？別に良いかそれぐらい。でもあのおかしなおっさんの言うとおりにつていうのも、なんだか癪だ。

逡巡した後、結論として俺はボールを取ることにした。

ベンチに座ったまま顔を上げ球を見ると、空は今ちようど無風らしく風に流されることなく真つ直ぐな軌道を維持していた。これなら野球経験の浅い俺でも簡単に取れる。

おっさんが向こうで何か言っているのを無視して落ちてきた球を素手でキャッチする。バチツと手の平を打ち付ける音と共に皮膚が痺れたけど、それだけで済んだ。

「おーい小僧、ボール持つてこっち来てくんねーか？」

バッターのおっさんが金属バットを持った右手を振つて俺を呼んでいた。

キャッチしてしまつた以上、この呼びかけを無視するのは気が引ける。あのまま避けて、投げ返していれば丸く収まつたのだろうがもうやり直しは効かない。

固まりつつあつた腰を上げ、無邪気なやんちゃ坊主のような笑顔を振りまくおっさんの前まで行き手渡しをした。

そして一言。

「ほい、バッターアウト。おっさんの負けだな」

ニタリと出来るだけ意地の悪そうに口を歪めてそう言つてやつた。人を小僧呼ばわりするからだ。

その瞬間。おっさんの笑顔は凍りつき、眉が怒りでしなつていった。

「んなつ!? てめえ……良い度胸してんじやねえか、名前はなんて言うんだ?」

「榊原幸希」

「けっ! みみっちい名前だな」

ぺっ、と加えていた煙草と一緒に言葉を吐き捨てた。……と思つたら、ちゃんと吸い殻を回収した。どうやらルールはちゃんと守る人らしい。

俺の名前をみみっちいと申すか。それじゃあ、さぞかし貴様の名前は素晴らしいのだろうな。

「じゃあ、おっさんの名前はなんて言うんだよ?」

「俺か? 俺の名前は『古河秋生』ってんだ! どうだ、イカす男の名だろ?」

「子供相手にムキになつてる時点でイカすもクソもないだろ」

「ちっ、生意気な小僧だな」

惜し気もなくそこまで自分を称賛できるつても、ある種の才能のようなものなんだろうか。

自信家というのは、それだけで人生を得た気分できているのだろうか、目の前で息巻いてる古河とか言うおっさんを見ていると若干の羨望と嫉妬の念を覚える。

……ん? 今このおっさん、自分の名前を『古河秋生』って言つてたよな? それつ

てもしかして……。

「なあおっさん……」

「おっさんじゃねえ、俺の事は『秋生様』と呼べ。つたく、一人娘が居るつつつても、まだまだ俺は現役だぜ」

「それじゃあ『おっさん』……古河って言つてたけど、もしかして、その娘つてのは『渚』つて名前じゃないよな？」

「たまに頭を過ぎる俺の予感つてやつはなかなかの高確率で当たるんだが、今回は……」

「だからおっさんって呼ぶ……おめえ、渚の知り合いか？」

文句を言おうとしていたおっさんがビデオの一時停止を押したみたいだに静止し、そして疑心混じりの声が聞こえてきた。無理も無いだろう。会つて早々、得度も知れない男に娘の事を言われたんだ、将来俺が娘を持つたら同じ反応をするだろう。

やはり、反応と台詞で判断する限り、どうやら俺は正解を引き当てたらしい。まさかこんな所で古河の親父と遭遇するとは、思つてもみなかった。

とりあえず、あらぬ疑いを晴らしてもらおう為に出来るだけ自然な口ぶりで説明しよう。

「知り合いつつても、俺の友達の友達つて感じだよ。岡崎朋也つていう奴經由で顔合わ

せをして自己紹介したぐらいいだ」

出来るだけわかりやすく伝えた瞬間、おっさんは破顔した。

「なあんだよあの小僧の友達か、早く言えよっ！ それなら渚の友達も同然じゃねえか！」

「岡崎の事しつてんのか？」

まさか、あの二人は既に親とも面識があるほど公認の中に発展していたのか？

だとしたらコッチとしては嬉しい誤算だ。余計な手出しをする前からここまで進んでいるなら、俺の計画を先に進めるのも容易いかもしれない。

先の見えない急な坂道かと思ったら、案外緩やかだったのかも。

「知ってるものにも、昨日家で晩飯食つてったぞ。……そうか渚の友達か」

「マジかよ……！」

岡崎ってそんなに凶々しい男だったっけ。友達とはいえ、精々一年と半年ぐらいの付き合いではそこまでは俺も理解できなかったって事だろうか。

硬派を気取っているけど、結構軟派な性格してたんだな。

「おい、そういえばお前学校はどうしたんだ？」

「行く気がしないからサボりだ」

「それじゃあ暇なんだな？ よしっ、お前も野球するか！」

なんでそうなるのさ。脈絡無さすぎだろ……。

「ばっちこーいっ!!」

金属バットを掲げ相手ピッチャーをけん制する。多分俺のポジションが言うセリフではない気が、言った後にしてきた。

バッターは俺。ピッチャーは古河のおっさん。

突然出されたおっさんの提案に、特にする事も無く暇だった俺は表向き渋々といった具合にそれを受け入れた。

野球を始める前に、まずどんなチーム分けをしているのかを訊いたら「そんなの、俺VSその他に決まってるだろ」と、法律で決まっているような当たり前の口ぶりで行われた。

子供達は、俺が高校生って事もあつておっさんに勝てるんじゃないかと期待して俺をバッターに勧めてきた。

結果、この通りである。

「俺の剛速球を、てめえなんか打てると思うなよっ?」

「御託はいいから、さっさと投げて来いよ」

丁度、溜まりに溜まった鬱憤とかその他負の感情諸々を発散したかった所だ。この機会に全部消化させてもらおう。

両手で握ったバットのグリップを、更なる力を込めるために雑巾を絞るようにギリギリと音を立てて握りこむ。

おっさんが投球と同時に、体に喝を入れるような声を短く発し、手元を離れた球は一直線に、さっきの少年の球速なんかとはまるで違う速さで迫ってきた。

「……………うおっ……………っ!?!」

遅れまいと咄嗟にバットを振ったが、球を捕らえた感触は感じられず無様にも空振りをしてしまった。

……………なんだこのおっさん、もしかしてプロか何かか？ 明らかにバッティングセンターで最高の設定をした機械並みに速いぞ。しかも、この場所が公園という開けた空間のせいもあるのか、視界が広くなる代わりに正面からの速球に集中出来ない。球が投げられた瞬間、それ以外の物が目に映って気を取られてしまう。

クソツ、情けねえ。

「どうだ？ 俺の魔球の威力は。速過ぎてバットが遅れてたぞ？」

「……………今のはちよつとしたハンデってやつだ。相手の力量を推し量るためのサービスだよ」

ヤバい。今の俺、さっきの春原みたいな事言ってるよ……ショックで死にたくなってる。

けど、情けない強がりを言いたくもなる。

俺は、負けず嫌いなんだ。サツカーの試合の時だって、死に物狂いで食いついて喰いついて、悔いのない試合結果を残してきた。諦めの悪さじゃ……一級品だ。

「次イ！ あと二球あれば十分だ。その球、見事に場外までかつ飛ばしてやるよ！」
「威勢が良いじゃねえか。嫌いじゃないぜ、そういう奴は……よつー！」

ピッチャー第二球。

俺の啖呵に触発されたんだろうか、おっさんの投げた球筋はさっきとほぼ同じ。球速だって変わらず、目が覚めるような剛速球だ。小細工など一切無用のど真ん中ストレート。

一回目はあっけに取られた。だけど、二回目はもうそんな事はない。よつて前回よりも気持ちの面では準備万端で、あとはそれに体の反応速度を乗せるだけ。

タイミングさえ合えば、十分に打ち返せる。

「……………らあ!？」

何だ今の!？」

バットは完全に球を捕らえていたのに、爽快感のある快音はせずにヂギイツとバット

から聞こえの悪い不協和音が奏でられただけだった。当然、球を打った感触もあまり無かった。

外野側を見ても球が飛んで行った様子はない。もしかしてと思つて後ろを振り向けば、キャッチャーをやっていた少年が後ろに転がつていった球を拾いに走っていた。

要するに、

「フアーロール！」

そうキャッチャーの少年が言つた通りだ。

惜しくもバットを掠らせるだけで、前には飛ばすことが出来なかつたんだ。

「どうしたあ？ さっきの威勢はどこ行つたんだ小僧？ もう後がないぞ」

「ぬかせつ、あと一球あるだろ。勝負つてのは最後の最後まで諦めなかつた奴にこそ相応しいんだよ」

「違いねえ……それじゃあ、征くぞ小僧！」

第三球を投げる為におつさんが構える。

俺はその手にある球だけを見ながら、どうしてさっきは掠つただけに終わったのかを考えていた。

真つ直ぐな球筋に確かに俺のバットの位置は合致していた筈。なのに、結果はフアーロールという予想外のものだった。……考えられるのはただ一つだ。あのストレートが、た

だのストレートじゃないって事だろう。

一つだけ、その答えに近いだろう物を俺は思い出した。野球では、凄い投手の投げるストレートはホップアップしているように見える事があるらしい。実際には多分してないんだろうけど、打席に立つて実際に味わったことのある打者はそう錯覚を起こしてしまうのだろう。上から下に下がる変化球はポピュラーだから目が慣れていて、浮上するような球筋には目が慣れていない。人間の目は『嘔吐き』だから、それに対応することが出来ないんだ。

恐らく、おっさんの投げる球も“それ”なんだろう。

おっさんが体の向きを横にして、大きく開き、さつきとまたも同じ剛速球を投げてきた。

三球連続同じ球種というのは、俺の事を甘く見ているのか……それとも、試されているのか。きっとそれは後者なんじゃないかと俺は思う。

だから——それに応える為、俺は二度の辛酸を糧に三度目の正直を——。

体内の不純物が全て吹き飛ばような快音は空に向かい、雲を突き抜け、天高く駆け上った。

「ほらやるよ、飲みな」

勝負の後、俺は再びベンチに座っておっさんから手渡されたジュース缶を受け取っていた。

冷たくなっている缶のプルを開けて炭酸が弾ける音を聞きながら、隣に座って煙草を吸っているおっさんの方を見やる。

「惜しかったな、さっきの……………すげー高いピッチャーフライ」

「……………次は絶対に大気圏外までかつ飛ばす」

「そりや、次が楽しみだな」

かかか、とやんちゃ坊主な大人は笑い、俺はそれを悔しそうに睨めつけながらジュースで喉を潤した。

結果からいって、悔しいけど、ホントもうかなり悔しいけれど……………俺の負けだった。

おっさんの投げた球にジャストミートした打球は、思った通りのコースと違って天高く打ちあがってしまった。多分、最後に力み過ぎて若干バットの位置が下になってしまったのに敗因があったんだと思う。

ただでさえ大きくない野球の球がみるみる小さくなって、戻ってきたのはおっさんの頭上。始めのおっさんが俺の頭上に打ったファールの逆を、そのままお返しするように

なつてしまった。

「死ぬほど悔しい……けど、たまにはこんな風にすつきり負けるのも、悪くないな」

昨日から抱えていたいろんな負の感情を綯交ぜにした鬱憤は、さつき打った球と一緒に多分天まで吹き飛んでいったんだろう。

心の闇に一筋の光明が差したような気分だった。心が洗われるっていうのは、きつとこういう事を指すんだろうと思う。

「だろ？　こうやって、遊びにマジになって、笑い飛ばせるような『負け』ってのも悪くないだろ」

「ああ、今まで情けない悩み事とかで落ち込んでる自分が、馬鹿らしく思えてきたよ」
「バツカおめえ、悩み事ってのは大体が情けなくて恥ずかしいもんだ。でもな、それが人を成長させるんだ。情けないってのも、それはそれで大事なもんなんだぜ」

胸を打たれたような気がした。

同じ男性としてだからだろうか。それとも、このおっさんの精神年齢が近いと思つていたからだろうか。ふと見せたその顔は、年相応の大人な表情をしていて、よくわからない言葉にも含蓄があるように思えた。

悩みが人を成長させる……だから情けないのも恥ずかしいのも全部、人には必要な、大事な感情。

おっさんは煙草を大きく吸い、それを吐き出し続きを話し始める。

「お前が一体何を悩んでんだかは知らねえし、知りたくもないけどな……そもそも俺は悩みが無い人間なんて信用ならねえ。人は壁にぶつかってそれを越える為に悩み続けるもんだ。」

言ってみれば、お前の「それ」だって、壁を越える為に必要な手段なんだ。胸張って
いこうぜ、男らしくよ！」

「……まさかこんなおっさんに説教されるとは思わなかったよ。らしくもなく落ちこんで、女々しいいたらありやしねえ」

そうだ。いちいち細かい事気にしてもしょうがねえ。

杏に対する後ろめたさも、岡崎に対する嫉妬と友情も、俺にとってはただの壁だ。今を後悔する前にやりたい事を成し遂げるのが先決だ。

後悔なんざ、後からいくらでも出来るんだ。

「ジュースありがとなおっさん。そろそろ……面倒だけど学校に行くわ」

「おう、行ってこい。でもって特大のホームランでも打ってこい。俺はこの向かいにあるパン屋をやつてんだ、気が向いたら今度遊びにでも来な。再戦なら受けて立つぜ」

そう言つて指さす方を見てみると、確かに『古河パン』という看板がかかっている家があった。今度近くを通つたらパンでも買いに行くか。

おっさんに向かって俺は尊大な笑みでもって返答をし、その場を後にした。

背中から聞こえるのは、少年達のはしゃぐ声と……おっさんの打ったバットの快音だった。

それを聞き届けながら、俺は学校に向かって足を進めた。相変わらず杏の事は好きで好きで愛してるけど、岡崎だって親友みたいなもんだ。嫉妬はあれど、恨み嫌いはしない。だから、俺は俺のやり方で杏を振り向かせてみせる。立ちはだかる壁を全部蹴破つて、見事ゴールに辿り着いて見せよう。諦めの悪い俺には、こんな単純な事しか出来ないんだから。

——最後に、背後でガラスが割れるような音と共に、おっさんの絶叫が聞こえて来て。面白い場面を見逃したと後悔したのが、立ち直つてから最初の後悔だった。

第五回：風の少女

真面目な奴ほど失敗には弱いらしい。

今はもう顔も思い出したくない程憎らしい男の言葉だが、たまに吐く言葉には反骨心を持ちながらも脳内に色濃く残る物が多かった。その結果、俺という人間は厭に歪んだ性格になってしまったが、それ自体に後悔はない。

男が言うには、真面目な人間とはそれ以外の人間に対して心の何処かで、真面目な分だけ自分の方が勝っていると思う節があるらしい。それ故に失敗という烙印を嫌い、己の純白な人生に泥が被る事が何よりも苦痛を感じるのだ。汚れたことの無い者は、その汚れの落とし方を知らないからそれ以降立ち直る事が出来る人が少ないらしい。それは裏返せば失敗が怖いから真面目になるという事だと思う。

なんとも偏見に満ち満ちた言い分ではあるが、まだ社会や大人をよく知らなかった自分からすれば、この男の言葉は世界の全てだった。教えられた事を嘘だという疑惑すら持たず、鵜呑みにしてしまいう自分にも疑問を抱かなかった。

洗脳といえばかりやすく、でもそれは俺にとつての「教育」だった。

だから俺は真面目には生きられなかった。ふとした失敗で自分が瓦解してしまうの

が怖かったから。

唯一真面目に取り組んでいたサッカーさえも、簡単に捨ててしまった。

不真面目に生きてきた今の俺は、あの男の望んだ人間になってしまったのだろうか。今ではもうその答えを訊くことも出来ない。

「真面目な人は弱い……だけどそれは、己を曲げない尊い信念の強さだと……思うけどね」

呟いたところで誰の耳にもそれは届かない。

静謐な空気を醸し出す寂れた学校の廊下は、しばしの余暇を満喫するかの如く俺の呟きに無視を決め込んで霧散させた。

『古河秋生』という大人な風貌のくせに子供っぽい、それでいて決める所はちゃんと決めるという、ハードボイルドの上っ面だけを模したような男と公園で別れてから学校に到着したのは良かったんだが。生憎と今は四時間目の授業中だった。

当然の事ながら、そんな授業中に俺みたいな「健康優良不良少年」が教室に入ったらクラスのみんなは絶対良い顔をしない。

杏に振り向いてもらう為に読んだ雑誌では、さりげない気配りが出来ると良し、と書いてあった。この前は裏目だったけど、今回は間違っつてはいない筈。態々受けるつもりもない授業を中断させても、誰も得をしないんだからここは素直に昼休みを待った方が

良いだろう。

しようがないからどこかの空き教室にでも行って、惰眠を貪ろう。

我がクラスの教室に向かっていた足を止め、踵を返して人が居なさそうな教室を探して俺は彷徨った。

五分ぐらい歩いた時だろうか。人の気配が薄くなった廊下を歩いていると、微かな、物音よりも小さい声のようなものが耳に聞こえてきた。

始めは気のせいだろうと思っていたが、歩き進むと次第にその声はちゃんと聞こえるようになってきた。

声はこの先の教室から聞こえる。

俺以外にもサボりの生徒がいたのか？

気になった俺は声のする場所——空き教室らしき所の扉を開けた。

「……………」

そこには一人の少女が最後尾窓際の席に佇んでいた。

腰ぐらいいまで伸びた深い緑混じりの黒髪に腰辺りに大きなリボンが結んであり、小学生なのではと思える程幼い容姿の少女が、俯いて垂れた前髪の隙間から覗かせる瞳は何かを凝視している。

一心不乱なその眼差しは手元に持っている木の彫刻だけを見ていて、俺が扉を開けた

音にも、入ってきた事にも気づいていない。

何を彫ってるんだ？　と、思つて少女が俺の存在に気が付いていないのを良い事に、凶々しく距離を詰めてみた。

「……………ほう……………」

一本の彫刻刀で顔くらいの大きさの木をひたすら彫っているが、これは……………。

「……………星……………いや、ヒトデ……………なのか？」

「……………っ!？」

直観で感じたままを言つてみたら、少女の肩がビクンと跳ね、眠たげな意思の無い瞳が俺を見た。

背筋が凍つた——。

恐怖などではない。意思の無いその瞳を見た瞬間……………あまりの存在の儚さ、危うさに震えたのだ。一度目^{ひとたび}を擦つて見直したら居なくなっているような、蜃気楼を目の当たりにしたような陽炎のような存在に見えてしまった。

陸に上がった魚の如く呼吸の仕方を忘れてしまい、息がつまる思いがした。その瞬間——。

「わああああああ——!！」

少女が悲鳴を上げて座っていた椅子から立ち、脱兎の如く教室の隅まで逃げて行つ

た。猫に追い詰められたネズミのように、隅で固まり俺に怯えるような視線を向けている。

悲鳴のおかげで俺の正体不明の悪寒は去ったが、人を見るなり喚いて逃げるとは失礼すぎる。不良なんて言われてしまっている俺に対して礼を求めるのもお門違いだろうが、だとしても少々傷ついたぞ。そんなに俺の顔って怖いのか？

こんな場面を教師が見たら、完璧に俺の所為になってしまう。きつとあらぬ疑いを掛けて俺をまた停学まで持つていくだろう。それだけは避けたい。そうなったら俺は杏と話すどころか、会う事さえ儘ならず、帰りたくもない家に監禁状態になってしまう。

ここは穩便に、出来るだけ優しく懐柔するのか吉！

そうと決まればやることは決まっている。

「悪い悪い。一体何をやっているのか気になったもんだから……それ、もしかしてヒトデ……だよな？」

「はっ……もしかして、ヒトデ協会の人でしょうか？」

なんだよそれ……知らない。

でも、さつきまで怯えた様子だった少女の強張った表情が若干だが緩んできたような気がする。ヒトデらしき彫刻を握る手も、強く握って赤くなっていた指先が元の色に戻っている。どうやら警戒は解いたようだ。

ヒトデ協会なる謎の存在のおかげか知らんが、今はそれを利用してもらおう。

「ああそうだ、お前の彫刻が非常に芸術的だったからな。協会員としてはそれを見過ごせないから、見に来たんだ」

我ながら苦しい言い訳だ。

こんな行き当たりばったりな言い訳で騙し通せるほど世界つてのは甘く――。

「やっぱりそうですかつ、風子感激です！」

――とんだ甘ちゃんだったらしい。

自分を『風子』と称した少女……この際風子でいいかもしれない。なんか掠とは違って、この少女にはさしていきなり名指しする抵抗感が感じられない。なんだろう、見た目？

ヒトデ協会っていうやつのお全貌が全く分からないままに身分を偽ったが、それが功成し風子は俺に対する警戒心を完全に解いたようだ。証拠に俺を見る瞳が違う。

「まさかこんな所で協会の人と会えるなんて、風子についてはますつ。毎日ヒトデを彫った甲斐がありました」

「……世界中のヒトデを愛する集団、通称『ヒトデ協会』はお前のヒトデに対する愛情を知り、今回の訪問に参った次第だ。風子の持つそのヒトデは、どうして彫っているんだ？」

こうなったらやぶれかぶれだ。一度吐いた嘘には責任を持つのが俺だ。なってやろうじゃないか、ヒトデ協会の人に！

このさつきからやけにテンションが上昇している風子に対する、せめてもの娯楽となるように。成り行きだが、なんか今俺、楽しんでるな。

「どうして風子の名前を知ってるんですか？ はっ、もしかして……風子はもう、ヒトデ協会の人に監視を!？」

「違う違う。さつき自分で自分の事をそう言っただだろが」

「そうでした、風子うっかりしてました。ヒトデ協会の人に会えた感激のあまり、ちよつと自分を見失ってました」

どうしてそこまで協会に歓喜するのか知らんが、風子は一度ヒトデの彫刻を持った手を胸に当て深呼吸を初めた。

一回、二回、とそこまでは順調に行っていたのに……三回目の時に、それは起きた――。

「はああ………っつ」

「何惚けてんだ？ おい、ちよつと！ もしもーしー！」

何度呼びかけても返事も無ければ反応もしない。深呼吸をする姿勢を保ったまま風子は恍惚の表情を浮かべ、心此処に在らずといった感じになってしまった。

甘いため息が小さな口から漏れ、触れれば弾力のありそうなモチモチの頬が上気している。一言でこの状態を表すのであれば、トリップだ。

うーん、どうにか元に戻せないだろうか。このまま帰っても良いんだが、あまり廊下とかを不用心に歩いているといつ教師とバッタリ会うか分からない。となると、選択肢は二つ。

一、何とかしてこの状態を戻して懐柔。

二、放置したまま寝る。

「……………二は楽だけど、一の方が面白いな」

よし一にしよう。退屈は敵だ。惰眠は良くても退屈は俺を窒息させる。よって悪戯決定なわけなんだが、多分年下の、それも女子に下手な悪戯は出来ない。俺は杏に操を立てているから、そこまで露骨にエロい事は出来ない清らかかつ一途な人間なんだ。

出来る事は限られている。俺は制服の裏地の、改造していくつもの収納スペースを作った所から色々な物を取り出した。

『十徳ナイフ』『ガム』『飴ちゃん』『ライター』『輪ゴム』『洗濯バサミ』『携帯型砥石』『瞬間接着剤』『煙玉』『催涙スプレー』『爆竹』『小型打ち上げ花火』『マグネシウムテープ』『自作ピッキングツール』

うむ、実に偏ったラインナップというか、カオスと言えいいのか。とにかくいろいろ

な物が詰まっていた。

この前の不良との戦いの時、岡崎が俺の喧嘩の仕方をしていって……春原が卑怯と評したが、それが間違つてはいないっていう証拠の品々が揃っていた。出来る限りの事をして、何としても勝つ。それが俺のモットー。卑怯と言いたきや好きに呼べばいい。ただし、それなりの報復は覚悟してもらいたい。

「どれを見ても、今の場面には適さない物ばかりだな……」

参った。悪戯を執行したのに、それにふさわしいモノを今の俺は持ち合わせていない。クソツ、俺には無理だつていう神のお告げなのか？

無力感に身を打ちひしがれていると、風子の手元に、気になる物があるのに気が付いた。

「そうだよ……もうしようがないからコレにしよう！」

風子が右手に——ヒトデを持っていない方の彫刻刀を持っている手に触れる。ふっとした擬音が出そうなほど柔らかい、赤ん坊のような手から優しく彫刻刀を取り上げる。

取った際、視界の端に映った痛々しそうな包帯を巻いた右手を見て、俺は振り返り机に向かった。

彫刻刀の刃はさつき見た通り、やっぱり欠けていた。そのせいで風子の手は傷ついて

いたんだ。こんな状態の刃じやまともに木を彫る事も出来ないだろう。

俺はさつき制服に仕舞った『携帯型砥石』を再び取り出して彫刻刀を研ぎ始めた。

水をつけて刃を当て、リズム良く前後に動かして研いでいく。こういった細かい作業から何まで、さして苦も無く出来てしまうのが自慢である俺はあつという間に新品同様に仕上げて見せた。

「まあ、こんなもんだろう」

当然刃がむき出しのこのままじゃ危険なので、さつきまで風子が座ってた机にあった木片を彫り『瞬間接着剤』を使ってくっ付け、簡易的な彫刻刀のキャップを作った。

これを被せて風子も手に戻してやる。

「おい風子、さつきと起きないとヒトデ祭りが始まっちゃうぞー！」

「……………はっ」

思いつきで言ったヒトデ祭りなる架空の祭りに反応し風子は我に返った。……扱い易過ぎてちよつと危ないぞこの女。絶対いつか悪い男に騙される……今がそうか。

「ヒトデ祭りはどうなりましたっ？　というか、ヒトデ祭りってどんなお祭りですかっ？」

「何言ってるんだ？　それより、右手を覚えてみる」

「右手……………あつ、なんか被ってます」

なんかその単語、嫌ですつ。

言われて彫刻刀の変化に気が付いた風子は驚き、俺お手製のキャップを取り外した。取って見れば、そこには光を反射させるほどに綺麗になった刃が顔を出していた。

「わあ……いつの間にか刃が綺麗になってます。もしかして、協会の人があつてくれたんですか？」

「刃が欠けたままじゃやりづらいだろ？ 今度からは手を切らないよう気を付けてヒトデを作るんだ。というか、協会の人って名前じゃないぞ俺は」

「はい、ありがとうございます。えつと……風子、あなたのお名前を知らないです」
ぱあつと花が咲いたような笑顔を浮かべ感謝された。

協会の人という呼称は、俺にしか通用しない。いつか他の人の前で呼ばれたら説明をしなくちゃならないから、それを省くためにもここで名前を覚えておいた方が良かったら説明をう。

なんかもう、既に信頼しきったような表情を浮かべる風子は、俺の答えを今か今かと待っていた。

「俺は榊原幸希。幸せという字に希望の希だ……こんどからはそう呼んでくれ」

「それでは榊原さん……これをどうぞ！」

「んっ？」

手渡されたのはさつきまで風子が真剣に彫っていたヒトデの彫刻だった。

理由は知らないが、あんなに真面目に彫っていた物をそう易々と渡してしまっても良いんだろうか。

「このヒトデはお前の大事な物じゃないのか？」

「大事です。大好きです。ですから、これを差し上げますので代わりに風子のお姉ちゃんへの結婚式に出席して欲しいんです」

「お姉ちゃん……？」

冗談で言っている風ではなかった。少なくとも風子の表情はふざけているようではない。

姉の結婚式とは言っても……。

「俺は風子の姉貴を知らないぞ」

「お姉ちゃんは、この学校で三年前まで美術の先生をしていました」

「三年つて、それじゃあ知ってる奴はみんな卒業しちゃってるぞ」

「そうですか……」

姉を知る人が居ないと分かるや否や、風子は残念そうに眉を顰め気落ちしてしまった。なんだろう、見た目が小学生ぐらいだからか、罪悪感が半端じゃない。

三年前つて事は、その教師を知っているのは今年の三月に卒業した連中が最後だ。三

年にながったばかりの俺が知るわけがない。それこそ、ダブってる奴しか……。

—— いるじゃん一人。

「風子。お前、今日の放課後は何してる?」

「どうしてそんな事訊くんですか? まさかつ、風子をヒトデ協会の本部まで——」

「お前の姉貴を知ってる奴に心当たりがある。そいつを放課後連れて来てやる」

「本当ですか?!」

ヒトデ協会の時点で暗い雰囲気はなくなったが、姉を知っている人を連れてくるといった瞬間の風子は、とても嬉しそうで庇護欲の湧く顔をしていた。杏一筋だけだな。

心当たりは一人いる……古河だ。

あの子は岡崎がいう事が本当だったなら一年留年している唯一の人だ。もしかしたら知っているかもしれない。見るからに真面目で大人しい印象の彼女だ、多分教師の事は顔と名前ぐらいは覚えていられるだろう。

古河について思案していると、ちょうど四時間目を終えるチャイムが鳴りだした。この音つてウエストミンスター・チャイムって言うんだぜ。知らなかったら。

「ああ、多分だけだな。少なくとも俺よりは知っている可能性はある」

「協会の人と言うなら間違いありません。では風子、放課後はここで待ってます」

「わかった。それじゃあ、俺はそろそろ教室に戻るけど、お前は どうする? というか、

何年生だ？」

質問を投げかけたら、風子はばつが悪そうな顔をして俯いてしまった。なんだ、踏んじやいけない地雷でも踏んでしまったのか？

人間訊いてはいけないもの、触れてはならない領域を持っているが、風子にとっては“それ”が“これ”なんだろう。

「……風子………」

「やっぱりいいや、言わなくていい。俺は放課後にまた来るから、その時ここにいてくれたらそれでいい。じゃあな」

「……はい。風子、ちゃんと待ってます」

触らぬ神に祟り無しだ。余計な詮索は大体面倒なもので、映画なんかじゃ早死にの原因の一つでもある。春原とは違って賢く賢い俺は藪を突くような真似はしない。

風子に背を向け教室を去る。きつとまたアイツはヒトデを作り始めるんだろう。手に持った風子からの贈り物を眺めながら、自分の教室に向けて歩く。

棕は今日も教室にいるんだろうか。きつとあのお人好しな性格の彼女の事だ、俺が昨日勝手に帰ったことに腹など立てず、逆に心配をされてしまうかも。杏には辞典攻撃が待っているかもしれないけど。

辞典の恐ろしさを考えると教室に行くのが嫌になってくるが、岡崎に古河の事を訊か

ないといけないからそうもいかない。中庭と演劇部の部室の二回しか会ったことの無い俺は古河渚が何組なのか知らないからだ。

放課後まではまだ時間はあるから、闇雲に探しても見つかるだろうが、どんな説明をして連れ出せばいいのか思いつかない。第一、岡崎の彼女候補の彼女に変な警戒心を持たれたくない。俺が原因で岡崎との仲に不和が生じたらたまつたもんじゃやない。だから、岡崎の協力は必要不可欠なんだ。ついでに二人が更に仲良くなればいいのだが、そこまで上手くはいかないだろう。

「というか、なんで俺はあつて間もない女子の手伝いをしてんだ……う」
完全な独り言だから返事なんか期待してない。きたら逆にびっくりする。

空き教室で偶然会っただけの風子に、なんで俺は手助けをしているんだろう。成り行き嘘に対する罪悪感？ いや、ありえない。あの程度の事で悪いと思うほど俺は人間が出来てない。杏関連ならば落ち込んだだろうが、ほとんどあつたばかりの人に感情移入をするわけがない。

原因ではなく、きっかけなら思い当たるな。風子を見た瞬間の印象は凄まじかった。もしかしたらあれが俺の興味を引いたのかもしれない。

あれこれと風子について考えていると教室まで着いた。というか、廊下に目的の人物と会いたくない人物の二人がセットだった。最悪だ。

「アンタ、あたしを停学にしたいの？　バイク通学は禁止って決まってるでしょ？」

「なんだ、杏はバイク通学なのか？」

「ちがっ……って、幸希っ!？」

教室前の廊下で杏が岡崎を壁に追いやって口を手で塞いでいた。どうせ岡崎が今言っていたバイクについて漏らしそうになっただろう。……くそうかなり羨しい。俺と人生変わりやがれ。

「よう、昼間っから随分面白そうな事やってるな。俺も混ぜろよ」

「アンタねえ、昨日急に帰ったりして何今更何でもないような顔してんのよ？　椋が死ぬほど心配してたのよ!？」

「よう榊原。今日はまた随分遅いな。もう来ないかと思ってたぜ」

「朋也はちよつと黙ってなさい。……さて幸希、どういふことなのかきっちり、椋に説明してもらおうわよ」

妹に関しては自分以上に感情を増幅させる杏が、鬼のような眼光で俺を見ていた。

岡崎は俺の介入によって杏の注意から外れ、これはラッキーと言った顔をしてそそくさと逃げるように教室へと戻っていった。こいつは今凄く贅沢な思いをしていたのに、何故それをこうも簡単に捨てられるんだ。いや、俺にとつてはそつちの方が好都合なんだが。

「悪かった、昨日は急用があつたんだ。家の事情でな……それを伝えようかと思つたけど、なんか深刻そうな話を二人がしてたから、声をかけられなくてな」

「へっ？　ちよ、ちよつと待つて……幸希……もしかしてアンタ、その話、聞こえてたり……」

「ゲーセンの中じゃ、周りの音が五月蠅くてそんなの聞こえるわけないだろう？」

嘘は言っていない。本当に俺はあの時家の事情もあつた。あの時間には帰らないと、そろそろ危なくなつていたから。時間が遅いのが関係しているわけではないが、そろそろ面倒を見なくてはいけなかつたから。ただ一つ、聞こえなかつたのは嘘だ。どこであろうと俺が杏の声を聞き逃すことはありえないからだ。

当の本人は焦つたような顔を安堵させ、ほつと息を吐いていた。

「幸希の言い分は分かつたわ。確かに、家の事情じゃ仕方ないわね。でも、ホント掠はアンタの事心配して大変だつたのよ？　怪我したんじゃないかとか、攫われたんじゃないかありえそうにない事まで」

「それについては後で掠にも謝るけど、少し大げさすぎやしないか？　なんで掠が、俺なんかを心配したつて何の得も無いぞ。精々変態に絡まれた時に一回助けてやるぐらいの特典しか——」

言いかけて、でもその声は教室からの岡崎の声によつて止まつた。

『みんなー！ 聴いてくれ！ E組の藤林杏って……バイなんだぜ!!』

まさかのカミングアウト。マジかよ杏さん。嘘だよな？ 男どころか女もありなんて、それじゃあ俺の勝ち目が……。

真偽を確かめるべく杏の方を見ると、恐ろしい形相で固まっていた。が、それもすぐに解けて教室へと一目散に飛んで行つた。と思つたらあつという間にまた岡崎を引つ張つて戻つてきた。俺は杏を引つ張つて行きたい派だが、たまには引つ張られるのも良いかもしれない……。

「あ、ん、た、ね、え……!」

ぎりぎりと言を立てて岡崎の着ている制服の襟が悲鳴を上げている。杏が締め上げているからだ。それにしても、凄い力だ。ギャグの面においては杏に勝つ方法はないだろうな。

感慨深く頷いていると、教室の出入り口から今度は掠が出てきた。

「お姉ちゃ……今の話……」

「アンタも信じない！ バイクよバイク！ 原付の事!」

なんだそういう事か。バイつてのはバイクの事だったのね。俺はてつきり本当にバイなのかと、考えてみれば岡崎の事が好きなのに、女も好きつてのはおかしい。……結論付けて気分が滅入るのは初めての体験だ。

「あ、あれ、榊原……くんっ?」

「おう榊原君だ。どうした泣きそうな顔して、岡崎に苛められたか?」

「んなわけねえだろ! お前が俺をどう思ってるのかよく分かったよ……」

冗談に決まってるだろうが。ま、コイツも分かかって言ってるんだらうけど。

目じりに涙を浮かべている様を見てると、突如横から何かが伸びて来て、俺の首に右脇下を経由して絡みついてきた。……脇腹に幸せな感触!

「幸希もいい加減にし、な、さぁーい!」

「あががが……し……しぬっ、きょう……くる、しい……」

首に腕がかかって締め、腕の関節が極まって、ついでに左足が杏の……見えないけど多分左足で絡まって背筋を伸ばされる。俗に言う『コブラツイスト』ってやつだろう。

死ぬほど苦しいが、それ以上に幸せな感触がふにふにと俺の脇腹をくすぐっていた。もったいぶらずに言うとそのは胸であり、乳であり神なる果実で禁断で尚且つ知恵を内包し母性があつてこれに触れるとどんな男も幼少まで退行してやわらかくてブラの感触がしてそれがまたリアルでもやっぱり苦しくて背骨が悲鳴を上げてるけどおっぱいに勝るものなんかない。……とにかく俺は昇天しそうだった。

きつと傍から見れば俺の顔はとんでもなく緩んでにやけているだろう。

交錯する様々な思いの中、俺はとある占いに關して思い出した。

椋が遅刻するか占った結果。よく覚えてないが、素敵な女性と衝突はしなかった。代わりに変なおっさんに絡まれ野球をやった。あとは、色々あって入院とか言つてた気がしたが、入院どころか死ぬほど幸せな事がありましたよ。椋様ありがとうございます！
酸素が足りなくなつて朦朧としていく意識の中、俺は杏の体の感触を全力で味わい、脳内に深く刻み込んだ。

藤林椋はその日の午前中、気が気ではなかった。

昨日の放課後、姉の計らいによって決行した憧れと好意を持つている幸希とのデート紛いの帰宅に胸を緊張と感動に膨らませていたが、それは最後に立ち寄ったゲームセンターで一気に下降線を辿つてしまった。

計り知れないショックを受けた幸希が逃げ出した後、椋と杏は幸希と一緒に彼女が好きな占いのゲームで相性を占おうとしていたのだが、戻つてみれば姿が無い。しかも荷物は自分達がかつきまで居た場所に置いてある。

これはきつと何かの事件に巻き込まれたのでは、と椋は愕然として当てもなくゲームセンター内で幸希の姿を探し回っていた。勿論、それには杏も同行していた。

二人の努力虚しく、結果として幸希は見つからず、煮え切らないままに二人は仕方な

く家に帰る事にした。あのまま遅くまで探しても、きつと幸希は見つからないだろうし、もし彼が何かの事件に巻き込まれているならきつと警察や救急車が対応する筈、と棕は一縷の望みに賭けていた。何も出来ない無力な自分が、せめて出来る事は祈る事しかない。

役立たずな自分に嘆いたが、それ以上に幸希の事が心配だった彼女は、夜通し祈り続けた。

気がつけば棕はそのまま眠ってしまったのか、次に意識を戻った時にはもう雀が朝を告げて鳴いていた頃だった。

その後の棕は浮かない表情のまま学校に通学し、いつもと同じで真面目に授業を受けていたが、どこか心此処に在らずだった。

授業中何度も幸希が座る席を盗み見ていた。しかし、目当ての人物はそこに座っておらず、隣の誰にやられたか分からないがボロボロになった上になんだかゴミのような、それでいてなんだか饅えた臭いがする陽平が寝ているだけだった。

そしてそのまま午前中の授業が終わり、昼休みに突入した。

普段からクラスの友人か姉である杏と昼食を共にする棕は、もそもそとたどたどしいゆつくりとした動作で弁当箱を取り出していた。

その時だっただろうか、朋也が『一ノ瀬ことみ』なる人物について質問をしてきたの

だ。その少女は学校でも有名な天才少女だったので、よく聞く話をそのまま朋也に伝えた。そして、ひと悶着起きた。

突然現れた杏に驚いたかと思つたら、間髪入れずに姉のバイ疑惑が浮上してシヨックで涙しそうになり、事実を確かめるべく追いかけて廊下に出たら——待ち望んでいた少年がそこに立っていた。

いつもと変わらず楽しそうな表情を浮かべて朋也と杏の二人のやり取りを見ていた彼を見て、掠の心の不安も一斉に晴れていった。

ただ気がかりだったのが、首を締め上げる杏と被害者である朋也のやり取りを見ながら、一瞬、僅かに幸希の表情に翳りが見えた気が掠にはした。涙の所為で見間違えたのかと思ひ、見直したら、元の面白い事には全力な少年の笑顔になっていた。

「あ、あれ、榊原……くんっ?」

逸る気持ちを抑えて、出来るだけ自然に気が付いた振る舞いをして掠は彼に話しかけた。

でなければ、もし人目が無ければ自分はきつと彼に向かって飛びついていた。しかし、それはやり過ぎ。いくらなんでも幸希も引いてしまう可能性がある。だから掠は心と体にブレーキを掛けた。

「おう榊原君だ。どうした泣きそうな顔して、岡崎に苛められたか?」

何でもないように返事をしてくれて、いつも眺めるだけの笑顔が自分に向いてくれた感動に、椋の胸は反動もあつてか早鐘を打つように強く脈打っていた。

一時はとても心配をしたけれど、今は理由を訊くとか、そんな事は野暮に思えて、それよりもこの思いをしつかり身に染みるまで感じようと思つた。が、それも長くは続かなかつた――。

「幸希もいい加減にし、な、さあーいーい！」

杏のコブラツイストに苦しむ幸希を見て、最初はあたふたした椋だったが、幸希の表情を見てそれは止まつた。

理解できない疑問に、椋の脳内会議では数多の弁論が飛び交つた。

目の前の光景を見ながら煩悶する。

だけど――その答えはいつまでも出ることにはなかつた。

第六回：桜並木の少女

春の麗らかな陽気は、無差別に人の眠気を誘う魔力を持つている。

この魔力に抵抗出来る人類はごく僅かで、しかも高校生という人種はこの力への抵抗力が極端に少ない種族なのだ。

よって、午後の授業から参加している俺にとって正午過ぎのこの時間は、日当たりが良く瞼が重く目を開けていられないんだ。

第一、こんな良い天気の下、大嫌いな勉強をした所で意味は無いと思う。こういう日は、桜の下でうまい飯（杏の手料理だとなお良い）でも食いながら睡魔に逆らわず微睡んでいた方が良い。

周りのクラスメイトを見れば、一応町一番の進学校という事もあつて皆真面目に授業を聴いている。

例外なのは岡崎と春原ぐらいだ。この二人はもう既に腹が膨れたせいで眠気に勝てず、机の上で腕を交差させて枕代わりにして寝ている。

（俺も律儀に起きてないで、本当は寝てしまいたい……………んだが、そうもいかないんだよなあ…………）

憂鬱から溜息が漏れる。

原因は俺が愛する藤林杏のクソありがたいお言葉のおかげである。

杏にコブラツイストをくらって胸の感触を堪能していた後、棕は俺の遅刻について注意してきた。思えば……いや、考えるまでも無くそれが原因となって杏は俺に、棕と一緒に注意してきた。

『あのね、あんたが遅刻すると棕にも迷惑がかかるんだからちゃんと来なさい！ それと、授業もちゃんと受けるのよ!? どうせ、いつも寝てるんでしょ？ 陽平の馬鹿と朋也だけでも棕が大変なのに、幸希まで一緒になって負担増やすような事すんじゃないわよ!?!』

『……任せろ杏。俺はやるときはやる男だぜ！（だから岡崎から俺に乗り換え乗車を……）』

俺の中では女神の杏がこう言って来たんだ、妹である棕を心配させないよう俺はしっかり眠気と格闘をしていなくてはならない。

真の男というのは、惚れた女の為なら海を割り天を裂く事だつて出来なくては務まらない。要はどんな事だつて出来るつて事だ。……程度によるけどな。

中途半端に従順だから、杏の奴もしかしたら俺の事、何でも言う事を聞く便利屋と思いは始めてないか？

いや、そんなわけないか。雑な性格だが、なんだかんだと面倒見がいい杏だからこそ俺は好きになったんだしな。もう、当初の理由を凌駕して杏という存在が好きになつてるけど。

てなわけで、真面目に授業は聞かずに起きているだけで体裁を保っているのも暇だ。暇つぶしに掠が何をしているか視線をやると、なんか知らんがコツチを見ていた。と
うかが目が合った。

「っ……!?!」

何やってんだあの未来の俺の妹君は。俺を見たつて授業内容は分からないぞ。

目が合つて一秒程、俺に気が付いた瞬間驚いた顔をして前を向いてしまった掠は、一心不乱にノートとにらめっこをしている。……新しい遊びか？

特別これといってする事がないから、今度は春原で遊ぶことにしよう。出来れば音が立たない遊びが良い。下らない事で怒られるのも面倒だ。ただでさえ教師には目を付けられているから、細心の注意をはらつて。

(……さて、何で春原をどうにかして面白い事にしたいが……どれを使おう)

服の中に収納してある小道具を取り出して考える。

花火や爆竹、煙玉なんかは当然駄目だ。音が出るし煙も出るから、そんなの怒つてく
ださいって言つてるようなもんだ。俺はそこまで馬鹿じゃない。

となると、選択肢は大幅に狭まる。花火関連でライターも当然だし、マグネシウムテープとかもう論外だ。基本喧嘩用のラインナップを揃えてるから、悪戯には向かないんだよなあ。風子の時だって結局面白くはならないで、好感度が上がっただけだったし。俺が上げたい人は一向に変動しないのに。世の中おかしいだろ。

春原は俺の悩みなど知らないままに幸せそうな寝顔を浮かべている。

(……そうだ、コレでいこう)

俺は懐から瞬間接着剤を取り出し、春原の机の上に置いてる右の肘に付け、そのまま机とドッキングさせた。

これでこいつは目が覚めた後、さあトイレにでも行こうと思いついて席を立つと、机と一緒に連れションをすることになる。地味だがやられると最高にじれったい。

そういえば、似たような事を過去の春原にやったな。

あの時は上履きの裏だったから、そのあと靴下じやみつともないとか言つて学生寮に帰っちゃったな。勿論、上履きは剥離剤を付けて元に戻しておいた。

あれ……という事はもしかして、二番煎じじゃないのかコレ。

いかん、やっぱり爆竹を春原の鼻に詰めて点火の方が面白……でもそのあとが面倒だ。

そうこう思っている内に終業のチャイムが鳴ってしまった。

これはこれで暇つぶしになったけど、イマイチ納得がいかない。ま、それより今は岡崎を起こさなくては。

「おい、起きろ岡崎」

「……………ん？ 榊原……………もう放課後か」

「そうだよ、だから早く行くぞ」

「どこにだよ？」

眠たそうに目を擦る岡崎が大きく欠伸をし、軽く伸びをした。

「古河の所。ちよつとあの子に訊きたい事があつてな、俺知らないんだよあの子のクラス」

「……………B組だ」

ポツリとそう言い残して再び眠りの態勢に戻った岡崎。

「寝るな、起きろ、お前も一緒に行くんだよ」

「……………なんで俺が」

「俺はあの古河って子とは顔を合わせた程度だ。いきなり訪ねて困惑されるのも面倒だ、だから友達のお前に同行してもらいたいんだよ」

「別に俺はあいつと友達ってわけじゃ……………」

「いいから行くぞ。ほらっ……………」

「あ、ちよ、お前っ……」

古河と仲良くなつてもらう為にも岡崎は必要不可欠だ。今は知り合い程度でも、顔を合わせる回数を増やせばそれなりに女子は意識をする……と俺愛読の最近の雑誌には書いてあった。なんでも女性とは大抵の異性の行動に理由を求めららしい。真偽の程は分からないが、だからといって無碍にする理由もない。

だから俺は渋る岡崎の腕を掴んで、古河が居るであろうB組の教室まで向かった。

放課後を迎えた学校の廊下は、帰宅しようとする生徒や、それに紛れて部活動に勤しむために部室へ向かう生徒で賑わっていた。

町の中でも一番の進学校である此処の生徒は、やはり勉学を重要視しており、受験を控えた三年生は特にその重要性を理解しているのか部活動に専念する生徒が少ない。大体が先に待ち構えるテストの為に自習をしたりする生徒が大半で、それ以外の時間を無駄と切り捨てる、俺からしたら奇特な人種ばかりだった。

でも、古河渚という生徒は違った。

彼女は一度留年して二度目の三年生なのに、今更部活をやるうとしていた。結局、その部活も廃部になっていて諦めざるをえなかったのだが、だとしてもこの学校内では彼女は「まとも」だ。

不良と蔑まれ、やつかみが多い俺から見たら、優秀な成績を得て有名な大学に進学す

る事こそ至高なのだ。と人生の全てを費やすクラスメイト達の方が「まともじゃない」。奴らはどうしてそれ以外の物に目を向けようとしないのか。もしかしたら、勉強が嫌いな自分には分からない快樂の類なのだろうか。と邪推してしまう。

理解が及ばない人を、人間は意識的にしろ、無意識的にしろ忌避したがる。知らないというのにはある種の恐怖材料だ。人は未知を恐れて既知に安らぎを得る。故に、B組にいた生徒らが未知の象徴である俺達を見て厭な顔をするのもしょうがない。

「……………」

数多の視線が俺達に集中した。

部屋の隅で蠢くムカデを見つけた時のような嫌悪感が籠った視線。自分よりも劣る生物を見るようにもそれは感じられた。

が、そんな無言の批難を浴びる事に慣れた俺と岡崎は素知らぬ顔をして目的の少女の姿を探した。……見つからない。

「おかしいな、なあ岡崎。本当に古河はB組なのか？ 聞き違えたか？」

「間違いない。あいつは確かにB組だって言ってた。普通に帰っちゃったんだろ多分」

一理ある。

岡崎が言うように、もしかしたら授業が終わって早々に帰ってしまったのかもしれない。見渡しても、彼女の姿は見えないし、箒を持って談笑する男子生徒と、その集団か

ら外れた鞆を持った女生徒達ぐらいしかもう教室には居ない。

……風子には事情を説明して、また今度にもしてもらおう。

諦めて踵をかえした時……偶然なのか、女生徒の会話が聞こえた。

「それにしても、あんたも結構悪ね。あの子一人に掃除を押し付けるなんて」

「ナオだつて共犯じゃん。良いでしょ別に。お人好しっぽいから、きつと今も中庭で一人律儀にやつてるでしょ。なんの疑いもしないで」

「ま、拒否しない方が悪いよね。私もやつてくれるから頼つたにすぎないし」

「持つべきものは便利なクラスメイトよね」

心の泉から湧き上がった不純物は……なんなのだろうか。

ごぼりと大きな気泡を産みながら浮上していくソレは、確かに俺を突き動かすには最適の燃料だった。

ふと岡崎を見れば同じように面白くない、不機嫌そうな表情で推測の人物を嘲笑する女生徒達を睨んでいた。

つくづく世の中というのは不平等なのでは、とセカイ系主人公のような何の易にもならない思考を即座にシャットアウトした。世の中に限らず、家の外に一步出れば、そこはもう不条理の領域なのだ。なんてことはない、当たり前前の事を当たり前前に行っているだけなんだこの女子達は。

息の揃った脚は俺と岡崎の。進行方向は自覚無き悪意を持った女子。握った拳は——腰の後ろで組んで隠した。

「ちよつといいかそこのサゲマン共」

「訊きたい事があるんだ」

「は？　いきなり何よあんた達。誰がサゲマンよ……！」

生来の口の悪さは、俺の齒に衣を着せず、刃となつて相手を切りつけた。こんな言葉一つで激情するなんて、もしかしたらこの女は相当自分に自信があつたのか。それは側に置く取り巻きを見れば明らかだ。

開幕から喧嘩腰の俺とは違って、逆に岡崎は冷静だった。しかし、その瞳には明確な炎が灯っていた。

こいつらも運が悪い、俺達の癩に障つたんだ。楽しい談笑は終わりにしてもらおう。

——外は不条理の領域なんだから。

※

何処かで一つの不条理が降りかかった時、中庭では一人竹箒を手に持った少女が佇んでいた。

彼女の他に竹箒を持って居る人が居ないことから、ここの掃除を一人でやっているというのは誰にだつて推測出来る。きつとクラスメイトに押し付けられたのか、それともじゃんけんなどで敗北した結果なんだろうか。どちらだつていい、と衆目は語り見て見ぬふりをして少女の傍を通りすぎる。居ないものを見過ごすように――。

「……………」

少女の手は先ほどから止まっていた。

小さな両手で持った竹箒は足元に根を生やしたように動かない。

作業が終わったのか、それとも一人な事を嘆いているのか、俯き加減な態勢からではその表情は窺えない。

けれど、いつまでもこの調子では何も変わらない。それとも、この少女は変わる事を恐れているのか、時折漏れる溜息が何度目かに達した時、一つの影が少女の眼前に差した。

「二人で何やってんだ古河……?」

透明感のある他人事のような声は、少女の知っている声だった。

問われた少女――古河渚は顔を上げた。

「あ……岡崎さん?」

「よう、掃除か? 見たところ二人のようだが」

右に左に視線をやりながら朋也は話しかけてきた。

物事を察する、というのは言い過ぎかもしれないが、渚にとってこの質問は言いずらい部類に入る話題だった。

気がつけば居なくなっていたクラスメイトに、良いようにされた事を恥じているのではない。ましてや、憎む事もない。人が良い渚は人を恨んだり憎むという事をしないのだ。

ならば、どうして。何故言いずらいのか、それは朋也が事実を知った時もしかしたら気を使うかもしれないと思ったから。

どうしてだか自分に話しかけてくれる彼に、余計な心配をしてほしくなかったからだから――。

「すぐに終わらせますので、部室で待っててください」

「……古河……」

誤魔化すのは、それはそれで罪悪感が生まれた。

悲しそうな、そんな揺らいだ朋也の瞳が渚の顔を撫でる。

“なんでそこで何も言わない。お前がクラスメイトに見捨てられた事ならもう知っている。一言相談してくれば、その悩みを解消出来るかもしれないのに。”

基本的に我関せずを自分なりに貫いていた朋也だが、現場を目の当たりにして無視で

きる程凶太くは無かった。心を痛めているかもしれない少女を前に、それを拭うことが出来るかもしれないのに……無力感とまではいかない、疎外感に似た性質の疼きが胸に走った。

柄にもなく手助けなどをしようとしている対象を見ると、止まっていた竹箒を動かしてせつせと掃除を終わらせようとしていた。

待てと人に言った以上、長い時間待たせてしまうのを彼女は嫌う性質なのだろうと朋也は推測する。

ここで見守つても良かったが、それでは渚の邪魔になるだろうと思い、背を向けで言われた通りに部室へと向かつて行つた。

中庭を繋ぐ校舎の入口に差し掛かると、人影が一つ。見慣れた人影だ。

朋也は思わず足の運びが雑になる。自分を待つ怠け癖のある卑怯者に対する、せめてもの抗議だと思ふ表示するように。

「話は終わったか？」

「部室で待つててくれ、だとき。……なあ、なんで俺だけに行かせたんだ？ わざわざこんな所で変人気取つて待つお前のやりたい事が、俺にはいまいち分からないんだが」

口を尖らせて言う朋也。

入口で待つていた幸希はそれを聴いて恍けたように笑うだけだった。

幸希と知り合つて一年が経とうとしているが、未だこの男の言動には理解が及ばない。

わざとらしい高笑いをあげながら旧演劇部室に歩いている幸希の背を見て、朋也は思わず頭痛に悩んだように手を当てる。

渚のクラスでの己の浅慮が仇となつて招いた事件の後、中庭に居る事がわかつた二人は、向かう途中で「俺はここで待つてる」と言つて立ち止まつた幸希。どうしてか問うてもまともな答えなど帰つてくるわけもなく、仕方なく一人で行つた朋也。

自分にとって面白い事なら進んでするというのはた迷惑な趣向を持つている幸希を、朋也は嫌いではないが、気疲れはしていた。どこまでも好き勝手に場を荒らす彼は、周りからしたら台風の被害に遭うのと違わない。中心に居る彼にだけ、その被害は無い。

文句の一つでも今度言つてやる、と密かに思いながら朋也も幸希の背を追い部室へと向かつた。

「それでは、風子ちゃんという子に会えば良いのですか？」

「ああ、会えば分かる……かもしれない。詳しくはそこにいつてからだ、岡崎も勿論付いてきてくれよ」

「……まで来たなら最後まで付き合おうさ」

三者三様、様々な足音を立てながらリノリウムの廊下を歩く。

落ち着いた静かな足音の渚が、堂々とした足音の幸希に問いかけ、気だるそうな足音の朋也が諦めたように口を漏らした。

部室で待つこと数分。掃除を終えた渚が部室に入つて、幸希は開口一番に「会わせた人が居るから、岡崎と一緒に空き教室まで来てくれ」と言い放つた。

状況がうまく把握出来なかつた渚は、あつけに取られたが、そこは朋也の助勢もあつて何とか納得が出来た。

要するに、一年留年している渚にしか知りえない事を求める女子が居るから、会つて欲しいとの事だった。

演劇部の復帰の為に色々やる事があつたが、朋也の友人である幸希の頼みを断れる度胸も、思考もしなかつた渚は二つ返事でそれを了承した。

連れられて十分程が経過して、幸希は目的の教室の前で立ち止まつた。

「ここだ、おーい風子、居るか？」

扉を開けて声をかけると、昼ごろに会つた時と同じ場所で同じように彫り物をしている風子が顔をあげた。

机の上には、幸希が研いだおかげで作業効率が上がつたのか、けつこうな数の木の彫刻が出来上がつていた。正確にこの彫刻がなんであるかを理解できる幸希からすれば、

それはまるで海辺のようにも見えなくなかった。……思つて、流石にそれはないなと脳内で却下した。

「榎原さん、風子待ちくたびれてしまいました遅いです」

「そりゃ悪かつたな。だけど、お前が望んでた人はちゃんと連れてきたぞ。ほら……」

「初めまして、古河渚です。あの、榎原さんに聞いたんですけど、わたしに何か御用ですか？」

渚の肩を軽く叩いて先を促し、丁寧な口調が旋律のように奏でられたのを見て、満足したように幸希はこの場を後にした。

渚と風子を見ていた朋也は、それを見逃してしまった。

やることはやった。あとはもう、自分が出るまでもなくお人好しな二人は風子に首を突っ込むだろう、と幸希は思う。

中庭でのやり取りを見ていた幸希は、二人が満更でもない感じになっているのを見て、嬉しくなった。

これは少しつついて背中を押せば、恋人関係になるのも時間の問題だと思つたからだ。風子の事のついでになればいいと思つてのものだったが、思わぬ収穫である。

ヒトデを愛する少女は、きつと渚に懐くだろう。彼女に、興味こそあつたが、だからといって入れ込んでもしようがないと思ひ、幸希はあの場を後にした。

「発端を担う者が投げだしたら、事態はどこに向かうんだろうな……」

自覚するように、訥々と言い放った。

数十秒もすれば、一人居なくなっている事に気が付いてしまう前に去ろうと、幸希は足を速めて学生寮に向かった。

※

「あんたのせいで僕の服破けちゃったじゃんかっ」

部屋に入って早々の先制口撃は、なかなかのスピードだった。春原にしてはやるな、という印象だ。

風子の事を岡崎と古河に押し付けて逃げるように立ち去った俺は、今日も今日とて怠ける為に春原の部屋に立ち寄ったんだが、家主はご立腹だった。

「何をいきなり。言いがかりにも程があるぞ、どこに俺が接着剤を使ったって証拠があるんだよ」

「もう白状したようなもんじゃんそれ！ あんたほど薄情な人間は会ったことないよっ」

「それがジョークのつもりなら、お前今すぐに首を吊った方が良いぞ」

「白状と薄情をかけたつもりはないですからっ」

説明するのがまた怪しい。

本当は笑って欲しかったんだらうか。

「まあ落ち着けよ相棒」

「な、なんだよ急に」

学校での悪戯に腹を立てている春原の肩に手を乗せ、フレンドリーに接してみる。

視線を下げて春原と合わせると、背後の壁にかかっている制服の肘辺りが破けていた。きっと机から離れなくて無理やり破いたんだらう。

「俺は何も嫌がらせの為にあんな事をしたわけじゃないぞ」

「じゃあ、何だつてのさ」

「お前の寝姿があまりに芸術的だったから、クラスのみんなに見てもらおうと思って固定したんだ。春原の寝る姿は、歴史的価値のあるものだったぞ」

「マジで!?! いやー、自分でもちよつとは思ってたけど、まさかそこまでだったなんて。そういう事なら仕方ないな」

照れたように後頭部をかく仕草をする単純馬鹿。

調子に乗った馬鹿は、止まらない。というのが、今夜得た俺の知識だった。……実に役に立たない物だ。

※

翌日。

春の陽気は未だ健在で、朗らかな陽光が差す通学路を、欠伸を嘯み殺しながら歩いていると気になる人物が先に立っていた。

学校前にある桜並木の坂道で、一人の少女が思案顔で桜を見上げていた。

感慨深そうな瞳と朝日に照らされて輝く銀髪が、この場では異質な感じがして、それが俺の歩をとどめた。

「あれは……」

そう、たしか以前にも見た事がある。

コスプレをして校庭に出た時に一度。俺に話しかけてきた女子。

名前は確か……坂上智代と言ったはず。杏から聴き、春原から恨み言のように聞かされた人物だ。

坂上は通学する生徒共には目もくれず、立ち止まりずつと桜を見上げている。それは雛鳥が刷り込みをするように、決して忘れないように、網膜に焼き付けるように。何かの決意の表れのようにも見える。

桜並木の景観から浮いているせいで目に留まったけど、これといって興味が無いので俺は坂上の視界に入らないように離れた距離をとって坂道を上った。

妄執なのだろうか、ただひたすらに桜を見続けるあの姿は、どこか危うげにも見えた。

「榊原、ちよつと付き合つてよ」

「俺はホモじゃない」

「そういう付き合うじゃないよっ」

教室に入ると、珍しくまともな時間に教室に居る春原に話しかけられた。

「じゃあなんだよ」

「これから坂上智代にリゾンベするんだけど、見届ける奴が居ないと僕がやったって証明できないだろ？ だからついてきて欲しいんだよね」

そういうことか。まあ、多分考えるまでも無く返り討ちにあうんだろうな。こいつの場合。

どうしてそこまでして坂上に固執するのか、きつとそんなのは些細な事なんだろうけど。

まだ杏も登校してきてないし、することもないから別にいいか。

「ついて行くのは良いけど、俺は手を出さないからな」

「当然。神原は指を啜えて見てるだけでいいから」

「ならいいんだ」

というわけで俺は春原について行くことにした。

教室を出る際、席に座っていた椋がこちらを見て何か言いたげな顔をしていたが、それが何なのか知ることは無かった。

不良は敵の下駄箱に果たし状を入れたりしているのを漫画や映画で見た事があるが、春原はそういったものを踏襲せず直接クラスに乗り込んで呼び出す方法を選んだ。この思い切りの良さは俺も見習うものがある。

桜の鑑賞が終わったのか、二年生のクラスにはちようど坂上が鞆を下ろしている姿があった。春原を見るなり「またか」って顔をしていたが、呼び出しには案外すんなり応じてくれた。

その後、人が少ない校舎の廊下まで移動し、今に至る。

「またか……いい加減諦めてくれないか」

「今日はちよつと違うんだよ……今日は、なあっ!!」

言い切った瞬間春原が坂上に向かって飛びついた。どうせ先手必勝とか思ってるんだろ。間違っちゃいないが、意表が突けないんじゃないや意味が無い。

右手を振りかぶり、あからさまなテレフォンパンチの春原に相対する坂上は、流れるようにその場で半回転し……閃光のような蹴り技を繰り出した。

格ゲーに出てくるチャイナ服を着たキャラクターみたいな、連続蹴り。一つ一つが残像のようで、無数に足があるような錯覚。

雨のような足技は、残らず春原の体中に命中した。……曲芸みたいだな。

「ごっつ……!!」

「だ、大丈夫か!?」 反射的に、つい本気で蹴ってしまったじゃないか」

「あー、そいつ鋼鉄○ークより頑丈だから大丈夫。あれだ、コマが変わると元通りなギャグ漫画のキャラみたいなのだから、すぐ直る」

「そうなのかな? そういえば、ダストシユートの時も……」

なんだそのダストシユートの時って。物騒だな。もしかして、この前春原がごみ臭かった日の事なのかな?

坂上にやられて駄目な感じになってる春原を放置して、坂上は考えるような素振りを見せた。が、すぐに俺の方へ向き直った。

「お前は、初めて見るがこの男の知り合いなのかな?」

「すんごく遺憾だが、一応知り合い……みたいなもんだ」

「そうか、お前も私になにか用があるのかな?」

「俺はただの見届け人だ。別にお前なんぞ女子相手に喧嘩するつもりもないし、文句もない。物置だと思ってくればいい」

誤解される前に、歪んでしまう前に正しておかないと後々面倒事に発展しかねないからな。それに、正攻法じゃこの坂上には敵いそうがない。する気もないが。女を殴ったなんて杏に知られたら、俺はきつと幻滅されてしまう。そこまでの自殺願望が俺にあるはずがない。

だというのに、坂上は俺を訝しげな目線でじろじろ観察してきた。俺ってそんなに疑り深いんだろうか。ちよつとシヨック。

「そうか、それなら良いんだが……それにしても、お前は傷だらけだな。もしかして喧嘩で出来た傷か？　だとしたら、あまり見過ごすことは出来ないんだが」

「お前には関係ないし、他人の便器を覗くような行為はあまりしない方が良い。糞を見る羽目になるぞ」

「随分口が悪いんだな、なんだか懐かしい気分………ん？」

坂上の首が十度程傾いたまま停止した。何か思う事でもあるんだろうか。

瞳は依然として俺を捕らえて離さない。

杏以外の女と見つめあう趣味じゃない俺は、目線を春原の方にやった。見れば再生を終えて顔が元に戻っていた。なんか化け物みたいだ。

「榊原……だったよな確か」

「それがどうかしたか？　もしかして、苗字が気に入らないって理由で俺を討伐する気か？」

「違う、私は自分からそういう言いがかりのようなことはしない。それより、榊原は昔……」

「これで終わったと思うなよお！」

問いかけは、しかし春原の乱入で遮断された。

復活を遂げたタフな春原は立ち上がり、指を突き出して宣誓している。不敵な笑みを浮かべながら。

「次は……この助っ人が相手だっ！」

「はあ？　お前は何を突然——」

「さつき言ってた通り、相手に味方して油断させる作戦ならもう良いからっ」

「……それは、本当なのか榊原？」

クソ、春原のくせにいつちよまえに頭使いやがって。お陰で坂上が信じてるじゃんか。

ゆらりと、幽鬼のように俺に敵意を向けてくる坂上は、地獄の死者のようだ。純粹に戦闘力の塊みたいな奴に、俺が叶うわけがない。

「良い奴だと思つていたんだが……残念だ」

「お前、実はすごい馬鹿なんじゃないのか？」

「なんだとっ!？」

いかん。火に油を注いでしまった。

仕方ない、騒ぎになるかもしれないからあまり使いたくないんだが――。

「俺はお前に敵対するつもりはないから、ここらでお暇させてもらおうよ」

懐から出した三つの物を瞬時にしようする。……ついでに、春原にもプレゼントをやる。

「じゃあな坂上――」

「――っ、まて……」

サングラスを付け、ある物に火を点けた。

閃光が、文字通りの光が廊下を埋め尽くした。

マグネシウムテープ。火を点けると、激しく光を放ち燃焼するのが特徴で、俺が良く使う道具の一つだった。これを使えば相手の目は一時的に見えなくなる。当然俺はサングラスを付けたので大丈夫。

ついでに、春原の目にタバスコを振りかけておく。

「ぎやあああああ――!!!」

「つゝ……！ 待て榊原っ！」

灼熱のような痛みに悲鳴を上げる春原の断末魔を聞きながら、俺を制止しようとする声を振り切つてその場から逃げだした。

嫌な事は、出来るなら逃げた方が得策に決まっている。ネガティブ万歳。開き直りつてのは精神を安定させるのに必要なものだ。

数年前、というほど昔じゃない頃。

嫌な事から逃避するように町の不良を狩っていた坂上と、そう違わないだろう。あいつは気づきそうになっていたが、それはお互い忘れていた方がいい出来事だ。誰も得しない、墓を掘り返すような行為に他ならない。

お互い、あの頃の自分とは向き合いたくない筈だ。

こんな時は杏と会つて癒されるに限る。またコブラツイストをかけて、あのパラダイスを味わいたいものだ。

「そうと決まれば、エロは……いや善は急げだ！」

男なんて馬より単純だ。目先に人參をぶら下げなくとも追いかけに言ってしまう、悲しいくらいに馬鹿な生き物なんだから——。

第七回：冷たい空の下の小さな温室

恋って素晴らしい。

世界全ての価値観が変わるほどに、己の価値観と優先順位などその他諸々。相手の為にチューンナップされていくような、そんな改変。

ありとあらゆる理不尽への怒りが、この世全ての悪意への憎悪が、全人類に根付く不平不満への無力感が。そんな全部がどうでもよくなるような、吹き飛ばような、嵐みたいな恋。

人間というのは素晴らしい。恋が出来るというのは最高の機能に違いない。

だがしかし……それだけに、しつぺ返しは凄まじい。

俺は、その叱咤をこの身に受けた。

「嗚呼、何故この世界はこんなにも不公平なんだろうか！」

「唐突に何わけ分かんないこと言ってるんだよ」

「やかましい、貴様にこの俺の崇高な思想が分かってたまるかよ」

迷惑そうに言う春原に切り返す。

毎度のことながら春原の部屋である。そう、俺は他に行くところがあまりないという

現状、悔しさを堪え菌を食いしばってでもこの部屋にいななければならないのだ。

学校も終わり、いつものだらけ空間に俺達三人は居た。

特に約束事を交わすこともなく、自然とこうして集まることがあるというのは、存外友人には恵まれている証拠なのかもしれない。

「そういえば榊原、お前今日の学校で俺と古河を置いて勝手にどっか行きやがったな。おかげで面倒な事に巻き込まれちまったじゃないか」

「面倒つて、風子はそこまで面倒な奴か？ そりや多少ヒトデを偏愛しているところはあるが、うまく誘導すれば面白いぞきつと」

「あいつ、なんか隠してそうで怪しいんだよな」

「そうか？ 俺にはただの歳不相応な体系の少女にしか見えんぞ。あ、別に俺がロリコンとかそういうわけじゃないからな勘違いするなよ？」

「しねえよー！」

危ない危ない。余計な失言で勝手に俺の趣味趣向が杏に知れ渡った時には、きつと杏は俺を軽蔑の眼差しで見えるかもしれないからな。

不安の種は残らず駆除しなくてはならない。

いや、まてよ。もしかしたら杏はこんな事を言うかも……………。

舞台は暗闇。

俺と杏のみの世界。

『幸希……あんた、小さい女の子が好きらしいわね』

『ち、違うんだ杏！ これには深い、それはもう幸村のじじいの皺よりも深いわけがっ

！』

ここで杏の頭上にスポットライトが点灯。

顔を上げる杏。

『あたしじゃ……あたしじゃ駄目なの!?!』

『……杏』

『あたし、幸希の好みの女の子みたいに背も小さくないし、む……胸も、その……あれだけど。それに、幸希を思う気持ちだって小さくないけどっ！ でもっ!』

涙を浮かべる杏は、懇願するように俺に追い縋る。

それを優しく受け止め、背中に腕を回し抱きしめる。

その瞬間、俺と杏を中心に光が広がり綿胞子のような小さな光がきらきらと宙に舞う。

『杏……俺は、そんな小さな勇気を振り絞ってくれたお前の事を……愛してる』

慈愛の眼差しを向ける俺。

杏と目が合うと、俺を映すその瞳がハートになる。

綿胞子のような光が全てハートに変わる。

世界は俺と杏を祝福している。

『幸希……好き、大好き……あたしも、愛してるっ!』

『杏……今夜は君を放さない』

そのまま抱き合い熱いキスをして倒れこむ愛し合う二人。

そこに特大のハートが……。

「——か、完璧だあああああ!!」

「だから、静かにしろよ! またラグビー部にどやされるだろっ」

拳を突き上げ勝利を手にした喜びの雄叫びを挙げる、が春原に注意されてしまった。

本当なら反論したいところだが、珍しく正論を吐いている為俺もそこまで強く出ることが出来ない。

「悪い悪い。ちよつとシュミレーションをしてたら、つい盛り上がっちゃって」

「今のお前、最高に奇妙だったぞ。ちよつと春原と被ってしまった」

「本気で謝るからその認識は改めてくれ岡崎」

「アンタら失礼すぎるでしょっ。謝るなら、まず僕にだろ榊原っ」

だつて春原……お前に似てるなんて言われたらどんな人類だつて泣いて赦しを請うにきまつてるだろ。あれ、もしかして春原を使えば世界平和だつて夢じゃない?

凄いな、世界各国のお偉いさんを相手に春原を引き合いに出したら、みんな要求を呑むだろ。いや、それなら杏相手に春原を引き合いに出して脅しを……駄目だ、それは俺の流儀に反する。惚れた女は真正面から口説き落とすのが男の流儀であり生き様そのものだ。

これまで磨き上げた漢の勲章にクソを塗りたくるような事は出来ない。

やはり、この雑誌の教えを乞うしかないか。

手に持っている雑誌を再び開き、キラキラとしたレイアウトの項目を見てみる。なに……。

「女の子とのデートでは、男が驕るのが常識？ 割り勘なんて言った瞬間、彼女は貴方か

ら離れちゃうよっ……だつて？」

「さつきから言動がおかしいと思つたら、何読んでるんだ？」

新たな女心を獲得するために勉強を重ねている俺を訝しんで、岡崎が近づき雑誌に視線をやった。

「なになに……えーつと、女の子はみんないつでも夢見る乙女。だから、王子様なカレにドキドキ夢中！ この純白スーツを着こなせば、貴方も一夜でシンデレラをゲット！ 目指せシンデレラストーリーいい……？」

内容を読み、後半に差し掛かるにつれ語尾がどんどんと上がっていく岡崎。

聞こえようによつては胡散臭いモノを見つけたようにも聞こえる言い方をする岡崎は、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「どうした岡崎、生理か？」

「んなわけないだろつ、お前、それ女子の前で言ったら速攻で嫌われるぞ」

「マジかよ!？」

「春原まで……はあ、たまに榊原つて奴がどんな人間なのか、分からなくなる時があるぞ俺は」

心底呆れた様子で頭を抱える岡崎。とりあえず俺と声を揃えた春原の口にはポケットにあつた野球ボール（硬球）を詰めておいた。

「俺はいつだって想定外の範疇で行動してるぞ」

「誰の想定だよ誰の。……じゃなくて、この雑誌。明らかに胡散臭いだろ、なんだよ王子様なカレにドキドキ夢中つて、純白スーツつてこれ完全に売りつけようつてのが見え見えじゃないか。それに、男目線なのか女目線なのかもよく分かんないし、なんでこんな怪しくない所を探した方が早そうな雑誌読んでるんだよ」

「それは……」

「というか、そんなに胡散臭いのかこの雑誌は。くそう、千円もしたのにコレ。腹いせにこの雑誌社には抗議のはがきを書いてやる。」

岡崎は今までも俺がこの系統の雑誌を読んでいたのを知っている。当然ながら、この部屋の主である春原も当然のことだ。だからこそ、今までも気になつていたんだろう俺が、こんな恋愛雑誌を読んでいる事を。

杏を振り向かせるためとはいえ、この系統の雑誌を買うのは最初は躊躇した。けど、これで杏の心を振り向かせるなら、と思つて今まで勉強を重ねてきたがまさか愛読していた雑誌が詐欺だつたなんて。恋は盲目とはよく言う。

「俺だつてほら、年頃な男子高校生なわけだし、少しくらい女にモテて——つて思う時ぐらゐあるだろう？」

「そりや、その気持ちは分からんでもないけど、だからつて少し短絡的過ぎやしないか。春原じゃないんだ、榊原は頭良いんだからもうちよつと考えようぜ」

「ヴおふあヴあぎこいヴおふうをふえはふうほはひやへへふえまひえんはへえつ（どさまぎに僕を貶すのはやめてくれませんかねえつ）」

「そうだな、ちよつと今の俺目先の欲に目が眩んでたみたいだ」

岡崎の言うとおりだ。最近何かと色々あつたから、肝心要の杏の気持ちを考えてなかつた。

こんな紙切れを読んでも杏の事が分かるわけじゃない。

別れを告げよう、過去の自分に。変化を恐れず、受け入れよう。たとえば、アドバイス

をしてくれた人物が恋敵であろうと。

「ありがとう岡崎。もうこんなクソ雑誌を読むのは止めよう、こんな上っ面で固めても意味は無いんだな」

「凄い掌返しだな……」

「これからは、別冊マーガリンを読むことにする!」

「……駄目だこりゃ、正気を失つてるとしか思えない」

岡崎はまたも呆れているが、気のせいだろう。これからは少女マンガに焦点を絞って
いこう。

少女マンガで女心を獲得して、そしていつの日か杏をこの手に……。

「つーか、なんで榊原はこんななんになってるんだ? ……って、これ酒じゃないか」

あ? 酒? 岡崎は何を言ってるんだ。

手に持つているのはお酒と書かれた空の缶。そういえば、そんなものを飲んだような
飲んでないような。

「あー、だからこんな駄目な感じになってるのか榊原は。こいつ、酒弱いもんなあ」

「ヴおー、ムムオオーヴアヴオーぼっ!」

「なに口の中に野球ボール入れてんだよ春原は。それがお前の晩飯なのか?」

「お前が入れたんだよ榊原……」

※

翌日、土曜日である。

最悪な事に今日の天気は生憎の雨。本来なら「雨だから」という理由で学校をサボるのだが、杏の言いつけで棕を困らせてはいけけない手前そう簡単にサボる事が出来ない。まあ杏と会えるから俺は良いんだけど。

規則正しく教室に入ったら、案の定岡崎と春原の姿は無かった。多分アイツらは春原の部屋で怠惰の限りをつくしているんだろう。

土曜だから授業は半日、いわゆる半ドンというやつだ。だからきつと今日はもう来ないかもしれない。

「榊原君、今日もちゃんと遅刻しませんでしたね」

席に着くなり話しかけてきたのは棕だった。

普通に考えればこの光景は当たり前前にあるもののだが、俺を相手となるとそれは違ってくる。

不良トリオなんて揶揄されてる俺に、こうして話しかけてくるのは棕と杏ぐらい。しかも、棕はこれまで必要以上に話しかけてくるような事はしてこなかった。精々、授業

で配られたプリントを渡す時とか、それぐらいだ。

「ああ、杏にあれだけ五月蠅く言われたら従うしかないだろ。それより、珍しいな椋がこうやって積極的に話しかけてくるなんて。何かあったのか？」

「い、いえ別に何かあったわけでは……。そんなに珍しいでしょうか、私が榊原君に話かけるのは」

「珍しいな。最近はそうでもないが、少し前はそこまで交流あったわけではないだろ俺達」

「それは、その……………うう……………」

いかん、涙目になってしまった。

どうして君はそんなにも涙もろいのだ。フランをダース買いする少年の飼いだ物語を観たら、この少女はティッシュ一箱は使うんじゃないのか。

言葉に詰まって困り顔のまま涙を堪える藤林椋。そして相対するのは学校の不良トリ才榊原幸希。

完全にヤバイ絵面だ、ヤツが召喚されてしまう——！

——地鳴りがする。

ドドドと世界の終りを告げる終局の鐘のように、着実に、確実に、迅速に俺達の下へと迫っている。

予感の中した。ヤツが現れるのだ。驕り高ぶった盛者を地獄へ叩き落とすように、法を書き留めた分厚い鉄槌を用いてやってくるのだ。

足が震える。よくわからない汗が止めどなく流れている。恐怖から奥歯が鳴り、自然と同調するように体も小刻みに震えてくる。ヤツと会えるのは嬉しいが、それは平時の彼女であり、この状況では好ましくない。

逃げよう。そう思った瞬間、頭上に垂れ下がった蜘蛛の糸は虚しくも消え去ってしまつた。

「——「おおおおううきいいいいい——!!」

「……………さくらば素晴らしき日々よ」

今日まで生きられた事に後悔はない。

強いて挙げるならば、杏と精神と肉体共に合体出来なかつたのは悔いだらう。

ヤツは……藤林杏は、教室のドアを勢いよく開け放ち現れた。

女性らしい体系に似つかわしくない、大きな辞典。幽鬼のようにゆらゆらと体を揺らしながら、呼吸を整える音が時々漏れて聞こえる。そして、その上にある眼光は獲物を見定めた肉食獣のような突き刺すような視線。

身の毛のよだつ瞳の中には、間違ひなく俺が映っていた。

「「おうきい、あんた………掠を泣かせたら許さないって言ったわよねえあたし？」

「一つ言わせてくれ……」

「……何よ？」

「おれはむじつだ」

「被告人の証言は棄却されました」

辞典が投擲された。大リーガーも真つ青な速度で、正確に俺の頭部に向かって飛んでくる。

おかしいな、何を間違えたら学校内で死亡なんてフラグが立つんだろうか。……どう考えても掠への対応を間違えたせいか。

メシヤアという肉が潰れる音が内側から聞こえて来て、狂と化した杏が視界から消え失せた瞬間、これは杏が消えたんじゃないやなくて俺が飛ばされたんだと他人事のように思っていた。

※

「つたく、最初から誤解だと言ってってくれば良かったのに」

「ご、ごめんなさい榊原君。私がちゃんと説明してれば……」

「だから言っただろうに、俺は無実だって……」

ギャグ補正って凄いい。あれだけボロボロにされたのに、あつという間に元通りだなんて真面目に生きるのが嫌になってくる程だ。

通り魔紛いの事をしてきた杏は、俺が昏倒した後掠が懇切丁寧説明したらしくなんとか誤解を解くことに成功した。誤解だと分かった杏は申し訳なさそうに手を合わせて俺に誤っている……ように見えて、実は結構上から目線だ。

「あんたが紛らわしい事しなきゃ良かったのよ。これに懲りたら掠の事泣かせるんじゃないわよ？」

「はなつから泣かせるつもりは無かったんだが……」

不用意に掠を泣かせると杏の俺に対する好感度が下がってしまったうしな。

溜息を吐いて席に座り直し杏と掠を見ると、なにやら杏が細目でニヤニヤとした視線を俺と掠の二人を行き来させていた。

「なんだよ杏、その面白いモノを見つけたような眼差しは。傍から見ると変人だぞ」

「別にいい、そういえばなんか仲良さそうだなあつて思っただけよ」

「お、おねえちゃん……!?!」

「なんだそりゃ、ただ真面目に登校してきた俺に劳いの言葉を贈っただけだぞ掠は。それほど深い意味なんか無いし、あるわけないだろ」

「うう………」

なんで棕は落ち込むんだ、当たり前的事しか言っていないだろ俺。

「あんたねえ、ホント女心つてのを分かってないわね」

「馬鹿言え俺ほど女心を学んでる男は早々居ないぞ。毎日勉強の為にざつ……」

「ざつ……? なによそれ、幸希みたいなデリカシーの欠けた男が何で勉強してるんだつて?」

「あまり無理に訊いちや迷惑だよお姉ちゃん……」

興味深そうに訊いてくる杏だが、俺が恋愛雑誌を愛読しているなんて知られたら……絶対に軽蔑してくるかも、いやこれを材料に無理難題言ってくるかもしれない。

それはそれで大歓迎なんだが、いつまでも杏との仲が発展しそうな気がしない。……どうしよう。

棕は俺に悪いと思ってるのか控えめな性格だからかは知らんが、杏の事を制止してくれてるが、どうにもならないだろうな。

「あー、あれだ……その、材料、とか買い込んで料理の勉強してるんだよ。ほら、誰かから料理を出来る男はモテる! なんて話を聞いたことがあったからな」

「料理? 幸希が料理? へえー以外ね、いつもカップ麺とか外で済ましてそうないメージだけだ。ねえ棕?」

「うん、でも……私は料理の出来る人は……その、い、かつこ……いいと思いますっ!」

「ほら、椋もこう言ってるんだし。そうだった、それなら今度お弁当作ってきてよ。あたしと椋があんたの料理の腕を見てあげるから」

思わぬ言い訳から嬉しいイベントが発生しやがった。

たまには嘘も役に立つ。いや、料理をすることに關しては嘘じゃないのだが、一応家でも俺が家事の全部をやってるわけだし……。

「えっ、お姉ちゃん急に言っても、榊原君の迷惑になるんじゃないかな」

「大丈夫でしょ？ どうせいつつ陽平の部屋でだらけてるだけなんだから。でしょ、幸希」

「杏の言うとおりだが、なんかそれだと俺が春原の部屋にしか居ないみたいない方がいい方だな」

そんなにしょっちゅうは居ない、あいつだつて家族が訪ねてきたりしたら俺は氣を利かせて居なくなるし。今迄あいつの家族が訪ねてきた事なんて一度もないけど。

曰く妹が居るらしいが、春原の妹の事だ、きつと怪鳥のような鳴き声を上げる生物なんだろう。

春原の妹がどんな形状をしているのか考えを巡らせていると、杏がポンと手を叩いて口を開いた。

「じゃあ決定！ 週明けの月曜日の昼休みに集まるわよ。幸希、あんたちちゃんとその日

も学校来るのよ？ 来なかったらボタンの餌にするから」

「サラツと恐ろしい事を言いやがるなお前は。分かったよ、その日はちゃんと行く」

「ちゃんと来るのよ？ 椋が腕によりをかけて作ってくるからっ」

「お、お姉ちゃんっ……」

そう言つて高笑いをあげながら杏は教室を後にした。……あれっ、もしかしてこれっで……昼飯を一緒に食べようつて事でいいんだよな？

もしかして今までの事は夢なんじゃないかと思つて、隣に居る椋の様子をうかがつてみると、目が合つた瞬間に逸らされてしまった。なんか嫌われるような事したっけ、ああ泣かしかけたな。

それなのに俺が杏と一緒に飯を食べる事を許容してくれるなんて、流石は俺が惚れた女神の妹だけあるな。

「すまんな椋。今更だけど俺が居ると迷惑になつたりするんじゃないか？ もしそうだったら……」

「そんな事ありませんっ……!」

椋は参加しなくても、と言おうとしたらいつもよりも大きい声量で反論してきた。

気が小さい彼女からはおよそ想像のつかない声だ。多分初めて聞いたような気がする。

だからこそ、不意を突かれた俺はしどろもどろになってしまふ。

「そ、そうか……それならいいんだ。月曜、俺も楽しみにしてるから」

「はい、私も……頑張りますっ」

ぐつと拳を作つて意気込んでいるが、多分見た目や性格的に掠の料理の腕は問題ないだろう。まっ、目当ては杏の手料理なだけだな！

こうして授業開始のチャイムが鳴つたところで俺達はお互いの席に戻つた。

想像通り、岡崎と春原は来なかつた。

※

半ドンつてこともあつて、いつもより早く授業を終えた俺は外の雨が強いから弱まるまでどこかで時間を潰そうかと思つて校内を彷徨つていた。

校舎には生徒の数もあまり多くない。いつもなら運動部なんか居たりするんだが、外が雨だからそれも休みになっているんだろう。たまに意識高い部活なんかは、室内で筋トレをひたすらやったりしているが、そんな気配も感じられない。

よつて俺は好きに歩き回つても面倒くさい視線を浴びせられることもなく、のんびりと散歩することが出来るわけだ。

とはいえ、ずっと歩き回っても何も面白くない。ここに春原でもいればおもちゃにして遊ぶんだが、それも叶わない。今頃あいつは部屋で寝てるだろ。

そんな時だった。

「お前は……確か、榊原だったよな？」

「あ？　だれ……坂上……？」

後ろからかけられた声に反応して振り返ると、そこには俺が今一番会いたくない女ナンバーワンが立っていた。

この前、有耶無耶なままに逃走してしまったのもあつて気まずさがとんでもないぐらいある。相手も俺を見る目が若干細く、ジト目のようになっていた。

「この前は世話になった。それで、今日はあの失礼な男は居ないのか？」

「……あいつなら今日はサボリで来てねえよ。見てみろよ外の雨を、こんなんじやあいつじゃなくても外に出たくなくなる」

「感心しないな、ズル休みを許容することは出来ない」

「どこまでも固い女だなお前。そんなんじや嫁の貰い手なんかいつまで経つても見つからないぞ」

鉄のような女。

一見して受ける印象はそれだ。当時、俺がこいつの姿を初めて見た時は少なくともそ

う感じた。

鬼のように強くて、それでいて玲瓏たる立ち振る舞い。もしかしたら、あの頃ちゃんといつと話をしていたら惚れていたかもしれないな。杏が一番だけど。

そんな鉄女は俺の言葉を聞いて表情を曇らせていた。

「いまのは、少し傷ついた。私だって女なんだ、お嫁さんに憧れたりする……」

「お前、頭の中に花でも咲いてるのか？」

おめでたい思考をしてるな。これが杏だったら速攻で婚姻届、もちろん俺の所は記入済みのやつを差し出すが、そうじゃないなら別だ。

「まあ、俺には関係ない。好きに嫁なりなんなりなつちまえ、じゃあな」

これ以上坂上と会話をして余計な事を思い出してしまうと、俺としては困る。だから早々に立ち去ろうと背を向けて歩き出した……んだけど。

「待ってくれ。お前には訊きたい事があったんだ、それまで出来れば時間を作ってほしいのだが……見たところ暇そうだ。少し付き合ってくれ」

「嫌だ、じゃあな」

制止の声も即座に切り捨て、歩みを止めず俺は先を急いだ。

背後からまだ声がするが、無理やり引き止めるような強引さは持っていないらしい。無視して歩き続けると、いつしか諦めたのか声も聞こえなくなり遠ざかる足音が聞こえて

きた。

昔の坂上からは考えられない。あんな生真面目な……そういえば、昔からあいつはあだつたような気がするな。人様に迷惑をかけていた工業高校の連中を中心に狩りをしていたし。案外、あれが元々の性格で、性分なんだろう。

なににせよ、今の俺とは関係の無い人物だ。あつちから来ない限り接点なんか生まれ
ない。

「……腹、減ったな」

グウと情けない音が腹部からして、今日はまだ何も食べていない事を思い出した。時間
間はもう昼を過ぎている。

購買にでも行つてなんか買うか……それとも。

「久しぶりにあそこに行つてみるか、多分まだ帰つてないだろう」

進路変更をする。購買の飯よりも五倍は上手い食べ物がある場所に向かつて俺は足
を進めた。

シトシトと降りしきる雨音をBGMに、段々と人通りが少なくなつていく廊下を歩き
続ける。

静かな学校というのは自分の殻に籠つて考えにふけるには最適だと思う。普段騒々
しい空間が静謐の顔を覗かせる瞬間というのは俺の好みで、こうしていると心が落ち着

いて色々と考えがまとまってくるもんだ。

帰りたくもない、けど絶対に帰らなくちゃならない家の事とか、生活の為のバイトで効率のいい仕事をするにはどうすればいいのか等、切り出せば沢山出てくる。人間ってのはいつだって悩みながらおっかなびつくり前に進み続ける生き物なんだと、哲学者めいた恥ずかしい言葉なんかを思い浮かべてみたりと、なかなか飽きないものである。目的地に着く途中、ふとグラウンドの状態はどうなってるんだろうと昔の癖で外を見た事を歯がゆく思いながら見ると、一人傘も差さずに立ち尽くしている人影が見えた。

「罰ゲームか何かか？ あんな所に突っ立ってたらあつという間に風邪引くぞ」

強い雨のせいでハッキリと見えないせいで誰かは分からないが、分かったところで俺が知っている人物なんてかなり限定されるが、それでも口出しをしたりはしない。

望んでやっている可能性は低いが、そうじゃなくてもその内自分から引き上げるだろう。

俺が態々注意したとしても、相手だつて俺には言われたくないだろう。よつて、視線を外して先を急ぐことにする。お節介よりも今は食欲を満たす方が先決だ。

歩く事数分後、目的地である『資料室』に到着した俺は軽くドアに手を掛け鍵が開いている事を確認すると、躊躇いなく馴染みの店に入るように扉を開けた。

「うーっす、有紀寧一居るかー？ 飯無いかー？」

室内は軽い書庫のようになっており、壁に沿ってアルミ製の本棚が立ち並びその中央に一つのテーブルが置いてある。

そのテーブルに、目的の人物は座っていた。

「あつ、幸希さん。こんにちわ、お久しぶりです……本日はお食事ですね？」

「うん腹が減つて減つてしようがないんだ、オムライスあるか？」

「はい、オムライスですねかしこまりました」

椅子に座っていた人物『宮沢有紀寧』は持ち前のおっとりとした柔和な笑みを浮かべ、席を立てていそいそと食事の準備をし始めた。

それを後ろから観察しながら席に着く。

この有紀寧という人物は、俺より一つ年下の二年生だ。いつもおっとり温和な表情を受けべている少女で、この資料室の主でもある。どういう経緯でそうなったのかは、俺も訊いてはいないから詳しくは知らないが、ここで飲食の提供をしていたり面白い話が聞けるので気に入っている。

最近はずつかりご無沙汰だったが、これを機会にまた通いだそうと思う。

「いきなり来て悪いな。ちょうど腹が減つて、購買よりは有紀寧の飯の方が美味しいから」「わたしは構いませんよ。幸希さんがいらつしやつて下さると、とても楽しい時間を過ごせますから。……お待たせしました、オムライスです」

「久し振りに見たなこのオムライス。それじゃあ、頂きます」

「はい、召し上がれ」

ホカホカの湯気が立ち上っているオムライスを早速頬張る。

ちようど良い火加減で焼かれた卵と、下に隠れているケチャップライスがとつてもマツチしていて最高に美味い。余計な小細工などしない、家庭の味がするこのオムライスは俺の好物の一つ。デミグラスだか何だかのソースより、シンプルにケチャップだけをかけて、ご飯の所もハムとピーマン玉ねぎぐらいしか入っていないオムライスが一番なのだ。誰が何と言おうとも一番なんだ。

休憩など挟まず、一心不乱に空腹な胃袋へとオムライスを運び続けているのを、有紀寧はニコニコとした表情でずっと見ていた。

「……ふいー、ごっそさん。相変わらず俺好みの味だったよ流石は有紀寧だ」

「お粗末様です。久し振りだったので、少し違ってしまうかとも思っていました、大丈夫でしたね。どうぞ、食後のコーヒーです」

「おっ、気が利くなそれじゃあ、お言葉に甘えて頂きます」

ふう、至れり尽くせりとはこのことだな。

食事が出てコーヒーも出る。普通に考えればありえない事なんだが、それが起きるのがこの『資料室』なのだ。

「なんかこうしていると、昔を思い出すな……」

「ええ、あの頃の幸希さんに、わたしはよく怒られてましたね」

「……………ありや忘れてくれ。若気の至りってやつなんだよ。そういえば、ほいつこれオムライスとコーヒーの金な」

「そんな好きでやってるんですからお金なんて……………この会話、もう何回目でしょうね」

「少なくとも、十回は超えてるな、という事でほれその豚にでもツッコんどいてくれ」
今でも十分若造だけど、あの頃はそれ以上に馬鹿で情けない人間だった。そんな頃に、俺はこの少女と出会った。

詳しく思い起こすと長くなるから省くが、まあお陰でこうして気軽に気を抜ける場所を獲得したわけだし、損をしたなんて考えは一切湧いてこない。

オムライスとコーヒーの代金として大体の計算で700円程を有紀寧に手渡し、有紀寧が一番背が低い本棚の上にある豚の貯金箱にそれを全て入れた。

これまで俺が食べた飲んだ分の代金は全てあの中にある、これが彼女の最低限の譲れるラインだからだ。

コーヒーの残量が半分くらいになった頃、俺はとある本に視線が留まった。

「なあ有紀寧、この『とっておきのおまじない百科』ってなんだ？ 前俺が来た時は無かったけど、新しく増えたのか？」

「いいえ、幸希さんが以前いらっしやった時もありましたよ。多分、目に付かなかつたんだと思います。これは沢山のおまじないが乗っている本です、効果抜群なんですよ」

「それって、占いとかの類なのか……」

信憑性は薄いが、有紀寧が言うならきつとそうなんだろう。この少女は誠実で嘘は言わない正直な子だ。時々天然ボケをかますが、それぐらいだ。

少しは、試す価値あるかもしれないな。

「それじゃあ、何か面白そうなおまじないとかあつたら教えてくれ。実際に試してみるからさ」

「では、この——」

有紀寧が楽しそうに話し始める。

どのおまじないがどんな効果を持っているのか、こんな願いを叶えるにはこんな事をしなくてはいけない等、沢山の話を続けていた。

始めはアツアツだったコーヒーが温くなり、いつしか時間は三時頃を過ぎていた。

外では相変わらずの雨だったが、この部屋の中は暖かく心安らぐひと時を得られる貴重な空間となっていた。

杏との悩みや、岡崎の事、それに……いつかは帰らなくちゃいけないあの場所の事などを忘れられる資料室は、今となっては俺には無くてはならない場所なのかもしれない

い。

十年來の兄妹のように無邪気に語り合う俺と有紀寧は、その日晩飯もご馳走になる事になった。

第八回：片思いの味

古河が風邪で寝込んだ。

そう切り出した岡崎は浮かない顔をしていた。誰が見ようとこう思うだろう——腑抜けの顔だ。

例によつてしつこいようだが春原の部屋で珍しく暗い岡崎は、炬燵に入ってちやぶ台に顎を乗せていた。

そんな折に岡崎は重い口を開いたのだ。

「……古河が、風邪で寝込んだじまつた」

「古河？ 誰それ、榊原知ってるか？」

「ああ、それで？ というかどうして、体が弱いつて言つてたけどそれが原因か？」

「昨日、雨だっただろ。それで——」

ポツポツと岡崎は語り始めた。

始まりは一昨日の約束が発端だった。岡崎は古河とよりにもよつてこいつの中で二、二を争う程の触れられたくない傷であるバスケをする約束をしたらしい。

俺達がこうして寄り合っている原因でもある部活。自然と春原と俺は軽口を言えな

い気分になり、部屋の雰囲気は暗くなるのを感じた。この三人が共通する傷は、気分を害するには十分な威力を持つていた。

しかし、そうまでして話すのを決意した岡崎の覚悟を無碍にするほど俺達は薄情な人間ではない。

話は続く。俺が昨日思っていた通り、岡崎はこの部屋で春原と共に居たらしい。本人としてもあまり晒したくないデリケートな部分なだけあって、始め岡崎はすっぱかすつもりだったらしい。

「じゃあ、なんで学校に行く気になったんだ？ 結構雨降ってたろ、面倒じゃなかったのか」

「逆だよ、雨だから……あいつ待ってたらって思ったんだ」

そうして、不安は的中した。

あの時俺が廊下から見た光景は古河だったのか。それが分かってれば、もしかしたら口出したかもしれないなかったのに。

今更湧き上がった偽善に、俺は自分が恥ずかしくなった。取り繕うようなこの感情が、今は憎らしい。

結局、それが原因となって古河は風邪を引いてしまったらしい。

「あの日、俺がちゃんと学校に行っていれば……」

自分が原因で古河に迷惑をかけてしまったと、そう思っているのだろうかこの戯けは。

俺自身を焼く憎しみは、いつの間にか岡崎への意味が分からないモヤモヤとした感情に変化していた。なんだろうこの気持ちは。こいつは、岡崎は責任を感じているのに……それは至極まっとうな考えなんだが、俺にはそれが何故が許せなかった。

「岡崎が古河に肩の話をしたのは以外だと思った。それだけあの子を信用したんだろう……だけど、ならどうしてお前は今ここでこんなかび臭い部屋で腐ってるんだよ」

「……榊原？」

「ちよつと、かび臭いはよけいでしょっ」

岡崎が困惑したように下がる眉を見て、回りくどい言い回しは止めで単刀直入に言うと思った。

「……行けよ」

「はっ……？」

「だから、さっさと行けよ古河の家に。公園の向かいにあるパン屋だろ、ここで野郎に愚痴溢す暇があるんだっいたらさっさと家に行つて、見舞うなり謝るなりなんなりお前が思うようにすればいい」

本人を前にちゃんと話をしないで、俺達と会話をしても意味は無い。そうしている内

にも、あの小動物はきつと色々考え込んでしまふだろう。未だ交流は全然ないが、それでもあの少女が岡崎の傷を知って心を痛めないわけがない。

だから、俺は俺の目的の為に岡崎に発破をかけなくてはいけない。

「男だったら迷う前に走れ！ お前にキン〇マがついてんならそれぐらい分かるだろう！」

「お、おうつ……………ちよつと行つてくる！」

「よつしやそれでこそ岡崎だ、かつ飛ばせ突つ走れ！」

表情に喝が入った岡崎が炬燵から跳ね起きる。

瞳には光が戻り、迷いの色は見えなかった。

勢いよく走り出し部屋から飛び出た岡崎を見送り、さつきまで岡崎が居た場所の炬燵に潜り込む。

一連の展開を傍観者よろしく見届けていた春原が、ポツリと捨て台詞を吐くように口を開いた。

「……………なにこの安っぽい青春劇みたいな茶番は」

「岡崎が居なくなつたお陰で、この部屋で一番の場所を奪取する事に成功したんだから安い代償だろ」

「あんたホント酷い人間ツスねえ！」

教訓——。

感情をむき出しにすると恥ずかしい思いをするが、それに見合う報酬をたまに得られる時もある。

※

無事岡崎が古河家に向かった後、俺は用事を思い出して春原の部屋から出て行き商店街を歩いていた。

なんの用事かなんて、思い出すだけでも俺の頬は熱したマシユマロよりも柔らかくとろけて落ちてしまう程緩んでしまう。ついでに目じりがだらしなく下がったり、口の端が釣り上ってしまったりする。

なんてたつてそう、明日の月曜日は学校。それだけなら憂鬱で面倒なのだが、今回は付け加えて『杏と一緒に昼食』という人生最大のイベントが待ち受けているのだ。これが喜ばずしてどうする。ずっと、毎日、毎時毎分毎秒妄想し続けた内容の内の一つが、明日を迎えるだけで叶うのだ。今までに比べれば安いもんだ。

特別何かする必要はないのだ。ただ弁当を少し多めに作れば良いだけだ。

「そうと決まれば、ちよつと豪勢にしたって罰は当たらんだろうー！」

中学の頃、クラスに一人は居た他の奴よりもちよつと豪勢な弁当。あれはきつと母親が見栄を張るために無理をしたに決まっている。そう、ウチはいつもこんなのを食べているのよ作戦だ。

当時、俺はあれが羨ましかつた。毎日ゴマがついているあんぱんと紙パックの麦茶をすすする俺には、あれは宝箱のような物だつた。

それを杏の前で披露すれば、一躍俺は料理が出来るいい物件と評価されて俺を見直すだろう。掠だつて料理が出来る男は良いと言つていたんだし、双子なら少しぐらい好みが一致するかもしれん。

行きつけの店で食材を買い集め必要な物を揃えていく。この時、余計な買い物はせず節約するのを忘れない。家の家計はなかなか危ないから、不必要に消費したら後々苦労してしまう。

塵も積もればなんとやらと言うぐらだから、心を鬼にして欲望を抑え込む。

愛読していた雑誌に書いてあつた純白スーツも、岡崎が止めなかつたら買つてしまつていたかもしれない。

「そういえば、杏は嫌いな食べものとかあるのか？」

もしあつたとしたら、そんな地雷を踏んでしまつたら杏に余計な気を遣わせてしまふかもしれない。

普段こそ傍若無人な行動が目には余るときがあるが、本質が心優しい少女だという事を俺は知っている。そんな杏が、俺の作った料理の中に苦手なモノがあつたら、あいつは気を使つてしまうかもしれない。

どうしよう。ある程度もう材料は買つてしまつたし、これからメニューを変更する事は出来ない。第一、俺はそこまでレパートリーがあるわけじゃない。一週間のローテーションするのが精いっぱいだ。

こんな時、杏本人……もしくは掠でも良いから通りがからないだろうか。

一縷の希望を抱いて辺りを見渡してみるが、夕飯の食材を買いに来たおばさんとか、ガチャポンに夢中になつてゐるクソ餓鬼とかそれを見咎める母親とかしか嫌がらない。

日曜の休日にこんな所で逢えたら、運命としか思えない。……だからこそありえないのかも、と柄にもなく弱気になつてしまふ自分が居た。

「自分を下卑た所で何にもならんな。とりあえず、一回引き上げるか」

誰に向けて言うわけでもなく澄み渡る空を見上げ、青臭い顔をして浸つて見たりする。

俺がラブコメの主人公だったらここで杏が俺の下に現れるんだろうけど、人生そう上手く行つたりしない。大多数の人間は、誘蛾灯のように引き寄せられる力を持つては居ないのだ。だからこそ悩み、懊悩するんだ。

振り向いて欲しい、声を聴きたい、自分だけに微笑んで欲しい、手に触れたいと。叶わぬ願いを夢想して叶わぬ現実に悲嘆の声を上げるのだ。

だけど、俺はそこで終わってしまったつもりは一切ない！

心底惚れこんだ女なんだ、そう簡単にはいそうですかと諦められるような代物じゃないんだ。

岡崎が好きだろうが関係ない。単なる友達としか思っていないなら、その関係乗り越えてやる。

これは男の意地だ。俺は、杏から岡崎への想いを奪い去って俺に向けなきや、一生後悔する。

商店街を抜け、帰り道を歩いていると目の前に見覚えのある公園が目に入った。

いつか杏が棕とゲーセンで話していた内容を聞いてしまつて、シヨックを受けた翌日にサボりに使つてた公園だ。あの時と変わらず、子供達は数人が集まつて野球をしていた。

あのオッサンは居ないのだろうか。居たらいつかの再戦を申し込んだのだが、見渡しても偉そうに笑いながら煙草をくわえる男の姿はどこにも見当たらない。

理由はすぐに分かった。向かいのパン屋を遠目に眺めてみると、店内に腕を組んだオッサンが居るのが見えたからだ。

他にも岡崎の姿が見える。そうか、ちゃんと行動したんだなあいつ、これで古河との距離は確実に縮まるだろう。

ちよつとオツサンへの挨拶がてら顔を出してみるか。

ちよつとパンも欲しかった所だし。

公園を突っ切つて真つ直ぐ古河パンと看板が出ている店まで歩く。次第に距離が近くなるにつれて、店内での会話が耳に届いてくる。

「ま、なんにせよお前が運んでくれたお陰で大事にならずに済んだ、ありがとよ」

「いや、俺は……」

申し訳なさそうな面持ちで視線を下に落とす岡崎。こいつは不良なんて言われてるけど、どうしようもない結果の果てにそう揶揄されてるだけで実際は優しい男なんだな、と初めて会った頃のあいつを思い出した。

見たところ岡崎の用は粗方済んだように見える。邪魔にならないタイミングは、今だろうと思ひ俺は店内に入りながら岡崎に声をかけた。

「人に感謝されたら、遠慮せずに素直に受け取った方が良いと思うぞ岡崎」

「榊原っ？ お前、なんでここに……？」

「買ひ物の帰りがてら通りがかったからな、ちよつと顔を出してみたんだ」

驚いた様子で振り返つた岡崎の顔は、結構面白い感じになつてて内心笑えた。

「客かと思えば、いつぞやのピッチャーフライ小僧じゃねえか。お前も渚の見舞いに来たのか？　だとしたら諦めな、渚は今寝てる。寝言で俺に愛を囁きながらな」

「やかましい。ありや調子が悪かったんだ、次は銀河系までかつ飛ばすつて言つたらうが。というか、頭に蛆でも湧いてんのかこのオッサンは？」

「俺に訊くなよ、ホント何しに来たんだお前？」

「けつ、テメーにや一生無理だな、俺を敬う事からまず始めやがれ」

一遍に「ごちやごちや喋るなよ……」

これでも俺は友達が少ない人間なんだ、そこまで会話には慣れてないんだから。

一々受け答えするのも面倒なので、一遍に済む返答を考え口を開く。

「パンを買いに来た」

「なんだよまぎらわしい、客なら客と分かるように、今度からはリンボーダンスしながら入ってきやがれ」

「無茶苦茶言うな、このオッサン……」

オッサンの無理難題に肩を竦める俺と岡崎。こんな大人がパン屋を営んで、どうして今まで生き残つてこられたんだろうか。失礼ながらちよつと不思議だ。

パンの味が心配になつてきて店内に陳列してある商品を見まわしてみるが、うむ、なかなかどうしてまともそうに見えるな。……なんか一種類だけ雰囲気が違うのが並ん

ではいるが。

どんな味がするんだろうと思いきげしげと観察していると、店の奥、住居とつながっている出入り口の近くに立っていた古河によく似た女性が笑顔で近づいてきた。

「あら、あなたは岡崎さんと渚のお友達ですか？ 始めまして、古河早苗と言います」

「ご丁寧にも、岡崎と古河の知り合いの榊原幸希って言います……つかぬ事を聞くけど、貴女は古河の姉貴かなんかですか？」

「まあ、お上手なんですわねっ」

破顔する早苗という女性は俺の質問を聞くなり、いそいそとある一角のパンを袋に詰め始めた。なんだろう、もしかしてこれくれるのかな。

卑しんぼな期待をしていると、脇腹を誰かに小突かれた。というか、岡崎だった。

何かと思いい視線をやると、岡崎は肩を颯め耳打ちをしてきた。

「……お前、あの人は古河の姉貴じゃなくて、母親だぞっ……」

「……マジかよっ、でもなんか嬉しそうにしてるし別に良いんじゃないやね。パン包んでるし……」

「……バツカお前、ありやなあ、早苗の作ったパンなんだ。良いか小僧、なにがなんでもアレを口にしたらぜつつつつつたいに『美味い』と言うんだぞ。良いな……?」

深刻な表情で話に混じってきたオッサンはわけのわかんない事を言ってきた。

なんだよ絶対に「美味しい」って言えっつてのは。料理番組の食レポでも俺にしろっつて
いうのか？

「なんだっつて良いけどさ、そんなに不味いのかあの早苗さんっつて人のパンは？」

「……………食えば分かる」

それ以上、オッサンは何も言わなかった。

早苗さんなる古河の母は袋詰めを終え、俺と岡崎の前まで足取り軽くやってきた。外
見からは絶対にこの人が古河ぐらいの歳の母親だなんて、分かるわけないだろ。

人類っつて凄いんだなと感慨深くなっていると、早苗さんは俺に袋を手渡ししてきた。

「はい、よかつたらこのパン貰ってください。……………岡崎さんにも、昨日のせめてもの感謝
の気持ちとして受け取ってください」

「おっ本当にくれるんすか。ありがとうございます、これで少しは食費が浮きますわ」

「い、いや俺は……………そんなつもりじゃなかったんで……………」

「貰っつとけよ岡崎、こういうのは相手を態々引込めさせたら失礼だろ」

「くっ……………正論だけど、何も知らないお前に言われると……………」

なんで拳なんか握ってるのだこの男は。

もらえるんだから、ありがたく貰っつておけばいいじゃないか。

袋の中には結構な数のパンが犇めき入っていた。どれもこれも、あの時雰囲気が違う

と感じていたものだったが、そうかこれは早苗さんが作ったパンなのか。……という事は、他のはみんなオツサンが作ってるのか？ 似合わねー。

見ていたらなんか腹が減ってきたので、試しにと思つて一つ取り出し口に運んでみる。

「それじゃあ、早速一つ頂きます早苗さん」

「おまつ、正気か……！」

「どうぞつ、めしあがれ」

制止する岡崎の声を無視して俺は一口、大きな口を開けてそのパンを頬張った。

……なんだろう、これは、パンの中に……あさりか？

断面から中を覗くと、パン生地の中にはあさりの佃煮が入っていた。

「名付けてあさりパンですつ。コンセプトは『田舎』、故郷に帰つて来た時、食卓に並ぶ食材をパンの中に入れてみました。どうでしょう？」

「せんべいの次はあさりかよ……どうだ榊原」

「小僧、わかつてるよな……？」

「…………うん、美味いつ！ 美味いつすよこれ！」

ガツガツと食いかけのパンを一気にかつ込んだ。

全然不味くないじゃないか、なんだよビビらせやがって。

満開の笑みを浮かべる早苗さんと、その光に当てられて慄いているオッサンと岡崎は、俺を化け物でも見るような目で見てきた。

「なんだよ、俺がどうかしたのか？ 全然美味いじゃないか早苗さんのパン。これなら金払ってでも買いに行くぞ俺」

「小僧、お前もしかして……とんでもない悪食なのか!? 舌が馬鹿になつてんのかっ!?

……はっ」

そこまで俺が「美味い」って言ったのが衝撃だったのか、オッサンは肩を掴んで前後に揺らしながら詰問してきた。

「あんただって俺に絶対「美味い」って言えとあんだだけ釘を刺したじゃないか、なんだよ疑つてんのか？ それとも——。」

揺れる視界に酔いそうになってきた時、チラツと見えたのは涙ぐんでいる早苗さんの姿だった。……えっ、もしかして今のオッサンの台詞で泣くのかよ。

「わたしのパンは……わたしのパンは……」

「や、やべえ……」

「味覚検査の備品だったんですね——!」

なんてこった、泣きながら店から出て行ってしまったぞあの人。中身は娘と同レベル

……いや、下回ってるのか?

岡崎が動じて無い所を見ると、そう珍しい事じゃないのかも。

「くそっ……俺は、大好きだぁー……!!」

慌てたオツサンが早苗さんのパンを口いっぱい頬張り、そのまま愛を叫びつつ早苗さんを追いかけて行った。

なんなんだこの夫婦漫才は。

これがこの店の名物なのか。

「なあ岡崎……これは、いつもの事なのか？」

「近所では名物になってるらしい……」

見世物になってんのか、これで金取れたりとかしないかな。

※

春の陽気が強まる昼下がりが、幸希はいつまでも古河パンに居てもしょうがないと判断し朋也と別れを告げ去って行った。

早苗のパンを平気な顔して食べる姿は、朋也にも衝撃だったらしく未だその余韻が残るなか去りゆく幸希の背を見送っていた。

家に帰ると、幸希はそう言っていたが、その表情が朋也にはとても痛ましく見え同情

を禁じ得なかつた。

初めて彼とあつたのは今から一年程前の話。

二年生になり、杏と春原の紹介で知り合つた幸希への朋也の印象は一言で言えば「危なつかしい男」だつた。

いつ顔を合わせても、体のどこかしらに傷があり、酷い時は頭に包帯を巻いている時もあった。氣になつてそれを質問した時、幸希は「男の勲章だ」と言い張っていたが、朋也にはそうは見えなかつた。答える瞬間、見逃してしまふような刹那、幸希の表情が翳つたのを朋也は見てしまつたから。

勲章などという誇らしいものではなく、もつと別の、直視したくない現実の表れのような傷に朋也は視えたのだ。

勿論それは勘違いなのかもしれない。

長い間父と不仲で、いつも衝突をして挙句肩に一生残る傷を負つた朋也の被害妄想なのかもしれない。けれど、それを抜きにしても幸希の怪我の頻度は多すぎる。

出会つて間もない頃ならいざ知らず、いまや彼は滅多に喧嘩などはしなくなつただ。

二年生の半ば、後半あたりからめつきり丸くなり。何かに熱中するようになってい

朋也はそんな夢中になつてゐる幸希を見て喜ばしく思つていたが、いまだなくならぬ怪我の後だけは尾を引いていた。

「一年から知つてる春原でさえ知らない事なんだ。俺が首を突つ込んでいい話でもないな」

自分と一緒に家に帰りがらない幸希。

そこに怪我の理由があるんだろう。だけど、それを無理やり訊いた瞬間、あいつは自分達との縁を切つて居なくなつてしまふ……そんな嫌な予感がして堪らない。

だから、これまでと変わらず彼とは適度な距離を保つた馬鹿をやる友人でいよう。

そうして、朋也は後に店に来た綺麗な女性に早苗のパンを全てあげて店から去つて行つた。

※

こう言つてはなんだが、今の俺、もしかしなくてもラブコメの主人公並みにラッキーなんじゃないか？

「ちゃんと時間通りに来たようね、関心関心、やっぱ時間を厳守する男の方が良いわよね
「掠？」

「えっ？ あ、う……うん、そうだねお姉ちゃん。榊原君……今日はよろしくお願ひしますっ」

昼休み。土曜に約束していた通り、杏……と椋の二人との昼食会と相成ったわけで、そこに参加しているこの俺は本当に『榊原幸希』なんだろうか。

実はまったくの別人になっていて、このイベントは俺が楽しみ過ぎて夢に見てしまっただけのまがい物なんじゃないかと疑いたくなる。

俺の幸せは希望通り現実となっているのか？

「杏……スマンが、俺を一回殴ってくれないか？ 夢幻の類でないか、確かめたいんだ」「相変わらず突拍子もなくわけのわかんない事を言う奴ね。これでいい、のっ!？」

「あべしっ……!？」

頭が吹っ飛ぶかと思っただぜ。

でも、これでようやく分かった。

………夢じゃない!!

「ありがとう杏。お陰で俺は今、最高の気分だ」

「うわー、もしかしてあんたマゾだったの？」

「ち、違わい！ ちょっと寝ぼけてたからそれを覚ましてもらおうかと思っただんだい！」

杏になら大抵何をされても良いが、マゾはちよつと厭だ。

趣味じゃないし、何より厭な記憶を呼び覚ましてしまう。

誠心誠意の説得が実を結んだのか、結果として俺がマゾという不名誉な誤解を解く事には成功した。

さあ、気を取り直して昼食会としやれ込もうじゃないか！

「へえーこれ、ホントに幸希が作ったの？ 結構やるじゃない」

「凄い、わたしじゃこんなにちゃんと作れないよ……」

「ま、今日はいつもより少しだけ豪勢にしたけどな。せつかくだから特別性にした」

「それって、掠やあたしが居るからって事？ なーんだ、あんたも結構普通に男の子やってんのね」

「当然だろ、お前ら（杏）にはちゃんとしたものを食ってもらいたくてな。ま、こんなもんよ」

関心した様子で俺の作った弁当を観察している二人に、鼻高々に答える俺。

ふっ、これで杏の心は俺がゲットしたも当然。岡崎よ……お前は安心して古河とくっ付いてイチヤイチャしてくれたまえ。

「さあ、遠慮なく食ってくれ！ 味は食べてからの楽しみだ！」

「それじゃあ、いただきますーすっ」

「い、いただきます」

それぞれ手持ちの箸で俺の弁当をつまみ始める。……あの杏が使ってる箸、どうにかして手に入らないかなあ。そしたら簡単に杏との間接キスが出来るのに。

形の良い小さく可愛らしい杏の口を、悟られないように横目で見ながら料理が入っていくのを見届ける。

もぐもぐと思わず頬ずりしたくなるような、柔らかそうな頬が無造作に膨らんだり伸び縮みするのを見ながら、味の感想を述べられる時を待っているとまず始めに掠の方が口を開いた。

「美味しいです……少なくとも、わたしより上手です」

「良かった、友達からは味音痴だの悪食だの言われてるから、ちよつと味付けが心配だったんだが」

「……うん、普通によく出来てると思うわよ。ただ……」

「ただ……?」

なんだろう。何か嫌いなモノでも入ってたのか?

危惧していた予感が現実を呼び寄せてしまったのか?

早くなる心臓の鼓動を抑え込み、杏が何を言うのか、固唾を飲んで待ち構える。

「そうね、あんたにしては意外と上手に出来てるわ。見た目だってそうだし、栄養バランスとかもしつかりしてるし、むしろそつちが壊滅的なんじゃないかと思ってた分これは

驚きだったわ。でも……ちよつと味付けが濃いように思うのよね」

「濃い、か……。そりゃ悪かった、ついいつもの癖で母親の好みにしてしまった」

「いいのよ別に、味の好みは千差万別あるんだから。そつか、幸希のお母さんの好みはこれぐらいなんだ。いつもあんたが作ってるの？」

「……………まあ、そうだな……………」

「……………？」

「母親」と訊かれて無意識に声のトーンが低くなつてしまったのを自覚した。

杏は微妙な俺の返事に首を傾げるだけだった、が逆に椋がそんな俺が気分を害したと思つたのだろうか、

「わたしは、榊原君の料理……………す、好きですよつ、毎日食べたいくらいですー」

なんて気を使つて言つてくれた。顔を真っ赤にしている辺り、よほどの勇気を振り絞り、羞恥を耐え忍んだのだろう。そこまですなくても良いのに。

流石は杏と血を分けた双子の妹だけある。優しさが俺に安らぎを与えてくれる。

「あらつ、よかつたじゃない幸希。椋に好きつて言つて貰えるなんて、普通じゃありえないことよこの幸せもんっ」

「料理の話だろうが料理の。お前はなに第三者を勘違いさせるような事を言つてるんだ。ただでさえ敵視されてるのに、これ以上敵を増やすような事言わないでくれ」

心底面白そうな表情で俺と椋をからかう杏は、マジで俺の事なんて何とも思っていないんじゃないのかと不安を抱きそうになるほどであった。

椋なんかさつきからずつと顔真つ赤なのに、双子でもこうも違ってくるもんなのか。

「わ、わたしは別に……それでも………」

「それじゃあ次は杏の料理でもふるまって貰おうかつー！」

何かを椋が口走っていたが、今は杏の料理に気を取られているため被せるように大きな声で言ったせいで、何を言っていたのか一切聞こえなかった。それほど大した話でもないだろう多分。

凄熱の入りようである俺の勢いに、若干上半身を逸らせた杏だったが、溜息一つ吐くと前に置いてあった弁当箱……というか、これは重箱か。重箱の蓋を外して、気落ちしている椋と一緒に箱を分離させ始めた。

何かと表情が変わるな椋も、やはり姉妹か。

「まったく、あんたを好きになる子が可愛そうに思えてくるわ」

「んなっ……！」

呆れた様子でそう言い放った杏の言葉は、俺を打ちのめすには十分な殺傷力を持っていた。

そ、それは、俺を好きになる事、は、今は……ない事を意味するんじゃないか……。

いや待て、あわてるな俺。冷静になれ。これはいわゆる杏のいつものちよつとした毒入りのリップサービスみたいなもんだ。売り言葉に買い言葉つてのがあるように、これはそういつた類の台詞に違いない。ここで俺が取り乱しては活路は見いだせないぞ！ 笑顔だ。一目で女をイチコロに出来ると雑誌に書いてあつた笑顔を台詞を、毎日練習していたアレをやるしかない。

顔面の筋肉を意識して操作し、軽く咳払いしてイイ声が出るように調整。そして、繰り返し鏡に向かって囁いた台詞を今つ——！

「——俺は、惚れた女は全力で幸せにする……後悔はさせねえよ！
決まった！ 最高だ今のはこれまでで最高の出来だつたぞ！

どうだ、これなら杏も俺にノックアウト——。

「口だけなら何とでも言えるわよ」

「……………あつ、はいすみません……………」

戦況——圧倒的不利。

孤軍奮闘の末、爆散。

敗色濃厚。

「し……………しあわつ、幸せ……………に……………つ」

「ちよ、ちよつと惊どうしたの!? あんた顔真つ赤じゃない！」

「うおっ、どうした掠。熱でもあるのか?」

「だ、だだだ大丈夫! なんでもないです、ちよつとポーつとしちやつただけでそんな具合悪いとか、そういうのじゃないですつ」

突如掠が瞬間湯沸し器みたいに見えない湯気を放出して目を回し始めた。

杏が気づいて慌てて掠の容態を確認するが、たいしたことは無く少し興奮してしまっただけらしい。何が原因かは、本人が頑なに口を閉ざしているから分からなかった。

さて、そしていよいよお待ちかね。メインイベントである杏の手料理が公開された。

「おお、後光が……後光がさしておるっ!」

「大袈裟ねえ。説明すると、こつちのがあたしでこつちが掠が、頑張つて、作つたやつだから……分かつてるわよね?」

「沢山作つたから、いっぱい食べてください」

素晴らしい、これがこの世に現存する宝箱というやつなのか。

キラキラと輝く宝石の如く俺の網膜に焼付け、記憶中枢の奥深くに刻み込まれる至高の料理。

後出しが有利という法則は現代にも根強くあつたのか。これはもはやただの料理ではない、いくら金を積もうとも手に入らない「愛情」という名の不思議調味料がふんだんに使われているに違いない。

箸を持つ手が震える。

この宝に俺のような薄汚い人間風情が手を付けてよいものなのかと、葛藤が生まれ行動を制限し続けている。だが、これを食べないことには、俺はいつまで経っても杏のお友達”のままだ。

ならばするべき事は一つしか無いだろう。

手を合わせ、今日の為に犠牲となった食材に……そして、杏と椋に感謝する為に――

「……いただきます」

「ちゃんと味の感想も言うのよ。ね、椋？」

「う、うん……榊原君、召し上がってください」

まずは杏の料理から。

オーソドックスに卵焼きからいただくとしよう。

「あーん………」

「……どう？ 味付けが濃いか薄いか、甘いかしょっぱいってのはある？」

興味深そうに俺の顔を伺い質問してきた杏は、ジーンとこっちを見つめている。ふっ、愛い奴よ。そんなに俺のことが気になるのかい？

心の中で杏を愛でつつ、玉子焼きを租借する。

う。程よい食感の杏の料理は、まさしく素晴らしい火加減で「きつと」美味しいのだから。

「……うん、美味しい！ 流石だ杏。まさか料理が美味いだなんて、知らなかった」

「そうよかった。でも、一言余計よ幸希」

「スミマセン」

顔を綻ばせたとしたら鋭い眼光で睨む杏に、反射的に謝罪し頭を垂れてしまった。恐ろしい、これが条件反射。パブロフか。

続いて椋の料理に手を伸ばす。

正直、目的は達してしまっただけど、本人のご好意で作ってもらったんだ。無駄には出来ないから、ありがたく感謝しつづいたたくとする。

椋の方も杏と似たようなラインナップが詰まっていたので、ここは違いを図るべく同じ玉子焼きを食べよう。ちよつと、焦げ目とかがついてるけどそんなの愛嬌だよね。

「んじゃあ、こつちの椋の奴もいただきます」

「は、はいどうぞっ」

上擦った声で答えた椋の頬ははまだ赤く染まったまま。大丈夫なんだろうか、本当に風邪とかじゃないよな。古河も昨日から風邪だし。

気のせいじゃないレベルで椋からの強い視線を感じつつ、食べ始めると、見た目どお

り口の中ではジャリジャリと焦げの食感と、バリバリとして多分卵の殻の食感がした。

これは、適当なことを言うときそうなる予感がする。でも杏だつて妹に甘いから、もしかしたら俺が美味いと言えればそれで済むかも。

「……うむ、少し焦げと殻の味がするけど、いけるぜこの味。俺は好きだな」

必殺『個人的に好きだ』を発動。

これは決して客観的ではなく、安全牌として自分は好きだけど、他の人がどう思うかは知らんよという、なんとも投げっぱなしな解答である。

当然これを使用すれば疑うようなことは無く、素直に安心をご提供出来るという優れものだ。ついでに、これは岡崎が扱き下ろしていた雑誌に書いてあった手段である。

「あう、殻……入っちゃつてたんだ」

「りよ、棕……でもほら、幸希は好きだつて言つてたし、これから頑張ればいいじゃない？　ねっ？　幸希もそう思うでしょ……？」

「おう、料理なんて積み重ねだ。これからもっと上達するさ、俺が保障しよう！」

なんてこつた。フォローよりも失敗点の方に意識が集中してしまうとは、これは誤算だった。

杏の必死のフォローと、脅迫するような眼光で俺を炊きつけ咄嗟に出た言葉を聞いて、なんとか棕の涙腺は収まったが、これは今後の対応を考え直さなくてはいけない。

こうして俺のドキワク胸キュン昼食会は幕を閉じた訳だが……まだ俺をひっくり返すような事件が残っていた。

※

昼休みも後数分というところで弁当の片付けも終わった俺達は、未だ中庭で食後の休憩を取っていた。

杏と一緒に昼を満喫し（しかも岡崎抜きで）杏の手料理を食べることに成功した俺は、今や人生で一番幸福をかみ締めている時に——それは起こった。

「——じゃあ、次はいつにしようか？」

「……次？」

次って何だ？

何を続けるって言うんだ？

脳内に満開の花畑が量産されて思考が幼児レベルまで低下していた俺には、杏が何を言っているのかが分からなかった。

間抜けにそのまま聞き返したら、杏は「何言ってるんだコイツ」って顔をして透き通るような声でこう言った。

「だから、次のお弁当品評会の事よ。いつにする？ あたしは明日でも大丈夫だけど、棕も平気よね？」

「え、うん。特に用事も無いから平気だよ」

「えっ？ はっ？ 明日？」

何これ。もしかして、この幸せが連チャンで続きちゃったりするわけ？

おいおい、そりゃいくらなんでも都合が良過ぎつてもんじや、

「じゃあ決定。幸希、明日もやるからちゃんとして明日も来るのよ？ あ、幸希は無理して

作ってこなくてもいいからね、明日はあたし達に任せなさい！」

「分かった。それじゃあ、明日は作らずに行くわ……」

神様……あんた最高や。

まさかこんな気の利いたイベントが定期イベントとなるなんて、一体誰が仕組んだんだ。まあいいさ、俺はこの期間に——杏を落とす！

心新たに意気込む俺だったが、棕が思わぬ爆弾発言をし始めた。

「それじゃあ——もう一人、岡崎君も呼んだほうが良いんじゃないかな？ それなら人数がぴったりになるし、ねっお姉ちゃん？」

.....へっ？

「えっ？ あ、そ、そうよね。幸希一人が男つてのも心細いでしょ。じゃあ幸希——明日は朋也も誘ってきなよ」

「.....ハイ、ワカリマシタ」

.....嘘だと言ってよ棕ちん。

茫然自失となった俺を夢から現実へと呼び起こすように、学校の昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

それは同時に、俺の幸福なひと時と思いきや、出が終わりを告げる合図にもなった。

.....チクシヨウ。

第九回：図書室ラブソディー

人間は気分次第で無重力を体感する事が可能なのだと、人類の進化の可能性を実感することになるとは思わなかった。

至福のような時間であった昼休み。俺は杏と椋の三人と昼食を共にしていて、しかも杏は「次もまた一緒に食べよう」と三半規管を震わせる音色で俺を魅了したのだが……椋の余計なひと言のせいで今回は岡崎も参加する事になってしまった。

シヨックでその後の足取りはふらふらとおぼつかなくなつて周囲の人が奇異の目で俺を見ていた。ただでさえ悪目立ちしているというのに、更に変人のレットルまで追加されてしまう。すき好んで集めているわけでもないのに、このままじゃ俺はこの学校一の変人に君臨してしまふ。あの春原を差し置いて。それは許されない。変人王の名は彼にこそ相応しい。

「なんて、現実逃避をあといくつ重ねれば俺は報われるんだ」
分かつていた。どうあがいても杏が俺を見初める事はもう無いし、それは岡崎に向けられているのだと。

だかしかし！ だからといって諦める俺じゃあない。

不満はあるが腐つてゐる訳にもいかない。そうこうしている内にも杏と岡崎の距離が縮まつては、それこそ本末転倒だ。俺にしか杏の恋路は邪魔できないんだ、なんか字面的にすんごく俺が悪者みたいに見えるがそうじゃない。

惚れた女の恋路を応援なんてのは敗者のやる事だ。俺はまだ負けてないし勝負すらしてないんだ。そんな出来の良い真似、死んでも出来ない。

——邪魔してやる、全力で。

「フアーハハハハッ！ やるぞっ！ やつてやるぞお！」

俺が巷でなんと呼ばれて恐れられているのか、彼奴らに思い出させてやる。

※

「と、いうわけで岡崎。お前明日の昼食は俺と一緒に食うぞ」

「なーにがというわけなんだ何が。説明もしないままにそうやって決定を下すなよ、せめて理由らしい理由を言つて納得をさせてから決めろよ。お前の悪い癖だぜ」

と、いうわけで放課後の春原邸。邸つて言う程豪勢な部屋じゃないのは重々承知しているが、物は良いようにと人は言った。だからここはせめて呼び方ぐらいは豪勢にしてやろうという俺の真心だ。

特に用もない放課後、俺はいつものように春原邸でいつものように春原で遊んだりして過ごしていた。というのも、この男、岡崎朋也君は演劇部の再興やら風子の姉の結婚式やらと、なにやら最近多忙なお人なのだ。

だからコイツが邸に来たのは日が暮れてからだだった。

面倒な事ばかりやって疲れただろうと思つた俺は、岡崎を労うべく言葉をかけたなら、
「半分はお前のせいだろうがっ、責任とれ！」

なんて理不尽に怒られたうえに、ちよつとお互いに気になつている女を犯つた後にそれを謝つたら言われそうな呪詛を吐きやがった。どうやら最近、マジで大変らしい。カリカリしてた、牛乳飲め。

不機嫌つばい岡崎相手にふざけたら、春原とは違つて多分手が出てくる可能性がある為、狡猾い俺は真面目にどうして昼飯を誘わなくてはいけないのかを説明することにした。

「今日の昼にさ、実は俺杏とその妹の棕と飯を食べたんだ」

「いきなり理由になりそうにない切り出しだけど、まあしょうがない聞くよ、で？ お前

藤林姉妹の料理食べたのか？」

「ああ、まあそうなるな」

「へえー、案外美味しい思ひしてんじゃん榊原。それじゃあ杏の料理はどうだった？」

あの性格だし、やっぱり不味いか」

「今すぐ涅槃に紐無しバンジーするか春原ア!？」

「ひいひいひいひいーっ!」

凄んだ。気が付けば春原が鼻水と涙を流しながら白目を剥いていた。

余計な横やりを入れないで大人しく隅で漫画を呼んでいればいいものを、好奇心は猫をも殺すと言うぐらい春原が生き残れるわけがない。

この一連の流れが毎回行われているせいか、岡崎も特に床に昏倒する春原を見てもなにも思っていないように表情が揺らがなかった。が、俺をに視線を戻して発した言葉に、思わず俺の方が狼狽える事になってしまった。

「なあ、なんでいまそんなにキレたんだお前？」

「……あー、なんというか、その、ほら流れてあるじゃん？ 漫才でもボケたらツッコミを絶対入れるじゃん、たまにボケ殺しとかいってツッコまないのもあるけど。要はそれと一緒にわけよ」

「でも春原はボケてなかったろ、いや、存在自体がボケてるって事を言いたいのか」

俺も大概だけど、岡崎、お前も結構辛辣な男だな。春原じゃなかったら自殺してたかもしれないぞ。

しかし、俺が杏に惚れているという事を知られない為にも此処は上手く話に乗って誤

魔化さなくては。

「まあそんな感じだ、だってほら春原は年がら年中色ボケ野郎なわけだし、俺は正当なツツコミをしたにすぎないんだよ」

「なるほど。一緒に飯食ったぐらいで安易に恋愛を匂わすなボケと、そう言いたかったわけか」

「なんだ、わかってんじやん岡崎」

わかつてねえよ、なんだよその曲解は。いや待てよ、俺の誤魔化したいという願望には一応そつてはいるな。

あまり必要以上の言い訳をすると岡崎は勘違いをして望まぬ勘違いを生み出しかねない。勘違いを正すつてのは思った以上に労力と時間が必要になるのを、身を持って思い知っているからこそ、それだけは避けたかった。

榊原幸希の歩む恋路に立ちふさがる最大の障害となっている岡崎朋也を廃さぬ限り、この道を望むのなら必ず越えなくてはならない。ただ、俺の場合はその障害である朋也と友人関係にあるのがネックになっている。

だからこそ、俺は卑怯者と評され蔑まされる道を歩むと決めたのだ。

「とにかく話を戻すと、その昼飯を食ってたら次もやろうって話になって、今度は岡崎も参加って決まったんだよ。理解したか？」

「ものすつこい単純で重要な所をすつ飛ばしてる気がするの、俺の気のせいかな？」
「何を飛ばしてるんだよ」

言われなくともわかっただけはいたが、会話の流れからブツ切りにするわけにもいかずつい口走ってしまった。

岡崎が訊きたかったのは、案の定どうしてそういう話になったのか、そして誰が言い始めたのか。と、至極当然で言った通り単純な事だった。

言われるまでも無くこの理由も、発案が誰なのかも当然知っている。知ってはいるのだが、二つをセットで説明となると非常に言葉にしづらい。杏がお前を好きなのを知った掠が余計な気を利かせたんだよハハハ、なんて感情を交えず気軽に言えたら今頃俺は愛しの女神に告白している。

どうやって誤魔化したものか、適切な他の理由を脳内で複数候補に挙げ検証する。どう言えば岡崎がどんなふうになんか納得をするのか、複数回脳内シミュレーションを行った結果回りくどい事を言わずに強引に言った方が良くも出た。

ので、実行することに決めた。

「ま、理由なんてなんだったって良いだろ。俺もちゃんと話聞いてなかったし、お前は行けばタダで飯にありつけるんだぜ。これほどいい話はないだろ」

「確かに……タダ飯ってのはありがたい。わかった、それじゃあ行くよ」

「おっし決まりだな、じゃあ明日の……って忘れてた、そういえばお前古河いつも飯食ってなかったか？ それに、最近は風子と何かやってるんだったな」

「古河とはたまに昼時に顔を合わせるだけで、別に約束して飯を食ってる訳じゃない。風子の件はお前が元凶というか、大本だけだな」

「だけだよ、いきなり何も言わないでってのも悪いような……」

「ばつの悪そうな顔をして、わざとらしく眉間に皺を寄せる。いかにも考え込んでいますって顔で。」

すると岡崎は思った通りの反応を示してくれる。

「そんなに言うなら、いつその事古河と風子も誘えば良いんじゃないか？」

その言葉を待っていた。

「すかさず俺はハッと俯きがちだった顔を上げあらかじめ用意していた相槌を打った。」

「それだつ、んじゃあ風子と古河にはお前から伝えておいてくれ」

「何言ってるんだ、風子にはお前が伝えろよ。俺は古河の方に伝えるから分担だ、少しはお前も手伝ってくれ」

「……しようがない、それじゃあ風子は俺からそれとなく伝えるよ。あいつはいつもあの教室に居るのか？」

「ま、大体はな。俺も良くは知らん」

風子が何処で何しているのか考えているような、少し仏頂面気味に嘆息した岡崎は言葉を切ると暗くなり始めた空を窓を介して眺める。

想像以上に想像通りになった話に、俺は満足し近くに転がっていた漫画を読み始める。なんとなく会話が途切れた時は、こうして適当にして時間をまた消費する。

古河と風子の話を出したのは、当然ワザとである。ああでもしなけりや、岡崎は普通にタダ飯につられて来ただろうし、まともに会話が盛り上がって距離を縮めてしまう。きつと掠は姉の為に色々と画策しているに違いない。彼女との付き合いはそれ程長くないのだが、それでも姉思いであるのは容易に見て取れる。

だからこそ、それを妨害しつつ新たな道を作る可能性を持った駒を連れて行くのだ。風子には場を荒らす役を。そして主役である古河には、岡崎と最近仲の良い女子生徒として全面に立つてもらおう。そうすれば、きつと杏は古河を意識する。岡崎の恋人なしなりうる存在なのでは、もしかしてもう岡崎は唾をつけているのではと。

あとはもう疑心の渦に落ちてくれればそれでいい。次に必要なのは俺の根性と愛の総量だけなんだから。

思わず笑いがこぼれそうになるのを抑えて漫画を読んでいると、この部屋に近づくと廊下を歩く足音が付いた。

とはいってもここは学生寮。廊下を歩く生徒は溢れるほど居るし、角部屋でもない春

原の部屋ではさして珍しくもない。だけど今回は少々廊下を叩く音が違う。

ぱたぱたと軽いスリッパの音だった。部屋の周囲に棲むのは当然男で、しかもラグビー部ばかりだから足音が軽いわけもなく、しかも連中は大体裸足だ。

だからこの足音の主は、きつと美佐枝さんだろう。

扉が開く音に反応して振り向いてみれば、そこには予想した通りの姿が立っていた。

「ちよつと失礼するよ、春原あんたに電話……ってなんで伸びてんのこの子は」

「まさか知らなかったんですか美佐枝さん。春原の本体はあいつの尻に出来たオデキで、しかも脱着可能なんですよ。だからいまあいつはちよつと留守にしています」

「榊原が何を言いたいのかあたしには全然分からないんだけど、通訳してくれない？」

「俺だつて無理つすよ。たまにこうやっておかしくなる時があるんだよなこいつ」

ちよつとふざけたら酷い良いようだった。なんだよオデキが本体つて。なんで俺はそんな事を言ってしまったんだろう。電波拾ったか？

どうやら白目で天井と見つめあつてる春原に用があつた美佐枝さんは、溜息を吐きながら口を開いた。

「つたく、家族からの電話が来てるつてのに魔の悪い子だね」

「ちよつとまつて美佐ちゃん、家族つて春原の？」

「美佐ちゃんなんて呼び方は止めなさい。そうよ、妹さんがね」

妹……か。春原の妹って、なんか最近こいつの口から聞いたような気がする。

「それじゃあ俺が代わりに出てやるよ。ほら、当事者は寝ちまつてるし、不本意ながら飼い主が懇切丁寧こいつの私生活を暴露してあげるから」

「んー、本当はあまり良くない事だけど。ま、榊原なら平気か」

「それでいいのか美佐枝さん……結構適当だな」

岡崎のツツコミは俺も思ったことだった。

一分前の俺の言動を聞いてなお俺で平気とのたまうとは、流石は男臭い学生寮の長をやっているだけのことはある。それとも以外に俺は信頼されているって事なんだろうか。だとしたらその信頼には答えなくてはならない。

呆れた表情の岡崎の視線を物理的に感じながら、部屋を出る美佐枝さんの後を追う。

リノリウムの廊下には二人分の足音が絶えず響き渡り、思わず足音でリズムを刻んだり、わざと合わせて一人分にしてみたりして遊んでた。

寮長の部屋の手前、入口付近にある電話は道に立っている緑色の公衆電話と同じで、受話器が通話状態を維持するために外したまま置かれていた。ってことは少なくとも電話口のまだ見ぬ春原の妹は、兄の声を今か今かと待っているんだろう。

「ほらあそこに受話器は置いてあるから、事情を説明して用事をちゃんと聞くんだよ？」

「甘いですよ美佐枝さん。妹は兄の声を待っているかもしれないんだ、俺はそれを忠実

に守ろうかと思う」

「……………？ 何を言ってるの」

意味が分からないと小首を傾げる美佐枝さんを横目に、俺は今まで隠していた特技を披露することにした。

自分の喉を指でいじり喉仏の位置など、諸々を調整する。

「あー、アツ！、アー……………ん、っうん！ 僕、春原陽平！ ちよつとスケベな本能に忠実な高校生っ」

「うわっ、びっくりした。凄いそっくりそれ、以外な特技もってるのね」

「実は僕、こないだ美佐枝さんの干してたパンツを盗んじやっただ、ごめんなさい本能に忠実で」

「……………」

感心した様子で聴き入っていた美佐枝さんの表情が途端に凍りついた。冗談で言ったのに、もしかして心当たりがあったのだろうか。だとしたら魔の悪い男だ。

転身して来た道を引き返すグラップラーの後ろ姿を見送り、俺は静かに春原の冥福を祈った。きつと今夜が山だろう。

犯行自体は多分あいつの仕業じゃないのは確かだ。小心者で小物思考のあいつはリスクを恐れてそんな事は出来ない。恐らく犯人は単なる下着ドロカ、ラグビー部だ。な

んにせよ、そのどつちかの為の生贄になるんだろうな。

「さて、それじゃあ……気を取り直していつちよ引つ掻き回すか」

春原の安否より今はその妹だ。

受話器を手を取って耳に当てる。勿論声色は春原のまま。

「もしもし今変わったけど、一体なんの用さ」

「あ、お兄ちゃん出るの遅いよ。芽衣五分も待ったんだから、電話代だつて安くは無いですよ」

春原っぽい脱力した喋り方で言ったら、芽衣なる妹はコロツと俺を兄だと信じたようだ。自分の才能が恐ろしい。

さて、まずはジャブで行こう。

「悪かったよ。ちよつと部屋の中で友達のエリマキトカゲと一緒にふんどし相撲をしてたからさ」

「え、エリマキトカゲとふんどし……相撲？」

「ああ、名前はエリザベスって言うんだけど綺麗な顔してるんだよ。いつもは一緒になって飛び回るハエを捕食するんだけど、今日はちよつと趣向を変えてね」

「ハエ……捕食、趣向おー!!? お、おにい……ちゃん」

いかん。この芽衣って妹、もしかして本気で信じてるのか？

なんか受話器の向こう側で鼻を吸る音が聞こえてきた。まだステージーだったというのに、これじゃあ3まで行った時にはどうなってしまうのやら。ここはちよつと様子を見て、要件を聞き出そう。

「それで……め、芽衣はなんの用事で掛けてきたんだよ」

「なんのつて、お兄ちゃんが……お兄ちゃんがちゃんとしてるか家族を代表して態々電話したのに」

「へ、へえー、別になんの問題も無いよ。充実した生活を毎日送ってるさ」

「エリマキトカゲとふんどしでハエの捕食相撲の何処が充実してるのよつ。今度そつちに様子を見に行くからねっ」

うむ。この娘、結構兄を本当に心配しているんだろうな。なのに話し相手は全くの別人だなんて、報われないな。俺のせいなんだけどね。

仕方ないから、ここは話を合わせてあげよう。これ以上ふざけたらマジで家族会議に発展するかもしれない。この妹ならやりかねない声音をしていた。

「しようがないなあ、それじゃあ来るときにお土産持ってきてよ。それなら良いよ来ても」

「随分あつさり許してくれるんだね、前はあんなに嫌がってたのに。それで、お土産つて何を持って行けばいいの？」

「くさやが良いかな。僕最近あれにはまってるから」

「へえーまあ良いや、わかったそれじゃあ行くからね。また連絡するから、じゃあね」

「おう、歯磨けよ」

最後に一言忠告を残して電話は切れた。耳元では終話を知らせる、彼女との繋がりが断たれた音が鳴り続けていた。

「さて……………俺しーらねっ」

※

翌日。

天気には恵まれよく晴れた日頃。太陽照らすアスファルトの上を歩きながら、幸希は今日一日で自分が取るべき行動がなんであるかを思い出していた。

まず、普段通りに通学をし教室に入る。すると十中八九教室の中には掠が居るはずなので、彼女に挨拶をした後に今日の昼についての話題を出す。

朋也はこの時間まだ自宅で睡眠を貪っている筈だから、参加の意思を伝えてもそれを確認する手立てが存在しない。その間に幸希は風子が居る教室へと移動。そして昼食の誘いをする……………わけではない。幸希が直接誘ってしまったのは、場を乱したと思われる好

感度が下落してしまふかもしれない。だから、風子には昼になったら自分らが食事をしていゝる場で鉢合わせをする必要がある。

それを成功させたら、あとは朋也次第だ。彼が素直に渚を誘うかで、幸希が企てた一連の作戦がようやく始まる。

思いついたら猪突猛進だったこれまでの幸希が、初めて恋愛ごとで策を講じる事になつたのには、やはりこのままでは埒が明かれないと思つたから。熱い想いをただそのままの熱量で解き放つても、度が過ぎた熱に身を焦がしてしまふだけ。だから幸希は頭を使う事にした。

渚と朋也を恋人に仕立て上げる計画を。

学校の廊下を歩き教室へと移動する幸希。朝早い時間ということもあって、未だその廊下の人通りはそれ程多くは無かつた。不良として生活していた幸希にとつてこれは滅多に見なかつた光景で、未だに違和感を感じずにはいられない。何かが違うという違和感ではなく、自分だけが違うという疎外感にも似ている。

立ち止まり教室の扉を開く。横開きの扉は校舎の長い歴史を裏付けるような軋む音を立てながら開かれた。半田舎な町とはいえ、進学校として有名なんだつたら扉の修理工事ぐらいいしると思ひながら廊下から教室の境界を越えた。

教室内にはすでに何人か生徒が席に着いたり、窓際で談笑をしたりと、各々が好き勝

手過ごしていた。扉が開いた瞬間、誰が来たのか確かめる為にその皆が一斉に視線を向けたが、それも幸希だと分かるとすぐに散らばった。

幸希はこの学校では、陽平以上に、朋也以上に恐れられ避けられている。嫌うものはもちろん沢山いるが、皆それを表に出してあからさまに嫌悪することは無かった。進学校だから、礼儀正しい人間が集まるのだろう、と思つてしまえばどれだけ簡単に済むか。まず三馬鹿トリオなんて揶揄される人間が入学できた時点でそれは無い。

理由としては単純、だが予想以上にこれの根が深い。大体が皆、幸希の事を恐れているのだ。見るからに言動が馬鹿丸出しな陽平は馬鹿だが、それなりにまだ常識的だ。そんな男を諫める立場に居る朋也はさらに危険度が低いと思われている。基本的に寡黙で、一匹狼のような気性が触れなければ大丈夫と思われているのだろう。

だが、幸希が黙々と自席に着き荷物を下ろしている様を、怯えたような表情を覗かせて盗み見る生徒たちは、何よりも幸希を恐れていた。

理由は様々あるが、なんとと言っても過去三年生に上がる前、一年生の頃にあつた大きな暴力事件が起因している。当時の工業高校の生徒を軒並み病院送りにした事件。それだけでも十分に恐れられるというのに、この事件の話題はこれでは終わらなかつた。普通それほどの暴力事件なら幸希も御用になるのだが、被害者である工業高校の生徒たちは誰一人として被害届を出さなかつたのだ。警察は直接喧嘩の光景を見ていたわけ

ではないのと、被害届が無いこと、そして幸希が進学校の生徒というのを材料に判断し逮捕を逃れた。

だからこそ恐ろしかった。腕力だけではなく、まるで計画したかのような犯行を行える賢さを持ち合わせていることに。

藤林椋は、この事件の事を良く知っている。だが、それでも彼を恐怖してはいない。だからこうして彼の席に歩み寄り、いつものように挨拶を交わす。

「おはようございます榊原君、今日はいつものように早く帰りましたね」

「おう、おはよ椋。そういや、今日の昼の事だが岡崎も来るそうだ」

「良かったです。お姉ちゃんにも伝えておきますね」

「あいよ。それじゃあ俺は行くところがあるから」

背を向け来て早々に教室を後にした。向かうのは風子と出会った教室。朋也の話聞いた限りでは、風子はいつもそこでヒトデを彫っているようだ。

思っている以上に神出鬼没な人物らしく、素直にその教室に言った所で風子に会える可能性があるわけではない。それこそ探し回る必要があるかもしれないのだと、朋也は幸希に忠告していた。

だが、幸希には風子を見つめる為の切り札を持っていた。それをすぐに使うつもりはないが、もし教室を探しても居なかった場合には遠慮なく使おうと考えている。何はと

もあれ、風子探しに関して幸希は一切悪いことは考えていない。

あと数時間を我慢すれば昼になると学生達がいよいよ始めた時間頃。ようやく登校してきた朋也は、眠気で重くなった足を引きずりながら懸命に坂を上っていた。

とつくに授業が始まっている今、桜並木の坂道には人の姿が朋也以外に見当たらない。当然だろう、進学校という肩書を大事に抱えている生徒が多く在籍しているこの学校、朋也のような人の方が特殊に見られてしまう。

校舎に入っても人の姿を見受ける事は出来なかった。授業中なのだろう。一步教室に入れば人で溢れているというのに、廊下を見渡しても人っ子一人居ないというのは不思議だと思い、朋也は思わず寂寥感を感じてしまった。

朋也は下駄箱を抜けてつきりそのまま教室へと直行するのかもしれない、その足は教室とは全く違う方へと向かっていた。

素直に遅れて授業中の教室に入っても、教師と生徒の反感を買うだけだ。だから朋也はそれを避ける為、どこか時間を潰せる場所を探しているのだ。

そうして辿り着いたのは、図書室と扉の上に飾つてあるプレートに書いてある場所だった。幸希のような捻くれた悪戯心を持っていなければ、ここは図書室なんだろう。

面白いつて理由だけで、教室のプレートを全部取り替えたことがる友人を思い出し吹き出しそうになる。

「……………つと、今日はここで寝るか」

人影が居ないのだから笑いそうになった表情を取り繕わずとも平気なのに、条件反射のようにしてしまった恥ずかしさを誤魔化しながら図書室の扉を開けた。

入った瞬間に朋也が感じたのは年月を重ねた木と紙の香りだった。小学生の頃、林間学校などで出かけた先のペンションで嗅いだ香りに良く似て、癒し成分でも分泌しているんじゃないか疑う程だった。

雰囲気は悪くない。扉が開いていたのは僥倖だったかもしれない、と窓際のテーブルを選んで座りながらうつらうつらとした瞼を閉じようとした。

「……………」

眠りは他者の存在に気が付いて吹き飛んでしまった。

置物のように静かに、一言も発しなれば呼吸も極力抑えられているのか耳を澄まさなくては聞こえないほどだった。

一瞬、朋也は幽霊でも目にしたのではと寒気を覚えた背筋を伸ばして、もう一人の住人を注視した。少女の邪魔なのではと思う長髪の色は杏や棕よりも来い紫で、両サイドに二つの球体が付いたゴムで髪をまとめており、残りは後ろに流している髪型は朝の手

入りに時間がかかりそうだ。なんて朋也は思った。

少女は椅子を使用せず、直接クッションを挟んで床に座り込んでいた。正座の状態から膝から下を外に逃がしたようなリラックスした態勢で、どういいうわけか上履きを吐いておらず裸足だった。

いじめにあつてるのか、とも思ったが少女の隣に上履きと靴下が置いてあるのを見て考えを改めた。この少女は好きでこうしているのだ。

裸足で床に座り、本を真剣に読んでいる彼女の視線は、ずっと変わらずに本の紙面に印刷してある文字を追い続けている。まるで朋也の存在には気が付いていないのではと感じるほどに。

「もしかして、気が付いてないのか？」

実際にそうだった。少女は驚いて音を立てた朋也に毛ほども反応を示さなかったのだから。

だが朋也本人はそうは思わず、少女は気が付かないふりをしているのではないかとおもむろに少女に近づいた。

※

二時間目の授業が終了し三時間目に入った時、俺は風子を誘導するために彼女と会う必要があったから授業をさぼって抜け出していた。

岡崎の姿はまだ見ていないが、多分その内ひよっこり顔を出すだろう。遅刻はいつもの事だし。ただそういうえば、今日は春原も見えていなかったな。ま、あいつはどうでも良いか、あいつこそホントにどこかの女子トイレから湧き出てきそうなんだから。

教師の気配が感じない道を選んで迂回しつつも目的の教室に到着した。だが、俺の耳は教室には誰も居ないと告げている。

「……おかしいな。もしかして本当に居ないのか？」

扉を開けると、不安は的中、風子の姿はそこには無かった。

というか、当たり前か。よく考えたら今は授業中だというのに、こんな所で堂々とサボる奴がこの学校に俺達以外で居るわけがないのだ。

そうなったら、途端にやる事が無くなってしまった。風子を呼び出すのは授業が終わってからでいいだろう。多分、授業中でも来そうだが、それじゃああいつに迷惑がかかるだろうしな。

仕方ない。何処か静かな所にも行って昼寝でもして待つことにしよう。こないだは屋上を使ったから、今日は室内の気分だな。

一番に思い当たるのは資料室なんだが、あそこで寝ているとたまに窓からやってくる

校外の連中が邪魔だからなあ。もし五月蠅くして有紀寧のじやまになったらなつたで悪いし、今日は使うのをやめておくか。

資料室を使わないと決めたら、他の候補なんてのはもう空き教室か旧演劇部の部室と、あとは図書室しかないな。普段から図書室は鍵が閉まつてるが、俺はいつもサボる場所を確保するために合鍵を作つて持つてゐる。よつて、鍵がかかつていようと関係なく侵入出来るのだ。

「……というわけで、着いたは良いが。……開いてるな、鍵」

おかしい、この時間の図書室は鍵が掛かつてゐる筈。しかも、なんか室内に人の気配が二人分。一応成功率を高めるために胸ポケットから取り出した聴診器で聴いても、やはり二人居る。

もしかしたら教師か司書でも居るのだろうか、そうなら入ると余計な説教を受ける羽目になる。このウザい教師の説教を態々自分から聞きに行く馬鹿は居ない。

諦めて違う場所で寝よう、と踵を返した瞬間、

「まてまて！ それは流石に不味いだろおい！」

なんて聞き覚えのある男の慌てた様子の声が聞こえてきた。というか、岡崎だった。

つてことは教師もしくは司書が居る可能性は無くなつた。安心して俺は図書室に繋がる扉を開け放ち中に這入つた。

——中では岡崎が大人しそうな女の腕を掴んでいる光景が広がっていた。

「んっ？ 榊原じゃねえか、お前もサボリか？」

「……………」

俺の侵入に気が付いた岡崎はそのままの状態で顔をこちらに向けた。

腕を掴まれている女は何が起こっているのか分からないって顔で、ぼーつとした瞳で岡崎を見上げ、それから俺の方にも視線を向けてきた。

髪色と同じ紫の瞳には俺の呆気に取られている姿が映つてはいるが、見られているという感じはしなかった。単に瞳に映っているだけで、認識はしていない。そんな玻璃のような瞳だった。

もしかして、もう既に彼女は岡崎の毒牙にかかってしまったのだろうか。

「なあ岡崎……………一つ質問しても、良いか？」

「なんだよいきなり」

信じられないが聞いてみないと真実は分からないままだ。二人の衣服に乱れは無いが、そうじゃなくても方法はいくらかでもある。

恐る恐る口を開いて、思い切って訊いてみる。

「もしかしてお前、もうその女を……………ヤっちまったのか？」

「……………は？ 何言ってるんだ？」

事態を把握できない、言葉の意味を理解できないといった風に眉を顰める岡崎。うむ、どうやら女の純潔は守られたらしいな。恋人なら止めないが、明らかにそんな雰囲気じゃないからな。

でも、面白いのでこのまま茶番を続けてみようかと思う。

「腕を掴んで、しかも恫喝してるとような声が聞こえたし。被害者（仮）はなんか感情を失った人形みたいに硬直してるから、岡崎が無理やりやってしまったんじゃないかとつきり思ったんだが……違ったか？」

「んなわけないだろうっ！　なんで俺がそんな事をしなくちやいけないんだ」

指摘され、岡崎はあわてて女の腕を掴む手を放した。これが杏だった場合、俺は多分この世に居なくなっていたかもしれない。人知れずこの世を去り、杏の思い出の中でのみ生きる存在になるんだ。あ、なんかそれいいな。でも岡崎と付き合い始めたらあつという間に俺の事忘れたり……しないよな？　いかんこれ以上の妄想は鬱を引き起こす。「これはこいつが学校の本をハサミで切り取ろうとしたのを止めただけだ、他に疚しいことは一切ないっ」

必死に主張する岡崎は、少女から本とハサミを取り上げて俺に証拠としてかざしてきた。返してあげようぜ、本とられて困ってるぞ後ろの女。

「そうか分かった、それじゃあそういう事にしておこう。この歳で前科持ちは嫌だもん

な。でも、その女が被害届を出したら諦めるよ？」

「俺は今ここでお前を被害者にしたくなってきたよ……」

怒気の孕んだ声で拳の関節を鳴らし始めやがった。

言い過ぎたらしい。普段からツツコミの人間ってのはこういつた時にいじられると弱いからな。でも、岡崎はどっちもこなせるオールラウンダーな気もする。

いい加減当事者を放置つてのも可愛そうだ。裸足で床に座る少女、というマニアックな趣向を抑えている少女を見ると、彼女の視線は主に岡崎へと向けられていた。モテモテですな岡崎さん、まじパネエつす。

「で？ 冗談はこれぐらいにして、この女とは知り合いなのか？ 見るからに接点が無って感じがするが」

「俺だって今日初めて会ったばかりだ。名前だつて知らないさ」

見るからに文学少女って感じがするし、どう人生を間違つたら知り合えるのかつてぐらい無垢な感じだ。

岡崎が口にした「名前」って単語に反応した裸足少女は、俺達から見て横向きだった身体を正面に向き直り、座つたままの状態で俺達を見上げ口を開いた。

「ことみ。ひらがなみつつで、ことみ。呼ぶときはことみちゃん……」

ひだまりのような微笑みと、透明感のある声が名を紡いだ。

一部の男子が目当たりにしたら恋泥棒だ、と騒ぎ始めるだろうが、杏一筋百年の俺にはなんの効果も無く単なる自己紹介程度にしか思わなかった。

でも——その自己紹介は十年ぐらい前で卒業した方が良いと思つた。

第十回：本当に欲しいもの

図書室の隅、窓から差し込む陽光の下に佇んでいた女は自分の名前を“ことみ”と自己紹介をして黙ったままだった。

唐突過ぎてついていけない俺は返答に困り、どうか何を言ってもまともな答えが返ってきそうな気がしないから、ことみとやらの相手は岡崎に任せる事にして沈黙を守っていた。

「あーっと、それがあんたの名前か。俺は岡崎朋也、D組だ、よろしくな」
「……おかげさき……ともや。……ともや、くん」

流石は天然女つたらしの称号を恣にしている男だ。この天然素材で出来てそんな女を相手に、物怖じした様子もなく会話を成立させてやがる。これか？　これが杏の心をゲットした秘訣なのか？

ことみ……恐らくは名前の方だが、おいそれと俺がその名前で呼ぶのは主義に反するので、心の中でのみそう呼称することにしよう。とにかく、ことみは岡崎の事が琴線に触れたのか、いきなり名前＋くん呼びで噛み締めるように呟いてほっこりとした顔をしている。

なんか、俺って邪魔なんじゃねーか。どう見たって彼女の瞳には俺が見えていない。「ああ、まあ呼び方は好きにしてくれ。それとこいつが同じクラスの——」

「——悪いな岡崎。俺は腹が減ったから飯でも食いに行つてくるわ、じゃあな。それと岡崎……昼休みを忘れんなよ？」

「おいちよつと、榊原っ」

図書室から去ろうとする俺を、岡崎が引き止めようとするが、無視した。

腹が減っているのは事実だし、ことみの存在に驚いて眠気も何処かに行つてしまつた。せっかくだからこのまま資料室で飯にありつく事にしよう。今日は使わないとさつき決めたばかりなのに、掌を返した意思の弱さをツツコまれたら痛い、しようがない。他に快適な場所が思いつかないのだから。

廊下に繋がっている扉に手を掛け、一步を踏み出した。岡崎も俺の人格を知っているので、一言制止の言葉を掛けただけでそれ以上関わつてくることは無かった。そういう気遣いが出来るから杏はあいつを好きになつたんだろうか。彼女の心を知らない俺には、それは永遠に理解できない数式のように思えた。

図書室から資料室へと移動するには、同じ学校内だからそれほど時間を必要としないが、面倒を嫌う俺には多少キツイ。だけど、教師の姿も、生徒の姿も見当たらない廊下で自問自答しながら歩いている内にあつという間に着いていた。

資料室も有紀寧が居ない時はいつも鍵が掛かっているから、当然今も鍵はかかっているんだろう。だけど俺は予め前から有紀寧に合鍵を貰っているので問題ない。懐から取り出した鍵を、取っ手の直ぐ上に着いている鍵穴に挿入し、鍵を半回転させる。ガチャッと錠の音がして取っ手に手を掛け引いた。

「……あれ？」

開かない。

おかしいな、鍵は間違っていないし確かに錠の音は聞こえていた。……そうになると、考えられる可能性は。

答えが出る前にもう一度錠の音がして扉が独りでに動いた。

「あつやはり幸希さんでしたか。どうぞ、入ってください」

「有紀寧、どうしてお前が」

今は授業中の筈だ。俺がおかしくなったんじゃなければその筈。だから有紀寧がこの時間、ここに居るのはおかしい。

でも、今の俺には好都合だった。とにかく誰かと話したい気分ではあったし、昼休みまでの時間潰しが出来るのはありがたい。面と向かって有紀寧に感謝をするのもおかしな話なので、とりあえず彼女の言葉に従い中に入った。

相変わらず、前の雨の日に来た時と変わらない、暖かな空間が出来上がっていた。有

紀寧が居ない時に何度かここで惰眠を貪っていたが、その時ここは有紀寧が居る時とは違って、どうしてか物寂しく感じた。

人が一人減っただけなのに、棚の本たちは薄暗く影に覆われていて、やかんの湯が沸く音もしないってのは寂しいんだな、と柄にもなく思ってしまったのを思い出した。

らしくない考えは自分を鈍らせるだけだ。憑りつかれる前に振り払うように軽く頭を横に振り、いつもの席へと座った。俺が座つたのを確認して有紀寧が座る。年下のクセに、俺よりも大人な仕草をしやがる。体型は子供なのに。

「では、今日は何に致しましょうか？ 食事ですか？ それとも、また何かおまじないでもやってみますか？」

「有紀寧のまじないは凄い効果だったが、今回は、そうだな……とりあえずコーヒーでもくれホツトで」

「はい。少々お待ちくださいね」

腹は減っていた。けど、それはこの後に待ち構えている昼食の為に残しておこう。

コーヒーを淹れる準備をテキパキとこなす有紀寧の後ろ姿を永めなら、杏がこんな感じで俺にコーヒーを入れてくれないかなー、なんて今俺に作ってくれている彼女に失礼な事を考えながら、壁にかかったアナログ時計を見上げた。

もうすぐ三時間目の授業も終わる。そしたら、ここで風子をある方法で召喚し、誘い、

戦いに挑めばいい。古河と風子というイレギュラーを投入したことによってどう転ぶかは分からない。が、少なくともただ杏に言われたままに岡崎を進呈するよりはマシだろう。

惚れた女の為なら何でもやるのが俺の良い所だと自負しているが、それは彼女に好かれたい、幸福であつて欲しいって欲望があるからだ。確かに岡崎を渡せば、非常にシヤクだが杏は喜ぶだろう。だが、それで彼女は幸福であるかは確定されない。岡崎が必ずしも杏にとつて嬉しい行動をつねにくれるわけがない。それは、誰を相手してもそうだろう。

だから俺は従わない。好かれるために、好いた相手とのセッティングなんて死んでも嫌だ。独りよがりだと言いたきや言えば良い。男つてのは自分勝手に、馬鹿なんだ。なら俺はそれを盾に振りかざすだけ。

もし、そんな信念が砕ける時が来たら……。

砕けた信念と同じように、俺の恋も儂く砕け散るだろう。そうなったら、負け犬としての役割を全うして杏の幸福を願うだけだ。

弱気になってテーブルの木目を特に意味もなく見つめていたら、間を遮って湯気が立ったコーヒーが差し出された。見上げれば、風子と同じくらい子供体型のクセに、母のような笑みを浮かべて有紀寧が隣に佇んでいた。

「お待たせしました。暖かいうちにどうぞ召し上がってください」

「……おう、あんがとな。いただきます」

慈愛つてのが形を得たら、きつと有紀寧にそっくりになるんだらうな。

コーヒーは淹れたてでただけあって熱かった。けど、腑抜けた俺の脳みそにはちようどいいだろう。不思議と、心身が安らいだような気がした。

「美味しいな、相変わらず」

「ありがとうございます。でも、それはきつと、幸希さんが疲れていらっしやるからだと思えます」

「疲れてる？ 俺が？」

「はい、実はこのコーヒーを淹れる前に、ちよつとしたおまじないをかけたんです」

おまじないって、一体どんな内容のおまじないをかけたんだらう。前回は対象の下半身の衣服がずり落ちてしまう、というなんともピンポイントなおまじないを春原を実験相手に確かめてみた。

やってみたいと有紀寧に言ったとき、女性には決して使ってはいけません、と強く言われたので仕方なく春原にしたが、効果は靦面だった。男の友情を深める為とか言つて春原をトイレに誘い、その入り口近くで試してみたら、奴はずり落ちたズボンに引つかつて隣の女子トイレへと転がっていたのが最高に面白かった。あの時は馬鹿になる

ほど笑った。

半信半疑だったおまじないが、確信に変わった瞬間はあの時だった。そんな成功率の高いおまじないを、しかも妙なものばかりのラインナップがあった中から、いったい有紀寧は何を俺にかけたんだ。

「ち、ちなみに、そのおまじないがどんな効果なのか訊いても良いか？」

恐る恐る強張った声で微笑みを絶やさない有紀寧に訊いてみる。嘘が吐けなくなるおまじないとかだったら死ぬ。杏を前にしたらセクハラどころか、言葉巧みに彼女を蹂躪しつくしてしまう可能性大である。

「はい。そのコーヒーには、〃心身疲労した人を癒すおまじない〃がかかっています。だから、それを飲んだ後の幸希さんは、とても落ち着いた表情をしていたので成功したようですね」

「なるほど、それで……」

道理でなんだかほっこりした気分になったわけだ。安らぎを感じたのは錯覚ではなかったか。

コーヒーで熱くなった喉で熱い息を吐き一息つく。春原の部屋以外では、この資料室はなるほど、確かに俺の癒しだろう。それは例え、おまじないを使わなかったって変わらない。

ここに通えるのも後一年を切ってしまったが、それまでは精々ここを守るために尽力しようと思った。

再び、一口目よりは温くなったコーヒーに口を付け流し込んだ時「あつ……」と、有紀寧が何かを思い出したように口を開いた。

「忘れていました。そういうえば、そのコーヒーにはもう一つおまじないをかけてしまったんです」

「……すっげー嫌な予感がわんさかするんだけど、それって、なに？」

「それは、その……実は」

正直言いたくはない言葉を言ってしまった、有紀寧は言いにくそうに開いた口元に手を当て、不安そうに下がる眉を見て俺は確信した。

絶対にロクなおまじないじゃない、と。

「ロクなまじないじゃないのはわかった。大丈夫だ有紀寧。何があろうと、俺はお前を責めたりはしないから」

こんな出来た後輩を虐めるなんてこと、杏に命令されても絶対にしない。というか、またも心に仕舞っておこうとした言葉が出てしまった。建前でも取られたか？

親に怒られる前の動揺した子供みたいになっっている有紀寧は、俺の言葉でどうやら余裕を取り戻してくれたのか、ハッと吃驚した後、安堵の表情がそこにはあった。

「幸希さんにそう言つて頂けると、嬉しいです。ありがとうございます」

「や、礼を言われる筋合いはないぞ。逆に、それはコッチの台詞だろどつちかつて言う」と

「……? そう、でしょうか?」

「そうでしょうね」

同じように返答したのを切つ掛けに、有紀寧は吹き出すように小さく息を吐いて、小さな口を閉じたまま笑つた。

笑いつてのは伝染するもので、彼女の控えめな笑いと一緒に、豪快に俺は笑つた。

「フアーハハハハハッ!」

「ふふつ、実はそのおまじないというのは『素直になる』ってものなんです」

「フアーハハハ………ハッ?」

「『心身疲労した人を癒すおまじない』と発動条件がそっくりで、どうやら両方効いてしまったようです」

「だからさつきから俺は本音ばかりポンポン出てきてしまふわけだ。こりやマズイ。この状態で外に出たら俺は五秒で捕まる自信があるぞ」

嗚呼、悪い予感つてのはつくづく当たるように出来ているんだな。これをマーフィーの法則と言つても言うのだろうか、ちよつと違うか。

このままじゃ俺は変態王子になってしまうつてのに、有紀寧はそんな俺の心情を知つてか知らずか、でも……と話を続ける。

「お陰で幸希さんの素直な言葉が聞けました。わたしをそんなにも信頼してくれて、いまでも嬉しい気持ちでいっぱいです」

「こんな人間でもよかつたら、存分に尊敬しても良いんだぜ。でもまあ、俺に惚れるなよ？ 既に俺には心に決めた愛しの女神様が居るからな」

あああああああー！！ やめろ！ それを言うなよこの間抜けな口め！

母親にも言ったことない秘密を此処でサラツとバラしてんじやねえよ。しかも自惚れた事まで言つて、こんな時に限つて悪い癖が出てしまった。

「そうですか、幸希さんにはもう好きな女性が居るんですね。少し残念です」

「まあな。そりやもう可愛くて、愛しくて、彼女のためなら死ぬるね」

「……そのお方の、お名前を訊いても良いですか？」

何をそんなにも訊くのか、有紀寧は微笑みを携えながらもその眼差しは真剣そのもので、俺にはそれがどうしてなのか全然わからない。

杏の事を聞いてどうするのか。そも、何故彼女は俺の好きな女について訊いてくるのだろうか。女子というのは恋の話になると人格が変わるつて雑誌に書いてあつたのは本当の事だったのか、なんだかもう、いろんな仮説と結論に反論が生まれてわけが分か

らなくてつてきた。

言うわけにはいかない。そう思つて口を無理やり両手で閉ざそうとしたが、俺の両腕は命令を聞いてくれない。まるで違う人の腕が付いているようだった。齒がゆく思つていると、愚かな口は開いてしまった。

「——悪いが言えない」

「……そうですね。申し訳ありませんでした、こんな無理やりな形をとつてしまつて」
どんな奇跡か、杏の名前が吐き出されることは無かつた。

申し訳なさそうに沈痛な面持ちで頭を下げた有紀寧を見ながら、しばらく俺はどうして言わなくてすんだのか考えてみたが、答えは出さず仕舞いだった。

「良いよ別に、なにも悪いことなんて無い。ただ、これだけは言うわけにはいかないんだ
スマンな有紀寧」

「いいえ……わたしが悪かつたのです。ご気分を悪くさせてすみませんでした」
参つたな。根つからの善人が罪悪感に苛まれるところも頑固になるのか。

意気消沈という言葉がしつくりくるほど有紀寧は自身を罰するような暗い表情をしている。そんなに落ち込むなら初めからしななければいいのに、とは思わない。

誰だつて間違ひは犯すんだ。好奇心や、安易な判断、思慮の欠けた発言など様々な理由から過ちへと変化していく。有紀寧が悪と言うなら、数えきれないほどの罪科を積み

重ねてきた俺は今頃死罪を迎えていなければおかしい。

「いんや、気分は最高に良いぞ。だから、どうしても自分を許せないんだったら、一つ俺からの頼みを聞いてくれないか？」

「なんでしよう？ わたしに出来る事なら何でも言っってください」

「相談したい事が、あるんだ」

「素直になる」というおまじないはまだ有効らしい。普通なら言いづらい事を、この口はすらすらと並べてくれる。

「自分を振り向いてくれない人を振り向かせるには、どうすればいい？」

岡崎の方へ向いている杏を、どうすれば俺の方へ向いてくれるか。

一つの弱音が、ここにはあった。

杏の事は、一度も誰にも相談をしたことはなかったのに、素直になった俺はよりにもよって年下の少女に吐露していた。

「どうしたら、振り向いてくれるか……ですか。それは、難しい問題です」

他人の色恋に真剣な表情で考える有紀寧。その表情を見て、なんて自分勝手な相談を持ちかけてしまったんだろう、と自分を恥じる。

この相談には明確な答えが用意されていない。

事情を伏せ、相手の情報も無く、独りよがりの人間の我儘に、どうして正答が得られ

ようか。

吐き出した後になって気づくなんて。

「悪い有紀寧、この相談は無かったこと——」

「——わたしなら、相手が笑顔でいられるように努力します」

なのに、誠実な彼女は自分にとっての一番を俺に提示してくれた。

眠たげにも見えるたれ目には、確かな光が灯っていた。

ならきつと、それは彼女にとっての正答で、こうあつて欲しいという彼女の願望なんだろう。

難しく考えてもしようがない。元々、俺がやれるのなんてそれぐらいなんだ。なら、

そうしよう。

「笑顔、か。当たり前だけど、一番大事だよな……確かに」

「はい。わたしは、わたしが大切に思う方の笑顔を望みます。ですから、その方が笑顔になるよう努力します」

そう言い切った彼女の表情には、もうさっきのような翳りはうかがえない。

一つ重荷を降ろして軽くなった時、授業終了を知らせるチャイムが学校内に鳴り響いていた。タイミングはバツチリだ。

すっきり冷めた残りのコーヒーを一気に流し込む。砂糖もミルクも入れていない、そ

のままの味が喉を通り独特の苦みが脳を活性化させる。

ポケットをまさぐり、小銭で二百円をコーヒー代として有紀寧に手渡し、席を立つ。「ありがとな、お陰で色々と軽くなったわ。『同じ』コーヒーをまた今度、飲みに来ても良いか？」

「はい、いつでも来るのをお待ちしてます」

さて、まずは岡崎に会いに図書室へと戻るか。

扉まで付き添い、見送ってくれた有紀寧に別れを告げ、足早に図書室へと向かう。授業が終わり休み時間になったせい、廊下にはさつきとは打って変わって人が沢山教室から出ていた。

生徒の群を、糸を縫うようにすり抜け図書室に到達。鍵が掛かってないかの確認もせず扉を開けた。あれから岡崎が移動をしていなかったらここにいる筈。

だが、そう簡単には物事は進まなかった。

「……いない、な」

室内に岡崎らしき人はおろか、人自体が居なかった。いや、一人だけ隅の窓付近に居た。

出て行く前と同じ位置で彼女は、ずっと小難しそうな装丁の本を読んでいる。視線が腰辺りにある本へ向いているせいで、若干ここから見ると猫背みたいになっていて、孤

高な姿と相まって本当に猫のように思えた。けど、岡崎と話している時の彼女は犬っぽかった。

岡崎がここに居ないという事は、教室だろうか。そろそろ春原も登校してくる時間だ。

俺はハサミを持ち始めたことみを視線から外し、図書室を後にした。

※

幸希が去り、一人になった資料室。

彼が飲み干したコーヒーマグのカップを洗う有紀寧の表情にはさつきまでの笑顔はない。

「……………ごめんなさい、幸希さん」

ここにはもう居ない人に、人知れず謝り、カップを洗い流す。

何についての謝罪なのか、有紀寧は最後まで本人にいう事が出来なかった。

幸希に出したおまじないをかけたコーヒーマグは、始めから手違いでも失敗でもなく、意図して二つのおまじないをかけていた。それは、どうしても訊きたい事があったから。

有紀寧には兄が一人居た。名前を宮沢和人と言ひ、お世辞にも社会的には真つ当と言えない人物であつた。毎日のように夜遅くまで友人と遊び、酷い時は帰つてこない日な

んてのもしよっちゅうあつた。だが、有紀寧にとつては大事な家族だつた。

今はもう亡くなつてしまつた兄に良く似た幸希を、有紀寧はどうしても放つておけなかつた。容姿が似ているわけではないのに、どうして彼を兄と錯覚するほど似ていると思つてしまうのか。それは幸希の為人に因があつた。

兄と似た所が多い幸希を心配するあまりにしてしまつた過ち。何故そんな事をしたのか、それは、

「どうして、いつもここにいらつしやると……泣きそんな顔をするのですか？」

有紀寧にはわからなかつた。どうして幸希があんな顔をするのか。何が彼をそこまです追ひ詰めているのか。

もしかして自分がいけないのか、とも思つた時があつたが、それなら此処に始めから来なければいいのだ。未だ彼が通ひ詰める事からそれは考えられない。なら、どうしてなのか。

それを訊くために、有紀寧はコーヒーに一服盛つた。素直になれば、シエルターのような心の防壁を取り払えば、きつとその理由を知ることが出来ると思つた。けど、話の流れで有紀寧は幸希の想ひ人の存在を知り、ついそつちを優先してしまつた。

降つて湧いた好奇心のせいで出来なかつたことを今更にして悔やむ。

中でも一番訊きたかつたのは、幸希の身体にある傷の事。これは好奇心ではなく、有

紀寧の信念を通す為にも必要だった。

「大切だから……笑顔でいて欲しい」

独りよがりな願望だとは承知している。

だが幸希を笑顔にするには、傷の原因を知る必要があると有紀寧はあたりを付けていた。

資料室に来るようになってから、幸希に会ってから、有紀寧は一度だって傷の無い幸希を見た事は無かった。他の生徒はそれを『喧嘩の末の傷』と吐き捨てるが、それは違ふと彼女の感が激しく否定していた。

これまで兄の友人が喧嘩で作る傷を手当してきた自分だからわかる。

あれは絶対に喧嘩で出来たモノではないと。

人の気配が薄くなった資料室に、新たな客人が窓から現れ、有紀寧は対応に向かった。カップの汚れは、綺麗に落ちていた。

※

三年D組のクラス委員長である藤林椋は、二時間目以降姿をくりました幸希の事が気になってしょうがなかった。

最近は双子の姉である藤林杏の言いつけを守って、毎日ちゃんと遅刻する事なく登校していたのに、それ以外の学校生活が改善されることは無かった。というのも、幸希が杏からされた厳命は「遅刻をして棕を心配させるな」という事で、決して真面目に授業に取り組みなさいとか、心を入れ替えて学校生活を送りなさいとは言われていない。屁理屈のようだが、実際そうである。幸希はこれを言われていないから、と遅刻をしない以外ではいつも通りの生活を守っていた。ある意味、規則的な生活を。

しかし、棕としては心配の種が一つ減ったに過ぎなかつた。遅刻がなくなつたのは当然喜ばしい限りだが、授業にも休み時間にもあまり教室に顔を出さないのでは、同じクラスという恩恵を得ている気がしないのだ。

これならまだ、幸希に物怖じしないですみませんかと踏み込んでくる杏の方が幸希との距離に近い。棕にはその姉の立場が、とてつもなく羨ましかつた。

「……はあ」

本来なら自分の方が近い立場に居られるはずなのに、叶わない夢となつてしまつた現実
実に溜息もつきたくなる。

三時間目の授業も終わり、残す一時間で待望の第二回昼食会が待っているというのに。それについての話を振って、少しでも仲良くなろうと密かに企んでいた棕の作戦も、相手が居ないのでは果たせない。

模範的な学生としての評価をなげうてば、幸希に今すぐにも会いには行けるだろう。だが、根本からしてそういつた大胆な行動をとれない性格の棕には、土台無理な話だった。

——積極性が欲しい。

誰に願うわけでもなく頭の中で思い浮かべた時、教室の開けっ放しになった扉を叩きつける音が聞こえた。

瞬時にそれが「誰」によって出された音か思い当たった棕は、機敏に視線を向けた。

「棕ーっ、ちよつといいかしらー！」

「お姉ちゃん?！」

予感した通り、積極性を持つ姉がやってきた。だけど、棕は杏を見て言いようのない不安を覚えた。

自慢ではないが、棕は杏に愛されている。それは誰もが周知の事実で、覆しようのない真実だ。そんな杏が、妹を呼ぶのに今にも爆発しそうなくらいの憤怒に満ちた表情をするだろうか。ありえない事が今ここにありえてしまった。

怒りで若干鼻息が荒くなっている杏は、ずかずかと大股で棕の座る机まで進んだ。途中、杏の形相を見て慄いた男子生徒が小さな悲鳴を漏らしたのを、棕は聞き逃さなかつた。

机まで着いた瞬間、杏は回りの目などお構いなしに大きく頭上に上げた両手を思いつきり音を立てて机に叩きつけた。

「幸希の奴が何処に行つたのか知らないっ!」

「きやつ……えっ? さ、榊原……くん? し、知らない、けど」

肝を震わせるような打撃音は、周囲の人以上に、中心に居た椋を何よりも驚かせた。

音の衝撃で数秒放心したのち、ようやく杏が言っていることがおかしい事に気が付いた。

「待ってお姉ちゃん。どうしてお姉ちゃんが榊原くんの居場所を訪ねて来るの?」

三時間目の授業が終わつたばかりのこの時間。杏が幸希関連の話題を出すには、今日という時間では殆どありえない。何故なら、彼女がここまで怒りを露わにする理由が、椋が知る限りないからだ。

杏の怒りがもし昨日からのものなら、その時点で椋は気が付く自信がある。けど、昨日の時点では、彼女はなんら変化なかつた。ということは、原因は今日しかありえない。だがここで椋に疑問を抱かせた矛盾が生じる。少なくとも、今日の二時間目が終わるまでの間、椋はずつと幸希を見ていた。自慢できることではないが、暇さえあれば盗み見していたので間違いない。朝登校してきてから、二時間目が終わるまで幸希は教室を出ていない。

杏を怒らせるのは不可能なのだ。仮説として、登校時に杏と出会い何かがあったというのも考えたが、杏はバイク通学をしており、しかも遅刻ギリギリが良くある。殊勝にも朝早く登校する幸希とは時間が合わないのだ。

ありうる可能性は論理で潰し尽くし、残った矛盾の答えを言わんと杏が口を開く。

「さつき授業が終わって少ししたら、クラスの子から手紙を渡されたのよ。それが……あーもう！ いま思い出してもむしやくしやする！ ホントに幸希が何処にいるのか知らないの!？」

「本当に私も知らないよお。それで、手紙は……もしかして榊原くんからだったの?」
怒りで喚き散らす杏を宥め、棕は話を進めるよう促した。

「そうよ幸希よつ。あいつ、手紙なんて回りくどい事しといて『今日は急用が出来たからスマンが行けない。岡崎は来るから安心しろ』とか書いてよこしやがったのよ!」

「——え?」

思いもよらない事実には棕は瞠若した。

どうして幸希は来れないのか。何故それを杏にだけ伝えたのか、自分ではなく。

「……………つ」

何かを言おうとして、しかしそれは始業のチャイムによって何もかも遮られた。

「もう、休み時間短過ぎよ。とにかく、幸希を見かけたらあたしにすぐ知らせてちょうだ

い。それじゃあね」

「う、うん……わかった」

手に持った幸希からの手紙を涼の机に置いて、杏は来た時と同じように大股で教室を出て行った。

同時に、反対側の扉から遅刻の陽平が姿を現した。眠たげに欠伸を漏らし、教室内の空気を疑問に思いながら席に着いた。そしてすぐさま肩にかけた鞆を枕替わりに寝始めってしまった。

ざわめきは教師が来たことですぐに鎮静化した。

涼も周りの人同様すぐに授業の準備を始めたが、机に置いてある手紙が目に入り集中出来なかった。

どうして幸希は来れなくなってしまったのか。杏を見て感じた不安が的中し、今はとにかく幸希の姿を一目見たかった。そうすれば安心出来ると、そう言い聞かせて授業に臨んだ。

結果として、不安は終わっておらず、最悪の形で実現してしまった。

楽しみだった昼食を前にした授業も半分を超えた頃、妙に教室外の空気が騒がしいのを涼は感じた。

授業中にも拘らずやけに廊下を叩く足音が鳴り、教師の切羽詰まった会話のようなも

のまで聞こえてきた。ざわめきはこの教室内にも伝播した。

「授業中失礼します。少し、時間良いですか先生」

突如開け放たれた教室の扉から飛び込んできた教師は、授業をしていた椋達の教師に声掛けし、他の人に聞こえないように小さく耳打ちしていた。話している内容がなんなのか、椋の座っている位置からは聞こえなかった。

しかし、それが如何な内容かは大まかに想像出来た。現に耳打ちされた教師は顔を青く染め、生徒達に自習を伝えると足早に教室を去って行ったから。

いきなりの自習に生徒達は何があつたのか口々に言い合い、想像は膨らんでいく。騒ぎはあつという間に広がり、その騒々しさに陽平は目を覚ました。

「ん、何なんだ一体。うるさいなあー、僕寝てないんだから静かにしてよね……」
が、目覚めが悪く、文句を言つて再び顔を伏せてしまった。

もう椋の中で巢食う不安の種は取り返しがつかないぐらいに成長していた。

三時間目から姿を見せない幸希、そして、突然の不参加。それだけでも椋の心臓は張り裂けそうだったのに、追い打ちにこの事態。こうも偶然が連続してしまうと、これも幸希が関係しているのではと邪推してしまう。

——積極性が欲しい。

再び椋は願う。今の自分ではクラスのざわめきを控えめに抑える事しか出来ないの

だから。

姉のような、傍目を気にしない堂々とした態度と、それを支える強靱な心が欲しい。そう願っている内に、三度目の来訪を告げる扉が開いた。

一度目は杏と陽平。二度目は教師。そして三度目は――。

「――岡崎くんっ」

教室に現れた朋也は、そこだけ明かりがさしていないのではと思う程に暗い表情をしており、眉間に大きなクレバスを作っていた。

何かを知っていると確信できる表情の朋也に、棕は駆け寄った。

「あ、あの、岡崎くん……その、榊原くんがどこに居るのか……知りませんか？」

「……あいつなら」

絶望に浸かったような面持ちの朋也は、底冷えするほど低い声でその事実を、棕にだけ聞こえる音量で口にした。

それは、幸希の晴れやかな笑顔を心待ちにしていた棕には、残酷な仕打ちだった。

「他校の連中と、資料室付近の校舎外で喧嘩をして……そのまま、停学になった」

――積極性が、欲しかった。

第十一回：卑怯者でいこう

榊原幸希の停学期間は一週間に決まったのは、杏が気落ちしている椋を連れて放課後に職員室へと赴き教師に聞いた時だった。

その日、昼休みを待つて授業を真面目に受けていた杏は、四時間目を前にした休み時間にクラスメイトから伝えられた一つの伝言を聞いた。怯えた様子のクラスメイトの女子は視線を泳がせながらも、しっかりとその伝言を伝えた。それは幸希から杏への、昼食会の不参加をシンプルに伝えた内容だった。

一方的な幸希の伝言に対する杏の反応は非常にシンプルだった。

「あの馬鹿野郎！」

怒りである。純粹な、約束を破ったことに対する謝罪も無い伝言に対する怒りだった。

杏の怒号を聞いて驚いたクラスメイトを余所に、心意を問い詰めるべく教室を飛び出した杏は幸希と椋、そして朋也が居るクラスへと真っ先に走った。

しかし、椋の口からきいたのは幸希の不在。居るはずがないのだ。この時、既に彼は悶着を起こして職員室へと連行されていたのだから。杏が知らないところで一人。

四時間目のチャイムが鳴り、杏は仕方なく教室へと戻り、先程伝言を伝えてくれたクラスメイトに一言お礼を言つて席に着いた。授業内容は、まったく言つていいほどに頭の中に入らなかつた。

受験のためと割り切つた勉強というのは、杏には欠片も楽しさを感じられない。大学へ行く為には必要だから、そう割り切る事で勉強が退屈になるのなら、いつそ割り切らずに挑めばいいのか、と言えばそうではない。どっちにしろ、学ぶという終わりのない積み重ねは心から好きだと言ひ張れる人間しか楽しめない。それはひたすらに一滴一滴落ち続ける点滴を眺める行為に等しい。

退屈な授業を耐える事五十分。待ちかねたように杏は再び掠のクラスへと向かつた。これほど早く行けば、流石に幸希も居るだろうと踏んでの行動だつた。

「幸希いるっ!」

教室に侵入しすぐさま標的の名前を言つた。応える声も、それらしい動きを見せた者も誰も居なかつた。ただ、教室内の空気が重くなつたのは感じられた。

気にした様子もなく杏は幸希が居ないのを確認し落胆した。仕方ないので掠に幸希が姿を見せたのか聞く為、いつもの掠の席へと向かつた。視界に映るのは生徒同士が内緒話をするように身を寄せ合う姿と、机で蹲つた掠の背中だつた。

「ちよつと掠どうしたの? 具合悪いの? それとも陽平のボンクラに何かされたの

？ されたのね、したんだわ、覚悟しなさい陽平！」

「わけも聞かないで討伐宣言するのはやめてくれませんかええ！」

「何言ってるのよ、椋がこんなに弱ってるんだから幸希が居ないならあんたか朋也しか居ないでしょうが！」

「あんたホント理不尽つすねえつ」

杏の脳内では、椋を泣かせる第一人者が幸希、そして順に陽平、朋也、その他とランク分けされている。これは過去に椋が泣いた回数と原因を作った人間を数え、統計的に算出した確率に基づいたランキングである。ちなみに何故幸希が一番かと言うと、椋が幸希に想いを寄せており、それによって幸希の些細なひと言でよく涙していたからである。

この杏と陽平の言い合いに反応して、ようやく椋が重くなつた頭を机から離れた。

「違うよお姉ちゃん……春原君は悪くないよ」

「椋つ、よかつたどこも悪くないのね？ どうしたの、あそこにいる猿が関係ないなら具合でも悪いの？」

「猿つて、言うに事欠いて猿とは……僕にも堪忍袋の緒が切れるっていうのを、知らないのかな」

「良かったじゃないか春原、これで晴れてお前も霊長類の仲間入りだ」

「嬉しくないよっ」

顔を上げたものの、掠の顔色は優れない。杏から見てもそれは病気の可能性を考えてしまふ程だった。顔面蒼白で生気も感じられず、己を制止した声すら掠れていた。何より、顔を上げた掠の目の周りは泣き腫らしたようになっていた。

妹が泣いた——杏の中にある堪忍袋が緒が切れてしまふ前に、袋自体が爆散した。紛れも無くそれは憤怒だった。体中の血液が熱く沸騰し、視界が白くぼやけ、力を溜めるように喰いしばった歯が軋む。

杏の変容に気が付いた朋也と陽平は戦慄で肌が粟立った。此処に居る全員が既にどこからか出し手に持った辞典で殴殺される。そんな映像が鮮明に浮かび上がったのか、朋也は額に冷や汗を流し、陽平は情けない小物のような悲鳴を短く上げた。

「……………誰？　掠を泣かせたのは」

「ち、ちがうよお姉ちゃん……………泣いてないよっ」

もはや掠の声も届かない。地獄の釜茹でがあるとすれば、沸騰音はきつと彼女が出したような声をしているのだろう。クラスの全員がそう思った瞬間だった。

鬼の形相の人の形をした何かは、片手じゃ足りないのか両手に辞典を装備した。これで攻撃力はさらに倍。怒り補正をプラスしてさらに倍の四倍にまで膨れ上がっている。ゆらり、と幽鬼のように杏の体が揺れる。

「早く白状しないと、ギャグ補正がかからないくらいに恐ろしい攻撃を与えるわよ」
「だから違うってお姉ちゃん。……私が勝手に泣いただけで、クラスのみんなは誰も悪くないよ」

いつもならこの言葉で正気を取り戻しただろう。しかし、今の杏は怒りのあまり正しく物事を理解する思考能力が五歳児前後まで退行している。棟を庇わせている誰かが居る。そうとしか思えなかった。

この時、誰もが発言をするものなら即座にあの手に持った鈍器で殺されると思い、恐ろしくて何も言えなかった。が、このままでは片っ端から杏がクラスメイトという屍を積み重ねてしまう。意を決して、杏の前に朋也が無防備な身を晒した。

「まてまてまてつ、俺が説明する、だからちよつと落ち着け杏!」

「なによ朋也、あたしはいたって冷静よ。だからそこどきなさい」

「経緯を、こうなつた経緯を説明するから一旦その辞典を降ろせえ!」

「……仕方ないわね。さあ、疾く説明しなさい。じやなきや、あんたが酷い事になるかもしれないわよ」

「随分物騒な仮定もあつたもんだ」

どうにか怒りを収めた杏は辞典を何処かへ仕舞い朋也が話すのを待った。

溜息を吐いた朋也は、気を取り直して事のあらましを語った。

話は簡単に済んだ。要は朋也の口から幸希の停学を知った椋が、突然涙を流し始めたのだ。驚いた朋也と陽平は椋を慰めようと必死になった。それはもう必死に。陽平の生傷が増えたぐらい必死に慰め笑わそうと努力した。しかし、すっかり塞ぎ込んでしまった椋には届かず、見かねたクラスメイトの女子に連れられ手も足も出なくなった。時間も経ち、粗方落ち着いた椋は泣きやんだのだが、今度は机にうつぶせになり視界を閉ざしてしまった。その後、杏が姿を現したのだ。

「どうだ、これでわかったか？ 俺達は何もしていないし、寧ろ何とかしようとした。これであつたら、藤林は勝手に泣いたんだ」

「そう言われると、なんだか私が悪いみたいですよ岡崎くん……」

「朋也、死刑」

「なんでだっ!？」

理不尽に嘆く朋也。視線を朋也から外し、僅かに下降させ杏は幸希の姿を思う。

いつも笑ったり泣いたり怒ったり、どんな事にも全力で、なにに変なところでもいい加減で——椋が好きになった親友と呼べる男。

杏にとつての幸希とはそういう風に出来上がっていた。親友ならばどんな悩みも相談してほしいと彼女は思う。しかし、突然の停学は流石に驚いた。同時に、椋についての顛末を知り、怒りの矛先をどこに向ければもわかった。昼食会の約束を破ったのも加

算して、与えるべき罰は凄まじい高さまで上り詰めていた。

自然と、空手に力が入る。悔しいのだろうか、それとも怒っているのだろうか。杏本人にも、それは良く分からなかった。

「……とりあえず、幸希は一回死なす」

「お、お姉ちゃん」

剣呑な物言いの杏の表情は真剣そのものだった。双子として長い時間付き合ってきた椋だからこそ、その本気がわかったのだろうか制止の声を上げ幸希の行く末を本気で心配した。これを抜きにしても既に心配はしているのだが。

ひとまず杏の怒りは収まった。幸希がここに居ないのであれば、いつまでも臍を曲げていてはしょうがない。気持ち切り替える為に嘆息したちようどその時、教室に新たな来客者が現れた。

「失礼します。あの、岡崎さん……」

来訪したのは、肩身を限界まで縮めおどおどと挙動のおかしい渚だった。

渚は今日の昼食会に幸希の悪巧みによって朋也を使って呼ばれていたのだった。朋也自信、もう昼食会どころではなくなつたのを察しているらしく、渚の姿を見た瞬間、あちやあと己のミスに気が付き頭を抑えた。

「すまない古河、唐突なんだが今日の昼は無くなつちまつたんだ」

「あ、そだったんですか、すいません。そうとも知らずわたしっただら勝手に……すいませんでした」

「いや、俺（幸希の方）が悪いんだ。お前が謝る必要はないさ、本当にすまなかった」

心の副音声が無れないように注意しつつ、しよげた顔をして頭を下げている渚に朋也は誤った。元凶は、全てを引つ掻き回したのは幸希だが、それを態々渚に言う必要もないと判断したのだろう。我慢を重ねた朋也の表情は鎮痛さと不満が混在した、言いようもない表情をしていた。

突然の渚の来訪を、杏は訝しげな表情で観察していた。束の間二人がどんな関係なのかを考察し、話してみなくてはわからないと結論を出し、接触を図った。

近くで見ると渚は思った以上に可愛らしい表情をしており、杏の男性的な感覚をくすぐり、何かがこみ上げる感覚を感じた。杏の存在に気が付いた渚は、意図が掴めない様子で小首を傾げていた。

「ねえ朋也、この子あんたの知り合い？」

「えっとその……は、初めまして、3年B組の古河渚です」

「……というわけだ、ちよつとした知り合いだな」

「ふーん」

「岡崎さんには演劇部の再建を手伝っていただいています」

「部活の……？」

目の前の小さな渚は演劇部を再建すると、その手伝いを朋也がしていると云った。杏は嘘のような朋也の殊勝さを疑ったが、渚を見る限り嘘を言っているようにも思えなかった。

「部活動」という足枷を引きずる朋也達不良トリオは、訳あって部活と名のつくものからはわざと遠ざかってきた。それが今になって朋也が部活に関わり始めた。こうなつては二人の関係を邪推せずにはいられなかった。

確認として挙げるが、杏は朋也に惚れている。幸希はこの事実を度々もしかしたら勘違いかもしれない、と持ち前のポジティブで乗り切っているが、彼も本心では分かっている。だからこの渚と朋也の構図は、本来杏にとっては非常に不都合なのだが、性格的にそれをあからさまに表には出せなかった。

竹を割つたような快活でサツパリとした男勝りの性格である杏だが、先入観を取り払えば一人の乙女に過ぎない。何より杏は、人の恋愛は相談を乗つたり策を講じるのが得意だが、こと己の話となると打つて変わつて臆病になつてしまう。

だから、杏はとりあえずいつも通りの自分であろうと決めた。自分の不都合を取り払えば、渚は非常に人が良いのが見目から滲み出ている。仲良くなりたい。そう思った。「渚って言うのね、あたしは藤林杏、つでこっちが双子の妹の涼よ、よろしくね。あたし

の事は好きに呼んでちょうだい、こっちも渚って呼ばせてもらうから」

「藤林椋です、よろしくおねがいます。私も、好きに呼んでくれて構いません」

「よろしくおねがします、えっと、杏……ちゃん、と椋、ちゃんって呼んでも良いでしょうか？」

「ええ、いいわよ」

「はいっ」

「……男前な奴」

あつという間に女三人の集団が出来上がった。横目でそれを見ていた朋也が、杏に對する思ったままの言葉を言った。同性にモテる理由が、わかった気がした。

男性陣が蚊帳の外に追いやられた事で、朋也は仕方なく一人で手持無沙汰になっていた陽平の方へ向かった。自分も混ざろうか、混ざるまいか右往左往していた陽平に軽く蹴りをお見舞いした。

「痛っ、いきなりなんだよっ」

「別に、拳ぐらいの大きさの蚊が止まってたから殺してやったんだよ」

「それ完全に僕手遅れになってますよねえっ……ったく、それで、どうすんだよ岡崎」

造形を崩した表情のリアクションをとったと思えば途端にシリアスになる。陽平は朋也の行動が単なる切っ掛け作りだった事を察したのだ。現に、朋也の表情は優れな

い。

「教室に幸希が停学処分を受けたのをいち早く持つてきたのは朋也だった。始めの部分は聞いていなかった陽平だったが、大体のいきさつをなんとなくではあるが自分なりに予想がついていた。」

「榊原が他校の連中と校舎外の敷地内で喧嘩したつて言つてたけど、それ、もしかしたら岡崎も居たんじやないの？」

「……ああ……俺も、あの場に居たさ」

それなのに自分は無罪、幸希は停学。あまりにも処分に差があり過ぎる所業に何も出来なかつた朋也は、忸怩たる思いを捨てきれないでいた。

朋也は幸希が停学になった瞬間を見届けた。だからいち早くその情報をリークする事が出来たのだ。やっぱりね、と珍しく感の鋭い陽平が呟いた。

「あいつ、岡崎がピンチになると余計なおせっかいかいをするクセがあるからね。なんとなくそうなんじやないかなあつて思つたんだよ。で、何があつたのさ？」

「思い込みの激しい奴だからな、俺にとつては『悪い』クセだよ。そのせいであいつがいつも損してるんだ。あの時も——」

苦々しい思いを嘔み潰し、朋也は語り始めた。

後方から女性の姦しい会話が聞こえてくるが、今はそれにいちいち反応をするつも

りもなかった。

※

時は僅かに遡る——。

朋也の姿を探して図書室に来たもののあえなく見つからず、本を裁断しようとしていたことを無視し後にした時だった。

いつでも杏の声を聞きつけピンチの時は都合よく現れ救い出す、という理想的即惚れシチュエーションの為に鍛え上げた幸希の広範囲型高性能聴力が、普段の学校では聞きなれない音がしたのを聴きとった。

野太い男性の荒い罵声と、鈍い打撃音、少女の声、ガラス製品かそれに近い陶器などが割れたような破砕音。想像もしたくない最悪の状況を振り切るように、幸希は持ち前の過去にサッカーで鍛え上げ、その後には喧嘩で搾った脚力を全力で解放した。

場所の特定は既に済んでいた。少女の声を聞いた瞬間、それが誰の声なのかを幸希は知っていた。ついさっきまで一緒に珈琲を飲んでいた少女の……有紀寧の声に違いなかったのだから。当然騒ぎの渦中は資料室付近だろうと踏んだ。

「(なんで急に……もしかして、有紀寧の“外客”が連れてきたのか?) だとしたら、

最悪だ！」

幸希の予想が正しければ、騒動を収める方法は、誰かが犠牲になる事しかなかった。無人の廊下を掛ける足が更に早くなる。自分の限界を振り絞るように走るが、足は思った通りの速度では動いてくれなかった。心なしに幸希の呼吸は荒くなっていた。さつきまで鼻呼吸だったのが、いまは大きく口を開いて酸素を少しでも多く吸入しようとしていた。

部活動を投げ出し、墮落に身を墮として年単位の時間を重ねていた幸希は、明らかに全盛期よりも体力が落ちていたのだ。不良は体力が無い。この偏見はいまの幸希には言い返す自信がなかった。

資料室に繋がる最後の曲がり角を折れた時には、もう肩で息をするほどになっていた。息が上がる速度は早くなったが、それでも走る速度は衰えてなかった。お陰で、幸希は間に合う事が出来た。

不幸中の幸いか、資料室の周りは空き教室が多く、確信を持てるほど大きな音を出しているにもかかわらず、幸希以外に人の姿は無かった。けど、それも時間の問題だろう。もたもたしていたら確実に教師の耳に留まり、大騒ぎに発展してしまう。逸る動機を抑え、一瞬の躊躇いすらも持たずに扉を開け放ち、資料室の中へと侵入した。

「有紀寧っ、大丈夫か!？」

「——幸希さんっ」

視界に映るものを脳が解析するより早く帰つて来た有紀寧の返事に、とりあえずは大事に至らなかつたと安堵した幸希。

「良かった、怪我は無い……」

「わたしは大丈夫ですが、わたしを庇ってくださいました岡崎さんという方が……」

有紀寧に外傷は見当たらなかつた。割れて飛び散つたカップの破片のなかへたり込んでいる有紀寧には確かに怪我は無かつた。そして、有紀寧の膝に頭を置いたまま目を覚まさない人物——幸希が探していた朋也にも外傷は見当たらなかつた。

なぜここに朋也が居るのか幸希にはわからない。だが恐らく朋也もまた有紀寧の“客”の一人だつたのだろう、と思つた。窓の外ではいまだに争う声と音がするが、幸希は膝を曲げて屈み、眠る朋也の頭を慎重に触つた。頭皮を掠める触れるか触れないかの優しさで万遍なく触れ、後頭部に膨らみがあるのを触れ、これが頭部への衝撃によつての気絶と理解した。

立ち上がる。有紀寧が不安そうな顔をして視線を追う。一瞥すると、有紀寧の目端に真珠のような雫が浮かび上がっているのを見つけた。

ついに、幸希の中で溶岩の如く煮えたぎる感情が爆発した。

「いけません幸希さん。落ち着いて下さい、卑怯な言い方になってしまいますが、あなた

には暴力を振るっては欲しくありません。きつと、後でご自分を傷つけてしまいますっ」

「有紀寧。朋也の頭はそのままの状態で冷やしてくれ、その内目を覚ます。………ごめんな」

「幸希さんっ」

幸希は逃げるように正面の割れた窓を器用に飛びこえた。瞬間、室内にさつきまで自分が使っていた珈琲のカップが半分に分かれて割れているのを見かけた気がした。自分の心もまた、同じように怒りで二つに引き裂けそうだった。

窓を乗り越えた先は、何も無い広いとは言えない通路のようになっていた。校舎と生垣を挟んで一本の道のようになっているこの場には、幸希以外に四人の強面な男が居た。誰もが少しは傷ついていていたが、一際傷が目立ったのは一人だけだった。疲労が積み重なっているのか、座り込んでしまっている。

という事は、この仲間外れが有紀寧の「外客」で友達なのだろう。幸希は瞬時にそう判断して、他の三人を敵と見做し立ちふさがった。見るからに他校の男共の目つきが鋭くなった。

「んだ手前えはっ！ 邪魔だ、どかねえと………ぶへっ」

枯れた声で啖呵を切ってきた男を、幸希は途中で遮るように思いつき顔面に右フツ

クをお見舞いした。見事に顎を打ち抜かれた男は殴られて強制的に右へ顔を向けた状態です。固まり、やがて膝から崩れ落ちた。

唐突に始まった奇襲に、残り二人の男共が怒りを露わにした。

「おい！ いきなりなにしやがんだ！」

「何も言わずに殴るとか、卑怯だぞお前！」

いくら喧嘩だろうと、最低限のルールは守るべきだと、そう主張し幸希に詰め寄る二人。有紀寧の友達だろう座り込んで立てない男が、幸希の危険を感じ二人が収まるように声を上げたが届かなかった。しかし、幸希は怯まなかった。進学校に在籍しているのだ、いくらまぐれで一発でノセたとしても、この状況をひっくり返す事は出来ないだろうとそう思った。

しかし男の想像とは裏腹に、幸希はむしろ諧謔の笑みを携え二人の男に向かった。

「そりやどうも、卑怯は俺の専売特許なんだよ。手前えらなんかにくれてやるもんか」

「お前っ！ 上等だよ、そこまで吠えるんならやってみるや！」

「坊ちゃんが舐めた口きいてんじやねえよ！」

激昂した二人は同時に左右から躍りかかった。

幸希は相手の愚かさを笑いながら、懐に手を伸ばした。そこから出てきたのは、幸希が愛用しているマグネシウムテープとライター。それと自分用のサングラスだった。

ある程度の大きさに切ったソレに火を点け、二人の前に放り投げた。すると眩い閃光が走り、二人の視界をあつとという間に真っ白に塞いだ。突然の光量に焼けた瞳の痛みに二人は呻いた。サングラスを付けた事で予防した幸希が反撃に出る。

「ボケがつ！ 俺相手に！ 複数！ ってのは！ むしろ！ 愚策だつてんだ！」

目を抑えてしやがみ込んだ二人に、怒りの頂点に達している幸希が容赦なく蹴りを浴びせ続けた。罵倒を一言一言乗せながら、一発づつ。

「誰だかしらねえが！ 次来たら！ もっと痛い目に遭うからな！ 覚悟しろ！」

「……………」

返事は帰ってこない。雨のように繰り返された踏みつけるような蹴りの前に、とうとう意識を手放してしまったからだ。それでも幸希は攻撃をやめない。有紀寧の居場所を荒らし、泣かせ、あまつさえ朋也を手にかけて事が許せないのだ。

蹴り続けても反応を返さない者を蹴り続けても痛覚は感じるのだろうか、と幸希は思っている。いったん攻撃の手を休めた。既にボロボロになった男共は見るからに哀れな事になっていくが、それでも幸希の怒りは収まらない。再び懐に手が伸びたのを見た有紀寧の友人が回復した体力を全力でつかいきって立ち上がった。

「おいそいつらもう気絶してるんだっ、もういいだろ！」

「アホ。それじゃあこいつらは次も来るに決まってる。此処でもっと恐ろしい目に遭っ

てもらおう」

「なっ……」

酷薄な笑みを刻んだ幸希に、思わず止めようとした心がたじろいだ。果たして懐から現れるは、市販で販売されているバリカンだった。有紀寧の友人は、開いた口がふさがらなかつた。

「ケケケケ……覚悟しろよ」

どんな凄惨な事をするのかと思えば、幸希は昏倒した男二人の頭を掴み、その髪をバリカンで狩り始めあるマークを描き始めた。

その時、有紀寧の献身的な介護が実を結び、朋也が目を覚ました。

「つつう、ここは……？　そうか、俺は……」

「良かった、目を覚ましたのですね岡崎さん」

「宮沢……そうか、資料室で茶を飲んでたら」

さつきまでの事を思い出し、朋也は部屋が荒れている事、なのに静かになっている事に疑問を持ちまだ鈍痛のする後頭部を抑えながら起き上った。

苦痛に顔を歪めるのを見た有紀寧がまだ寝ているように言うが、朋也はそれを振り払い、割れた窓の外に向かった。慌てるように有紀寧もその後続いた。

「なっ、なんだこりゃ……！」

「幸希さん、いけませんもうそれ以上はっ」

朋也が見たのは物言わぬ男二人に未だ何やら責め苦を繰り返しているのだろうと見える幸希の背中と、この状況を作った原因の一人である有紀寧の客人の傷ついた姿だった。あまりの光景に有紀寧も息を呑んだ。

どうして幸希がこの場に居るのか、有紀寧と知り合いなのか、いろんな疑問が朋也のなかに浮かび上がったが、とにかくこれ以上はマズイ。止めなければと思い朋也は幸希の肩を掴んだ。

「おい榊原っ、もう止めろ！ これ以上やったら教師が来るかもしれないぞっ」

「んだよ邪魔すんなよ……っつて、岡崎、もう頭は大丈夫なのか？」

水を差され怒りを見せて振り返った幸希だったが、相手が岡崎とわかるなりそれも霧散しいつもの表情を覗かせた。

「頭はまだ少し痛い、まあ大丈夫だ。それより、随分と酷く……っ!? お前、これはやられた俺でも同情するぞ」

「イカす頭してるだろこいつら。カリスマ美容師俺の腕が良いからな。もうアレにしか見えないだろ」

「幸希さん無事ですか？」

「お前有紀寧、もう平気か」

平常時の幸希である事を安心したのか、有紀寧は安堵からホツとし胸を撫で下ろしていた。その時、苦い表情をしている朋也が見ていたものが有紀寧の目にも入った。他でもない、幸希によって不良共の頭髪から生み出されたマークだった。

「ん？ 幸希さん、このマークはなんでしょう何か何かの地図記号ですか？」

「あーつとそれはな有紀寧……」

「待て言うなよお前。流星にそれを言ったら俺は引くぞ」

「わかつてるよ。あれだ、特に意味は無いが、なんか描かなくては気が済まなかったからな、それだけだ」

「そうでしたか、ですがやりすぎですよ幸希さん」

「すまんつい」

項垂れ反省の意を示した幸希。有紀寧はそれで満足したのか、ぼんぼんと二度頭を優しく撫でそれで許した。

傍からそれを見ていた有紀寧の友人が、ぼつの悪い顔をして近づいてきた。幸希はそれを見るなり電光石火の如き攻撃を男に喰らわせた。朋也は目にも留まらぬ速さの幸希の攻撃に驚愕した。なぜなら男と幸希の間の距離は十歩以上あるのだ。それをどうやって縮めたのか、それが分からなかった。

攻撃が当たった男の方を見ると、それがどんな方法なのかすぐにわかった。パンツと

炸裂する音と、小さな筒状の物、明らかにロケット花火だった。

「いきなりなにしてんだよ榊原、お前あの人に恨みでもあんのか？」

「いけません、あの方はわたしのお友達なんです」

「あいつがこうなつた原因を作つたんだから悪いに決まつてんだろ、これは然るべき制裁だ。そうだろ、老け顔のオッサン」

「ああ……すまねえゆきねえ！ 俺のせいであんたの、俺達の聖域を穢しちまつた！」

謝れば許されるとは思つては無いが、それでも謝らずにはいられないのだろう。男は有紀寧に向かつて深々と額に地を擦りつけ土下座をした。同時に、資料室に慌てた様子の教師たちが現れた。

室内の惨状を目の当たりにした教師は顔を青くし、幸希と朋也の姿を見るなりすぐに顔を赤くした。怒りがこみ上げたのだろう。

「またお前らか岡崎に榊原！ それとその部外者！ 一体なんだこれは」

「見りゃわかるだろ。気に食わなかつたから暴れたんだよ俺一人だな。ここで気絶してる以外の他の連中は俺を止めようとしたんだよ」

「おい榊原つ、それは」

「黙つてろ岡崎」

反論しようとする朋也を止め幸希は教師陣の方へ向かった。実際、朋也はやられただ

けで何もしていない。広い視野をもって見れば、彼も被害者の一人なのだ。同然有紀寧もその一人だ。

教師は幸希の気性と過去の事案をしっている事から、状況を判断しそれが事実として受け入れた。有紀寧と朋也は最後まで幸希を庇い立てるように発言を繰り返したが、決定が覆る事は無かった。

こうして、幸希の停学が決定した。

※

「……………そんなわけで、榊原は停学になっちまった。俺があの時気絶さえしなければ、なんとかなったかもしれないのに」

「なるほどね。それにしても、相変わらず榊原は卑怯な手をすき好んで使うね。僕だってそこまではしないのに」

事件のあらましを最後まで聞き、陽平は感想を述べた。

「あいつ曰く、卑怯は俺の専売特許らしいからな」

「それ僕も聞いたことあるよあれでしょ、何をしてでも勝ったもん勝ちだ、って言ってたね。まっその意見には僕も賛成だけどね」

「お前はそれでも負けるから恥ずかしいな」

「よけいなお世話だよっ」

ふと陽平にある疑問が浮かびあつた。大して重要ではないのだが、個人的にどうしても気になった事だ。

その場を見ていただろう朋也は覚えているだろうか、と思いつつ疑問を投げかけてみた。

「結局、榊原がバリカンで刈つたマークつてなんだったの？ ウンコでも描いてたの？」

「そんな単純なもんじゃねえよ。……言いにくいけど、口頭で伝えるぞ」

「うんうん」

非常に遺憾だという表情で朋也は口を開きずらそうにしていた。それほどに言いづらいマークだったのだらう。しかし、朋也一人で背負うのもなんだか嫌だったので、陽平を巻き込むことを決めた。

「……二重丸に＊を重ねたものだ」

「えっ？ 二重丸に……えっと、＊を……こうやって、こうか……ん？ げっ、これって」

脳内でイメージするのが難しかったのか陽平はノートの端に、朋也が言つた通りのマークを描き、それがなんなのか知り絶句した。この時陽平は、いつぞやの幸希が言つた生理ネタを思い出した。デリカシーのかけらもない発現だったが、これはそれに匹敵

する程の下品さだった。これを悪い顔をしながら、喜んで実行している幸希の表情が鮮明に再生され陽平は何も言えなくなった。

そつとノートを閉じる。勿論、これが女子の目に二度と入らないように消しゴムで消すのも忘れない。万が一にでも見られたら、意味は解らないだろうが、知られた時が陽平の学校生活が終わってしまう。女子に軽蔑されたまま。

「……悪だなあいつ」

「ああ、悪だな。それも、とんでもなく下劣な」

陽平と朋也が静かに呟いた。

※

放課後。結局あの後昼食は男子と女子に別れ、すっかり仲が良くなった渚と藤林姉妹が一緒に、朋也と陽平が共にとり、図らずも幸希が望んだ結果に終わった。

職員室を後にした杏は、椋と共に昇降口へと向かう道中どうやって幸希と会おうか考えていた。教師の話を書く限り、停学を言い渡された幸希はその後、職員室で生活指導担当の幸村と話をして帰ったらしい。なら幸希の手掛かりは幸村だろうと思つて杏が訊いてみれば、

「そりゃ、他の生徒には言えんことだからのう。すまんが教えるわけにはいかんのだ」
と門前払いをくらってしまった。

どの道学校に居ないのでは、杏から幸希に会う事は叶わない。二年からの付き合いであるものの、幸希の事に関して杏は知らない事が多かった。自宅がどこにあるのかも、親が何をしているのかも、どうしていつも傷を作っているのか。杏にはわからず仕舞いだった。

停学期間は一週間。少なくともその間、幸希に会う事は叶わない。そう思うと、どうしてだか寂寥感のようなものが湧いてくるのを感じ、杏は己の感情を不思議に思った。思い起こせばいつだって近くに居た幸希が、突然連絡もつかない場所に消えてしまったのがそんなにも心乱す事なのか。最後まで杏にはわからなかった。

隣を歩く棕も、また杏とにた寂寥感を感じていた。棕の場合それに加え、無力を嘆く悲しみも混じっていた。こんな時に何もできない自分が、悔しいと。

「もしかして朋也と陽平なら幸希の場所知ってるんじゃないかしら。ねえ棕、そう思わないい？」

「今は、それしか可能性がないと思うよ」

「よしつ、それじゃあ陽平の住んでる学生寮にでも行ってみますか。どうせ朋也も一緒に居るでしょ」

「うん、それじゃあ急ごうお姉ちゃん」

可能性の出てきた手段に、それまで暗い表情だった椋が花を咲かせた。

わが妹ながら現金な娘の態度に微笑ましいものを感じながら、杏は陽平と朋也が居るだろう学生寮へと足を向け始めた。

西に沈みゆく夕焼けが、時折杏の視界を遮るが、同時にこんなにもちゃんと夕焼けを見たのはいつだっただろう、とノスタルジックに浸りながら、隣を歩く椋と共に歩き続ける。

途上、何か気の利いた物でも買っていこうと思つた椋が杏に提案し、商店街によることにした。椋は食べ物、杏はどうせ陽平の部屋だし、と思つてゴキブリホ○ホイを購入していた。妹にその暴挙を止める力は無かつた。

「あのく、すいません。少し道を聞きたいんですが良いですか?」

買物も済まし、店を出てしばらくした頃だった。駅の近くを歩いてしばらく遠出をしていないな、などと思つていた矢先、姉妹は声を掛けられた。

ナンパだったら容赦なく辞典で撃退するのだが、声の主は少女だった。しかも可愛らしい。

「どうしたの? あたし達にわかる場所なら良いんだけど」

振り返ってみれば、少女は黒髪を両サイドで縛り短い尻尾のようにしていた。小さな

体軀から年齢に相応した可愛らしい髪型だと、内心思つた杏の頬が思わず緩む。

目線を合わせるように掠が屈んだ。

「どこに行きたいんですか？」

「お二人の通つてる学校の、学生寮に行きたいんです。わかりますか？」

「それなら、あたし達もちょうどこれから行くところとしてた所よ。それなら一緒に行かない？」

「わあ、良いんですか？　ありがとうございます、助かりました」

向日葵を連想させる満面の笑みを浮かべる少女は大きく頭を下げた。そして、あつ、と小さく漏らして慌てて頭を挙げた。

一挙手一投足に至る全てが愛らしい、と杏は思つた。

少女は笑顔のまま、小さな口を開いた。

「自己紹介を忘れてました。わたし——春原芽衣と言いますっ」

第十二回：悪戯の結果

夕刻。

藤林杏は妹の椋と一緒に春原陽平が住んでいる学生寮へと向かっていた。

結局一度も顔を合わせることもなく停学となつてしまった友人、榊原幸希の自宅を知る為にも陽平と、一緒に居るだろう岡崎朋也に会う為に。

何故なら杏は幸希の自宅がどこにあるのかを知らないからだ。

一年余りの付き合いであるにも関わらず、幸希という人物についておよそ知りえる事実は非常に少ない。それは隣を歩く椋も同じで、だからこそ可能性のある陽平と朋也から聞き出そうと思いつたのだ。

手段としては非常に頼りないが、これしか方法がないと杏は悔しく思い内心歯痒い思ひだった。職員室で教師に訪ねれば話は簡単に済むだろう。しかし、学校内でも特に忌避されている幸希の素性を、別のクラスの、しかもクラス委員長である杏が訪ねたところで、余計な詮索を植え付け徒労に終わると杏自身予感していたからだ。教員の中でも比較的幸希には甘い幸村ですら、幸希の所在を教えるはくれなかつたのだから。

故にこの拙いやり方は妥協の未考え付いた、至極当然な苦肉の策である。

陽平が、朋也が幸希について知りえる事は少なくとも自分よりは多いだろうという他力本願な手段。高校生という年齢と立場を鑑みれば、これが限界だろう。まだ出来る事よりも、出来ない事の方に天秤の秤は傾くのだから。

「それにしても助かりました。まさかこんなに早く兄と同じ学校の……それも知り合いの方に会えるとは思いませんでした」

双子姉妹の後を追従する小さな少女が、小さな歩幅で遅れないよう時折速足になりながらもついて歩いていった。杏はそんな少女に微笑ましい表情で答え、少女に気づかれないうよう歩く速度を落とした。

少女——春原芽衣とは先程の買い物終りに駅近くで出会った。

聞けば彼女は学生寮に住む兄の様子を窺いに尋ねたらしい、と杏は聞いた。いまだき珍しくらしいの兄思いの妹だと感心したぐらいだった。

だが杏は芽衣の名前を聞いたとき、同時に自分でも信じられない仮説が脳裏に浮上したのを無視出来なかった。そう『春原』という苗字が、杏には非常に聞き覚えがあったからだ。

まさか、そんな偶然が起こるわけがない。妹が居るなんて話を聞いたこともないし、なにより、この幼くタンポポのような少女が「あの男」の妹の訳がない。外見はともかく、内面が似ても似つかない。

ありえないな、と杏は妄執を振り払って学生寮へと向かう。

隣を歩く椋は、杏から見ててもなにを考えているのか分からない、様々な感情が入り混じった顔をしていた。なんとなく、その心意が気になった杏だったが、実は自分以上に頑固な性質である椋に問うてもきつと答えは返ってこないかもしれないと思い、今はそつとしておこうと決めた。

せめて黙りこくるのは空気を悪くするので、芽衣を皮切りに話を広げようと思い、杏は大きなリュックを背負う芽衣の方を振り向いた。

仮説を証明する為の解を求めて。

「芽衣ちゃんはお兄ちゃんに会いに来たって言ってたけど、その人ってどんな人なのかしら?」

「兄ですか? そうですね……優しい人です」

「優しいかあ……なら、あいつじゃないわね」

「……?」

少なくとも、杏の持つ春原陽平という人物像は『馬鹿で粗野でデリカシーなど欠片もない情けない男』という風に出来上がっている。よって、芽衣の評する『優しい人』というのは陽平には当てはまらないと思えば少なからず安堵した。

ホッと胸を撫で下ろす杏の隣で、椋は姉とは真逆の答えを出していた。

棕よりも陽平に近い杏ではその内面を良く知っているのと、杏自身の性格と個人的な感情も相まって陽平を評価しているが、姉よりも大人しく陽平をそこまで詳しく知らない棕からすれば、芽衣の言う『優しい人』はむしろ該当すると思っただのだ。

どんな人も外見だけで評価してはいけない。それを自分によく言い聞かせているからこそその棕の答えだった。

「もしかして、そのお兄さんというのは春原さんじゃ……」

「はあ!? ちょ、棕何言ってるのよ、あいつなわけないでしょ。あの〃陽平なのよっ?」

「……陽平?」

ぴくつと芽衣の肩が小さく跳ねた。

「もしかして、その陽平というのは元サッカー部でしたか?」

「え、ええそうだけど。確かにサッカー部だったけど……まさか……」

杏の顔面が引き攣る。ひくひくと頬が震えるのが自分でもよく分かる。

棕は芽衣の質問と反応を見て、やっぱり、と呟いた。

「はい。春原陽平は、わたしの兄です」

「うそでしょー!?!」

こうまで似つかない兄妹が居る事に、杏は信じられず絶叫をあげてしまった。

どう見ても聞いても可愛らしく慇懃なこの少女が、あの無礼と馬鹿を着て歩く陽平と血を通わせた兄妹とは、何をどうすればこうなるのか。杏は己に照らし合わせて双子の妹の事を見やり考える。なるほど、例え双子と言えど似ているのは外見ぐらいで性格には差異がある。双子ですらこうなのだから、兄妹でこうも違ってもおかしくない。

なんとか平靜を取り戻した杏は、大きく息を吐いた。

※

帰り道、男二人並んで歩くという構図に、なんだか納得がいかない陽平の表情は晴れやかとはお世辞にも言い難い顔をしていた。

朋也に言わせてみれば馬糞を喰らったような顔と表現するだろう陽平の表情は、学生寮に近づくにつれ段々と収まり也を擧めようとしていた。

「ったく、一体榊原は何処に行つたんだよ」

「何処つて、そりや家だろうよ。当たり前前の事を何言つてやがんだ春原」

「榊原の停学で背負つた罪悪感で僕に八つ当たりはよしてよねっ」

「すまん……」

「はあ……なんか、調子狂うなあ」

二人は視線を落として黙ってしまった。

いつもなら素直に謝るなんてしない筈の朋也に、陽平はなんだかやりずらい思いを抱いた。

この場に幸希が居たならばこんな気まずい雰囲気になっても、持ち前の空気を破壊し尽す言動で何もかも有耶無耶にしてしまうのに。

肝心の幸希が居ないからこそこうなってしまうているのだが。陽平はそう思わずにはいられなかった。

「だいたいあつさり停学になる榊原も榊原だよ。自己保身と人を陥れるのにかけては右に出る奴なんか居ない筈なのに」

「……自惚れるわけじゃないが、多分俺が居たからだろ。それと何より、宮沢が居たからだろうな」

「あいつ、僕達が関係すると無茶ばつかするからなあ。で、宮沢って誰？ 女子？」

「迷わず女子かどうか訊くお前も、そろそろ保身を考えた方が良いぞ」

「大丈夫、いざとなったら本気出すから。それで、女子なの？ 可愛い？ 後輩？」

いざという時が陽平にいつ訪れるのか。朋也は呆れて嘆息した。

「女子で後輩だ。それにまあ、可愛いな」

「へえ、宮沢って言うのか」

「一応、忠告しておく、幸希の知り合いらしいから馬鹿な事すると榊原に痛い目見せられるぞ」

「うげっ……」

榊原幸希を敵に回す。それは陽平にとって死刑宣告となんら変わり無い。

味方であるからこそ友達だからこそ本人曰く悪戯で済んではいるが、敵と認識されてしまったらそれも容赦ない、悪戯と言いつ捨てる事の出来ない苦痛を味わうかもしれない。朋也の忠告のお蔭で、陽平は有紀寧には変な事をしないと決め、人知れず人生を守りきった。

幸希にとって有紀寧がどれほど重要な人物に振り分けられているのか陽平は知らないが、朋也が言うのだから余程の事なのだろう。

だからこそ、陽平は降つて湧いたような疑問を無視する事が出来なかった。

「榊原の好きな女って、もしかしてその宮沢って奴なのかな」

「さあな。俺の見た限りじゃ、なんとなく好きというより、兄と妹って感じだったぞ」

「兄と妹、ねえ……」

「深刻に考える程の事か？」

陽平の噛み締めるような、誰に向けられたものでもない言葉は、朋也の感じた疑問とは違うものだった。

しかし、それを今ここで言った所で意味も無い。

無邪気に自分について回る芽衣の姿を夢想して、振り払い陽平は切り替えた。今ここに居ないのは幸希も芽衣も変わらないが、それでも遠く離れた妹よりも今は幸希の方が重要だと思った。

「いや、別に深刻にはなつてないさ。……それより、これからどうするのか」

「榊原は一週間の停学。しかも、俺達はいいつの自宅がどこなのか知らない。見舞おうにも、場所が分からないんじゃないかな」

「それだよ。僕達つて友達でしょ、それなのに家すら知らないとか、どうなつてんの」「友達は俺だけだろ。春原のことは多分ペットとかそこらへんのカテゴリに居ると思うぞ」

「ペットならもつと優しく扱うべきつすよねえ！ ペットを虐待する飼い主とか、残酷すぎでしょっ」

「あいつなりの愛なのかもしれないぞ」

「そんな愛なら僕はいらないよっ」

「がりがりと頭皮を掻きむしって嘆く陽平に、朋也がいつものように笑う。いつの間にか、幸希が居た頃のような空気が蘇っていたのだ。」

二人では綻ぶやり取りも、三人いれば固く結びつくはずだった。如何に幸希という人

物が自分らにとって重要なのか、陽平は大袈裟なりアクションを取りながら改めて幸希の居る楽しさを思い知った。

「で、どうするの?」

「そうだな、とりあえず寮に居る美佐枝さんに聞いてみよう。寮母なら教師にも顔が効くかもしれないし」

「美佐枝さんの弱みを握ればいいんだね」

「お前は一回、その的外れな考えを改める必要があるな」

卑劣な手段を取ろうと提案する陽平はさておき、美佐枝に尋ねるといふのは的確だろう。

不良生徒である朋也と陽平では、教師に聞いても門前払いをくらうに決まっているし、多少融通が利く幸村でも叶わないだろう。それは杏が既にとった手段であるからして、のっけから無理なのだ。しかし、美佐枝ならば少なくとも教師よりも生徒寄りの大人だ。

日々の寮母としての生活態度を見ればそれは自ずと理解できる。悪戯を繰り返す生徒に制裁を加えるのも、裏返せば彼女の愛情なのだから。

幸希と面識があり、交流もある彼女なら何か知っているかもしれない。そう思ったのだから朋也は学生寮へと急ぎ足で向かった。

「ちよつと、置いてくなよ」

「遅れた方がジューズ奢りな」

「あんたは小学生ですか」

太陽が西に傾いた頃に、二人は学生寮へと到着した。

夕焼けになった西日が強く瞳を突き刺して、二人は反射的に目を細くした。……だからだろうか、寮の入り口に立つ三つの人影が誰なのかすぐに分からなかったのは。

「……あれっ？」

「杏……か？」

前に進むと屹立する木々が西日を遮り徐々に視力が戻ってきたのか、陽平は入口に居るのが本当に朋也が言った通り杏なのか確かめようと目を凝らした。

陽平にとって禍々しささえ感じさせる紫陽花のような色の髪が視界に入り、それが二人いる事に気が付き、姉妹でいるのだろうと理解した。

しかし、

「……あれっ？」

再び同じ言葉を漏らす陽平は、姉妹だけでは数が合わない事に気が付いた。

三つの影が在るのに、二人では勘定が合わない。もう一つの人影は、他の二人よりも小さく、何よりも陽平が良く知る人物だったのだ。

おかしい。あいつがここにいる筈なんてないんだ。だって僕は何も聞いてないし、芽衣が連絡も無しにいきなり来るなんてこともありえない。

本能的に否定を証明する為の推論が浮かび上がるが、それは影が徐々に鮮明になり実像を表すことで意味を成さなかった。事実として存在するものを否定することなど、不可能なのだから。

「あつ、おい朋也ー陽平ー、遅いわよー」

「ど、どうもこんばんわ、です」

「もうっ、お兄ちゃんのが帰ってくる遅いって、どういうこと?」

三人が朋也と陽平の姿を確認すると声をかけてきた。

朋也はなんとなしに駆け寄るが、あまりの驚きに硬直した陽平は呆然としたまま立ち尽くしてしまった。

「よう、何しに来たんだお前ら? それに、そっちの子は誰だ?」

「何しにって、あんたらなら幸希の家しってるかと思つて来たのよ。掠があまりにも幸希の事心配するから、仕方なくね。あたしもあいつを一発かましてやらなきや気が済まないし」

「お、お姉ちゃん? あの、クラス委員ですから、榊原くんの事心配するのは当たり前で

……」

「あつ、そうそうこの子……聞いても驚かないですよ？」

「藤林、お前の姉貴は薄情だな」

杏の物言いに赤面して言い訳を並べ立てる椋を無視して会話を続ける姿に、朋也は椋に同情を禁じ得なかった。

朋也にとつて間違いなく初対面である芽衣が、杏によつて朋也の前に突き出される。

芽衣は、離れた位置で立ちすくむ陽平から視線を外し、朋也を見上げ礼儀正しくお辞儀をした。

「初めまして、春原芽衣と言います。兄がいつもお世話になっています」

「……………は？」

一瞬、何を言っているのかわからない様子で固まった朋也が芽衣を見つめた。

その反応が杏には思った通りだったのか、笑いを堪える為に目一杯頬を膨らませて吹き出すのを我慢していた。

「……」
「ここでようやく陽平の意識が現世に戻ってきた。」

「め、芽衣っ！ どうしてお前がここに居るんだよ!？」

「何言ってるのお兄ちゃん。ちゃんと昨日連絡したでしょ、覚えてないの?」

「連絡う? そんなの知らないぞ僕は」

「嘘だあ、ちゃんとお兄ちゃんと話したもん。エリマキトカゲのエリザベスと一緒にハ

工を捕食するなんてのが趣味だって、お兄ちゃん言つてたじゃん」

芽衣が何を言っているのか、陽平には理解出来なかった。

どうして僕と話をしたなんて勘違いをしているのか、それに、エリマキトカゲとハエの捕食なんて悍ましいことを趣味にする筈がない。

会話の中に見逃しようのない祖語が生じていることに気が付き、陽平はその原因を考える為に芽衣から視線を咎し朋也に向けた。

朋也も聞いていたのか、陽平を見て意味深に頷きむくれている芽衣を見やった。

「なあ芽衣ちゃん、本当に春原と話したのか？」

「間違いありませんっ、間違ってるのは兄です。あの声は聞き間違いなんてなく兄のだったもん」

「けど僕はそんな覚えは何もないよ。第一に、芽衣から電話があつたら僕はここに来ること自体を許可しなかった」

自分の身を案じる妹に、無様な姿は晒したくはない。兄として妹が鬱陶しい時もあるが、それ以上に守るものとしての矜持というものだろうか。陽平は今の自分をあまり芽衣には見せたくなかった。余計な心配をするのが目に見えてわかつていたから。

なのに彼女はこうしてここに居る。これはどういう事だろうか、と朋也と陽平は探偵が推理するように顎に手を当て考える。

その時、学生寮の中から声が聞こえてきた。

「電話に出たのは春原じゃなくて、榊原だよ」

呆れたような声で、気だるげに姿をした美佐枝が箒を携えて現れた。これから夕方前の掃除でもする前だったのだろう。だとしたら、ジャストタイミングとしか言いようがない。

「あの時、春原の妹さんが話したのはそこに居る金髪じゃなくて、声帯模写なんて離れ業を持った馬鹿だよ」

「美佐枝さん、知ってたのっ?」

「あん時電話を取り次いだのはあたしだからね。なのにあんたったら気絶してるんだもん、それで榊原が立候補したのよ。やり過ぎすって」

「で、事態を引つ掻き回すのが好きな榊原が芽衣ちゃんを騙したってわけか」

「そゆこと」

良く出来ました、と朋也を褒めた美佐枝。

此処に至つてようやくお互いの勘違いと、それを生み出した原因がなんなのか、誰なのかかわかった。

幸希の仕業と分かり、陽平も納得いったのか「なるほどねやっぱり」と呟いて肩を下ろした。幸希ならば、それぐらいの事はやってのけるだろうと、朋也と陽平は美佐枝に

言われる前から予感していたのだ。だから、犯人が幸希と分かっても怒りよりも納得が先走る。そもそも、このぐらいで怒りを持つほど二人は狭量ではなかった。

真実を知ったが、事情を知らない女子三人は男子に比べて心穏やかでは無かった。特に、杏は苛烈だった。

「幸希の奴……こんな純粋な子の気持ちを弄ぶだなんて、許せないわ！」

「流石に、やり過ぎだと思えます」

「えっ、それじゃあお兄ちゃんはエリザベスとハエを食べたりしてないの？」

「当たり前だろうっ、僕をなんだと思ってるんだよ」

杏はともかく、基本的に中立幸希寄りの椋までもが、今回の悪戯には不満を抱いたのかしかめっ面をしていた。

今この場に幸希が現れるようなら、杏なら既に一発予約済みなので、追加で二発辞典攻撃。椋なら遅刻を咎める時と同じぐらいでお説教と決めていた。

騙された張本人である芽衣は、幸希に対して少なからず不満のようなものを抱いたが、そのお陰でこの町に来ることが出来たと思えば、些細な事だった。でなければ陽平は芽衣の来訪を拒否していたのだから。

「まあ落ち着けよ杏、それに藤林も」

「元はと言えばあたしにも原因の一端があるわけだし……ごめんね」

「そんなつ、謝らなくても。……あつ、でも電話で話したのがお兄ちゃんじゃないなら、これもいらなかったかな」

原因の一端といえば、確かにそうだろう。美佐枝が幸希の行動を咎めなかったのも起因してはいる。しかし、始めから幸希が悪戯心を持たなければこんな事にはならなかったのだ。

人知れず杏の幸希に対する好感度が下がっている事態を知った時、幸希がどんな顔をするのか。そんなことは知らずに、杏は幸希に対してさらに何等かの感情を増幅させた。

芽衣は『これ』と称した物をがさごそとリュックの中を弄り、取り出し陽平に差し出した。

「これって……………」

「…………くさや、だな」

絶句した陽平に次いで朋也が補足した。

冗談で言った幸希の言動を真に受けた芽衣が持ってきたのは、くさやだった。

「これ、どうしよつかな」

「春原……………これお前の部屋で焼いても良いか？」

「そんな事したら僕がラグビー部全員から袋叩きにあうよつ」

くさやはそのままならば臭いはそれ程でもないが、加熱をすると非常に臭くなる。それを知っているからこそ朋也は提案し、陽平は拒否したのだ。

事態は幸希の話で一致した。こうなつては本人不在で話を続けるのも無意味と思つたのかじれつたく思つたのか、杏がみんなの前に出て口を開いた。

「とにかく、幸希に会わない事には話は進まないわつ。朋也、幸希の家つて何処にあるのよ」

元を正せば杏と椋、そして朋也と陽平は幸希に会う為に行動している。それを思い出した杏は単刀直入に切り出したが、朋也の口からは望んだ答えは返つてこない。

「俺らも榊原の家がどこにあるのかはわかんねえんだ。あいつ、前からそういうのは一切話したがないから」

「この中で一番付き合ひの長い僕でさえ、榊原の『そつち方面』の事は全然知らないんだよ。ま、聞こうともしなかつたんだけどね」

そう、陽平はこの集団の中でも一番幸希と知り合ひ友人として過ごした日数が多いのだ。元々、幸希はサッカー部に所属していた為、陽平は入学当初から知り合つていた。

杏は頼みの綱だった二人が不発に終わり、手がかりが途絶え肩を落とした。

「使えないわねあんた達」

「ひどい言いようだな」

「というか、それを僕達は美佐枝さんに聞くつもりだったろ。ねえ美佐枝さん、幸希の家って調べられない？ 会いたいんだけど」

杏達は朋也達を、朋也達は美佐枝を頼っている。それならば、まだ望みは途絶えた訳ではない。

珍しく冴えた事を言った陽平の質問に、美佐枝がきよとんとした顔で目を見開いた。なんだか『なにを馬鹿な事を言っているんだこいつ』みたいな表情をしているので、陽平は疑問に思い首を傾げた。

答えは簡単に美佐枝の口からあっさりと告げられた。

「榊原なら——いま春原の部屋に居るわよ」

静寂が降り立った。

予想だにしなかった答えに、一同が声を発するのを忘れてしまったのだ。若干一名、事情を知らないので空気を呼んで黙っていた。

後に絶叫。そして、疾走した。陽平の部屋へと。

後に残された美佐枝は嘆息し、五人の少年少女によって舞い散らばった落ち葉を集める為に、手に持った箒を使って掃きはじめた。

※

春原の部屋で寛ぐこと数時間。やる事がなくなつた俺はついに飽きていた。

漫画は読んでしまったし、腹が減つたから勝手にお菓子を食つたし、春原のラジカセに糸こんにやくを詰める作業も完了してしまった。あとやれる暇つぶしなんて、春原のパンツに練りワサビを塗りつけるぐらいしか残つてない。勿論局部に。

一週間という臨時休暇を貰つた俺は、教師共の叱咤を耳栓をしてやり過ぎし真つ直ぐこの部屋に舞い込んでいた。入る時美佐枝さんには会つたけど、俺がサボるのなんていつもの事なので軽いお小言しか言われなかつた。

「ああく、暇だ」

停学に不満は無い。岡崎と有紀寧を守る為に振るつたんだ、自己満足を満たせて俺は満足だ。

だけど、一週間も杏と会えないっていうのは……非常に苦痛だ！

無理に決まつてる。土日の二日間会えないだけでも心不全を起こしそうになるんだ。これが三倍になるんだ、俺の心の炉心が融解してしまうかもしれない。

しかもあの家に一週間も……。考えるだけで怖気が走る。嫌い、と言うわけじゃないが、それでも嫌な気分だ。でもたまたま帰らないと、どうなるかわかつたもんじゃやない。もしかしたら死んでしまうかも……。

高校生になって金を稼ぐことも出来るようになったけど、俺は未だに鎖に繋がれている。斜に構えて他人を見下している俺が、実はそんな奴らよりも下だと杏が知ったらどう思うだろうか。家の事以上に考えたくない事だ。

「どうしよう、マジでどうしよう。このまま春原の部屋に泊まるって手段もあるが、それは俺が負けた気がするし」

三日に一回は帰らないとマズいし、そうなたら確実に傷ついて馬鹿の春原でも気が付くかもしれない。いや、そうでなくとも疑念の種をばら蒔く行為は避けたい。

事此処に至って俺の思考回路はぐるぐると廻りショート寸前だった。

こういう時は、杏との未来ある可能性を想像するに限る。という事で、今日はどんなシチュエーションにしようか。

——よし、どういったわけか岡崎を見限って俺に惚れた杏、という設定に……。

妄想の世界にダイブする瞬間、廊下を叩く複数の足音に気を取られ俺は閉じていた目を開いた。

地震のような地鳴りは着実にこつちに近づいている。波濤のように迫り、音が次第に大きくなってくるのが聞こえる。

なんだ？ またラグビー部が美佐枝さんのパンツでも盗んだのか？

気になって俺は思わず扉に耳を当て身体を寄り添わせた。壁は薄い、それでも確実に

に聞きたいという欲求だ。野次馬根性丸出したが、これを材料に、あわよくばラグビー部を買取することが出来るかもしれないからな。

敵は少なく、味方は大いに越したもんじやない。

音が近づいてきた。

というか、この部屋の前で途切れた。えっ、どゆこと？ 春原に用があつたのか？

「ふべっ……！」

その瞬間、俺の身体は後方へと吹き飛んでいた。

扉に耳を当ててたから壁しか視界に入らなかつたが、多分俺はその扉が開いた勢いで吹き飛んだんだろう。その証拠に頬が痛い。でもって乱暴に開けたのか、大きな音が響いてで鼓膜も痛い。

「だ、誰だこの野郎！ 俺様にこの狼藉、時代が時代なら打ち首じゃあー！」

不意を突かれて錯乱状態になった俺はわけのわからない事を言い出してた。どこの時代のお偉いさんだよ俺は。

せめて下手人の顔を見ない事には気が済まない、と思つて扉側に視線を向けてみると………そこには水色と白のストライプ天国が、あつた。というか、杏のパンツだったいやっほい。

扉を蹴破つたんだろう、足を水平に上げた状態で止まっていたおかげで俺はこの世の

真理を紐解いたような全能感で満たされていた。ラッキースケベは、俺にもあったんだ。

「……………桃源郷ですか？」

「……………いいえ、地の獄よ」

しかし現実。女性が赤面して照れ隠しにひっぱたく程度では済むはずがない。いや、済ませてくれるわけがないのだ、この杏が。

悪鬼のような顔をして、幽鬼のようにゆらりと身体を揺らし、両手に持った辞典が異様に禍々しく見えて俺は慄いた。現実にはコンテニユーは存在しないから、俺はここで終わるかもしれない。

「杏……………」

「なによ」

「俺は……………どんなパンツだろうと愛する自信がある」

最後なんだ。せめてこの思いを告げないわけにはいかない、そう思つて一世一代の告白のつもりが、パンツに脳を犯されてパンツの事しか言えなかった。これじゃ変態みたいだ。

「そう、さようなら」

悲嘆コキョウトスの川で氷漬けになるほどの冷気を帯びた杏の声に、俺の身体も硬直した。

そして、二つの衝撃が顔面に走り、穴が開くんじやないかって程の勢いで穿たれた錯覚に陥った。避けるという選択肢が、そもそも俺には存在してなかった。

崩れ落ち、薄れゆく意識の中、ふと視界に映ったのは……投擲によつて前かがみになった杏の胸元から除く……ワイシャツだった。そこはせめて、ブラチラとかを見せて欲しかった。

夢を見ている。

昔の夢だ。

俺がまだ愚か者で今と変わらず卑怯者であつた頃の。

杏と出会つた頃の夢を見ている。

幸希なんて名前をしている癖に、幸せなんて微塵も感じられず、希望なんてまやかしの過ぎないと思つていた頃の夢を。

そうして思い出した。

幸せも希望も、全部この杏が俺にくれたんだと。

「好きだーっ！」

夢だとわかった以上、やりたい放題だ。普段できない事をしまくってやろうではないか。そう思つて俺は夢の中の杏を抱き締めた。

「きやつ……」

抱き締められた杏は驚いて、瞬時に頬が朱に染まり、そして束の間硬直したかと思えばお返しと言わんばかりに俺を抱き締め返してきた。おお、この夢最高だな！

杏の身体は柔らかくて、それでいて暖かいのは体温が上昇しているからだろうか。この際、どうしてかいつもの杏よりも潮らしいのも、少し胸が大きく感じるのも目を瞑ろう。いつ目が覚めるのかわかったもんじやないんだから。

背中に回した両腕をさらにきつく、それでいて苦しくならないように細心の注意を払つて抱き締める。同時に、首筋に顔を当て香りを嗅いだりしてみたりする。うむ、フローラルや。

「あつ、ちよ……ま、待つて……」

夢の中の杏の身体がぴくんと跳ね、熱のこもった声を漏らした。俺も色々と漏らしそうです。

これ以上は流石に夢と言えど、マズイのでこの状態を維持するのを渋々諦めた。変態の烙印を押されたら生きていけないし。

と違って身体を離れた瞬間、またも俺の身体が、主に顔面が鈍い衝撃に見舞われた。視界がブレ、杏の姿が無数の線になって、そのまま消えてしまった。もう終わりかよつ、もうちよつといいじゃねえかよ！　というか顔が痛てえ。

「——いつてえな！　……あれっ？」

気が付けばそこは見慣れたレイアウトの部屋だった。というか春原の部屋だ。

どうやら俺は春原のベッドで寝ていたらしい。そうか、杏の辞典で気絶して、それからこのベッドに。

事態を把握するために回りを見渡せば、そこにはまず最初に、顔を真っ赤にした椋が俺のベッドに上半身を投げ出していた。そして、横を見れば悪鬼のような顔をした杏が。離れた位置で岡崎と春原、それと見覚えのない小娘が批難するようにコツチを見ていた。なんなんだまったく。

「……………おはようございます」

「おはよう、そしておやすみ」

「ちよ、ちよつと待て待て！　なんでそうすぐに俺の命を刈り取ろうとするんだお前はっ」

「自分の胸に手を当てて考えてみなさい！　あんたが今何をやったのか、思い出してみな」

「つっても俺、寝てただけぞ」

寝ぼけて何をやったか知らないけど、そんなに杏を怒らせる事したのか俺。

思い返してみても、何も知らない物を思い出すもクソもない。無理なものは無理なのだ。杏から視線を外して開き直っていると、ちょうど正面の掠と目が合った。

「あ、さ、さ榊原く、ん……おは、ようございま……す」

「おう、おはよう掠。風邪でも引いたのか？ 顔真つ赤だぞ。春原の小汚い、異臭がわずかにするベッドでも使うか？」

「ちよつと！ 僕の寝床にある事ない事言うのはやめろよつ」

「汚いのは否定しないんだな」

「陽平も朋也も黙ってなさい、今は幸希を処刑するときなんだから」

なんでそうなる。杏によって寝かせられたと思つたらまた杏によって起こされて、でまた寝かされるって、どんな無限ループだよ。

辞典を持つて投擲態勢に入った杏。

その時、俺と杏の間に割つて入つてきたのは……以外にも掠だった。

「だ、駄目だよお姉ちゃん、待つて」

「とめないで掠、これはあんたの為でもあるのよ。今ここで幸希は滅ぼした方が……」
いつの間に俺の好感度は暴落してただよ。杏がここまで俺に冗談に近いかもしれ

ないが、敵意を向けるなんて、正直もうこの場で泣きだしたいぐらいだ。なにしたんだよ、さつきまでの俺。

椋が間に入って、どうにか杏の暴拳を止めてくれているのがせめてもの救いだ。思った以上に、もしかして俺は椋に好かれてるのかもなんて自惚れが頭を過ぎるぐらいに。

「だ、抱き着かれたのはわたしなんだから、お姉ちゃんが怒る必要は、ないよっ」

「それは、姉としてっ。椋の為を思っただけであって」

「へ？ 抱き着いた？ 俺が？」

マジで？ 第三者の答えが欲しくて、岡崎にアイコンタクトを送ると、瞼を閉じて静かに首肯した。

おお……なるほど、あの夢は杏に見えていたけど、現実では椋だったわけか。そりゃ、杏も怒り狂うわけだ。そうとわかればやるべきことは一つだ。ここは潔く、男らしく。「すいませんでした椋さん！」

ベッドから飛び上がり、狭いスペースの床の上に額を擦りつけて土下座した。

男に下げる頭は無いが、杏の為ならば俺はいくらでも頭を下げてやる。今回の場合、俺に百%非があるわけだし。

「さ、榊原くん……。わたしは怒ってないですから、その、頭を上げてください」

「ちよつと棕良いの？ 幸希の奴、あんたを抱き締めるだけじゃ飽き足らず、匂いまで嗅いでたのよ。完全に変態の所業じゃない」

夢の中かと思つてやったことが裏目に出るなんて、神様でも思わないだろう。つくづくついてないとしか思えない。なんで普段やらないのに、いざやったらこうなるんだよ。これもマーフィーの法則つて言えるのか？

床しか映らない視界からはわからないけど、後頭部がじりじりと焼けるような視線が当たっている気がして堪らない。

「うん。でも、わたしは……嫌、じゃなかったから……」

だというのに、棕の持つ独特な静謐さを秘めた声が俺を守ってくれた。

この子、天使だ。流石は杏の妹だ。

感極まつて顔を挙げれば、ちよつと棕が俺を見ていて目が合った。相変わらず赤面しているが、慈愛に満ちた笑みを浮かべられて思わず、可愛いと思つてしまったのは一生墓まで黙つておこうと思う。俺は杏一筋なのだ。

一方、その杏と言えば。納得がいかないって具合の顔をしてはいるが、棕の制止が余程効いたのか大人しく辞典を何処かにやった。一回その収納術を教わってみたい。

「幸希」

「は、はいっー」

「掠に免じて、今回は見逃してあげる。……けど、次は無いからね！ わかった!？」
「イエス！」

「すみません榊原さん。わたしのせいでお姉ちゃんが」
「いいんだ、ありがとう掠」

掠は何も、寧ろ俺を救ってくれた側だ。俺が責める資格なんてありはしない。

それにしても、掠の肢体を見ていると、なるほどこれに俺はあんなにも強く抱きしめていたのか。胸は、双子の姉よりも大きいんだな。

赤面する掠と、向かい合う俺。ただ見合い続けると言うのも気まずいので、ふと視線を外して見れば、春原が三白眼で俺を睨んでいた。

横一文字に噤まれた口が開く。

「——人の部屋でラブコメするなよ」
もつともだ。

第十三回：三人の想ひ

杏の嬉し恥ずかし折檻を受けた後、恐らく今世紀最大の衝撃に見舞われていた。

「こゝこの小娘が春原の妹だあああつ?!」

「は、はい春原芽衣って言います、いつも兄がお世話になってます」

な、なんて礼儀正しい小娘なんだ。

どう考えたつて春原と遺伝子レベルでのつながりがあるとは思えない。違う種で栽培された子なんじゃね、とかむしろ春原が突然変異体なのかもなんて口に出してはいけない荒唐無稽な推測が脳裏に飛び交う程に信じられない。

けど現に小娘は否定してないし、春原もなんか気持ち悪い顔して照れ隠しにそつぽ向いてる。そういうのは杏がやるから可愛いのであつて、貴様のような男がやるのはむしろ逆効果だろ。

「いや驚きすぎだろ、確かに以外だと俺も思つたけど」

「あたしも、人目も憚らずに大声で驚いちやつたわよ」

マジで? その場面すつごく見たかつた。杏の驚愕に満ちた顔とか、くそう脳内に焼き付けておきたかつた。

絶対に可愛いに決まってる、間違いない。こんな事ならここでだらけてないで僅かな可能性に賭けて外に散策に出るべきだった。

「みんな驚きすぎだろう、僕と芽衣が兄妹ってそんなに意外か？」

「当たり前だ。お前みたいな猿人から、なんでこんなおしやまな小娘が続いて誕生するなんて思うわけないだろ」

「家族が居ようと平常運転ですええあんたつ。というか、元はと言えば榊原が余計な事をするから芽衣がこっちに来ちゃったんだろつ」

「芽衣ちゃんの前でそんな酷いこと言うなよな」

「岡崎はどっちの味方だよつ?!」

すかさずツツコミを岡崎にシフトするその能力は、いくら春原と言えど誇つていいと思うぞ。

しかし、まさか本当に来てしまうとは。思いつきの冗談のつもりだったんだが、思い返してみれば確かに俺が原因と言つても過言ではないだろう。

おかげで居心地を悪そうに俯く芽衣とか言う春原の妹を見ると、若干良心の呵責を感じてしまう。……あと、杏と椋の二人が俺を見る視線が痛い。なにこれ拷問？

「ねえ幸希。あんた、こんな幼気な女の子を騙すなんて……どうかと思うわよ」

「流石に、その……やり過ぎだと思えます」

「えっ？ あー、その……すんません」

杏ならいつもの事なんだけど、意外な事に掠まで参加するとは思ってなかった威圧的な態度に、思わず身が竦んでしまった。

責めるような杏の視線に、なにやら体の中心からえも言えぬ熱い感覚がこみ上げてくるのを感じ、新しい扉を開いてしまいそうな、そんな新しい真理を得てしまう所だった。「謝るならあたしらじゃなくて、ほらちゃんと居るでしょっ」

頭を鷲掴みにされて、さらに無理矢理回され春原の妹が座ってる方を向かされた。首の骨が軋む音がしたのは気のせいだと思いたい。

視線が合った春原の妹がはつとなつて顔を上げた。そうだよな、謝るならこの子にっ
てのが筋だよな。

「すまなかつた春原の妹。悪ぶざけとはいえお前の兄貴を騙っちまった、許してくれ」

「あ、はい……べ、別にわたしはそんなに怒ってませんから。お陰で兄の所に行く口実も出来まし」

「そんな簡単に許しちやつて良いの芽衣ちゃん？ こいつ謝ってるのに、こんな上から目線なのよ？」

俺の頭を掴んでいる力が強くなった。ぎりぎりど万力のような握力が、頭蓋骨を碎か
んばかりに襲いかかり変な汗が背中から流れてくるのを感じる。

目線が上からなのは生まれつきというか、普段から態度がデカイ言動ばかりなのが原因だ。だから別に偉そうにしてるとか馬鹿にしているわけじゃないんだが、弁解しようにも頭が痛くて変な呻き声しか出てこない。新しい扉がノックされ、再び開きそうになる

「あがが……ぎい、がああ……」

「あのー杏さん、それぐらいにした方が良いんじゃないですか？　なんか、変な声出てますよ？」

「良いのよ、こいつはこれぐらいしないと反省しないんだから」

「お姉ちゃんやり過ぎだよ。榊原くんも、ちゃんと謝ったんだしもう許してあげようよ……」

「……二人がそう言うなら、しょうがないわね。二人の寛大さに感謝しなさいよ幸希！」
「は……い」

棕のその一声によってようやく頭の拘束が解放された。そのまま継続されていたかと思うとゾツと来るものがある。危うく頭が割れて脳漿が飛び出る所だった。一体あの身体の何処からこんな力が出てくるのか不思議でしょうがない。

ともあれ、杏の疑似アイアンクローから解き放たれた俺は頭蓋骨が無事なのを確認して、改めて春原の妹と向き合った。

まじまじと観察してわかったが、ホント春原とは似てないこの少女。……とか思ってたら目を逸らされた。地味にシヨック。

「……はあ」

「なに溜息なんて吐いてんのよ」

「いやちよつとな、顔面格差社会の無慈悲な現実とその憤りについて考察したら、ついで」

「……? よくわかんないけど、これに懲りたらもう馬鹿な事するのはやめんのよ？」

他の人にだつて迷惑掛かるんだから」

呆れたような口調で杏にそう言われ、好感度が下がっているのを実感する。人目が無かつたら泣きたいです。

「喧嘩だつてそうよ、そのせいで色々大変だつたんだからねつ。棕は目に見えて狼狽えるし、あんたに会いに行こうにも家がどこにあるのかわからなくて苦労したんだから」「ちよつと待て。俺に会いに……来たのか?」

「そうよ、それがどうかしたの?」

「な、なんでもない」

顔がにやけてしまうのを抑えられない。他の奴らにばれないよう、咄嗟に俺はポケツトに入っていたマスクを装着した。なんでもは入ってないけど、入ってるものは入って

るのが俺のポケットだ。

「というか、杏が俺に会いに来た？　もうそれだけで一週間を生き残る自信が湧いてくる。」

「幸せの青い鳥はここに居たんだ。」

恍惚の表情で天を崇めていると、春原の妹の視線が俺に向いているのに気が付いた。けど杏の「会いに来た」という言葉で舞い上がってる俺は、そんな彼女の視線なんて気にもならない。

ふと、後ろから肩をとんとん、と二度叩かれた。

「んあ？　岡崎か、なんだ？」

「いや、あの時の事、一応でも謝つとこうかと思つてな」

「何言つてんだお前。あれは俺が勝手にやったことだろ、お前は何も悪くないじゃん。むしろ悪いのは俺の憩いの場を荒らしたあの部外者共だ」

「バツの悪い顔をしてる岡崎だが、寧ろ俺は逆に怒られると思つてた。」

「だって勝手に乱入して、その上あつさりと負けたとと思われる岡崎を差し置いて相手をブチのめしたかと思えば、さらにその罪を一人で被るといふかつかつけをしてしまったんだ。並みの男ならプライドを守る為に、勝手な事すんなど俺を責めるもんだ。」

「なのに、岡崎は俺に謝ってきた。斜に構えてるクセに、こういう律儀な所があるから」

きつと俺はこいつと友達でいられるんだらうな。でも杏は譲る気はないぜよ。

「気にすんな、停学なんてただの連休だと思えばなんともないし」

成績なんて気にするのも今更だし、進学なんて一切考えてない俺にはそんなの痛くもかゆくもない。

「いいよなー榎原は、僕も一週間休みみたいな」

「だ、駄目ですよ春原さん」

「あんまり掠の苦勞を増やすんじゃないわよ陽平」

「わかつてるって、ちよつとしたアメリカンジョーズだつて」

「お前の存在そのものがジョーク染みてるな」

その岡崎の一言に、また春原が反応して騒がしくなってきた。というか、こんなお世辞なんて飾りたくもない小さな部屋の中に六人つてのはかなり無理があると思う。現に人口密度が高くて少し熱気を感じる。

息苦しさを感じ、俺は窓際に避難した。ここがこの部屋で一番最初に風が入ってくるところだから。

窓際に背中を預けて、暫しみんなのやり取りを傍目に見ていると、あつと掠が声を小さくあげてこつちにやって来た。

「あの……いきなりですけど、よかつたら榎原くんのお家がどこにあるのか、教えてくれ

「ませんか？」

「俺の家？」

「はい。学校を休んでいる間、授業のノートとかプリントを届ける為に……」

成程、委員長としては落伍者の面倒を見るのも仕事の一貫だと言うわけか。そうではなくても人の良い棕の事だ、もしかして自発的なのもかもしれない。

ま、誰であろうと答えは決まってる。

「悪いが、俺の家はストーカー対策の為に国家レベルでの機密になってるんだ。だから教える事は出来ない」

「えっ？ えっと、機密……ですか。それじゃあ仕方ないですね、すいません変な事を訊いて」

しゅんとした表情で俯く棕の目尻には、涙は浮かんでなかった。直ぐに棕は持ち直して笑顔を浮かべたが、その笑顔も何処か無理をしているように、そうでなくとも悲しそうに見えた。

「いいじゃない家ぐらい教えてくれたって、知られて困るものでもないでしょこの面子なら」

当然そんな棕の雰囲気を感じ取れないわけがない杏が追求してきた。

こんな時でも凜とした杏の声が、今だけは煩わしい。知られたら困るから断ってるん

だ。察つする事が出来ないのはわかるが、それなのに焦燥感を抱かずにはいられない。杏相手でなければ凄めば簡単に済むが、そういうわけにもいかない。

だから俺は道化を演じる。

「実は俺の家は町でも有名なゴミ屋敷と名高い家だな、半径一キロに近づくだけでその異臭に失神する人続出なんだよ。被害を抑える為にも、教えるわけにはいかないんだよ」

「いつまでそんな冗談言い続けるつもりよっ」

「ちよつと待て杏、別に良いだろ幸希の家がどこだろうと。プリントとかなら此処に持つて来れば良いだろ」

「……まあ、ほぼ毎日ここに居るなら、それでも良いけど」

いつその事逃げ出そうと思つた瞬間、岡崎からの思わぬ援軍に救われ難を逃れられた。

どうして助け舟を出してくれたかはわからないが、今は岡崎に感謝せずにはいられない。言葉にしてしまったら、そうまでして家を知られたくないのか、と思われるかもしれないから口にはしないけど。

どんなことをしようと、家は知られたくなかった。知られるという事は、いつか尋ねる時が来るかもしれない可能性が1%でも生まれるからだ。もし、それがあの時だった

ら……俺は今の生活全てを捨ててしまいかもしれない。それだけは避けたい。

「悪いな杏に掠。此処にはいつもいるから何かあったら遠慮なく来てくれ」

「僕の部屋だよっ」

「お兄ちゃんつて、いいお友達が沢山いるね」

そう言えば、この春原の妹に自己紹介はしてなかったな。

一応、此処に来る原因を作った張本人なんだし、挨拶ぐらいはちゃんと済ませておくか。

確か、ポケットに何かお菓子が入ってたような……。おつ、飴玉があった。

「春原の妹よ、今更ながらに自己紹介をしよう。有耶無耶になっちゃったしな。俺は榊原幸希だ、よろしく。ほれっ、飴ちゃん食うか？」

「わあく苺味だあ、ありがとうございます榊原さん。それと、わたしの事は芽衣と呼んでください」

「うむ芽衣よ、困ったことがあったらその兄貴より頼りになる俺に相談すると良い。気が向けば助けてやらんでもない」

「はいっ、迷わず相談しますねっ」

苺が好きだったのか、にこにここと上機嫌にな表情をしている春原の妹……。もとい芽衣は、初めての邂逅時からは考えられないぐらい一気に信頼を寄せてきたのを感じる。

「お前って、小さな女の子には物凄く懐かれるのな」

「もしかして……………幸希ってロリコンなの？」

「さか…………榊原くん…………」

「変な情報を追加するな岡崎っ！ それと杏に掠！ それはありえないからなっ！」

「こんな事、勘違いされたらたまらん。

「なんだよ小さい女には懐かれるって、自慢じゃないが学校じゃ俺は嫌われ者ナンバーワンだぞ」

「自身気に言い切る事じゃないだろ。それに、風子とか宮沢とかにはお前懐かれてるじゃねえか」

「あれは懐いてるとは言えないだろ」

風子はただ俺をヒトデ協会の人間だという妄言を信じているだけだし、有紀寧は資料室でたまに会う客と店主みたいなものだ。いずれにせよ懐くという心情からは程遠い存在だろう俺は。

それに、杏以外の人に懐かれても意味はない。

いつだって欲しいものは思うようには手に入らない。

時間も経過して夜が始まろうとした頃、杏達はそろそろ帰らなくちゃと腰を上げた。

「あつ、それじゃあわたしも。明日また来るからねお兄ちゃん」

芽衣もまた一緒に立ち上がって春原に別れの挨拶をした。

彼女は今夜から、ここにいる間の三日間を杏と椋の自宅にお世話になることになったらしい。と言う事は、杏とひとつ屋根の下で寝泊りするってことだよな。今すぐにも代わってほしい。

一緒に夕食とか、お風呂でバツタリ会うお約束とか、そういったイベントが目白押しだろう。

「それじゃあ幸希、ちゃんと大人しくしてなさいよ?」

「わかってるよ。お前がそう言うなら、ちゃんと大人しくしてるさ」

当分は学校にも行けないんだし。

ちようど良いから古河のおっさんがやってるパン屋にでもまた行ってみようかな。

※

陽平の部屋から去り、彼の妹である芽衣を連れて杏は双子の妹と一緒に自宅へと向かっていった。

奇しくも陽平の部屋へと行く時と同じ面子で自宅に帰るとは彼女も想定しておらず、

不思議とこみ上げる可笑しさに顔を綻ばせた。

「良かったんですか？ わたしがお邪魔しちやっても」

「気にしなくても良いのよ。ウチの両親、今日から新婚旅行に行つてて休み明けまで帰つてこないから」

「遠慮しないで良いですよ、芽衣ちゃんが来てくれて嬉しいです」

「えへへ、それじゃあお言葉に甘えてお世話になります！」

初対面なのに家に迎えてくれたそれが芽衣には嬉しかったのだろう、小さな少女は向日葵のような笑顔を咲かせていた。

杏の家に到着するのはそれほど時間を要しなかった。日も暮れ路地に点々と灯った街灯の下を歩き、到着した三人は先導する杏のあとについて家屋へと入つていった。

「お邪魔します」

粗野な兄を反面教師にして礼儀を学んだのだろう芽衣がそう言つて家にながった。

先導してリビングに客人を迎え、暗闇に満ちた空間を照らす為に電灯のスイッチを入れた。

「よしつ、まずは晩御飯にしましよつか」

「あつわたし手伝います」

杏の提案に芽衣は手を挙げて主張した。

おおかた何もしないでいるのは悪いと思つたのだろう、と杏は思つた。

事実それは間違ひではないだろう。陽平の私室や、帰路での会話で感じたのは、年齢とは反比例して想像以上にしつかり者だという印象だつた。

しかしだからこそ、彼女には客人としてもてなしを受けて欲しい。中学生なのに年上に遠慮をしていては、後々後悔をする羽目になると杏は思っているからだ。

「芽衣ちゃんは、ここで掠と一緒に出来るのを待つてなさい。お客さんなんだから」
「でも……」

「良いからつ、わかつた？」

「芽衣ちゃん……わたしと占いでもして待つてましよう？」

年上の二人——ましてはこの家の住人である二人に強く言われては反論など出来るわけもなく、芽衣は大人しく二人の要望に応える事になった。

両親が結婚記念日で旅行に行つて不在という現状、ともに料理が出来るのは杏一人しかない。

むろん掠がからつきし料理が出来ない、と言うわけではないが、彼女が完成させた品はお世辞にも「美味しい」とは言い難い味をしている。技術向上を支援している杏はこれを度々味見しているが、未だ合格点を上げるのは早すぎる、というのが杏の見解だつた。唯一の例外として幸希の顔が浮かび上がったが、あれも強がりから出た言葉だ

ろう。

とにかく、この家唯一の料理人たる杏は、楽しみに笑う居間の二人を傍目に黙々と調理をし続けた。

慣れた手つきで次々と料理を完成させ、出来上がった品々を椀がテーブルに運び、晩御飯が完成した。

「あまり時間かけられなかったから、ちよつとお粗末かもしれないけど……まっ、気にしないでくれると助かるわ」

謙遜した口ぶりの杏が作った料理は、はたして本当に手抜きで作ったのだろうかと疑わしい完成度の高い品ばかりだった。

見ているだけで空腹を誘う料理を、呆けたように口を開けて見入っている芽衣は数秒そのままの態勢で静止していた。そして、思い出したように動き出した。

「す、凄く美味しそうです！ 杏さんって、料理上手なんですね！」

「そう？ これぐらいならすぐに出来るようになるわよ」

感動をあらわに言葉にした芽衣に、気恥ずかしい感情が込み上げて来た杏は更に謙遜で返した。

遠くから女子の尊敬と、同性に向けられる好意を逸脱した感情を向け続けられていた杏ではあったが、褒められるという事には慣れていなかった。それ故だろう。彼女はも

う一人この場に居る事を、すっかり失念してしまった。

「わたしも、練習……してゐるのに」

言わずもがな、声を落としたのは双子の妹の棕だった。

簡単にやつてのけ言つてのけた杏の言葉が突き刺さつたのだろう。棕は失意に染まつた顔色で俯き、周りを淀んだ空気が漂い始めている。

「ち、違ふのよ棕。……別にこんな事も出来ないとか、そういう意味で言つたんじゃなくて——」

異変に気付いた杏は弁解を述べるが、一向に棕の気分は沈んだままで……むしろこの言葉がとどめとなつてしまった。

「こんな事も、出来ない。……そうだよね、これじゃあ美味しいお弁当なんて、出来ないよね……」

「あちやく、この子つたら変な方に思考がいつちやつてるわ」

杏は失言に後悔して額に手を打ち、せりあがつたものを吐息にして吐き出した。自閉から脱するにはそれからさらに数分の時間を要した。

一悶着あつた食事時が終わり、三人は順番に風呂に入り、就寝するのみとなつた。

制服や普段着からパジャマに着替え、一同は居間に敷かれた三人分の敷布団の上に

座っている。勿論、杏と椋には各自の部屋がありベッドも配置されてはいるのだが、せつかくのお泊り会に一人寝は勿体無いと椋の提案で居間に寝る事に決まったのである。

杏もこの意見には二つ返事で賛同した。

女性が三人、就寝前に顔を突き合わせて会話に花を咲かせる。自然と、必然なのか話題は恋の話になっていった。

「お二人は、恋人とかは居るんですか？」

この芽衣の何気ない一言によって、会話は急速に中身あるものになった。

先制をきつたのは、以外にも椋だった。

「わ、わたしは……いる……かな」

言っている最中に意中の男性でも想像していたのか、椋の声は上擦り視線が右に左に彷徨っていた。対象は言わずもがな、現在学校で話題の渦中にいる榊原幸希だろう。が、残念ながら恋人とはお世辞にも言えないのが現状である。椋は緊張と昂揚で上手く理解できていなかったのだ。よって、杏が補足として恋人ではなく意中の人と芽衣に説明した。

以前、ゲームセンターで問うたときに聞いた杏には新鮮さなど感じられず寧ろ——何故椋が幸希を好きなのだろうか——疑念の方が強かった。

杏には当然の事実だが、芽衣には驚愕だったらしく、大きな声を上げて心意を問うように身を乗り出していった。

「誰なんですかそれっ!？」 同じ学校の人？ 年上？ それとも年下ですか!？」

「えっと、あ……いや、その……」

もしこの場に朋也が居合わせていたなら、やはり兄妹だな、と感慨深く感じただろう。それぐらいに、陽平が有紀寧について朋也に聞いただしていている時の姿と酷似している。

同じように陽平を知る杏も、また内心でやはりこの兄妹は似通った点があつたと乾いた笑い声を上げた。

芽衣の猛攻に反撃する間も与えられない椋は、苦笑いを浮かべながら息苦しそうにしていた。

そう簡単には言えないだろう。椋の性格から考えれば、意中の相手の名前を挙げるなんてそう簡単に来る事じゃない。なす術もなく言葉を詰まらせる椋に、そろそろ助け舟を出そうと思つた……そのときだった。

杏が予期していた事態とは異なつた行動に椋が移つた。

「わ、わかりましたから……ちゃんと云います、ね？ だから芽衣ちゃんも落ち着いて下さい」

「えっ？ 言うの椋?」

根負けしたのは予想外だった。意外な発言に驚き、杏は目を見張った。

「う、うん」

「ここまで来たんですから、止めないでくださいね？ 杏さん」

「いや、まあ掠が良いって言うならあたしに止める権利なんかありやしないんだけど……」

協力すると言った以上、杏は掠の決定に口出しをする必要もないと判断した。

人の恋路に口出しするのは杏の性分ではある。しかし、必ずしも助言をするわけでもない。妹に不利益をもたらす発言は、杏としても本意ではないのだ。よって、彼女が決意した以上それを咎めるような気概など懐かない。

暗に了承され、好奇心が膨らんだのだろう乙女は気を取り直し、改めて掠に問うた。

「それでそれで？ 誰なんですか掠さん？」

「……絶対に誰にも言わないでくださいね？」

もし芽衣が気まぐれや口を滑らしてばらしてしまえば、それが幸希本人に知られてしまえばもう後には引けなくなってしまう。

未だ彼を良く知らない掠からしてみれば、短期決戦は不利としか言いようがない。よって、この秘密は絶対に漏らしてはいけない。ならば何故彼女はそれ程のリスクを背負ってまで、態々打ち明けるのだろうか。

頬を赤くしながら深呼吸を繰り返している妹が何を考えているのか、生まれた瞬間から姉という肩書を背負う杏には理解出来なかった。

「大丈夫ですつ。これでもわたし口固いですから！」

「兄貴の事を考えると、ちよつと心配になってくるわあたしは」

胸を叩いて豪語する芽衣。その仕草が兄の面影と重なり、杏に言いようもない不安が過ぎいった。

姉の不安などいざ知らず、大きく吸い込んだ息を吐き出して、襟は顔を上げた。

「じゃあ、言います……………その、同じクラスの……………榊原くん……………です」

「榊原……………って今日兄の部屋に居た、あの人ですか？」

「はい、その榊原くんで合ってます……………」

「どうしてだかわからないんだけど、本当よ。あの傍若無人が服着た、やたらと偉そうな奴が好きらしいわよ」

深く溜息を吐いて杏は瞼を閉じた。

暗くなった視界の中に、薄ぼんやりと幸希の能天気な顔が浮かび上がり思わずその面を殴りたくなった。

藤林杏にとって、榊原幸希という人物はよき友人であると同時に、頭痛の種でもあった。それは、不良トリオとして有名な一人ではあるが、他の二人に比べて幸希の行動は

過激だったからだ。遅刻が多いぐらいと授業をさぼる以外では基本的に無害な朋也や、乱闘騒ぎを起こして退部になった陽平と比べて、幸希はそれこそ「不良」というレッテルが良く似合う人物だった。

少なくとも、杏が知る人物は皆そう評価していた。というのも、幸希の人物像が影響しているのだろう。尊大な態度で、勝つためなら何をしても良いという卑怯者と揶揄されるような行動にも迷いが無い。

友人として、この問題に頭を痛めないわけがないのだ。

「意外でした。でもわたしは良いと思いますよっ」

「えっ、あいつが？」

信じられない物を見るような目で杏は芽衣を見た。

あつけらかんとした顔で表情を崩さない所を見ると、どうやら本気で言っているらしい。

「はいっ、始めはわたしに嘔吐いた人で、しかも顔が怖かったですけど……なんとなく良い人だって感じました」

「それ……単なる悪口にしか聞き取れないんだけど」

「ええ〜！」

「そんなことないよお姉ちゃん。榊原くんは、優しい人だよ」

「いや、否定するつもりは無かったんだけどさ」

言われずとも幸希がどんな人間なのかは杏も理解している。表面上を見れば確かに彼を恐ろしく思う者もいるだろうし、内面だつて褒められるような思考をしていない。それに関しては何も掠でも擁護するのは難しい。

では何故、そのような男に身を寄せるのか。それは彼がそれだけの男では無いと感じ取ったから。杏にしても、掠や……そして芽衣も僅かに幸希の奥底に秘めたものを感じ取ったからこそ、ただ性格の悪い男と判ずることが出来なかつた。

自分を秘匿する事に徹底している幸希から、己を語らせるのはほぼ不可能と言っても良いだろう。それこそ、言い逃れが出来ない状況に追い詰めない限り。

「じゃあ次は杏さんの好きな人を教えてくださいっ」

話は掠で終わりでは無かつた。

芽衣は次なる標的を杏に定め、逃さぬよう怪しく光る双眸の眼差しを突き刺している。

「なんであたしは居る前提なのよ!」

「細かいことは気にしたら負けですよっ」

何に負けるのか理解出来ない杏は、それなら負けでも構わないと逃げの一手を講じようとする。

「そんなの、あたしには居ないってば！」

「えっ？ お姉ちゃん——」

何も考えてないだろう椋の発現に、重ねるようにして杏は告げた。

「椋は黙ってて」

「あう、ごめんなさい」

「へ〜……そういう事ですか」

にやにやと締りのない表情で杏を見据え、確信を持ったように言った芽衣にはすでにこれが杏の吐いた咄嗟の嘘だと見抜いているのだろう。

一方の杏にも、見え見えの嘘が既に意味を成さなくなつたハリボテになつてしまつたのに気が付いていた。誤魔化そうにも顔は熱を持っているし、椋には嘘を咎められ、ぐるぐると思考が交錯しその中心に思い人の顔が鎮座していた。

少しでも思い人——岡崎朋也の顔を消し去ろうと両手で顔を覆つて呻き声を上げるが、芽衣相手にこの行動は無謀だ。

「どうしたんですか杏さん？　なんだか、何かを必死に隠そうともがいてるように見えるよ〜」

「気のせいじゃない？　これは、最近流行ってるダイエット体操よ」

「……無理があるよ、お姉ちゃん」

苦し紛れの発現にも現実味がなく、棕は肩を落として溜息を吐いた。

言い訳を考えようにも、杏の頭の中では沢山の朋也が犇めき合つて彼女の脳内を埋め尽くしているのだ。それ故に、上手く思考が回らずに結果空回りしてしまった。

「お願いだから、今だけはどつかに行つててよ朋也！　いつもは勝手に居なくなるくせに！」

現実のつれない朋也とのギャップに悩み、更に杏を煩悶させた。

一部始終を観察していた芽衣は、はたと何か考えが浮かび上がったのか、独りで首肯して何かを確認し始めた。そして、布団に蹲る杏に視線を転じた。

「すいませんでした、もうこの質問はやめます」

「……ほんと？」

一転した態度に疑念を拭い去れない杏は糺すように言つて、芽衣の表情を観察した。

——嘘は見られない。

信じて大丈夫だろう、と杏は警戒を説いた瞬間だった。

芽衣はにこやかな笑顔のまま言った。

「はいっ、もう岡崎さんが好きなんですわね？　なんて質問はやめにします」

「なんで朋也が好きなんて知つて——はっ!？」

「……………アタリ、でしたか」

鎌かけだとわかったときにはもう遅かった。

言質を取られた杏にはもう言い逃れは出来ない。感情の高ぶりのままに言ってしまった言葉を飲み込むことは出来ないのだから。

「やつぱりそうだったんですね」

「……な、なんで朋也だってわかったの？」

「なんとなくですつ」

「なんとなくつて……ああ、油断したわ……」

額に手を当て天井を仰ぎ見た。蛍光灯の明かりが眩しくて、思わず目が細くなった。

そもそもどうしてこうまでして朋也の事を隠し通したかったのか、それは杏が自分に關しての恋に臆病だからだった。人の恋愛相談や、思いを成就させるために暗躍するのが好きな性質であった杏だが、それなのに彼女は恐いのだ。自分が思い破れ否定されるのが。

朋也が自分を好いているとは、好意的に考えてもまずない可能性の高いだろうと杏は予感していた。思いたくないと目を逸らしながら、しかし直視せずにはいられないかった。そしてそれに満足している自分もまた居た。協力すると言ってくれた椋には後ろめたいが、それでも杏は自分から積極的に何か行動しよう、という考えには至らなかった。

もし勇気を出して告白して、振られてしまったら。もう二度と元の友達ではいられないかもしれない。それが杏にはどうしようもなく怖いのだ。

だから、真実を知って息巻いてる芽衣の提案にも、否定も肯定も出来なかった。

「兄のお友達二人が杏さんと棕さんの好きな人だなんて、なんだか素敵です！ わたしも、短い間でですけど何かお手伝いできませんか?!」

「あゝ、いや別に……あたしよりも、棕の方を手伝った方が良いわよ」「わ、わたしっ?」

自分よりも棕を優先する。この言い訳を盾に言い逃れたつもりだったが、杏は中学生のポテンシャルを見誤っていた。

棕と芽衣は幸希にどうやって振り向いてもらうか、どんな人物なのか趣味は……など色々聞き出していた。これで自分にお鉢が回る事は無くなっただろう、と安堵していた。が、そうはいかなかった。

「じゃあじゃあ、杏さんは岡崎さんの何処を好きになったんですか?」

「な、なんでそんな事言わなきゃいけないのよ!？」

「良いじゃないですか、棕さんも気になりませんか?」

「そういえばお姉ちゃんから、そう言うのって聞いたことありませんでした」

「……棕まで……」

協力者が増え、追求が強まった今、杏に言い逃れの道は残されていなかった。

「あくもうつ、わかつたわよ！ 言えば良いんでしょ言えば！ でもそんな大したもんじゃないわよ？」

※

「なあ、明日は休みなんだし起きたらお前の妹でも迎えに行かないか？」

「なんでそんな面倒くさい事、僕がしなくちゃいけないのさ。ほっといても勝手にこっちに来るでしょ」

「わかってないなー、もしかしたら道中で誘拐されるかもしれないんだぞ。そうじゃなくても、どつかの馬鹿に絡まれるかもしれないし、迎えに行つてやった方が良いんじゃない？ 俺もついて行つてやるから」

「珍しいな、榊原がそんな事言い出すなんて。芽衣ちゃんの事でも狙つてるのか？」
「だから俺はロリコンじゃねえつての！」

「しいて言うなら俺は杏コンだ。杏婚したい。」

春原の妹が杏の家に泊まつてるなら、それを口実にすれば少なくとも明日は確実に彼女に会える。これを逃す手は無いだらう。

「どうせ暇なんだから、ついでにみんなで何処かに出かけようぜ」

「んー、まあ確かに此処に来たってする事なんか無いし、それならいつそ……」

「岡崎はどうだ？ 明日暇か？」

何やらブツブツと呟いて思案している春原だが、腹の内ではもう決まってるんだろ。こいつ、実はシスコンだったのだ。

杏達が帰ってから妹の話をしていたら、何かと嫌そうな口ぶりをしてた癖に顔が若干緩んでいたのだ。感情が隠しきれてなかった。

このままなら春原は賛成するだろう、と思いきや岡崎も巻き込んで面白おかしく行こうと誘ったんだが、肝心の岡崎の表情は優れなかった。

「悪いっ、俺明日は古河の家に行かなくちゃ行けないんだ」

「マジでっ!? えっ、なんで？ もしかして付き合ってるのか？」

もし本当なら、俺にも希望が見えてくる。

考えに耽っていた春原には、聞こえていなかったのか依然としてベッドの上で唸っていた。

「ちげえよ！ いま風子が古河の家に厄介になってるから、それで様子を見に行くんだよ」

「なんだ……風子か」

古河じゃないのね。別に風子と言ひ仲になつても俺は構わないんだけど。

嘆息したとき、春原が丁度考えがまとまったのか俯き加減だつた頭を上げた。

「しようがないなあ、まったくそれじゃあ僕が迎えに行つてあげるか」

「あーはいはい、わかつたから。それじゃあ明日の朝行くぞ」

「お前ら、杏の家がどこにあるのか知つてるのか？」

「あつ、僕知らないや」

「俺知つてるぞ」

「マジかよっ!？」

二年の時にストーカー行為すれすれの、愛という名の尾行活動が実を結ぶ日が来るとは。

いずれにせよ、これで明日の予定は決まつたな。後は現地に赴いて杏と椋が俺達の誘いに乗ってくれるかどうか……だが。まあ大丈夫だろう。杏はああ見えて面倒見が良し他人思いだし、椋は断れない性格だし。

杏……今頃三人で盛り上がつてる最中だろうか。俺の話題で盛り上がつたりしてないかな。

※

「朋也を意識したのは二年生の時だけ……別に好きになった理由なんて、大したものじゃないわよ」

椋と芽衣に降伏した杏は、当時の心境を振り返ってみた。

いつの間にか話す様になっていた朋也だが、考えてみればいつ、どこで、どうして彼を好きになったのかなんて明確な理由が出てこなかった。彼女としてはこれが普通で、今の感情が大事だった。

だけど、芽衣はそれじゃあ納得がいかない様子だった。

「えー、じゃあ特に理由もなくて……気が付けば好きになってたっていうんですか？」

「簡単に言えばそうね。しょっちゅうあいつらと遊んで思ったのよ——あ、あたしこいつの事が好きなんだ……って」

「お姉ちゃんのこんな話、初めて聞いた」

ますます話は盛り上がった。

翌朝になったら杏の家に行くというのが、楽しみでしようがない幸希は心躍る気持ちを抑えきれず顔に出ていた。

それを見た朋也は、話しの流れから考え付いた理由を訊ねてみた。

「もしかして藤林の家に行けるのが、そんなに嬉しいのか？」

「バツ、な……なな、なに言ってるんだよ！ 別に俺あ——」

凶星を突かれ狼狽する幸希だったが、心中で朋也が「藤林」と呼称したのに気が付き、次第に冷静さを取り戻した。

違うと言えば違うのだが、違わないというのもまた事実であり、幸希は返答に困ってしまった。

いつの間にか布団からテーブルに場所移動をした三人娘は、お菓子を広げて話に花咲かせていた。

朋也についての話が終わり安堵した杏だったが、次に標的になった椋に、彼女は仕返しするために芽衣に助勢して詰め寄った。

「幸希の何処が好きになったのよ椋。この際だから、お姉ちゃんに行つて御覧なさい？」
「杏さんだつて言つたんですから、腹をくくつた方が良いですよ？」

「あうう……」

勢力が一転し、あつという間に窮地に立たされた椋は限界まで身体を捻つて彼女らから視線を逸らそうと必死になっていた。

椋にとって、幸希を意識するきっかけになった出来事は、大切な思い出であつておい

それと話せる事ではないと思つてゐるのだ。きつと幸希本人は覚えていない、そんな小さな事だが、棕には確かにそれからの自分を形成する大切な思い出だつた。だから、

「い、言えないよおー」

こんなお菓子をつまみながら話せるような事じゃない。

棕の嘆きは夜の空まで響き渡つた。

朋也は藤林と呼称するのは棕に対してだ。よつて、さっきの発言は杏の家という表現ではなく、棕の家という事になる。

幸希としては棕よりも杏のが圧倒的に優先されるので、考えに入つていなかった。

「ま、まあ……楽しみじゃないと言つたら嘘になるな」

「回りくどいな」

幸希の言動に苦笑いを浮かべる朋也だつた。

「お二人は、いつ告白するんですか？」

「えつ、告白ですか？ そんなの、恥ずかしくて……まだ出来ません」

「告白よりも、今は棕が上手くいく方があたしにとつては先決ね」

「付き合いたいとは思わないんですか？」

「……まあ、失敗するよりは、成功するほうが良いに決まってるわね」

「(いつの日か、杏に告白してもし上手く行ったら……やべえ、想像しただけでトリップしてしまう)」

「な、なあ岡崎。なんか榊原が不気味な顔してるんだけど……」

「うーん、こりやまた酒でも飲んだか？」

第十四回：浮彫

——この世界のどこかに幸福があるとすれば、それは同時に、どこかに幸福に劣る不幸が存在している証明である。

暗闇が支配する小さな空間には、狂気に蠢く人影があつた。

六畳間の和室。襖を閉め切り部屋の柱とそれに接しているマス縁には掛金が付いており、無骨な南京錠がかかつている。一つだけではなく、十は越えるだろう複数に亘つて大小様々な種類が不気味に付いている。さらに窓は外から中の様子が見えないようカーテンで閉め切り、さらにその上からガムテープを無造作に、規則性を冒瀆するかのよう四方八方に張り付けられている。

防音性はともかく、一室の空間を隔絶するには十分な、しかし病的な施錠は何の為だろうか。他愛ない疑問は浮上することなく、当たり前前に繰り返される行為によつて現れている。

——音がする。

鈍く重く高い音が繰り返し、ステーキの肉を叩くときのような音がする。

それもその筈。蠢く人影が手に持っているのは文字通り肉叩きだった。本来なら肉

を柔らかくする為に使うソレは、食品ではなく人に向けられている。他でもない自分の子供に。

主に上半身と太腿を集中的に叩いているのは、そこが一番やりやすいからだろうか、責め苦を受ける子供——榊原幸希は反抗の意思など持たず、ただされるがまま畳に跪いている。

自分に苦痛を与え続ける親に憎しみは無かった。あるのはやりきれないという思いだけ。

この惨状が既にどうしようもない、治療の施しようがない致命傷であるのは明白だった。それだけに、幸希はやりきれない思いを懐かすにはいられない。

「……っ！」

狂乱した様子で何かを言っているが、相手が肉叩きを使用する前に繰り出した、強烈なフライパンでの横殴りのせいだ。耳が良く聞こえない。

幸い鼓膜は破れていないのは経験でわかった。単に衝撃で一時的に聴覚が麻痺しているだけだろう。病院に行く羽目にならず内心で幸希は安堵した。

病院に行けば自分がいま晒されている状況をさとられる恐れがある。そうなれば話は大きくなるだろう——警察沙汰を一瞬心配したが、己の世間での日ごろの行いからそれはないだろうと切り捨てた——真偽の程は知らずとも、身の回りの人間に話が

届くのは時間の問題だ。

幸希としては、それはどうあっても避けたい。

肉叩きが飽きたのか殴打するのは止め手放した。ごとんと音を立てて肉叩きの頭が少し畳に沈んだ。幸希の親は次に何をするのか予定でもあるかのように、和室の隅にある古めかしい机に並んでいる器具を手に持った。

殆どが一般家庭にあるだろう器具が並んでいる机の上だけが、この部屋の中で綺麗だった。

長く使用している弊害をもともさせず磨かれた古めかしい机。一定の間隔で正確に並べられた器具。端には何かを書き留めたメモが一纏めの束になって置いてあった。

何故この一角だけ異質なのか、幸希にはわかっていた。

「(まだ……こんなモノが無ければ生きていけないのかよ。あんたは)」

これは証だ。

幸希が暴力を受け続ける証であり、暴力を振り続ける親の証である。

他人から見れば馬鹿馬鹿しくてゴミ箱に捨てるような物だが、これがこの家族の生命線でもあった。だから幸希は何もしない。反撃などするわけもない、ただの木偶となるしかなかった。

だけどこの日の幸希は、明日に杏の家に行くという予定がある。それ故に、これまで

とは違った行動を衝動的にとつてしまった。理由は単純に、明日になって目立つ傷を出ればあまり増やしたくなかったから。言い訳が通じるだろうレベルに留めておきたいから。

咄嗟に突き出した手で相手の振う腕を掴む。片方だけでは空いた腕が襲い掛かってくるので、同時に抑えるのを忘れない。長年の喧嘩の経験がこんな所で生きる事になるとは、これっぽっちも思っていなかった。

動きを止められた親は、この幸希の予測出来なかった行動に、途端に不安と恐怖に顔を歪め崩れ落ちた。小さく蹲り、でも幸希に掴まれた両腕だけが力が抜けた状態で伸びていた。

握る腕を痛めないよう僅かに力を緩めて、同じ目線の高さになった親を見据える。目の前の相手は蹲り顔も伏しているせいで視線が交わる事はなかった。

——率直に、哀れだと思った。

「なあ……もう、やめよう」

優位に立っているのはどちらなのだろうか。そう思わせるほどに幸希の声には力が籠っている。

怒りではない。憎しみでもない。たった一つの願いを込めて、幸希は言葉にする。

一言。この一言を言えばこの人は大人しくなる。それを自分は知っている。ただ一

言、それを口にすれば済む話だ。

この時初めて幸希は認めがたい感情が湧き上がった。彼にとってこの状況を脱する事が出来る魔法の言葉は、出来る事なら言いたくない呪詛のようなものだ。その言葉は今を——「親」を認めることの言質になってしまふから。

しかし、背に腹は代えられない。

事態が露見するのと、今を食いしばって乗り越えるのであれば、最終的に幸希の天秤は後者に傾いた。

「——親父」

※

朝である。新しい朝だ、希望の朝だ。

清々しい天気の下で歩くのは心地が良い。昔はこんな陽気には体力作りの為にランニングをしていたが、今となってはそれももう必要ないな。

サッカーはもうやらない。俺は……いや、俺達はその場所にはもう戻れないし、戻らつてもない。これは隣で能天気な顔して歩いている春原も同じだろう。

「昔は、こんな天気にはよくランニングしてたよね」

同じことを思ってたのか、春原は空を見上げる。釣られて俺もまた同じように見上げてみる。

雲一つない青天は廣大にどこまでも広がっている。そう、どこまでも。例えばどこまで行こうとも、空は変わらず俺達を見下ろし続ける。

「珍しいな、お前が昔の話をするなんて。思い出すだけでも嫌な思い出じやないのか？」
「別に僕はサッカーが嫌いになつたわけじゃないよ。嫌いなのは……あの『場所』だけだ」

一拍置いて吐き出した声には間違いない、唾棄に似た感情が含まれていた。

あの場所。つまりは俺達が昔在籍していたサッカー部の事だろう。乱闘騒ぎを起こして辞める羽目になつた元居場所。嫌つたのはサッカーそのものではなく、それを取り巻く環境だった。

「もし、あの場所が俺達にとつて居心地のいい場所になつたら、お前はまた始めるか？」
「ありえないね。未練が無いって言ったら嘘になるけど、それよりも楽しい事を僕はもう知つちやつたから」

楽しい事？ 軽く鼻で笑い飛ばして春原は、空から視線を外して俺の方を向いてきた。
「だって、こうやって榊原や岡崎と馬鹿やつてる方が僕には楽しいからね」

「……ばーか、いま良い事言ったな自分とか思っただろ」

「あ、ばれた？」

「そういうの、女子の前じゃやらない方が良いぞ」

「なんでだよ？ 絶対いけると思うんだけどな」

「絶対ボロが出て倍幻滅されるのが落ちに決まってるだろ。お前馬鹿なんだから」

馬鹿をやらずにはいられないから、こうしていつも付いて回ってるんだらうな。どいつもこいつも救いようがない。

部活っていうコミュニティから爪弾きにされて、学校そのものにすら居場所をなくした俺達は身を寄せ合った。それは決して傷のなめ合いとか、そういうサブイボが立つようなもんじゃなくて、どっちかと言うと類は友を呼ぶと言うやつなんだろう。春原と類というのは非常に遺憾だが、これ以外に適切な言葉が思いつかない。

周りがみんな勉強とか受験が日常だと思つてたりするつまらない連中とは違う、娯楽を大事にする奴だと思つたのだ。だから、俺もこいつらから離れるような事がなかった。

「それにしても、委員長の家つて楽しみだなあ。やっぱり部屋とかも、女の子らしくて可愛い感じなのかな」

「下着漁ったら殺すからな」

「言いがかりと同時に脅迫って、あんたどんだけ僕のこと信用してないんすかっ！」

「でも一瞬考えただろ？」

「……………」

露骨に視線をそらす春原。何でもないような素振りを本人は意識してるんだろうが、ハッキリ言つて白々しい。バレバレだ。

制裁としてたまたま持っていた爆竹を春原のパンツの中に入れる事にした。

「ひよっ!？」

乾いた音がした瞬間、心臓がひっくり返つたような裏声で短く悲鳴を上げ、そのまま空を仰ぎ見て背中から倒れた。

金髪なんて髪して行くせに、内面が小心者だからこういうのには弱い。多分、その内小学生にも負けそうな気がする。

杏の家は迷うことなく無事到着出来た。当然だろう、俺が杏の家への道のりを間違えるわけなんてないんだから。愛の度量が違う。

しかし、思ったよりも時間がかかってしまった。予定なら十分は早く到着できたはずなんだけど。原因である後方から遅れて付いてくる春原に振り返る。

「お前のせいで予定時間よりも遅くなっちゃったぞ、どうしてくれる」

「そりやこつちの台詞だよ！ おまえが僕にあんな事するからこうなったんでしょ」

「あれは春原に巢食う虫を退治するために、仕方なくやったことなんだよ。これから人様の家に入るっていうのに、害虫なんか持ち込んだら不味いだろ」

「どんだけ不潔な存在なの僕!？」

糾弾する春原を無視して杏の家の門に付いているインターホンに手を伸ばす。これまで幾度となく彼女の後を警護してきた俺だが、実は家を訊ねるのは初めての事である。

緊張で体が震えて、上手くボタンを押す事が出来ない。というか、ここまで来て不在だったらどうしようとか、なんでウチをしつてるの？ とか不気味に思われたらどうしよう、とかネガティブな想像ばかりが広がってしまう。

あ、不味い。なんか怖くなってきた。どうしよう、帰るか？ でもここまで来てそれも、いやこんなのいつもの事だし……でも春原が居るし。そうだよ春原が居るんだから、なにも俺が気味悪く思われる可能性は少ないだろう。その為に春原とその妹を出汁にしたんだ。

「なに固まってんのさ、早く呼ぼうよ」

「……あつ？ っておいお前何つ……」

葛藤の渦に呑み込まれてて気が付かなかった。

声がしたかと思えば、横から春原の腕が伸びてあつという間にインターホンを押していた。なんだか横取りされたような、そんな悔しい気持ちも少しあつた。

「なに先に押してんだよっ」

「え、だつていつまで経つても押さないで固まつてるから。何かいけなかつた？」

「……なにもいけなくねえよ」

ボタン一つに腹を立てる程狭量じゃないし、むしろ俺が出来なかつた事を何も考えていない馬鹿がやつてくれたんだ。感謝するべきだろう、けどそれをしたら増長するのは目に見えてるから絶対にやらない。

インターホンを押したら、家の方から家主を呼び出す電子音がした。暫くそのまま待っている。「はーいつ」って声が返つて来た。間違いなく杏の声だった。俺が聞き間違えるわけがない。

心臓の鼓動が次第に大きくなっていくのを感じ抑えていると、扉が開いた。

——私服の杏が現れた。

アフロデイト

美の女神も裸足で泣きべそかいて逃げ出す程の杏の美しさに、俺は視線を離す事が出来なかつた。なんていうかもう、杏に首つたけつてタイトルで映画を一本作つてしまおうかと思う。

「あれっ？ あんた達、どうしたの？ てかなんでウチしつてるの？」

案の定杏は質問を投げかけて来るが、私服のインパクトで思考回路が上手く回らず返答できない。

見かねたのか春原が一步俺より前に踏み出した。

「芽衣を迎えに来たんだよ。榊原がどこか連れて行つてやろうつて言うから」

「へえー、案外お兄ちゃんしてるじゃんあんたも」

「僕じゃなくて、提案したのは榊原だよつ」

「はいはい、幸希も結構いいところあるわね。ちようど良い、あたしと椋も一緒に行くわ。

……椋ー、芽衣ちゃん、出かけるわよー!」

黙っていたら福の方から歩いてやつてきた! よくやつたぞ春原! 後で何か奢つ

てやろう。

杏は呼びかけながら踵を返して家へと戻つて行つた。ばたんと扉が閉まり、春原と俺

は外に置き去りにされた。

束の間待つっていると、今度は椋と芽衣を引き連れて三人が出てきた。当然、みんな学

校が休みなので私服である。

「で? どこに行くつもりだったのあんたら?」

「えっ……?」

やべつ、何も考えてなかった。つい素つ頓狂な声を出してしまい、杏は訝しんで俺を

見てる。どうしようどこに行こう、こういう時は……これまで培ってきた漫画や雑誌の知識を知恵に変換して昇華するんだ。

「もしかして何も決めてなかったわけ？」

「んなわけないだろつ、ちゃんと決めてたき、ほら行くぞお前ら着いてこい！」

先陣を切って歩きだす。あれ、そういえば俺杏の家に入れなかったな……。こんなチャンス次はいつ来ることやら。

さて目的地は何処にしよう。こういうとき少女漫画だったら——駄目だ、俺が読んでいるのって大体主人公の好きな男はイケメンで完璧な男ばかりだ。そのどちらでもない俺じゃあ適応できないじゃないか。

どうしよう、とりあえず商店街の方にも向かうか。

※

昼前の商店街は、休日という事もあってか人で賑わっていた。

この町よりも田舎から遙々やってきた春原芽衣は、好奇心に満ちた眼差しで通り過ぎる建物や景色を片っ端から目に焼き付けていた。

兄の様子を見に来たのが本来の目的ではあるが、そこは年頃の女の子。都会への憧れ

を少なからず懐いていた芽衣からすれば、この機会を逃すという選択肢は存在しなかった。

前を歩く幸希の少し後方、椋と杏が並んで歩いている横にちやつかり陣取っている陽平が笑っている。サッカー部を辞めてからの兄が、他に何か打ち込めるものがあるのか、生活に苦勞してはいないか等の心配をしていた芽衣から見ても、兄への心配は未だ拭えない。

せめて彼女の一人でもいれば、この心配事からも綺麗さっぱり別れを告げられるのだが……。唯一仲がよさそうな前方を歩く姉妹は、それぞれがそれぞれの想い人がいるのを知ってしまっている。

学校で兄がどんな生活をしているのか昨日の晩に訊いてみたが、彼女の「か」の字も脈がありそうな女性はいなかった。

〔ホント、大丈夫なのかなお兄ちゃんは……〕

芽衣は集団から少し遅れて後ろを歩き、見られないように兄への憂慮を吐息にして吐き出した。

今は楽しもう。せっかく案内を提案してくれた幸希の気遣いに報いるよう、精一杯今日と言う日を満喫しよう。そして、あわよくば椋の恋路を応援すべく、自分も出来る限りのサポートをしよう。

胸の前で小さく握り拳をつくり意気込んだ芽衣は、棕の恋愛対象になつてゐる相手へ改めて視線を向けた。

「(……あれっ?)」

恋路を手伝うならまずは相手の事を詳しく知るべきだ、と芽衣は思つておりそれを遂行すべく幸希の動向を観察していた。

芽衣から見えてまだわからない事だらけの幸希は、よく見ると隙さえあればいつも杏の顔を窺うように盗み見ている。そして彼女の反応に一喜一憂している。懸命に話に入つてゐる棕など、まるで目に入つていない。

「(杏さんは昨日、榊原さんに好きな人がいるかもしれないって言つてたけど……これつて、もしかしたら)」

昨晚、根掘り葉掘り聞いた後に、協力をかつて出た芽衣はまず幸希について色々二人から話を伺つていた。その時に杏が呟いた言葉が、今になつて鮮明によみがえつてくる。

——でもあいつ、棕にも話したんだけど……もしかしたら好きな人がいそうな感じがするのよね。

乙女の恋愛思考回路は時に物凄い回転数で回り、とてつもない解答を導き出す。

杏の発現をあつた夜は話半分聞いていたが、今はそれが本当なのかもしれないという

予感と——もし本当なら、この恋はどうしようもないくらいに報われないだろう、という悪寒がした。

「(榎原さんの事が好きな椋さん。そして、杏さんの事が好きな榎原さん。なのに、杏さんが好きなのは、榎原さんの親友の岡崎さん)」

全てが一方的で、全てが噛み合わない。

勘が間違つてなければ、いや、間違つてくれた方がどれだけ楽か。それでも、否定する程見当違いとも思えない。だからこそ芽衣は一人、この関係に気が付き胸が痛くなつた。

だって、こんな誰も幸せになれない。一步踏み込めば、みんな傷つき涙する。これを恋だとは定義したくなかった。

辛い思いをするだけの感情が恋と言うならば、いつか誰かに恋するだろう自分もまた、こんな想いを懐くのだろうか。そう思うと恋なんてしない方が良いと思つてしまふ、それが嫌だから否定したかった。

「(この事を椋さんに……駄目、こんなのを言ったら二人の姉妹関係まで壊れちゃう)」

いま椋が幸希にいくらアピールした所で、暖簾に腕押しだろう。何処まで続いているかわからない綱を、暗闇の中でひたすら手繰り続けるのと変わらない。

なんとしても早まった行動をさせてはいけない。椋の状況は額に銃口を向けられて

いるのとなんら違いのないのだから。ただ一言、〃銃を持つ者にとつて打ちたくなるような言葉〃を言つてしまつたら最後、掠は拒絶の弾丸で打ち抜かれしまふ。そうなつた時、果たして彼女が立ち直るまでにどれぐらの涙を嵩増せばいいのだろう。

「駄目……どんなに考えてもわたしじゃ何も思いつかないっ」

所詮自分は部外者。この三角関係には入る事が出来ない。

なら、自分よりも近い関係にある誰かに伝えれば。しかし、それには非常に狭い条件が積み重なる。この町の住人である芽衣に、そんな交友関係などあるわけもない。

杏と掠の知り合いで、何より幸希と親しいかつ、秘密を絶対に漏らさないだろうという信頼をおける人物など――。

「あつ……！」

袋小路かと思われた道が一気に開けた。

目の前にいるのは誰だ？ あれは自分の家族だ、普段は乱暴で目立ちたがり屋ではあるが、こと真剣な事になれば真面目に受け止めてくれる、信頼できる人物だ。

「（お兄ちゃんなら、もしかして……）」

天啓のようにひらめいた案だったが、抵抗もあつた。

まずそこまでしてこの一件に首を突つ込んでみても良いのだろうか、という遠慮があつたのだ。それに掠はまだ告白をするつもりはないときっぱり言つていた。ならばここは

まだ静観していた方が得策なのでは。

「（それにまだ、榎原さんが本当に杏さんの事が好きなのか、確信があるわけでもないし……）」

結局のところ憶測でしかない。心の隅では間違いないと警鐘を鳴らしているが、浅慮によつて起こした行動が何を招くのか、それを恐れた芽衣は自分を誤魔化すしかなかった。

まだ中学生という年頃なら、むしろ賢い選択だと思うだろう。よつて、最終的に芽衣は幸希が本当の所、いったい誰が好きなのかを確信するまでは黙っていようと決めた。長考の末、やはりとるべき行動は幸希の事を探るといふ、最初に思ったものだった。

※

クレープ屋に行き、おもちゃ屋のおっさんとチャンバラごっこをしたり、ゲームセンターでプリクラを撮ったりと遊びまわった後、俺達はすっかり日が暮れた夕焼け空の下、帰路についていた。

思いつきで行動していたが、案外それでも何とかなった。行く場所に困れば杏や椋があそこに行きたいだのなんだのと、意見を言ってくれたおかげで必要以上に悩むことも

無かった。

芽衣も楽しかったのか、ゲームセンターで撮ったプリクラを見てにこにこしている。五人集まって一斉にとった集合写真みたいになっているが、彼女にとつてはそれでも良かったのだろう。どうしてか、俺だけ掠と二人で撮る羽目になったのはいまでも納得いかない。それなら俺は杏と一緒に撮影したかった。さりげなく肩を抱いたりして。

「日も暮れてきたし、そろそろ帰る？」

「そうだな、俺もこれからバイトに行かなくちゃならないし」

そろそろ稼いでおかないと。

俺の発言に、杏は意外そうな顔をしていた。

「学校は遅刻ばかりするクセに、バイトになるとホントあんたって真面目よね」

「バイトは金を貰ってるからな、遅刻したら減給になっちまうんだよ」

「なら学校だってお金払って通ってるんだから、勿体無いか思わないの？ そう考えれば結構遅刻することもないんじゃない？」

「そんな思考操作しなくなつて、最近は遅刻せずに行つてたぞ。お前の妹がそれを証明してくれる、なあ掠？」

「はい、お姉ちゃんが注意してから、榊原くん最近は遅刻しなかつたんですよ」

何がそんなに嬉しいのか、掠は笑顔でそう答えた。

杏はその掠の言葉に嘘がないと判断したのか、真偽を吟味するような難しい顔をしたかと思えば、一転して顔を綻ばせた。不覚にも、その表情に血が熱くなるのを感じた。「ま、ちゃんと来てるなら良いのよ。遅刻しないで行くのは、あんたの為でもあるんだからね。ただでさえ停学なんてくらって大変なんだから、卒業出来なくなったら掠が悲しむわよ」

「悲しむって……お姉ちゃんつ、そんな事言わなくても」

「掠を泣かせるような事だけは、しないでよ幸希？」

「……ああ、わかったよ」

俺と一緒に卒業したいって、暗にそう言っただよな杏は。まったく、妹を建前にしないで言えないなんて素直じゃないんだから。

頬が緩むのを感じてだらしない顔になってると思い、ばれないように顔を逸らすと、春原と芽衣が普通に仲良さそうにして歩いていった。

「これからどうする？ もう結構いい時間だけど」

春原の意見には同意出来る。確かにもうそろそろ時間的にも晩飯時と言っても差支えないだろう。

「暗くなってきたし、ここらで解散するか？ ちょうど分かれ道だし」

「そうね、あたしも晩御飯の準備しなくちゃいけないし、そろそろ帰りましょうか」

「芽衣ちゃん、今日も家に泊まっていますよね？」

「良いんですか？ 二日も連続で泊まっています」

そのつもりじゃなかったのか、芽衣は遠慮がちにそう言った。

人の良い棟の事だから、そんな事気にするまでもないだろう。現に、彼女は芽衣の言葉に慈愛のこもった笑みで答えた。

「勿論です、わたしは芽衣ちゃんが泊まってくれると嬉しいです」

「えへへ、それじゃあお言葉に甘えます。棟さん、杏さん、今夜もお世話になります」
今夜も芽衣は杏の家に一泊か。俺も女だったら遠慮する事無くお泊りを所望するんだが……。

分かれ道に差し掛かり、芽衣が春原に軽く挨拶をして杏達の方へと駆け寄って行った。

「それじゃあまた学校で。幸希は来週ね、今度はせめて喧嘩してもばれないようにしなさいよー」

「榎原さん、春原さん今日はありがとうございました」

「明日はわたしがそっちに行くから、ちゃんと待っていてよねお兄ちゃん」

別れを告げ三人は俺達に背を向けて帰って行った。こうしてみると、三姉妹に見えるくもない、仲睦まじさだった。芽衣の適応能力というか、人間社会に溶け込む能力は兄

貴なんかよりよっぽど優秀だった。

肝心の春原は妹の最後の言葉に「まったく、これじゃあ明日は昼まで寝れないじゃん」とか文句を垂れながら、しかし表情はどう見ても嫌そうには見えなかった。

「このシスコン」

「いきなり何言うんだよっ」

「違うのか？」

「違うに決まってるだろっ、まったく最近のお前、何かと僕に暴言とか暴行ばっかじゃない？　ちよつとそういうの控えろよ」

溜息を吐いたかと思えば、説教をしてきた。珍しく真剣な表情で。

「すまん、ドがつくほどのMのお前が喜んでくれるかと思つて」

「いつ僕がそんなこといったんっすかねえっ」

「前世で僕は君の奴隷でした、どうぞ思う存分痛めつけて下さいって入学当初に自己紹介してたじゃん」

「あつさり過去を捏造するなよっ！　それじゃあ僕が変態みたいじゃんか！」

いや、これを除いてもお前は十分に変態としての素養もあれば言動をしてるだろ。

岡崎からの話によれば坂上に因縁をつけた時には、男子トイレに誘い入れたり、おっぱいの貸し出しを要求したりと、色々セクハラをしまくっていたらしい。大体岡崎の陰

謀なのはわかるが、普通そんなのおかしいと思うだろ。

「まあ、待て。この話を聞けばお前も自分の性癖に納得がいくだろう」

「な、なんだよ……だから僕はMじゃないって」

「お前は俺と出会った時、前世で俺の奴隷でしかもドMだった記憶を思い出した。それは、衝撃だった。お前は自分の性癖に辟易して毎日苦悩していた」

話し始めると、春原は大人しくなつて話を聞き始めた。単純なのか、素直なのか……きつと馬鹿なんだろう。

「そしてある日、お前は気づいた。……そうだ、実際に叩かれてみればいいんだ。気持ち良くならなければ僕はMじゃない。そう思いついたお前は、俺に懇願してきた。

どうか、僕を殴ってください……と。そして……俺はこいつがMだと確信した。な、やっぱりお前はドMじゃん」

「なんでそこで終わるのさ！ 途中までまともに進んだかと思えば、お前が勝手に思い込んでただけじゃん！ というか、それも捏造だよっ」

「チツ、わかつたよ」

「舌打ちっ!?!」

春原で遊ぶのをやめて、俺はこいつの住んでる寮の方へと足を向けた。

途中、何処かの店で何か買って、春原の部屋でいつも通り深夜近くまで時間を潰すと

しよう。最終的に、泊まるかどうかはそれから決めよう。岡崎は死んでもそれだけではないっていつだったか言ってたけど。

夕焼け空がアスファルトや建物までも茜色に染める風景を眺めながら進む。すると、いつだったか学校をサボった日にオッサンと野球をした公園まで来ていた。反対側を見れば、この間あさりパンをただでくれた古河パンが建っている。

ちようどいいや、晩飯はパンで簡単に済ませよう。

「春原、先帰っててくれ。俺は晩飯かってくから」

「あいよ、そんじゃあな」

ドライに挨拶を交わして春原と別れた。

古河パンの前まで来る。今日はさつき見た公園にはガキ共がいなかったから、オッサンが店番してるだろうか。なににせよ、また古河の母親でも来てくれればタダでくれたら嬉しいのだが。

「こんちゃーつす」

ガラスの引き戸を開けて中に入ったが、店内には人が一人も居なかった。いいのか、こんな適当な営業で。よく潰れないこの店。

暫く誰かが出てくるのを待ってみたが、一向に出てくる様子がない。もしかし留守なのか？ いや、でも上からおっさんらしき声の雄叫びが聞こえるんだが……。

「おーい！ 誰か居ないのかー!？」

今度は二階にも届くような大きな声で呼びかけてみる。これで出てこなかったら、勝手に会計してパン持って行くぞ。野菜の無人販売みたいに。

声を掛ける事数秒、反応が無かったので仕方なく諦めようと思ったそのとき、ようやくオツサンが面倒そうな顔をして出てきた。仕事しろよ……。

「つたく、こつちやあ忙しいんだよ、おまちどう……つてなんだてめーかよ」

「てめつ、仕事もしないで客に文句を言うなつての」

「しゃあねえだろ、取り込み中だったんだよこつちも」

聞く耳持たないつて感じてオツサンは懐から取り出した煙草に火を点けた。なんだか俺が間違つてるような、そんな理不尽な雰囲気になりつつあるのを感じる。

「で、俺の邪魔をしてまで何しに来たんだ？」

完全に邪魔者になっていた。俺以上に傍若無人な人だこのオツサン。

言葉で何を言ってもしょうがないので、入口にあるパンを乗せるトレイとトングを持ってオツサンに見せつける。

「ご覧の通り……客だ」

「なんだよ、それなら早くそう言えよ。まあいい、好きなの買え……いや、お前にはこのパンがお勧めだ」

思い立ったように機敏な動きで、商品台の一角にあるパンが乗っているトレイごと持ってきた。ネームプレートには、シジミパンと書いてあった。

「前回のあさりパンよりグレード下がってないか？　これ」

「……訊くな。何も訊かずに、このパンを買っていけば良いんだよ」

「脅迫みてえだなそれ」

「今なら半額にしてやる、どうせ……いやなんでもねえ」

なにか嫌な予感がしたって感じで言い淀んだオッサンは、俺にトレイを渡すとレジにある椅子に座って何かを取り出した。気になって見てみると、それは見たことがある代物だった。

以前、初めて風子と出会った時に持っていた、俺も貰ったヒトデの彫刻の未完成品だった。

「オッサンまでそれもってる……というか作ってるのか？　いつからこの町はヒトデブームになったんだ」

「なんだ、お前も知ってるのかこれ。渚に頼まれたんだよ、作るの手伝ってくれって。可愛い娘の頼み事だ、断るわけにもいかねえだろ」

「その割には楽しそうに彫ってるのな」

「作り始めたら凝ってきてな。ちようど良いや、もう一人の小僧も上に居るからお前も

手伝つてけ」

そうか、岡崎が来てるのか。そういや昨日、古河の家に行くつて言つてたもんな。着々と仲を進展させてつてるんだなあ。二人。それなら様子を見ていくのも良いだろう。

「ま、良いや。それならお邪魔するぜ」

「おう、精々沢山作つてつてくれや」

「作つたらパンの値段割引にしてくれ」

「どうせこの時間じゃ売れ残るしな、好きにしろ」

よし、期待してなかつたけどこれで晩飯代が少し浮くぞ。

レジでヒトデ量産の作業をしているオッサンの横を通り過ぎ、靴を脱いで段差に気を付けながら暖簾をくぐる。と、その時オッサンが俺を呼び止めた。

「しつかしこの時間にパンを買いに来るとは、明日の朝飯にでもするのか？」

「いや、俺の晩飯だよ」

「家じゃ親が作つてくれないのか？」

「片親だからな、親は夜も仕事なんだよ」

夜も仕事というのは咄嗟に吐いた嘘だ。あの人仕事なんか出来るわけがない。

片親という単語に気を悪くしたのか、オッサンは啞えていた煙草を口から離して軽く

咳払いをした。

「そっか、そりゃ悪かった。親父さんは仕事が忙しいのか」

「……親父は居ないよ、居るのはお袋だけだ」

「そうか、それならまあ、お袋さんに土産でも包んでやるよ、帰りにでも持って行け」
「氣い遣わなくても良いよ、貰っていくけど」

不覚にも正直に言ってしまった事に、自分でも驚いた。そして居た堪れなくなつて俺は階段を上つて行つた。これ以上自分の事を訊かれて、家の事が浮き彫りになるのを恐れた。

「二つアドバイスしてやるよオッサン。ヒトデは模様を浮彫にするとよりリアルになるぞ」

「ほう、ちつと試してみるか」

ハードルが上がつた事がそんなに楽しいのか、声色が弾んでいた。

きつとあのオッサンに、俺の中に居る理想の父親像を思い浮かべてしまつたんだらう。

父親は中学の時に死んでしまった。今でも死んでせいせいしている。それほどに、俺にとつては最悪な父親でしかなかつた。

——だから、俺の家族はもう母親だけだ。

第十五回：定まり、変わる朝

夕焼けが顔を隠し始め、反対方向から夜が顔を表し始めた頃。

古河パンで晩飯を買いに来た俺は、紆余曲折あつて二階の居住区、居間にあるテーブルに前のめりになつて座っている。

左手には何処から持つてきたのか、四角い木片。利き手の右には彫刻刀を持つている。

集中していた意識を切らして顔を上げると、周りにはテーブルを囲うようにして古河家一同……いや、おっさんは抜きで。あと、面倒そうな顔で手の進む速度が遅い岡崎と、恐らくこの状況を作つた張本人だろう風子が熱心に作業をしている。

「(なんで、俺こんなになじんでるんだ?)」

この店に来たのはまだ二回目だ。しかも二階の生活空間には一度だつて来たことが無い。

娘の友達だ、という事だけでこんなにも簡単に男を上げるだろうか。俺が父親だつたら、連れてきた男の頭をサッカーボールにしてハットトリックを決めてる。

見るからに娘を溺愛していそうなあのおっさんの事だ、てつきり何かしら文句をつけ

るだろうと思つたが杞憂だつたようだ。

黙々と彫刻量産し続けていると、手が慣れてきたのか段々と速度が上がり、同時に精度も上がってきた。いつも色々な不意打ちグッズを手作りしている器用さが功を成したんだらう。

「おら、七つ目出来たぞ」

「凄いです榊原さん。こんなにも早く作れるなんて」

「器用な奴だな」

「流石は風子が認めた人です」

賛辞を受けるのは悪い気がしない。取り柄なんてサッカーぐらいしかなかった俺が、こうして褒められるつてのはなかなかいい気分だ。

調子に乗ってさらに量産するために作業に集中する。反復作業はあまり好きじゃないが、パンが安くなるならお安い御用だ。

「古河、そつちにある木を寄越してくれ」

「はいっ、どうぞ岡崎さん」

多分岡崎は古河は古河でも、古河渚の方に話しかけたんだらう。けど、実際に動いたのは母である古河早苗の方だった。にこやかな慈愛に満ちた笑顔で差し出している。

「いや、早苗さんじゃないんだけど……まあ良いか、ありがとうございます」

「どういたしまして」

「ちよつとまで岡崎」

手渡しで受け取った岡崎に向かって俺は提言する。

「なんだよ榊原、腹でも痛いのか？ トイレならあつちだぞ」

「違うから、あとさりげなく嘘教えるなよ、トイレはこっちにあるのを確認済みだ」

「犬みたいなのやつちやな。で、なんだよ？」

「なんで古河の母の事は早苗さん、って呼ぶのに、古河の事はそのまま苗字で呼んでるんだ？ 紛らわしいから古河の母の方が反応しちまったじゃないか」

古河家に居るんだ、このまま古河と苗字で呼んでいては何度このアホなやり取りを見る羽目になるのかわかったもんじやない。

俺が何を言いたいのか、察した様子の岡崎は照れくさそうに古河を一瞥して、視線に気が付いた古河もまた照れくさそうに頬を染めて俯いていた。もう付き合っちゃえよ、お前たち。

「いつまでも苗字で呼びあうなんて、他人行儀はよそうぜ岡崎。友達なら、仲睦まじい間柄ならっ……名前呼び合うのが一番じゃあないか?! なあ！ 風子もそう思うよな?!」

「……………」

駄目だ、トリップしてやがる。

自分で作った物で恍惚に浸る。これは例えるなら自分で描いたエロい漫画で、自分で………な事するのと変わらないんじゃないか。とんだ自給自足だぜ。

ツッコんだ話題に古河の身体が萎縮し、岡崎が手に持っていたヒトデをテーブルに音を立てて乱暴に置いた。

「まてまてまて！ どうしてそうなるつ、というか、お前楽しんでるだけだろ」

「だつてさー、こうして家にまで遊びに来て、名前も呼ばないで俺を糾弾とか………どれだけへタレなんだよお前」

「あア？ ……お、おまえなあ……」

「古河の母もそう思いませんか？ こいつ、娘とこんなに仲が良いのに名前前で呼んであげてないんですよ。あなた方が一生懸命、愛情をこめて付けた名前を！」

舞台役者のような大仰な素振りで俺は大袈裟に言ってみた。誰かが背中を押して突っ走らなくちゃ、いつまでも煮え切らない感じになるかもしれないから。

俺としては、一刻も早く岡崎に彼女が出来て安心したいのだ。空気が読めないと罵られようと、嫌でもこの二人を意識させなければならぬ。

「そうですねえ、確かに岡崎さんには渚の事を、ちゃんと渚と呼んで欲しいです。お願いできませんか？ 岡崎さん」

「お、お母さんっ?」

「恨むぞ、榊原……」

「あはははっ、超おもしろー」

さて、良い具合に場も温まってきた事だし、そろそろ更なる燃料投下をしてみるか。彫刻作業を中断して、古河の母に問い詰められている岡崎と、その隣であたふたしている古河を尻目に俺はその場から腰を上げた。そうして階段の方へと向かい、一階で煙草をふかしているだろうおっさんに聞こえるような声量でわざとらしく言ってみる。

「ああー! 岡崎が女と言う女を手籠めにしよう!」

「ぬああああにいいいいーっ!」

地鳴りがして階下を覗いてみると、憤怒の形相で駆けあがってくるおっさんの姿があった。この家族って、どいつもこいつも単純すぎないか?

高速で駆けあがってきたおっさんは、とっさに壁際に寄りかかって置物に擬態した俺に気が付くことなく岡崎達の居る居間へと向かって行った。

「てめえ、俺の女達に手え出すたあ、良い度胸してんじゃねえか!」

「誤解だっ! この状況の何処を見ればそう思えるんだよ、榊原の悪質な陰謀に決まってるだろっ!」

「失敬な、俺は事実を言ったまでだ」

「どこをどう見れば事実なんて言えんだ！」

事実だろ。というか予言みたいなものか。絶対にお前は古河と一緒になつてもらうってな。

言葉つてのは口にする力が宿るつて言われてる。それを昔は言霊とか言っていたが、俺はこれはあながち間違つてはいないと思つている。だって、こう言われれば相手は……古河渚は十中八九岡崎を意識するだろう。

友達が少ないだろう彼女は、恐らく岡崎が一番近い友人であり、一番近い距離に居る男性だ。あとはそれを焚き付けて意識する回数を増やせばいい。我ながら頭脳プレイだと思うぜ。

「小僧、本当に手え出してないんだらうな？」

「おっさんの目は節穴か？ どこからどうみても違うだろが」

「つてこたあなんだ、俺はお前に謀られたつて事か？」

じろりと鋭い目つきを俺に向けてくる。不良少年がそのまま大きくなったようなおっさんの眼光は、しかし敵意も悪意もこもつていそうには見えない。

「ちよいとしたりジョークだよアメリカカンジョークだ」

「……アメリカのコメディアンに謝れ」

「お父さん、岡崎さんは何も悪いことはしていませんっ」

「ちつ、渚に免じて今回は許してやろう。ただし、もし娘が欲しいってんなら力づくで奪うぐらいの気概を見せてみな！ つつても渡す気はねえがな！」

そう言うつてのけて豪快に笑し飛ばし、おっさんはそのまま居間に居座つた。この人の家だから俺がとやかく言う資格なんて欠片もありはしないが……店番しろよ。

俺の手にはもうすぐ八つ目が完成しようとしているヒトデがある。そもそも、何故こうして俺が風子のヒトデ量産計画を手伝っているのか。原因を説明するには時間を少しばかり遡る……必要なんて全くない。一言で言えば、巻き込まれた、だ。

春原との帰路の途上、古河パンで夕食をと思ひ立ち寄つてみるとどういふわけか風子が居たのだ。聞けば風子は、いまこの家に厄介になつて居るらしい。

ならばなぜこの場に岡崎が居るのかという疑問が浮かび上がったが、この事実事態に不満は一切ない。二人の仲が進展するのは俺としては望ましく、好ましい展開だからだ。どうやら岡崎は、俺が押し付けた風子が持つ願いの手伝いをさせられているらしい。

「何も訊かずに、言われるままに作業してたが、こんなにヒトデを作つてどうするんだ？」

「風子の姉貴が結婚するらしくてな、その式の招待状らしい」

「ヒトデが招待状？ その式はヒトデ祭りでも開催するつもりなのか？」

「なんですかヒトデ祭りというのは？ 風子、気になります！」

要らん事を言つてしまつたらしい。意図せずして問いかけた言葉は、風子の興味の琴線に触れたらしく好奇心を露にしてテーブルから身を乗り出した。

そう言えばそんな理由だったな。数日風子に会つてなかつたから完全に忘れていた。

「それはどういったお祭りなんですか、榊原さん？」

「古河まで……、こいつの言うことに一々耳を貸すな。訊くだけ無駄だぞ」

「そんな事はありませんつ、岡崎さんはヒトデ協会の方を見誤つています。きつとヒトデ祭りとは、とても——はあく……」

トリップしやがった。

しかし岡崎よ、折角俺がお膳立てをしてやったというのに、未だ古河渚のことを苗字で呼び続けるとは。ヘタレ也。

古河家の食卓を囲みながらの騒々しい喧騒は、どこか俺を隔絶させる温度を持つている。

“家族”という集団に傷痕を持つ者からしたら、笑顔の花咲く家庭というのは非常に居心地が悪い。このヘソの裏が痒くなるような感覚が嫉妬だというのはわかつてる。似たような傷を持つ岡崎にもこれを感じただろう。しかし、彼は今古河家と風子に囲まれ一緒に、ぎこちないながらも笑顔を浮かべている。

いい事だろう。友人の傷が癒えようとしているのだ。祝福すべき成果だ。

「(だけど……)」

そうは思つても、頭で理解をしても、心という実態のない臓器がキツく締め付けられる。

願つても得ることの出来ない物を、人はどうせ大した物ではないと、自分には必要ないと決めつける。すっぱい葡萄とはよく言うもので、例に漏れず今の俺もまたこの光景を、どこか安っぽいものだと思定している。酷く下らない、滑稽な人形劇を見ている気分であるよう自分を律している。

杏の想いを一身に注がれ、尚且つ間接的とはいえ家族の温かみを得る。

ああそうか……羨ましいんだ、俺は。

「悪いけど、俺はここらで失礼するぞ。晩飯を食わなくちゃならないからな」

「なんだ小僧、もう帰るのか？　もうすぐ早苗が作る飯が出来るんだ、食っていけよ。なあ早苗？」

「ええ是非、晩御飯がパンだけでは若い体には足りませんよ」

「いや俺は」

断ろうと座っていた尻を上げ中腰になったとき、おっさんが制するように手を差し出した。

「早苗の作ったパンじゃあ悲惨すぎて物悲しいだろうが、いいから食ってけ小僧——
——って、やべ」

まさか当の本人が居るこの場で口走るとは、なんて馬鹿なのだろうか。岡崎や古河はやつてしまったという顔をして俯いていた。

見ればおっさんの前のテーブルには缶ビールが転がっている。いつの間に飲んでたのか知らんが、原因は恐らくこれであろう。酒に酔って調子付いたおっさんは、頬を赤らめながら悲愴感漂う表情をしていた。

「わたしの……わたしのパンは——」

「ち、ちがうんだ早苗っ訊いてくれっ!」

「じゃっ、俺はこれで」

「あつテメツ、逃げるつもりかっ!」

「悲しみの象徴だったんですねえ——!」

非難の声を上げるおっさんの横をすり抜け、お決まりの如く早苗さんが階下へと走って行った。

以前ならここでおっさんが早苗さん特製のパンを口いっぱい頬張って追いかけるのだが、残念ながらここにはそのパンがない。いや、正確には「俺の」持っている早苗パンしかない。

周囲を素早く見回したおっさんは、俺の傍らに置いた袋に目を付けた。

「くそつ、俺は大好きだぁー……！」

しじみパンの入った袋を強奪し、豪快に頬張ったおっさんはそのままぐもった声で愛を叫びながら去っていった。

……俺のパン。

その日の晩、結局俺はそのまま春原の部屋へと戻り、手ぶらの俺を見た春原が訝しげな眼差しを向けてきたので目潰しをした。

バイト中、腹の虫がうるさくてしょうがなかった。

※

早朝の日差しを身に浴びながら、人通りの少ない道を歩くのは黒いベスト姿の幸希であつた。

夜から日が昇る朝方にまで彼のバイトは続き、その疲労と睡魔は十二分に高まつていた。高校生という身分上、十時以降のバイトはご法度であるのだが、幸希はそれを超過して働いている。

業種は夜中のみ営業している飲食店。昨晩はこの町では数少ない、オーセンティック

なバーでバーテンダーとして従事していた。労働時間を破っている上、酒を提供する店に勤めるのは当然ながら褒められるものではないが、幸希はそれを押し通している。

バーのマスターとは間接的な旧知の仲であり、彼の環境も苦悩も少なからず理解を置く人物であった。この立場を利用して、幸希は無理を言つて働かせてもらつていたのだ。

深夜手当が欲しかつた幸希からすれば毎日続けたいが、店の売り上げもそこまで良くはないため、給料も多くは支払えない。よつて、幸希が働くのは週に三日程度だった。なのでバーでのバイトがない日は、日払いの土木作業をして金を稼いだりしている。

「……眠い」

ほぼ丸一日眠っていないことになる幸希は、睡眠欲に勝てず眠たげな目をして歩いていた。どうせこの時間に外をうろつく人物など年老いた者しかいないだろう、という偏見によつてだるそうな風貌を隠そうともしていない。

店から徒歩で帰宅中。ふと、幸希は気まぐれに自分が通う高校の前を通り過ぎようと思ひ、進路を変更した。

早朝なので一般生徒が登校することはあまりないが、それでも部活動や委員会に席を置く生徒が登校することはある。道を変え学校が近づくと、そういった理由ある生徒の姿がちらほら見え始めた。

これから何時間も学校という牢獄の中で過ごすはめになる生徒たちを見ながら、幸希は頬を吊り上げた。

「はっ、朝早くからご苦労なこと。お前らがこれから汗水流す間、俺は惰眠を貪ってやるからな」

小さい男だった。

停学中の価値を底上げする為に彼は高校に立ち寄り、あまつさえ世間の目で見れば自分よりも真つ当な生徒たちを見下し、嘲ることで優位性と充実感を補填しているのだ。これだけでも彼の意地の悪さが見透かせる。

が、これを責める者は居ない。

聞こえていようと、一度牙を剥けばその代償は高くつと彼らは思っているからだ。朋也や陽平のような不良とは毛色が違うと思われている幸希は、突けば何をされるかわかったものではないからだ。その恐れが、幸希の言動を嗜める行為に制限をかける。だから斜に見続ける幸希を皆、一目もくれずに通り過ぎる。

「……なにやっつてんだか俺。アホらし、帰って寝るか」

己の行為に呆れ、幸希は踵を返した。間違つても彼は、常日頃からこういった惨めな行為をしているわけではない。今日はたまたま虫の居所が悪く、前日の不快な家族の有様を目の当たりにしたが故の苛立ちがそうさせたのだ。なら許されるかと問われれば、

あつさりとは肯定できるわけではない。

よつて、幸希の背後に立った彼女の告げる言葉は正当性を持つていよう。

「早朝に用のない生徒が、制服も着ずに登校。しかも関係の無い生徒への嘲笑にも等しい野次は関心出来ないな。遅刻しないのはせめてもの救いか」

「……………」

背中から投げつけられた棘のある言葉に、幸希はため息を一つ吐いて無言のまま振り返った。

声音は聞くからに女性のもの。しかも、不良というレッテルが張り付いた幸希に対してここまで堂々と、凛と言つてのけたのは日の光に反射して銀に煌く髪をした少女——坂上智代だった。

なぜこの時間、この場所で彼女で出会ってしまったのか。己の浅ましさを呪いつつ、幸希は睡魔にまどろんだ瞳のまま彼女を睨めつけた。並の男であれば一発で怯むであろう眼光を向けられ、それでも智代は毅然とした態度のまま相對する。

「榊原幸希……。お前の悪名はこの学校では大き過ぎる。悪戯に自分を貶めるような行為は控えたほうが懸命だぞ」

「そりゃ悪かった。だが、俺がどこで何をしようと俺の勝手だ。『他人の迷惑だから』なんて理由が俺に通用すると思つてんのか？ だとしたら大物だなお前は。みんなの為

に立ち上がる正義のヒーロー様ってわけだ。是非その愚直なまでの真っ直ぐさにあやかつて、俺も真つ当になりたいもんだ」

幸希の為を思つての提言だったのか、智代の不器用な気遣いを余計なお世話と受け取つた天の邪鬼は子供のような屁理屈を述べた。

他人を扱き下ろす事に置いては一家言を持つている幸希は、このまま相手が逆上して立ち去る事を望んだ。そうすれば余計な諍いは長続きしないし、何より今の機嫌ではどんな理由があろうと問答無用で攻撃的な言動になつてしまうのが自分でもわかつていたから。

目の前に伸びる桜並木の坂道。既に桜の花が散り始めているのを見ると、もう四月を後半に差し掛かっているのだと幸希も感慨深くなつた。

「お前……その性格では友人を作るのに苦労しないか？」

「俺以上に最悪な性格の春原や、言われるまで自分に向けられた好意に気が付かない鈍感な岡崎がいるからな。他にも年下のクセに年上みたいに感じる後輩とか、辞典を亜音速で投げる同級生とかいるぞ」

嫌味をもつともせず智代は、同じように皮肉で返答した。本人は涼しい顔で言つてのけたつもりだったのだろうが、幸希の目には皺を深くした眉間と、小刻みに震える拳が見えた。

どうやら逆鱗に僅かながら触れたらしい。即座に暴力に訴えるような事は流石にせず、理性を持って自制するところは何処かの金髪と大違いである。

感心しつつも幸希は仮称鉄の女の意図を探る。

何故こうまでして自分と会話を続けるのか、その意味を、価値を量るも重量は彼女のような人物が登校を中断してまで続ける理由に繋がらない。この時間に学校に居るという事は、彼女もまた部活動、または委員会やそれに属する何かの為に登校している筈。ならばここで幸希と会話を続けることはなんの身にもならない。

登校時間を延長して、自分の時間を削つてまでの雑談になんの意味があるのか。疑念を懐いた幸希の眉根がますます寄つていく。

「その屁理屈、少しは丸くなったと思つたが……口の悪さは何も変わっていないのだな」「……まるで俺とお前が前から知り合ひだったみたいなきさだな。悪いけど前世でとか、遙か太古の大戦時とか、そう言つた転生系の話しだつたら止してくれ。朝っぱらからぶつ飛んだ話に付き合うつもりは無いぞ」

そう言いつつも、幸希の中で渦巻く疑念を取り払う答えが、天啓のように降り立つた。信じたくはない天啓ではあるが、それなら彼女のこの頑なに別れようとしなない態度にも頷ける。

適当な事を言つて茶化した幸希であるが、実際のところ二人は昔に何度か出会つたこ

とのある間柄であった。

彼女自身は、始めは予感程度であつただろう違和感が今では確信に変わつていた。言
い切るような言動が、それを物語つていた。

ならば榊原幸希はどうするべきか。

坂上智代と昔の思い出話に花咲かすなんて筈もなく、だとしても幸希自身そう易々と
軽く話せる内容でもない。

昔話に登場する榊原幸希は、未だ藤林杏に恋をする前の自分であり、思い出せば顔か
ら火が出るほど恥ずかしい若気の至りに満ち満ちた出来事であるからだ。

「なにが言いたいのか知らんが、俺は眠いから帰るぞ」

「待つてくれ、どうしてそんなにわたしから避ける。昔の事なら別に気に——」

「——あのな、俺が此処まで知らんぷりしてるんだから、少しは察したらどうだ？ 思い
出話は嫌だと態度で示してるんだ、それを斟酌するぐらいお前にだつて出来るだろ」

ついに昔の事と言いつつ切った事に、幸希もしらを切ることを止めた。

過去について話すのは嫌だし、それを良く知る人物である智代はいわば黒歴史を綴つ
た日記のような存在で、出来ればあまり顔を合わせたくない。

だから遠ざけたつもりであつた。が……智代の狙いは、どうやら昔話をする事ではな
かつたようだ。何処か煮え切らない表情をしていた智代は、幸希の反論を耳にした途

端、重荷を降ろしたようにすつきりとした表情をしていた。

「そうか、ではやはりお前は『あの』榊原幸希なんだな」

「……ちつ、始めから確認だけが目的だったのかよ」

吐き捨てるように言い放った悪態を、智代は風を受け流すカーテンのように聞き流した。

「別にお前が望むなら思い出話も悪くないんだがな、どうしても嫌なら仕方ない。ただわたしは今のお前と、昔のお前がどうしても符合しなかったから確認したかったのだ」

「外見はそんなに変わってないだろうが」

「中身の話した。不満と傲慢を合わせ抱きながら怒りと暴力を振りまくだけだったお前が、こうも丸くなるとは思えなかったんだ。以前友人と共に笑っている姿を見たときは、驚きで目玉が飛び出しそうだった」

「大袈裟に言うなよ、どうせ顔には一切出していない鉄仮面のクセに」

「誰が鉄仮面だ、わたしは見た通りの乙女だぞ。少しはその口の悪さをどうにかしないのか」

意図せず智代の思い通りになってしまったのが悔しくて減らず口を叩いたが、それもあまり功を成さなかった。

嫌味が通用しないのではもう残されたのは逃亡しかない。本人確認が終わったのな

ら今すぐにでも幸希はこの場から立ち去りたかった。自ら足を運んでここまで来たが、それは早朝の内を通り過ぎる程度の時間しかないつもりだったからだ。時間も経過し、早朝とは言い難くなった今となっては、いつ教師に出会ってしまうかわかったものではない。

停学中の身である幸希が、敷地内に入ってはいないとはいえ学校前まで来ているのだ。教師が見れば即座に注意しに来るだろう。

「話は終わりだな。じゃあ俺は帰るぞ、眠いからな」

「何を言ってるんだ、これから授業が始まるんだぞ。わたしの目の前でサボる事は許さないぞ」

あつさりと別れを告げた幸希を、案の定智代は咎めた。

どうやら智代は柄にもなく彼が早朝から学校に登校しに来たのだと思っっているらしく、制服はどうしたと服装を指摘し始めた。

「その服はファッションなのか？ だとしても、学校には制服で来るものだ。校則にも、

学校指定の制服もしくは学校指定ジャージ以外の服装での登校を禁じている」

「校則もなにも、俺は停学中だから関係ない。だから別に帰ってもお前に責められる言われもない」

むしろ校門を通り抜ける事が今では注意の対象になっている。よって、幸希の言い分

は何も間違つてはいない。

まさか停学になつていゝとは思つてもみなかつた智代は、鼻を鳴らし胸を張る幸希に瞠若した。彼女が何を思い、何に對して目を見開いたのかは幸希の知るところではないが、道理を考えればそれはおのずと見えてくる。停学中であるならば、何故この学校前に居るのか、幸希のこれまでの性格を考えても面倒を嫌う彼がわざわざこんな時間に出歩くとは思えなかつたのだらう。現に臉は睡魔に耐えかねて何度かその重みに負けているし、時折目端に涙を浮かべながら欠伸を噛み殺していた。なのにどうして、それほど眠いにも関わらず外出しているのか。

「停学中ならどうして、この朝早くに出歩いてゐるんだ？」

「……別に、停学明けのボケを作らないように早起きしてただけだ」

坂上智代の言動を鑑みて、この理由であれば余計な詮索をさせず彼女は納得するだらうと思つての言葉であつた。

学校に真面目に通う殊勝さを見せれば、どこまでも真つ直ぐな智代はそれ以上の追求をしないだらう。それは彼女の性分であり、ある種の突き放した信頼によるものだと思われる。

結果から言つて、智代はあつさり目論見通り納得し幸希を見送つた。騙した手前、どうなるかと逡巡したが、それも幸希の杞憂に終わった。

「しつかりと自宅でも勉強するんだぞ」

「あーはいはい、しまうしまう」

「……？ まあいい、わたしもそろそろ行かなくては、じゃあ」

ようやく訪れた別れに幸希は無言で帰路に復帰した。既に時刻は通常の登校時間の少し前程になっており、真面目な生徒達の登校風景でいっぱいになっている。

自分とは逆方向の人の群に、真つ向から突き進む気も眠気のピークによつて失せ、人通りの少ない路地を通つて行く事にした。

智代がまさかここまで知恵を巡らせて幸希の証明をしたのであれば、今日の気まぐれはその隙を与えてしまった後悔で埋められてしまった。こんなことなら初めから真つ直ぐ家に変えれば良いものを、何故あんな下らないことの為に立ち寄つたのか、すつかりこれから訪れる惰眠の時間は憂鬱に変わりつつある。

「(起きちまった事をいつまで悔やんでもしょうがないか。ひとまず春原の部屋にでも行つて、夕方まで寝るとするか)」

気分的に自宅へと帰るのは気が向かなかつた。

ただでさえ冴えない気分にもかかわらず、更に精神を削られる家に帰るなら、春原の部屋で眠つた方がマシだと思つた。

途中、運命の悪戯で杏と奇跡的に出会わないかと願つたが、都合よくそうはいかな

かった。

※

その日は教室に飾ってある花瓶の水を交換しようと思ひ立つていつもより若干早めに家を出た。

姉の杏は用もなく朝早く起きる性質ではないため、着替えを終えて泊まっていた芽衣と共に家を出る時でも目覚めなかつた。遅刻をしないように、一応起こそうとしたし、今日は先に出る旨を伝えたから大丈夫だとは思ふが、また時間ぎりぎりになつて慌てバイクで登校するのはあまり賛成できるものではない。

もう少し、せめて姉が起きるまで出るのを遅らせようとも思つたが、一度出る準備を終えた手前そうもいかない。芽衣は兄を起こす為に寮へと向かうらしく、それなら一緒に出ようと提案した彼女が取り下げるのも悪いと思つたのだ。

悩んだ末、姉の意思を信賴して妹の椋は芽衣と共に家を出た。

彼女の目的地である学生寮は、高校からそう離れた場所ではなく途中までは同じだつた。だから道中は芽衣との会話に花が咲いた。芽衣は話上手で、巧みな話術と逃げを許さない質問攻めに、あつけなく色々と正直に話してしまつた。

「いつから榊原さんの事好きになつたんですか？ その理由は？ 告白するんでしたらその前にしつかり周りを見た方が良いですよ。大きいですねサイズはいくつなんですか？ 制服可愛いなあ、わたしもここに進学したいなあ」

「あ、あはは……」

芽衣のバイタリテイ溢れる積極性は、棕の欲したもので、学ぶところが沢山あつた。もしこれほど大胆になれたら、きつと幸希に思いを伝える事も、それが叶わずとも放課後に一緒に帰つたり、休日に二人つきりで遊ぶ事も出来ただろう。

希望的観測をすればするほど、棕は自分の至らなさを嘆きたくなつた。姉の影に潜んで、その威光にあやかつて幸希を願つた通りにするのは、喜ばしく思う反面痛ましい罪悪感が身を裂いた。

立ち返つてみれば棕はこれまで姉の氣遣いを理由に行動してきた。なにが悪いのだと居直られれば責める手立てを失うが、これは卑怯な行為だと気が付いて、逸らし続けた目を向けてしまった棕は言い訳を出来ない。この先も同じ手を使い続ける豪胆さも、一度認めてしまった卑劣さに耐えられる精神も持ち合わせていないから。

巷で卑怯者と侮蔑されている幸希は、今以上の、自分以外の沢山の人から悪辣さを批難されている。それでも平気な顔で好きなように、奔放であり続ける彼の隣に立つならもつと強くならなくては。

「いつまでもお姉ちゃんの後ろに居たら駄目だ。わたしは、自分で進んで榊原さんの隣に立たなきゃ……」

決意に至った原因は、幸希の停学が決まったと聞かされた時だった。あの時ほど積極性を渴望した時はなく、結果としてそれが椋を杏という巢から飛び立たせる一因となった。

姉にだって意中の人は居るのだ。いつまでもこのままでは、己の恋に臆病な彼女は告白などしないだろう。

だから、自分が先んじて……こんどは自分が指針となって姉の背中を押すのだ。

これまでの自分に内心で別れを告げた椋は、気が付けば学生寮との分かれ道に到着していた。

「この道を真っ直ぐに進めば、春原さんの住んでる学生寮に着くから、気を付けてね」

「はい、ありがとうございます。また学校が終わったら、一度ご挨拶しに行きますね」

元気よく挨拶し、椋が差した方へ向かって駆け出した芽衣を見送った。

通学路を歩いていると、ちらほらと生徒数がどんどん増えて行つた。というのももう少し歩けば学校に到着するからである。教室に到着したらまずは花瓶の水を交換しよう、そう予定立てていると、なにやら一際目立つ話し声が聞こえてきた。

声は二種類。一つは少女の声で、もう一方はよく聞く……いや、よく盗み聞いている声だった。

「榊原くん？ 停学中の筈じゃ……」

間違いないという確信と、そんな筈はという疑念が渦巻きながら椋は先を急いだ。

校門の前、対になってる柱の一方に声の主は立っていた。関係のない生徒たちが意図的に避けていたその場合は、不自然に空間が空いていた。

積極的に、自発的に行動しようと思心している椋は、彼の姿を見つけたらすぐに声を掛けようと小さく決意していた。が、それは彼の前に立つ少女を見て留まってしまうた。

「（あれは、たしか二年生に転校してきた……坂上さん？ どうして榊原くん……駄目、早合点しちやだめ、きつと注意されてるんだ）」

一瞬二人の関係を訝ったが、見る限りではそういった雰囲気を感じ取ることはなく、幸希が一方的に注意をされているように見えた事に椋は安堵した。

これまで彼を長く見続けていた結果に得た観察眼では、幸希の態度は警戒とうんざりしているように見えた。それは自分や姉と会話するときには一度も見せない顔で、だからこそ勘違いせずにすんだ。

恐らく何らかの理由で偶然通りがかった彼を、智代が見咎め注意しているのだろう

と、構図的にはそう見えた。

ここで彼らを見無視して校内に入るのもなにかと思い、棕はそのまま遠目に二人を見ていた。と、暫く経って二人は会話を終えて二手に分かれた。智代は校舎に向かい坂道を上り、幸希は逆に離れて行った。

何を話していたのか聞き取れなかったが、このとき棕の頭から教室の花瓶の事はすっかり抜け落ちていた。

自分から歩み寄らなくては、彼を射止める事は叶わない。

まだ羞恥心はあるし、何を話せばいいのか思いつかない。が、だからといってこのまま見送っては一生このままだと思ってしまう。

いつだったか杏が自分にした忠告を思い出した。あの時はうやむやになっていた言葉が、呪いのように脳裏にこびりついて離れない言葉が過ぎった。

——幸希、多分だけど好きな人いるわよ。

それが誰なのかは、わからない。確信を持ってこの人だ、と断定できる要素がまだ足りない。

だからこれは仮定でしかない。悪魔の証明ほど不可能なものではなく、突き詰めれば可能な仮定でしかない。

よって一言、すべてを変容させる魔法の言葉を唱えれば証明は出来る。ただその果て

に遂げる変化はある答えを出されたら、棕を含め、複数の人が辛く苦しい思いをするハメになってしまう。

だからいまはまだ、それを唱えるべきではない。まだ朝の挨拶をするだけで十分だと、棕は目を逸らして、幸希に向かって小走りに駆けだした。

第十六回：臆病な少女

まだまだ春の陽気が健在な暖かな風を身に受けながらスクーターのアクセルを更に開ける。

ぐん、と速度が上昇すると、同時にそれを咎めるように止まれと風当りが強くなり、眼球を晒したままの状態に耐えられず瞼を細める。薄目で前方を注視しながら走っていると、端から感情が高まったわけでもなく涙が風に晒され横に流れたのを感じて、ゴールも買えば良かったと思った。

スクーターに跨り駆ける少女は、次々に移り変わる景色を横目に、双子の妹にもう少し粘って起こしてくれてもいいのにと一方的な恨み言を溢した。というのも、彼女——藤林杏がこうして懲りずにスクーターに乗っているのには訳があった。

教室の花瓶を交換するから、今日はいつもより早く家を出るから、芽衣ちゃんも一緒に出るからね。いつもよりも深く微睡んでいた杏に向かって説明したのち、もう一言ちゃんと起きる旨を伝えて椋が家を出た後、杏は見事に二度寝をしてしまった。昨晩は前回と同じく、再び芽衣を交えての深夜にまで及ぶ女子会が繰り広げられ、会話に花咲き、お菓子も多く消費された。それはいい。まだ杏もよかった。問題はその後だった。

寢床についた杏は仰向けになって、ある事を考えていた。

議題は最近の幸希の行動と、その結果作用した環境の変化であった。

「な〜んか最近のあいっつっておかしいのよね……」

独り言は絶えず吹き荒ぶ風によってかき消された。

昨晩も考えていた幸希の不可解な行動の理由に思考を巡らせながら、心なしかアクセルを閉じてスピードを下げる。考え事をしながらの運転は、危険に繋がると思つての行動であつた。

不審に思い始めたのは最近の事であつた。それまでは気に留めなかつた幸希の行動は、いまにして思えばある一つの出来事に収束しているのだと、直観的に杏は感じたのである。幸希が変なのはいまに始まつたわけではないが。

疑念が浮上したのは停学が決まつた日の事だつた。昼休みの教室に姿を見せた古河渚と、岡崎朋也の仲の良さを感じ取つた杏はこれまでになかつた変化を身を持って味わつた。部活を毛嫌いし遠ざけ続けた朋也が、なぜ今になって再び関わり始めたのか。

ただ単に部活動に再び目を向けたのであれば、彼の進歩に杏も称賛したであろう。出会つた当初から部活動とは忌むべきものだど、どこか憧憬の色を混じらせて遠目に眺めていた彼が、今一度、一步を踏み出すというならそれはとても喜ばしい。商店街のコロッケを一つ奢つてもいいと思う程には喜ばしいことだ。が、そこに女の陰があれば話

は別である。

部活は部活でも、過去朋也が在籍していたバスケットボール部ではなく、あろうことに傍らで肩を小さくして小動物を思わせる愛嬌を持った古河渚の望む演劇部再建の為に立ち上がったのだ。その事實は寝耳に水で、たちどころに杏は称賛の声を嚙下した。

朋也に恋慕する杏からすれば、横槍を入れられたという焦燥を感じずにはいられない。しかも、二人の関係を固める助勢をしたのが、榊原幸希だったのだ。

『岡崎と渚ちゃん？ 僕はよく知らないけど、榊原は何かと岡崎に色々アドバイスしたり焚き付けたりしてたような』

『ふーん、そう……幸希が、ねえ』

『質問に答えたんだから、約束通り可愛い雌を紹介してよっ！』

鼻息を荒くしながら迫る陽平に、杏は慈愛の笑顔を浮かべて花を摘まんだ手を差し出した。

『……なに、これ？』

『見ればわかるでしょ、花よ、は、な』

『んなこたあ見ればわかるよ！ そうじゃなくて、可愛い雌を紹介するから質問に正直に答えると、そういうたのは杏だろ!? 女の子は!? どこなのさ、もしかして連絡先とか、この花がヒントとでもいうつもり!?』

『よく見なさい陽平、ほら、キュウリの雌花よ。幸村先生に頼んで、特別に譲ってもらったの』

『それがどうしたんだよ、そんな蘊蓄なんてどうでもいいから早く』

『可愛いでしょ、この雌』

『……………まさか、これ？』

『いまなら紹介するだけじゃなくて、譲っても良いわよ？』

『がああああああー！ 騙されたああああああー！』

そうして得た情報が、幸希の不可解な、らしくもない行動であった。

思いつきにしては成果が大きく、気まぐれにしては長続きしている幸希の行動は、杏の目から見てただ面白いからという理由だけではないと思えた。朋也だけではなくあの三人皆が部活には苦い思い出があるにもかかわらず、あえてその地雷を踏み抜いてまでの遊びであるはずがない。なにか、自分が思いもよらぬ企みがあつての事ではないか、と杏は考えている。

昨晩はそれを考え続けたせいで夜更かしをしてしまった。だから、いま杏は寝坊をしてスクーターに乗っているのだ。

「ああ〜もうつ最悪、まさか一時間目を丸々睡眠で潰しちゃうなんてつ。それもこれも幸希のせいだわ！」

諸々の失敗や憤りを、全てここに居ない幸希のせいにして杏はスピードを上げる。残像が連続していた景色が、一本の線状になりつつあった瞬間、身を揺るがす衝撃が全身を走った。

前に進もうとする力が突然留まり、慣性に流され杏の身体はスクーターから投げ出され中を舞っていた。視点の高くなつた景色を見て、ようやく杏は自分が事故を起こして浮遊しているのだと把握した。これまで何度も人身事故を起こしてきた杏であるが、それでもこれほどの事故は初めてだった。主観から目測するに二メートル以上は地面から離れている。

そうか、いま自分は事故ってしまったのか。と他人事のように杏は緩やかに考えながら、被害者の姿を探した。これほどの衝突ならば、きつと冗談じゃ済まないだろうと内心で謝罪しながらその姿を見つけた。

「良かった、ギリギリで避けたみたい。あたしがぶつけたのはガードレールだったんだ……っていうか、あれ朋也じゃないっ」

横倒しになったスクーターの近くで尻もちをついていたのは、杏が良く知り、またよく撥ねる相手であった。

景色がスローモーションに流れていく中、朋也と視線が合わさり、その瞳が大きく見開いた。このまま落ちれば軽い打ち身程度では済まないだろうと、己の身体が重力に引

かれ降下していくのを感じながら、杏はいずれ来る衝撃に身を固め瞼を閉じた。

——しばらくして衝撃は思いの外、柔らかいものだと感じた。

「……あれ？」

痛みがない事を疑問に思い瞼を開けると、視界は広大に広がる大地ではなく空を見上げていた。

アスファルトの匂いも、焼けるような痛みも、つんと鼻を衝く血の臭いもしない。これは一体どういう事だろうと、杏は状況を把握せんがために周囲を見回した。痛むだろうと思っていた首が上手く廻ると思ったとき、以外な声が頭上から聞こえてきた。

「ふっ、これぞラブコメにおける主人公体質の一つ。絶好のタイミングでの救出劇っ！
なんとという僥・倖！ 世界も捨てたもんじゃないぜっ！ ありがとう、お姫様抱っこ
という言葉を生んだ人！」

喧しく思う程の音量で、謳うように大仰に語る声に驚き視線を向けると、そこには見知った知人であり——さつきまで自分の不都合の原因を全て擲った対象が居た。どう
いうわけか感涙しながら。

「えつと……幸希、よね？」

「おうともさ杏よ！ 如何にも俺様は榊原さん家の幸希様であるぞ。さあ感謝せよ、我
を崇め、崇拜しなくていいから桃色な展開を色々見返りに進呈してくれ」

妙に高いテンションの幸希に、怒涛のように流れ込む情報に溺れ思考が追いつかない杏は目を点にして固まった。幸希が何を言っているのかも、いまは理解できない。

つまりどういう事だろうか、一体全体何がどうなつてこうなつたのか。どうして自分は無事だったのか。そもそもどうして幸希がここに居るのか。考えれば考え程に杏の思考回路は熱を上げ、次第に視界にまで影響を及ぼし始めた。太陽光が眩しいのか、思考と本能が分離するほどの熱量を生成したせいなのか、視界が白く色を覆い尽くし始めたと同時に。臀部に這い寄る不快感が杏を襲った。

意思を無視した声が、勝手に発し、体が自動化して単一の行動をとり始めた。つまるどころ、成敗である。

「いいから、降ろせー！ー！ー！」

「アイマムツ！」

超空間より召喚した辞典による打撃攻撃。筋力に頼つた暴風を生み出す暴力の塊は、頬をだらしなく緩ませた悪漢の横つ面目掛け激突した。

一瞬の内に全身の骨を粉碎する悪魔のような攻撃力を持った辞典を、避ける間もなく一身に受けた幸希は、歓喜の声を上げながら重力を無視して真横へと飛翔した。暫く弾丸飛行を遂げた人体は、山の斜面に激突し二本の足を土から生やした世にも珍しい植物となつた。

※

杏が落ち着きを取戻し、朋也が倒れたスクーターを起こし、幸希が植物から人間へのクラスチェンジを果たした後、一同が寄り集まり顔を突き合わせた後、一帯には妙な空気が漂っていた。

幸希の不可解さに冷静さを欠いた杏が事故を起こし、朋也が被害者になりかけ、大怪我を負いそうになった杏を、一連の原因にされていた幸希が助けた。この奇跡的な連続性は過ぎ去り、日常へと回帰したはいいが、杏を含め誰もが第一声は何を言えば良いのか迷っていた。

今になってようやくと事態を把握しきった杏は、まず助けてくれた幸希に感謝をしなければならぬ。そうは思っているのだが、その後の暴挙がフラッシュバックしてしまいうどうにも切り出せない。

どうにか現状を打開してくれる者はいないかと、朋也の方に視線をやると、彼は苦々しい顔を杏の視界の外へと向けていた。一体何を見ているのか気になり見れば、そこには恍惚の表情を浮かべトリップしている幸希が立っていた。

「げっ……いー」

幸希からすれば恍惚なのだろう表情は、残念な事に杏視点では不快を催す形相であった。

ハの字に広がった眉に、福笑いのような三日月に歪み細くなった目に、何事かを小声でつぶやき続ける口——により不快を感じたのは、腰の辺りにちようど花嫁を抱きすくめるようにして置いて置いている手であった。掌を天に向けながら、その五指が節足動物のように蠢いているのだ。これはきつと、幸希に恋慕している掠であつても一度は引く光景であろう。

何が彼をそうさせているのか。答えは考えるまでもないが、それを杏は予想すらしない。

「はあ……なんだこれ」

ここにきてようやくやく意味を持った言語を発したのは朋也だった。彼はどこか違う世界へと精神が旅立った幸希を見て、呆れたように額に手を当てかぶりを振った。

状況を嘆いた朋也の言は、杏も同意出来る。まさしく、なんだこれである。本来なら真面目に経緯を話し、謝罪し、感謝すればいいだけ。たつたそれだけなのである。なのに、幸希の変貌の威力に中てられそれが全うできない。

「なんかもう、あたし疲れたわ……」

「奇遇だな、俺もだ」

諦念にも似た感情を溜息と共に吐き出し、二人は未だ旅人となつてゐる幸希を一瞥した。

「どうする？ ーいっつ」

言うまでもなく、どうやって処置するかを杏は問いかける。

意見を求められた朋也は、難しい顔をして束の間、よしつ、と発して杏に告げた。

「もう一発かませば治るんじゃないかねえか、多分」

「そうね、そうするわ」

迷う余地は一切なかった。自分の一撃によつてこうなつたのであれば、もう一度繰り返せば元に戻るだろう。なるほど、思いつきにしては納得のいく提案である。それならば善は急げ、幸希を救う手段であるためこれは善行だと判じて杏は辞典を振りかぶる。

——狙うは二ヶ所。不快な面と、不愉快な手つきを二ヶ所。

壊れたテレビのように単一の音と映像しか映さない幸希に向かって、両手を大きく後ろに伸ばし、腰を仰げ反らせ、肩を起点に大きく半円を描いて頭上を通つて辞典が投擲される。その速度は、三メートルにも満たない近距離で亜音速へと達し、瞬く間に幸希の顔面を粉碎し手を歪なオブジェへと変質させた。

衝突の瞬間、キュツ、と短い悲鳴が聞こえたが、聞き入れた時には既に発声源は遠い山肌に再び突き刺さつていた。

「とうか、なんであいつが居たのよ」

「俺が知るかよ。あいつの奇天烈さは今に始まったことじゃないだろうに、今更頭を抱えたつてもう遅いぞ」

「人類としての限界を越えてるとしか思えないわ」

「そりゃ、俺からしたらお前も同類だぞ」

聞き捨てならない言葉が聞こえたが、杏は黙殺する事にした。彼女は一応、朋也を轢きかけた暫定加害者なのだから。

願わくばこのまま有耶無耶に終わってほしい所であるが、それも幸希が正常に復活を遂げた事によって泡と消えた。何事も無かったかのように、体中に付着した土を払落しながら歩み寄ってきた。

「つたく危ねえな杏、バイクに乗るならボーっとしてちゃ駄目だろうが」

「なんでだろう……確かに悪いのはあたしなのに、この素直に謝ったら負けな気分。ダイエツト中にふくよかな女の子から“自制心が足りないのよ”なんて言われた時の気分似てるわ」

「言いたい事はある程度分かるが、それ似てるだけで意味合いはかなり違ってくるぞ」

助けてくれた幸希には感謝すべきなのはわかつてる。しかし、杏の中でいまこの男に謝罪をすれば、事あるごとに引き合いに出されるだろう。そう、弱みを……借りを作

る事になってしまうのだ。よりにもよって幸希に対して命の恩人なんて莫大な借金を。

一生の不覚に杏は齒噛み、苦悩した——瞬間だった。天啓が降り立ったのは。

雷光の如き速度で被雷したそれは、杏にとつて一発逆転の切り札になりえるものだった。上手く行けば、彼の方が大きな負債を背負う事になる、悪魔のような手であった。

「ねえ幸希……あんた、あたしのお尻触ったでしょ」

「——ツ!?!」

「お前それ、普通に駄目だろ」

付き物の取れた爽やかな賢者のような態度が一転、パグのようにしわくちやに皺の寄った渋面になって幸希は押し黙った。ばれてないとも思つたのだろうか、額に滝のような汗を流しているのを杏は見逃さなかつた。

偶然臀部を触れたのであれば、杏とて鬼ではない、とっさに彼女を助けるための不可抗力であれば見逃しもした。だが、それだけにとどまらなかつたのが、幸希の落ち度、いわば墓穴なのである。沈黙を守りとおす幸希に、すかさず杏は追撃をかます。

「それだけじゃなく、あまつさえ揉んだでしょ」

「……………知らない」

「知らないじゃないわよ! あたしのお尻揉んどいてしらを切るなんて、お天道様が許してもあたしは許さないわよ!?!」

「……………存じ上げません」

「丁寧に言っても駄目っ！」

言い逃れなど許さず杏はじりじりと詰め寄る。

電車内での痴漢を咎められ退路を失ったような幸希を見てみると、哀れに思いつつ自業自得であろうと、それまで傍観していた朋也は口を挟もうとして開いた口を再び閉じた。

よりにもよって朋也の目の前で痴漢行為をされるとは、杏は今にしてその重大性を理解して赤面した。好意を寄せる人物の前で、他の男に身体を触れられた。覆しようのない事実にも、もう一度幸希を折檻しようとも考えたが、思ったほど自分がそれほど怒り狂っていない事に気がつきいったんは止めることにした。

なぜ、普通なら警察に突き出してもおかしくない被害を被ったのに、それに見合う怒りが湧き上がらないのか。二度の折檻によってある程度怒りを消費したからなのか、それとも、また別の？

榊原幸希とは一年前からの、朋也たちと同時期に知り合った友人である。二年生に進級したあの時期、杏の周りにいた同級生たちは皆、受験を見据えて生活の遊びを勉強に振り、次第に疎遠になっていった。受験が大切なのはよくわかるが、それでも自分とは何かがズレていると思っていた矢先に同じクラスの三人が目に入ったのだ。

その頃から既に不良として忌避されていた三人は、話してみれば随分と愉快な人物たちであった。腰掛け程度の顔見知りだが、いつの間にかやら友人として確立していたのだ。あげく、その内の一人に恋し、恋されるとは杏も思ってもみなかっただろう。

過去を振り返って気が付いた。杏は幸希との友人関係に居心地の良さを感じていたのだ。いつだって自分に大きな被害をもたらさない彼は、暴君のような振る舞いとは裏腹に、杏の前ではただの愉快なピエロであり続けた。それが杏にとつては居心地がよく、出来る事なら捨て置くことなんてしたくない、大切な場所なのだと思いが付いた。

「今回の事だって、あたしを助ける為だったわけだし……うーん、仕方ない」

恩人と痴漢の、彼女の中にある諸々の価値観を混ぜ合わせてつり合いがとれていた天秤が、ここにきて恩人に傾いた。

何はともあれ、幸希は杏を救ったのだ。彼女はまだその事についてまだ感謝をしていない。ただ一言、ありがとも言えない自分がいたとは、己の恥知らずさで燃え尽きそうだ。

「幸希……」

「ハッ、なんでしようかゴッド」

水に流そう。そう決めた途端に、足元に跪く幸希を見下ろしていると、その気も削がれていく。何処までも真面目に対応するつもりが無い彼に、だけど怒りは湧かず、常と

なっている日常を垣間見て心穏やかな気分になるのを杏は感じた。

「……ありがとうね」

「おう」

「ま、今回はこれに免じて許してあげるわ。こんな所で殺人犯になっちゃったら、二つの意味で掠に泣かれちゃうわ。でも、次は無いんだからね、わかった？」

「……存じ上げません」

「丁寧に言っても駄目っ！」

「俺、もう学校行っても良いか？」

※

一悶着が落ち着いた後、杏はスクーターをいつもの隠し場所に留めて校舎に入っていた。

それまでの事を思い返すと頭が痛くなる杏であったが、それを顔には出さずに自分の教室へ入った。クラスメイトが遅刻の理由を、好奇心のみで訪ねてきたり、クラス委員としての仕事を頼まれたりと、きて早々忙しくなった彼女の回りは人の渦のようになっていた。

珍しくもない。杏は持ち前の男勝りな性格が故、人当たりが良く、不良にも臆さずものをいう事が出来ると思われている。頼りにされるのには慣れていた。

遅刻によって生まれた遅れを消化し一息吐いた所で、杏は妹がいるD組に顔を出そうかなと考えた——のだが、登校途中に幸希から得た判断要素と、朋也から聞き出した判断材料を思い出し、足が思わず止まってしまった。

無罪放免の沙汰を下した後、杏は現在進行形で遅刻を更新し続けているのを承知で、色々と気になっていた事柄を幸希に質問することにした。とは言っても、その場には朋也も同席していた為、彼と渚の関係を直截的に尋ねるのは気が引けた。

『最近のあんた、なんか色々とは合わない画策とかしてない?』

『ん? 何の事だそりゃ』

まどろっこしい言い回しを嫌い、単刀直入に、しかしぼかしつつ問うたが、幸希の返答は恍けた様子もなく本当に意味が理解できないといった具合のボケ具合だった。

学校内で一番付き合いが長い陽平でも、幸希の考えることは理解出来ないのだから、いまこの男が何を考えているのか探るのを諦めていた。幸希が駄目ならば、朋也に聞けばいいのだ。肝心要の部分は包み隠して……。

『あそ、まあいいわ。じゃあ朋也、なにか最近幸希に色々押し付けられたり、提案されたりしたことある?』

『そのぐらい、いつもされてるのはお前も知ってるだろう。なんで改めて苦労話をせにやならんのだ』

『い・い・か・ら』

余計な時間は食いたくないのだ。説明は簡潔に、わかりやすかつ彼女が求めた内容を的確に答えてくれるとちょうど良い。

杏の目に映らない場所で、誰かが息を呑んだような音が聞こえた気がした。

『そうだな……ま、最近だったら殆どが古河絡みだな。風子を押し付けたり……失敗したと思った時とか、この間飯に誘わされたり。あれ、よく考えたら俺、色々と面倒事やらされてないか?』

『演劇部復帰を手伝ってるのも、幸希に唆されたから?』

いまの言葉で十分わかった。しかし、この質問は果たして今の杏に必要な疑問なのだろうか。

幸希の画策を探るといふ理由で証言を求めた朋也に、答えられれば決定的なものを出き付けられる質問を、いましてもいいのだろうか。会話の流れで言ってしまった事に気が付き、杏は己の迂闊さを呪いたくなった。ここで“自分の判断”で助勢しているとわかってしまったら、平静を保つなんて難しい。

聞きたくない。でも、やっぱいいいなんて言つて、意味深にとられるのも嫌だ。まだ

自分は気楽な片思いをしたままでありたい。

変化してしまう環境が、どうしようもなく怖いのだ。

今更どうにも出来ない杏は、耳を塞ぐ代わりに瞼を閉じて世界との関わりを遮断した

——その時だった。

『岡崎、お前今日は早く学校行った方が良いでしょう』

『は？ 突然なに言ってるんだお前？』

思わぬところから援護射撃が飛んできた。

『春原が、今日という今日はこれまで岡崎に僕の怖さを教えてやる、とか息巻いてたぞ。

あの蟻程度の脳みそしか持つてない奴が何するか知らんけど、何であろうとお前には損

しかない事すると思うぞ。あいつ馬鹿だし』

『やべえ……言えてるとしか答えられない。クソツ！ 悪いが杏、俺は先に学校に行か

なきゃならんらしい、話なら後で聞くらわ！ じゃあな！』

『え？ あ、う、うん。じゃあね』

あつけに取られている内に朋也は固い表情をして学校へと走って行った。

正直、助かったと思つた。あのまま答えを聞いてしまえばきつと、杏の中で何かが変

わつてしまった予感がしていた。朋也の答えがどちらにせよ。

本心では否定して欲しかった。朋也の事が好きな杏にしてみれば、他の女子と仲良く

している様を見ているのは胸が痛む。相手の女子を恨んでしまえば痛みも和らぐのかもしれないが、その相手は悪し様に言おうとしても、その要素が見当たらないほどに純粹な子であつた。

古河渚は、間違ひなく杏にとつて友達になりたいと思える程可愛く、恨み辛み妬み嫉みとは無縁の足跡一つない新雪のような存在なのだ。だから杏は、彼女を恨むという安易な道を歩めない。それに、安易に妬みの道を行くのはみつともないという気持ちもある。何処までも彼女は己に厳しさを強いるのだ。

だから幸希の援護には感謝したかつた。が、面と向かつてそれを言つてしまえば意味がない。悟られまいと苦悩していたのに、悟らせるような言動をしては本末転倒だ。幾重にもオブラートに包んで、遠回しに伝える事にする。

『いまの、陽平のちっちゃな野望は本当の話なの？』

『嘘に決まつてるだろ。先祖代々小物の小物による小物のための人生を積み重ねてきたあいつが、そう簡単に遺伝子レベルで逆らうわけないだろ』

『そうよね、陽平じゃ何をどう頑張ろうと不可能よね。じゃあ、何の為にあんな嘘を吐いたのよ、また思いつき？ 面白そうだから？ だとしたらあんたって、本当に快樂主義のケでもあるんじゃない？』

『決まつてるだろ、お前が困つた顔してたからだよ』

だから手助けをした。そう優しく、なんてことの無いように断言した幸希に、杏は声が出なかった。

いつの頃からか、幸希は度々こういった「ワザとらしい」キメ顔で、決め台詞を言うようになった。おそらく本人は格好つけているつもりなのだろうが、普段の生活態度を良く知る杏からして見れば滑稽の二文字に収まってしまふ。

あからさま過ぎるから、それが嘘に決まっていると杏は決めつけているのだ。だから安心して杏は、いつものようにキツイ言葉を浴びせられる。

『そういうのは掠に向かってやりなさい。あたしにしてどうすんのよこの朴念仁』
『……………あい』

こうして振り返ると、朋也の弁を信ずるならやはり幸希は彼に何かをさせようとしていると思えた。

古河渚と岡崎朋也をどうにかしようとしているのだろうか。だとしたら、杏にとつてそれは非常に都合が悪い。否定する材料が欲しいが、この線で考えるのが一番可能性が高いのだ。突然朋也の隣に現れた渚の姿、今はまだ一度しか顔合わせをしていないが、朋也にしては珍しく特定の人物と長く付き合っている。

渚にカマかけでもして確かめるか。想う故に思案していたが、杏は自分にそんな勇気が無いことを良く知っていた。己の事になると臆病なのが自分だと、わかっていて直そ

うとしないのはそんな勇氣すらないからだ。

よつて今はこの件については保留しようとした。幸希の行動は怪しいが、だからといって自分に何が出来るというわけでもない。彼の人柄を考えれば、杏にとつて最悪の結果をもたらすとは思えないという——信頼からの保留だった。

自分の事よりも、まずは双子の妹の恋を成就させるのが先決だ。どこまでも自分らしく杏は席を立てて椋が居るだろう教室へと向かった。きつと、椋は幸希の姿がなくて気落ちしているに違いない。想像するとその光景が鮮明に脳裏に浮かび、思わず杏は微笑みを溢した。

椋のクラスはD組であり、杏はその隣のE組だ。よつて教室は隣で、移動にはさして時間を要しなかった。

「椋ー？」

引き戸の扉を開け、妹の姿を探す——までもなく彼女は自分の席について、クラスメイト達にせがまれるまま占いをしていた。

椋の占いはトランプ占いという非常に奇怪な代物である。また、椋の占い方法はその都度変化し続ける。扇状に広げたトランプから一枚取らせたかと思えば、次の相手には真剣衰弱をさせたり、カードシャッフルの最中で落としてしまった時に表になったカードで占つたりと、その種類は多種多様存在している。占い師の彼女曰く、乙女のイン

スピレーションらしい。

占い中であれば終わるのを待とうとして、杏は陽平でも弄って時間を潰そうとしたが、不在だった。まだ学校に来ていないのだろうか、朋也の席も見れば姿は見当たらない。

手持無沙汰になり教室の壁に身を預けて数分、女子の列がはけて解放された椋がやってきた。

「待たせてごめんねお姉ちゃん」

「いいのよ、久しぶりに椋が占いしてる所を見られたし」

「そういえば最近は余りやらなかったね。それで、どうかしたの？」

「晴れやかな表情で答える椋に、これまでなかった自身が芽生えたように見え、杏は一瞬だけあつげにとられた。

「特に理由はないんだけどね、今日学校に行く途中で幸希を見たから、椋に知らせようと思つてね」

「それならわたしも、今朝偶然に榊原くと会つたんだよ」

「なんの偶然か、椋もまた幸希と顔を合わせていたらしい。となると、杏が幸希と出会つたのは、既に椋と別れた後という事になる。

それなら言つてくれればいいのに、と内心で独りごちたが杏にそれを伝える義務など

当然幸希には存在しない。聞かれなかったから。そう言われれば何も言い返すことが出来ない。ただ単純に杏がこの事を秘匿されていたのを気に入らなかっただけなのだ。棕についてのことなら、その場でなにか入れ知恵を出来たやもしれない。みすみす逃したのを惜しく思いながら、杏は棕の話に耳を傾けた。

「どうしてなのかわからないんだけど、朝学校に行ったら、校門で坂上さんと何か話して……その後、頑張って話しかけたの。おはようございますって……」

「って、それ朝の挨拶だけじゃない」

「うん。でもわたし、その後沢山榊原くんとお話したんだ」

満ち足りたように語る棕に、良い方へと変化し始めた杏は感じた。

「なんか変わったね……棕」

心からの感想であり、称賛であった。自身の無いが故に奥手で引つ込み思案。他人の頼みごとを断れず、苦笑いの奥で涙を流す彼女が、今やそれらを霞ませる強さを見せている。

杏の後ろにいた彼女が、もう杏という建前を必要としなくなった。籠を巣立った小鳥は、しみじみと漏らした杏の言葉に笑顔で答えた。

「いつまでも立ち止まったままじゃ、何も変えられないと思ったから。だからわたしは、変わろうって……そう思ったの。ねえ、お姉ちゃんは……」

前向きに物事を考える言葉は杏を安堵させるが、語尾にとつてつけられた己に対する言葉は……。

「お姉ちゃんは……自分の事だけを頑張ってもいいと思うよ」

「棕……それは」

自分の事だけを。姉を氣遣つての言葉であろう棕のそれは、杏にとつては突き放されたと思つてしまう程の衝撃であつた。

どこか棕の恋路にのみ従事し、お節介を続ける事に安心感を持つていた。朋也の事は変わらず淀まず好きであるが、好きという気持ちと向き合うのが怖かつた。一度春の平原から、冬の山脈に放り出されるようで身体が凍てついて思うように動かなくなるのだ。だから杏は自らに「棕の恋が先決」という都合の良い、面の良い免罪符を張り付けたのだ。

何も困る事はない。これまではそう思つていた。

だが、朋也の隣に渚という少女が居つくようになった。朋也もまたそれを受け入れている。棕はこの二人の危うさを察知して杏を氣遣つたのだろう。杏とて二人の關係には焦燥感を感じていた。だから幸希に問い詰めたり、朋也に詰め寄つたりして事実確認をしたのだ。

つい先ほどまで、幸希を信頼して保留にしたが、棕はそれを知らないし教えるつもり

も無かった。この状況は非常にややこしく、憶測でしかないのだから。

「あ、あたしの事はあんたの後でいいのよ後でっ。それよりほらっ、あと数日はあいつ学校に来ないんだから、こうなったらどうかして自宅を調べて、多少は成長した料理スキルを——」

「お姉ちゃんがこれまで提案したことは、全部自分で頑張ってみるから、だからお姉ちゃん……」

「いいからお姉ちゃんに任せなつて、絶対あいつをその気にさせてやるんだから。じゃあそろそろ休み時間終わるし、もう行くね」

逃げるように杏は教室を後にした。

間違いなく棕は杏を心配して、思いやりからの提案だった。それは一重に姉に対するこれまでの感謝の意からの、純粋な提案で、いつまでもこのままではいられないと予感した棕との決別でもあった。

棕が自信を付け積極性を獲得しつつあるのは喜ばしい。だが彼女の求めたモノは杏から離れる事で初めて得られるという事が、杏を悩ませる。棕が姉をあてにしていたのと同じく、杏もまた妹を隠れ蓑にしていたのだから。

「うまくいかない……」

ままならない。姉妹揃って面倒な恋をしている。もつとも、面倒にしているのは彼女

らの煮え切らない態度も一因しているのだが。

これまで姉に隠れて思うようにアピールが出来なかつた椋。

これから妹を理由に自分の恋から逃げる事が出来なくなつた杏。

今日まで姉に助力を求めた妹はもう居ない。

今日から妹を理由に求めた姉が姿を見せる。

それもこれも、幸希が画策したと思われる行動が起因している。

「(一体なに考えてんのよあいつ。もう、わけわかんないわよ)」

ある種均衡を保っていた関係が、いまにしてバランスを崩し始めた。

あるいは始めから、一風吹けば崩れる脆い牙城だったのかもしれない。

杏に椋の弱さを責める事は出来ない。彼女もまた、弱いことから。

独り廊下を歩きながら、杏は幸希の停学が解ける日数を指折り数えていた。

第十七回：初めての……

「もう幸希さんっ、ちゃんと食べた容器は水で流してから捨ててください」

「すまん、ここなら別にいいかなーって」

「駄目ですよ、わたしが居るんですからゴミを見過ごす事なんて許しませんっ」

「じゃあこの部屋に二年以上住み着く、大きなゴミを処分……」

「人の兄を勝手に処分しようとしなくてください」

そう言つて少女は地べたに胡坐をかいて寛ぐ上を跨いで、せつせと掃除を再開し始めた。

はて、どうしてこんなほのぼのライフを俺は送っているのだろうか。思い当たる節は、あんまりなかった。事が起こった時には既にこんな状況を、俺は享受していた。

思い返してみたが、なんてこたあない。

坂上智代の口撃を交わして、きて帰るかと思えばどうしてか掠が現れたのだ。大体そこら辺から回想してみるとしよう。

※

「お、おはようございませぬ榊原くんっ」

坂上から今度こそ解放されたと思ひ校門から離れた俺に声をかけてきたのは、我がスイートパイの双子の妹である藤林椋だった。ここ最近よく顔を合わせるようになった彼女が、まさか学校の外で挨拶してくるとは思つてもみなかった。基本的に引つ込み思案なのが彼女であり、それがまた良い、という男子は声こそ大きくないが数多く存在しているのだ。隠れた人気者つてやつだな。

「おうおはよう椋。今日は早いんだな」

「クラス委員ですから、教室にある花瓶の水を交換したり、黒板消しを綺麗にしようと思ひまして」

「その真面目さには頭が下がるよ」

そんな七面倒くさい事、杏に命令されない限り絶対にやらないだろう。自ら率先してやるつてのは、思ひの外意思の強さを要求される事だ。いつだったか杏が「ああ見えて椋はあたしよりも頑固者よ」つてのはあながち間違ひじゃないんだな。

我がクラスの奉仕担当は、俺の服装がいつもと違ひのに興味があるのか、しきりに視線を泳がせてはちらちらと上下させている。

「そんなに気になるほど変か？　この服」

「い、いえそうではなくて。……その、か……かつこいと、わたしは思いますっ」

なんて優しい子なのだろう。きつと俺を傷つけまいと思つてのお世辞なのだろう。顔が赤くなつて、上擦つた声をしているのが良い証拠だ。

聞く相手が杏だつたら、正直にきつとこう言うだろう。

『わーかつこいいかつこいい。いい年してジジ臭いポシエツトつけた若者よりかつこいいわー。いいお手本になるから、そのまま校門に立つてみんなにアピールしてなさいな。きつとみんなあんだの眩しい輝きに目を逸らすから』

とか俺の胸を穿つ言葉をはつきり物申すはずだ。うむ、これはこれで……悪くない。

「ありがとう掠、その優しさを忘れてはいけないぞ。きつとその内、お前に似合う良い男が涎を垂らして現れるはずだ」

「えつと、ありがとうございます……？」

どう反応していいのかわからないといった風に、苦笑いを浮かべて掠は小首を傾げた。ちょうど良いので、こんな仕事を絶対にしないだろう杏に置き換えて妄想をしてみる。双子だけあつて顔の造りはそっくりなので、あとは髪を長く脳内変換すればいいだけだ。

『えへへ、つたく幸希つたら……困つたさんなんだからっ』

イエス！　なんか元の性格ではありえない言葉を発してるが、俺の本能が求めた結果

なら文句はない！

空想の世界では俺はラブコメの主人公で、目が覚めたら隣に住んでる幼馴染の杏が俺を起こしにベッドへとダイブするんだ。そして、朝の体操で大きく伸びている息子を目の当たりにした杏は、赤面しつつも言うのだ。困ったさんなんだから、と。なにをとち狂ったこと考えてるのか、俺だってちゃんと理解している。だがしかし、空想では何もかもがありなんだっ！

脳内で力説しながら拳を握りしめていると、棕の存在をすっかり忘れてしまった。不自然に沈黙が流れて、彼女はどうするべきか決めあぐねたようにもじもじしている。その姿を俺は杏で——以下略。

「さ、さつき校門で話していた方って、たしか坂上智代さんでしたよね？ 二年生の」
「あんな融通の利かない女が二人と居てたまるか。間違いなくあれは坂上だな。それがどうかしたのか？」

「なにやら言い合っているようにも見えたので……少し、気になって」

もしかして、それはアレか？ 姉に相応しい人物であるかを審査しているのか？ 俺があんな鉄の女と良い仲である事を疑っているのか棕は？

確かに顔はいいが、俺には榊原（旧姓：藤林）杏という伴侶が居るんだぞ。心変わりも浮気も、絶対にありえない。

身の潔白を証明するために、俺は肩を縮めてもじもじしている。襟を掴んで断言した。「安心しろ、俺は何処までも一途で硬派な男だ！ だから、絶対に後悔なんかさせない！」

「は、はいっ……！」

決まった。これで襟は俺が杏にとって相応しい男であると思つたはずだ。ただ残念な事に、彼女は杏の想い人が俺ではなく岡崎だという事を知っている。どうしようもないが、こればかりは岡崎が古河渚とくっ付いてもらわれないことには始まらない。

希望的観測をし続けても仕様がなない。襟の肩から手を離し、俺は一歩後ずさった。

「そーいや、今日は杏と一緒にやらないんだ。あ、まちがつても今のはギャグじゃないからな。偶然たまたま今日と杏が重なっただけだからな」

「お姉ちゃんはまだ、家にいると思います」

あ、無視ですか。いやありがたいけど、態々拾って取り繕うような事をしないだけありがたいけどね。でもやっぱり君も杏と姉妹だけあるね。

「あの、気になっていたんですけど。今日はどうしたんですか？」

「ん？ ああ、さつきまでバイトだったんだよ。夜遅くから朝までのバイトでな、その帰りだ。朝日も眩しいからそろそろ家か、それとも春原の部屋にでも行って寝ようかと思つてた途中だったんだよ」

「どんなバイトをしているんですか？　見た目の印象ではウェイターさんのようにも見えますけど」

「んー、一応校則違反だから公にはしたくないんだよな。ただ一つ言っておくなら、棕の予想は当たらずとも遠からずって感じだな」

ウェイターは給仕であつて、実際にはサービスを提供するのが主であるが、バーテンダーはサービスに加えて酒を美味しい状態で提供し、会話を提供して楽しい時間を過ごすために従事する職業だ。バイト先のマスターは事あるごとに『外ではどんなにどうしようもなく、だらしのない人間であろうとも、カウンターを潜ればそこに立つのは一個の完成されたバーテンダーであるべきだ』と口癖のように言っている。

外ではだらしなくても、ネクタイを締めてベストを着用しカウンターに立てば、そこはあらゆる現実から乖離した異界のような、日常にはない空間でなくてはならないらしい。客の中にはそう言った雰囲気の中で飲む酒が好きらしく、好んで通う人間もいた。

マスターが言いたかつたのはきつと、どんな人間もキメる時にはしっかりとキメる人間であれという助言なんだろう。実際、昼の間に見かけるマスターは、ただのくたびれた総白髪の爺さんだった。店でのギャップが激しくて、偶然見かけた俺は耐えられずに大笑いして、後日店内で怒られた覚えがあつた。

「校則違反はいけない事だと思いますけど……お姉ちゃんもたまに、バイクに乗って通

学していますので、わたしは聞かなかつた事にします」

「そりやありがたい。實際バれてバイトを止めさせられたら、こつちも生活が危ないからな」

死ぬほど家計が切迫しているわけじゃないが、それでも日々の労働で得る金銭は欠かせないものだ。なにより、無理を言つて働かせてもらつてる分、マスターに迷惑を掛けられない。

「最悪、学校を辞めて働かなくちやいかんかもしれないしな」

「あ、それは駄目です」

本気で学校をやめるなんて杏が居る限り考えていないが、冗談で言つたつもりが掠には本気と受け取つたらしく、焦つたように返答してきた。

俺が学校を辞めれば、俺を嫌う沢山の生徒が大手を振つて喜び、口に戸を立てず声高々に俺を悪し様に言いふらすだろう。俺を嫌いな奴なんて、俺も嫌いだからどうでもいいが、だからこそその目の前の引つ込み思案なクラス委員が引き止めてくれたのは嬉しかった。

「せつかくここまで来たんですから、後一年、い……一緒にがんばりましょう」

「今辞めたらこれまでの学費が勿体無いからな、辞めるつもりなんかないさ。まだ、やらなきやいけない事が色々あるからな」

「やらなきやいけない事……ですか？」

「至極個人的な事だけだな。ま、これまで個人以外の為に何かをやってきたつもりは一切ないけど」

やりたいようにやって、ありたいように在る。この世の半分以上が不平と不満で構成されてるんだと思つた時、あれから俺は自分勝手であろうと決めた。どうせ損するのであれば、せめて良かれと思つた事を迷わずやろうと。

俺は俺の欲求に従い愛する杏を手中にせんが為、杏の想いを台無しにしようとしていゝる。これをしたたら彼女はどんな顔をするだろうか……。考えたくもないが、そういう道を俺は選んでしまつたんだ。リスクを背負わないと獲得出来ないと思つたから。

この計画は誰にも知られてはいけない。岡崎にも、それに春原にだつて。

あいつはああ見えて人の感情の機微に聡い。サッカー部に居た時だつて、部長との確執や諍い、それに部員たちの俺らを見下し嘲笑しているのを感じた春原が、耐えられず爆発したから今がある。そういう鋭さでいえば、三人の中であいつが一番だろう。

「そろそろ学校行かなくていいのか？ クラス委員」

「あつ……：そうでした。ごめんなさい、それじゃあわたしそろそろ行きます」

「おう、しつかり後悔なく過ごせよ」

どこか明るくなった彼女に、別れ際に自分の信ずる言葉を贈る。と、掠は背を向け校

舎に向かったかと思えば、振り返り戻ってきた。打って変ったように何かを決意したような、真剣な眼差しで。

「どうした、何か忘れもんでもしたのか？」

「後悔なく過ぐす為に……渡したい物が、あります」

視線を合わせず俯き、棕はか細く喘ぐように声を絞り出し鞆から四角形の包を取り出した。群青色の布が包んでいるのが何か、手渡された時の重みと、仄かに漂う香りによつて理解した。

——これは弁当だ。

渡したい物とは弁当だったのか。でもなんでこれを俺に渡すんだ？

「見た感じ弁当だつてことはわかるんだが、どうしてこれをくれるんだ？」

「あれから練習しましたつ、ですから、あの……味わつてくれると、嬉しいです」

必死の面相で棕はまくし立てだが、最後には消沈したようにか細くなつていった。

風船がしぼむように小さくなった彼女が、そこまでして頑張つた物を改めて翳して観察してみる。あの時はお世辞にも他人が食えば、まず間違いなく「不味い」と評する味だったが、まあ別に良いか。腹も減つてるし、でも……。

「貰えるのはありがたいんだが、これ食つたあとの容器はどうすりやいいんだ？」

「あ、明日は春原くんの住んでいる学生寮に居ますか？」

「まあ、認めたくないが暇なときは大体、あいつの部屋に居るけど」

「でしたら、明日また取りに朝向かいますので、その時にっ………そ、それではっ」

言いたい事を言い切ったからなのか、耐えられずに逃亡したのかは知らんが、棕は言い切ると同時に踵を返して坂道を駆け上がった。意外と足速いなあいつ。

ま、思いがけずして食糧を得る事が出来たんだ。これをもつて春原の前で自慢しながら、苦悶に伏す奴の姿を肴に飯をいただくとするか。

鞆を持っていない為むき出しの状態で弁当箱をぶら下げながら、俺は春原が眠っているであろう学生寮へと足を向けた。

※

時に、世界の意味とは存在するのであるか、という議題について議論をしたいと思っている。

第一に絶対条件として、たんに“ありえない”という反論を禁ずる。

第二に反論言にて“ロジックじゃない”という感情論を主張するのを禁ずる。

第三に——世界とは我らの神であり、女神であられる藤林杏の事を指し、この場においての意思とは広義で地球全土どこにしようとな彼女を感じられる特殊粒子の事を指す。

以上の事を遵守して、我ら榊原幸希は世界の意思について、一部ではまやかしいう現実派と、また一部では愛ゆえにと唱える浪漫派に分かれて議論を進めたいと思う。なお、議長を務めるのは私、榊原幸希議長であります。紛らわしいので議長でお願いします。

「藤林杏とは世界！ すなわち世界とは藤林！ 故に、一個の人格を持つ彼女に意思は存在し、だからこそ世界にも意思はあるというこの意見、あなた方浪漫派の意見は荒唐無稽です！」

「なにが荒唐無稽か！ 杏に捧げるべき愛は世界全土を覆い隠すには十分の大きさが必要だ。故に、俺達は世界中何処にいたって彼女の事を感じられる！」

「答えになっていない！ 君たちは結局『愛』という言葉を便利に利用するだけの狂言者に他ならない！ 世界に目を向けるよりも、まずは一人の人間としての彼女を想うべきだ！」

「順序よく物事を進めればすべてが上手く行くなんてのは、お前ら堅物の為に必要な信仰だもんな。それなら一生、ベルトコンベアとでも恋愛してろ！ ロジックじゃないんだよ恋つてのは！」

「議長！ 彼らはいま第二法に抵触しました、裁きを！」

うむ。では浪漫派筆頭の榊原幸希よ、先も説明したばかりの第二法をただ言ってみた

かっただけという思惑が見え見えなので、罰を下す。一日杏との新婚生活シミュレーションを禁ずる。

「嘘だああああああ!!」

議論を戻そう。貴様らはいつも藤林杏のことになると口論が白熱して、目先の議題を忘却してしまう。いま話し合うべきは、彼女への愛ではない。世界の意思の存在についての議論である。

議長である私はここでジャツジ・ガベルを打ち鳴らし、話しを本戦へと引き戻した。

「では、浪漫派筆頭の榊原幸希はショックのあまり寝込んだので、代わりにこの俺、筆頭代理の榊原幸希がいかせてもらう。愛ゆえにな」

「何度来ようが結果は同じ。意思などという都合粒子が存在するわけがないんだ。そんな存在があれば、私たちは既に彼女の愛を獲得していてもおかしくない」

「いや、意思は存在するね。お前が何度否定しようが、幾度となく吠えようが、これは覆せない純然たる真実だ」

筆頭代理の榊原幸希が腕を組み、現実派の党首榊原幸希を睥睨した。威圧的な眼光に、武闘派ではない党首はたじろぐがそれは議長である私も同じだった。

この幸希はこれまでの奴とは何処か違う……。理由のない余裕が、催眠術のように私たちを引き込んだ。

「ぐつ、な、なら説明してもらおうか!」

「良いだろう。ではこの二人に、俺に変わつて説明してもらおう——来いッ!」
「力の
奴隸」榊原幸希!」
「愛欲の奉仕者」榊原幸希!」

筆頭代理の両隣に、突如として渦巻く亜空間が出現し、中心部から二人の榊原幸希が姿を見せた。

浪漫派筆頭の右手である「愛欲の奉仕者」と左手の「力の奴隸」。この二人が現れたという事は、筆頭代理は早々に決着をつけるつもりなのかもしれない。議長として公平な立場でいなくてはならない私であるが、彼らの登場で密かに心が湧く気分では秘密だ。

「お、おいあれは愛欲の右手じゃないのか!」

「不味いぞ党首! 奴は愛欲の名の通り、「全権者」榊原幸希の最もなくてはならない人物だ! 筆頭の右手なのもダブルミーニングなんだぞ!」

「なんて卑猥なつ! 力の奴隸は粗野で乱暴で気性が荒く、自分本位な人格だと聞いているぞ! きつと我儘の限りを尽くして、この議會を総崩れにするつもりなんだ!」

現実派の者達が狼狽し始め、もはや統制のとれない徒党に成り果てて知ったのかと、諦めの境地を懐こうとした瞬間であつた。

「沈まれいい!!」

そう。こんな窮地はいつだつて乗り越えてきた。彼こそが、現実派党首の榊原幸希なのだ。

鼓膜を震わせる怒声は波濤のように広がり、すぐさま味方達へと伝播した。

「この程度の脅し、私たち『現実的に杏をキョンキョンする方法とは何かな?』派に通じるわけが無かるうが! 冷静であれ! 平静であれ! 常に傍らには君たちの藤林杏が寄り添っているのだぞ」

この総勢五万にも達する大会場で、ここまでよく通る声を持つのは彼しかない、議長の私は思った。だからこそ彼は此処まで支持され、ここまでのし上がってきたのだ。幾多の榊原幸希を退け、有り余る杏へのアプローチ方法を手練手管で提案し、妄想で現実とする欲の強さ。

どこをとつても彼こそが次の『全権者』として相応しい人格であろう。

「さて、はらから同胞が失礼をした。では浪漫派筆頭代理よ——小鳥の如きさえず囀りを聞かせてはくれないか?」

決まった。劣勢を覆す苦し紛れの虚勢!

これは党首の得意な技だ。まともにくらってしまった浪漫派が生き残っているのか……。

見やればそこには虫の息になっている筈の榊原幸希達が……。

「フ、フフフ。フハハハハッ！」

高笑いを上げる浪漫派。

一体何が彼らをこうも笑いに誘うのか、もはや一議長の私では遠く理解に及ばない。「な、なにがおかしいんだ！」

「愚か也！ 哀れ也！ たかだかその程度の抵抗で、俺らが打ち破れると思つていいのか!? 片腹痛いわ！」

「俺達は意思の存在をより明確な、反論の仕様がなない事実として観測しているのだよ」「然り、故に俺らに敗北の二文字は不要」

「見せてやろう、これが——我らが『全権者』榊原幸希が感じ取つた意思の証拠だ！」
振りかざした筆頭代理のに釣られて私たちは皆、そちらの方へと視線を向けた。

視線の先にあるのは大きなスクリーンだった。そこに映るのは、私たちの全代表、
『全権者』榊原幸希が見ている景色をそのまま放映している映像であった。

想い人である藤林杏の妹とわかれた幸希は、春原陽平の部屋へと赴いていた。途上、彼は自販機で飲み物を購入したり、公園のベンチに座り込んで暫く空を見上げて過ごしたりと、無為に時間を浪費していた。

すべての榊原幸希が、この映像に憑りつかれたように見入っている。皆、この視点を欲して争いを続けているのだ、一同の眼差しには憧憬が色濃く映っている。

『さて、そろそろあいつの部屋にでも行くとするか』

ベンチを立ち上がった幸希は空き缶をゴミ箱へと放り投げ、公園を後にした。

——その時であつた。

『ん？ 杏が危ない目に遭う予感がする……！ 急がねば！』

まるで事前に知っていたかのような口ぶり。確信をもつて発した言葉は、この場に居る全員の動揺を誘つた。静かな湖畔に投石された波紋のように広がり、瞬く間に会場内は沸き立った。

誰もがこの映像を見て意思の存在を仄めかす言葉を口にし始めた。これまで否定であつた現実派もそれは例外ではなく、動揺を隠しきれていなかった。

決まつたな。私はこの瞬間、全権者が感じ取つた奇跡のような意思の力を思い知つた。

幸希は風の如く走つた。迷わず、正確に、まるで彼女の居所が分かるかのように。

そして、その瞬間は訪れた。

「あれはっ！ 藤林杏が事故つているだとお!？」

「そうっ！ これこそが、この危機感知能力こそが、ご都合を裏付ける意思の存在の証明だ!！」

宙に投げ出された藤林杏を見て、幸希は己の運動能力を駆使して彼女を抱き留めた。

一同が安堵した時、全権者を通じて私たちにも彼女の香りや感触が訪れた。

「こゝ、これは杏の香り！」

「これは杏の感触！」

「杏の体温！」

「杏の存在の温かみ！」

「即ち愛！」

喝采が起こる。歓声が、歓喜の歓声が広がり、あつという間にみな杏の虜となった。

無理も無い。私たちは対立しあう仲とはいえ、みな同じ榊原幸希なんだから。

見事杏を抱き留めた幸希は、その感動に身を打ちふるわせていた。その瞳からは滂沱の涙が流れ、神経細胞が活性化し、五感の全てが冴え渡った。

「おい！ いま杏の尻を揉んだら愛欲の！」

「ふう、済まないが何の事だね？」

もう何も争う必要などないのだ。皆同じ幸希、皆同じ杏が好きなのだ。同一の存在が分かれば態々争う必要なんてないんだ。

迷いも惑いも此処に置き捨てよう。手に握るジャツジ・ガベルを振りおろし、遺恨を叩き潰すのだ。

カツーン、と獅子脅しのような静謐な調べが響き、皆が私の方へと振り返る。憎しみ

は、ここで根絶やしにするのだ。

「現時点を持つて議論の終結を知らせる！ 一同に結論を言い渡す！ 座して聴け！」
 声を発したのは久方ぶりだ。この一文だけで私の声は枯れ果ててしまった。よつて、これからは通常の語りに移行する旨、理解を願う。

現実派だの浪漫派だの烏滸がましい。なぜ藤林杏を想う同一の私たちが別れ争うのだ。あげく派閥の名前は陳腐にして質素。名を冠するのであれば杏派として、一同が一身となり全権者の願望を果たすための走狗となるのだ。

彼は意思の存在を証明し、私たちに可能性の種を植えてくれた。芽吹き花咲く大樹となるには、私たちの協力が必要不可欠！

立ち上がれ同士達よ！

奮い立て榊原幸希！

我ら脳内会議議会の最高委員、総勢五万の榊原幸希たちはそれぞれの役職に戻る！

後に正気を取り戻す貴君は、我らの旗頭！ 決してそのはためきを絶やすことなかれ

！ あらゆる障害を魁立て！

我らの杏を——よろしく頼んだぞ全権者よ。

※

てな具合に騒々しかった脳内の会議は、杏の一撃によって全て消滅してしまった。結局意思とは何だったんだろうか。結果論だが杏を助ける事が出来た俺としては、それがなんてあろうと構わない。

彼女が笑顔になるのであれば、俺はどんな道化も演じてみせよう。来たるべき計画成就の日まで。

で、その後杏に計画を感じづかれそうになった俺は、逃げるように春原の部屋へと突入した。寮内に入ると美佐枝さんが廊下の掃き掃除をしていたが、俺を見るなり「停学中ぐらい大人しく出来ないのかねあんたは」とあきれられた。

どうせ春原は寝ているだろうと踏んで、驚かそうと思い目一杯の力でドアを蹴破った。

「おらあ！ 山賊だあ、ありったけの酒と金ツ、それに女をよこせ！ じゃなきやテメエの命を量り売りするぞゴラア！」

「きやつー！」

……きやつ？

おかしいな、本来ならここで春原がダサイパジャマのままベッドから飛び起きて、情けなく慌てふためいて周りの物を倒して転ぶ筈なんだが。どうして少女のような小さ

な悲鳴が聞こえるのだ？

ドアを開けて真正面のベッドには誰も寝ていない。というか、長らく見ていなかったシーツを剥がした後だけを残して、寂しげな物に成り果てている。

よくよく観察すると、床に散らばった漫画も綺麗に整頓されているし、空いたペットボトルや食い物の容器の残骸も転がっていない。おかしい、いつの間に美佐枝さんが入りこんで掃除をしてみたというんだ。彼女がそんな殊勝な心がけをする筈がない。生徒の自主性を重んじている美佐枝さんが、こんな事。

「あ、あのお〜」

声に呼び止められて振り向けば、そこには半裸で壁に寄りかかっている春原の妹芽衣が立っていた。なるほど、この部屋の惨状は彼女の仕業だというわけか。

着替えの途中だったのだろうか、芽衣は装飾が最低限しかないベビードール姿に、胸の前で組まれた両手で衣服を抱いて立ち竦んでいた。俺という男が突然入ってくれば、そりゃ驚くか。

「悪かったな芽衣。いま外に出るよ」

そう言い残して扉を静かに絞めた。どれほどの時間待てば着替えが終わるのかわからない俺は、ドアの横の壁に身を預けて待ち続けた。

芽衣が着替えを終える間、部屋の中で狼狽して取り乱す声がしきりに聞こえてきて、

この部屋の防音性を疑い始めていた時、ようやく芽衣はドアを開けて俺を招き入れた。「あの、すいませんでしたなんか」

「謝るのは俺の方だろ……多分、いや俺悪くねえな悪いのは此処に居ない春原だ。よし、そういう事にして今回は水に流そうじゃないか、なつ、飴ちゃんやるから」

「いえそんな、わたしそこまで単純じゃうわあ〜この飴地元じゃ見たことない物だあ〜！」

簡単に懐柔出来たよ。こんな町でも芽衣からすれば都会と変わりないのだろうか、彼女は俺の差し出して飴をひったくって口に放り込んだ。

「苺の味がする〜！ ありがとうございませす榊原さんっ」

「気にすんな。持つてるだけで俺自身は食べないしな」

「じゃあこの飴は誰が食べる為に持つてるんですか？」

「大体が芽衣ぐらゐの歳の子相手か、学校の資料室に君臨してる後輩にだな」

あれから有紀寧はどうしているだろうか。停学になったために彼女の居る資料室に顔を出せなくなつたから、今はどうしているのかがわからない。今度岡崎にでも頼んで彼女の様子を窺ってもらおうか。ついでに古河を誘うようにも誘導してみよう。

「榊原さんって、顔怖いのに優しいんですね」

「怖くねえだろ、普通の顔してんじゃん俺。そこまで凶悪じゃないでしょ、どつちかつて

言えば癒し系だよ」

「あはははっ、冗談も上手なんですわねっ」

「ふざけてんのか？ 間違ひなくふざけてるだろお前、今日の下着の種類と色を兄貴に教えるぞこの野郎」

「すいませんでした。どこまでやれば怒るのか試そうとしてて」

ちよつと凄んで脅したらそれまでの態度と打って変わって、芽衣は素直に頭を下げた。断じて俺の顔が怖いせいだとは思いたくない。春原を脅しの材料にしたのが効果的だったに決まっている。

しかし、見回してみると本当に綺麗に整頓されている。男の城だったこの部屋が、ここまで綺麗になるとは思わなかつた。

「将来はいい家政婦になるな」

「そこはいいお嫁さんの方が、わたしとしては嬉しいです」

「そうだ、将来は俺が雇ってやるよ」

「あの、わたしの話……聞いていますか？」

苦笑いを浮かべながら乾いた笑い声を弱弱しく吐き出した芽衣は、徐に立ち上がり三角巾をかぶりハタキを持ち始めた。まだどこか掃除するつもりなのか？

「まだ掃除するのか？ 見た感じじゃ、もう十分綺麗になつたと思うぞ。どうせ今ここ

で頑張ったって、三日もすれば俺達はすぐに元通りにしてみせるぜ」

「そんなこれからお前の努力を台無しにしてやる、みたいに言わないで下さいよ榊原さん」

「幸希さんで良いぞ、俺は悪くないけど、一応お前の着替えを見ちまったしな」

まさか杏よりも早く、よりにもよって芽衣を相手にこのイベントを発生させてしまうとは。この榊原幸希一生の不覚っ。

「わかりました、では幸希さん……幸希さんは現在学校を停学中でしたよね？」

「うむ、なにか文句でもあるのか？」

「いえそれはありません。では、これからの予定はなにか入っていますか？」

一体なんの質問なんだこれは。全部答えたら粗品でもくれるのか？ でも既にもう、この部屋に入った時点で粗末なものを……。いやよそう、なんかこの子も兄貴と同じで鋭そうだ。しかも完全にこっちのが上位互換って感じがする。

無垢そうな顔をして、裏の顔を隠しているだけかもしれない。ここは一旦、彼女の期待に応えるとしてよう。

「何も無いぞ、デートでもしたいのか？ だとしたら他を当たってくれ、俺はロリコンじゃないからな」

「それは残念です。じゃあ、何も予定もなく、今日はこの部屋で過ごすつもりだったんで

すね?」

「そうだけど、なにがそんなに嬉しいんだ? 俺といられるのが嬉しいってんだったら
他を——」

「はいっ、ではお掃除を手伝ってくださいっ」

……どうしてそうなる。

というわけで、様々な紆余曲折を経て今に至るわけである。

する事もない以上、断る理由も無く俺は芽衣に唆されるままに掃除を手伝う羽目になつていた。ちよつと面倒になつてサボつてみれば見逃さず咎め、別の作業を押し付けてくる。おかしいな、俺の方が年上なのに顎で使われている感が凄いぞ。

大体なんで俺が春原の部屋を掃除せにやならんのかと、一度抗議を試みたが、ほぼ毎日ここを使っている俺は反論しきる材料が無かつた。

「手伝つてくれて助かりました。どうしてもわたしだけじゃ届かない場所とかもあるの
で、幸希さんが居てくれて良かったです」

「報酬は兄貴に請求するから、気にせずジャンジャン使つてくれて構わないぞ。その分
あいつの負担が大きくなるだけだから」

「兄と仲が良いんですね本当に」

「今の何処をどう聞けばそんな勘違いが出来るんだ。耳の穴も掃除してやろうか？」
お互い作業をしながら淀みなく会話を続けるぐらいには仲も深まり、建前を必要としないぐらいには言い合えるようになっていた。

この妹、兄貴よりもよっぽど会話の運びが上手い。世渡り上手だ。営業とか接客業なんかさせたら、結構いい売上を叩き出すかもしれない。

「気になっていたんですけど、幸希さんの好きな人って杏さんなんですか？」

何の脈絡も無く芽衣が切り出した話題は、俺の意表を突き沈黙させるにはベストなタイミングだった。

「い、何をいきなり言ってるんだおお、お前。俺が杏を好き？　なんの冗談でそんな、そんなこと、こと」

「思いつきりどもってますけど、大丈夫ですか？」

拙い、何を考えての奇襲であるかはわからないが、これは明らかに意図した質問だ。こいつはこの為だけに俺を懐柔しようとおの手この手をつかったのかもしれない。

芽衣が俺の女神である杏の事を確認して、一体何の為になるって言うんだ。これが単なる好奇心であれば、単純に「好きな人いるんですか？」と訊くに決まっている。だが芽衣は、そうは訊かなかった。明らかに好きな人は杏だろ、とある程度断定してから質問してきた。いや、質問というよりもこれは、事実確認に近いかもしれない。ってんな

ことはどうでもいいんだよ。

肝心なのは知られてはいけないという事だが、もうこれは不可能に近い。だとすれば次に講じる打開策は——口封じしかない。

「でもそうですか、幸希さんは『やつぱり』杏さんの事が——」

「——この事を誰かに漏らしたら、俺はお前の下の口に飴ちやんをブチ込む。比喻じゃなく、本当に飴をブチ込む。しかも千歳飴を」

周囲に誰も居ない今だからこそ言える最大の脅しを口走った。出来るだけ怖い顔を意識し、低く唸るような声を出して。

「——ひうつ」

効果は上々。悪戯っ子のような笑みを見せていた芽衣は、血の気が引いたように青い顔をして己の身体をかき抱いた。

いかん、冗談のつもりで言ったんだが、反応が冗談じゃすまない感じになっちゃってる。こんな所を見られたら、もし杏にでも見られたら確実に俺は墓場へ直送されてしまう。たとえば春原が来たとしても、そのあるのかわからない友情にヒビを入れる事になるかもしれない。

すぐさま俺はしやくりを上げる芽衣の前に四つん這いになった。

「すまなかつた冗談だ！ 頼む、出来る事なら何でもするから許してくれ！ だから何

も言わないでっ！」

昔、まだ俺がガキだった頃。思い出すだけでも腸が煮えくり返る親父は、事あるごとに言っていた。

男というのは人生で一度も土下座をしないで生き抜く事は不可能なんだよ。家庭を持ちたければ、なおさらな。

今にして思えばそれは恋人の両親に、結婚の承諾を得る為だと思っていたが。まさかそれよりも早く土下座をする羽目になるとは。着替えイベントといい、土下座といい、この小悪魔みたいな少女は俺から二つも初めてを奪いやがった。

「……わかりました。さっきの言葉にはわたしも取り乱してシヨックを受けたので……今日一日、わたしと一緒に町でデートしませんか？ 勿論費用は幸希さんが全部持つて下さいねっ」

この上さらに二人つきりデートの初めてまで奪うつもりなのかこの少女は。

第十八回：こどものじかん

ハッキリ言つてこの街は都会とは程遠い場所だ。そりやゲームセンターはあるし、食い物屋には困らないし、百円均一ショップだつてある。だがそれだけだ。

天を衝くようなビルなんて立つてないし、駅周辺だつて都会の賑わいとは無縁の長閑さだ。ファツションだのオシャレだのそういった流行というのが流れてくるのは、お世辞にも早いとは言えない。

都市でもないのに都市伝説みたいなお伽噺があるこの街は、俺にとってはウンザリするが、今すぐ出て行きたいという程のものじゃない。

——だからこうして彼女が年相応にはしゃいでいる姿を見ると、悪い気がしないのも本心だ。

「わあ、見てくださいい幸希さん。クレープがありますよ、種類も沢山、流石は都会ですつ」
「お前の実家は山中にでもあるのか？ クレープぐらいあるだろそりや。あと、別にこ

こ都会じゃねえからな」

「どれにしようかなあ〜」

「聞けよ。つか金あんののか？」

街路にポツンと建っている移動式のクレープ販売店は、女子が好きそうなピンクや黄色などの明るい色でメルヘンな感じに彩色されている。これで客の目を惹いているのか、それとも店主の趣味なのか。どっちにしろ俺の琴線に触れる事は一生ないだろう。既に購入を決めたのか、芽衣は屈んでサンプルのクレープが並ぶショーケースを真剣な眼差しで見つめ、どれにしようかと吟味し始めていた。

流れからして完全に俺が奢るのが決まりかかっていた。いや、このコケティッシュとは縁遠い少女は奢ってもらう気満々だろう。仮に、ここに居合わせていたのが俺ではなく岡崎であつたなら、多少の遠慮を見せるぐらいはしたであろう。

——しかし。

「うーん、どれもおいしそうで悩みます。でもどうせ幸希さんにご馳走になるなら、見た事も無い物が良いですね」

「自分の財布が痛まないから冒険心を持つのは、潔いまでに凶々しくて良い。が、奢る側の俺としては、あんまりゲテモノちつくなもんを選んで、金をドブに捨てるようなことはしたくないぞ」

脅した代償として同席する俺に対して、芽衣は遠慮を置き去りにこのデートに臨んでいた。

悩ましい声で唸りながら右へ左へ行き来させていた首が、あつ、という小さな選定を

終えた声と共に停止した。

「これがいいですつ、このプリンセススクレープってやつ！」

「プリンセスう？　なんだその仰々しいネーミングは………げっ！」

な、なんだこの馬鹿でかいスクレープは。値段は、二千円だど!?　おいおい、こんな買い手が付くのかよ。明らかに価格破壊じゃねえか。

握ったら柔らかかそうな小さい手から伸びた指先は、大層な代物を指しており、その破壊力に動揺を隠せなかった。

「な、なあ、マジでこれにするの？　明らかにお前の顔よりもデカいんだけど、食べきれるのか？」

「はいっ、これがいいです、こんなの見た事ありませんっ」

「いいか芽衣。外国の諺にもあるが、好奇心は猫をも殺すと言つてな、好奇心も程々にしといた方が今後の為だと思つぞ」

「わたし——気になりますっ！」

うん、それは止めよう。岡崎が聞いたら洩々したがってしまいそうな感じだから。よそでやつちや駄目だぞ。

バイトを欠かさないと健康勤労不良学生の俺なら、このぐらゐの値段を支払うのは当然可能だが、スクレープに二千円というのはどう考えても損だと思えてしまう。

二千円あれば、適当な飯屋で手頃な値段の、値段相応の味の料理を腹いっぱい食える。普段からこういうったデザートは、この前岡崎によつて咎められた雑誌に載つたので学んで知つてはいたが、だからといつて理解を示せるかと問われれば、NOである。

せめて相手が杏であるならば、迷うことなく即座に店員に注文したであらう。どこまでも俺を突き動かす原動力は、彼女を置いて他にないのだから。

「むう……幸希さん」

杏との仮想デートの妄想に耽つていると、胸の辺りから拗ねたような芽衣の聲がした。

見れば彼女は声色どおり、拗ねたように頬を膨らませ、形の良い小ぶりの唇を突出し抗議するような上目使いで俺を睨んでいた。

「女性とデートしてる時は、他の女の人の事を考えないのがマナーでルールですよ」

「なにを言つとんのだ。『女性』つて言うより『少女』つて表現のが相応しいだろ」

中坊が何をマセた事を。

「杏さんなら、きつと同じ事を思う筈ですよ。たぶん、あの人は一々文句を言わない豪快な人がお好きかと」

「さあ芽衣よ、好きだけクレープを食るんだ！　なあに、金の心配はするな、今日は全部俺が持とうじゃないか！」

「わー、ありがとうございます！ すみませーん、このプリンセスクレープを——」
嗚呼、俺ってば単純……。

一度行ってしまった以上、これ以上男を下げない為にも今日は芽衣の思うままにさせてやるしかないだろう。春原の妹とはいえ中身はしっかりとしたもんだ。

あと、杏の家にも泊まってるから、この見返りに彼女の自宅での生活とか色々訊けたらいいな。

程なくして営業スマイルを張り付けた店員からクレープ（プリンセス級）を受け取り、紙切れが二枚巣立って行った。

「ん〜、おいひいですう〜」

どう作ればこんなデカイクレープを作れるんだ。

両手でしっかり持ったクレープを頬張った芽衣は、それはもうとても美味しそうに頬を緩ませ幸せそうに目を細めていた。

歩きながら食べると、万が一の可能性で落としてしまうかもしれないと憂慮し、とりあえず店の付近にある公園のベンチに腰を下ろしていた。

今日は平日。この時間、学生達は学校へと行っているから街路を歩く人たちの中に制服やそれらしい年齢の人は見当たらない。サボっている奴が居ない限り大丈夫だろう。こんな幼女と一緒にクレープ食ってる場面なんて見られた日には、ロリコンと勘違いさ

れ蔑まれてしまう。

一步踏み外せばあつという間に転落してしまう危うさにビクついていると、ふと眼前をクレープが遮った。甘い香りが鼻腔を突いて、思わず生唾を呑んでしまう。

「よかつたら食べませんか？ このまま食べきっちゃうのも、やっぱり悪いですし」

「別に全部食つて良いんだぞ。奢ると言つた以上、吐いた唾を飲むつもりはねえよ。気にせず豪快に食つて、豪快に肥えろ」

「肥えろとは酷いですつ。いいですか幸希さん。体重、体型、体脂肪は女の子が男性に一番指摘されたくない話題なんですよ？ 臆面もなくそんな事を言つてのけるなんて、もつと乙女心を理解してください」

膨れっ面で俺の欠点を指摘してくる芽衣。はて、乙女心というのは雑誌で読んで概念はしっているが、最終的な主観が入つた結論では、あれは女の都合の良い言葉と岡崎と結論付けた覚えがあるぞ。

「生憎、俺が理解するべき女はただ一人つて決めてるんだ」

「そう、ですか……」

「なんだよ、その含みのある顔と言いようは」

「いえ何でもないです、ほらっ、これ一口だけあげます」

表情に影が差した芽衣が、誤魔化す様にプリンセスクレープ（二千円）を差し出した。

なんか釈然としないが、きつとそれを問い質しても彼女は口を割らないだろう。それぐらい理解出来るぐらいには、俺も彼女のことかわかつてきた。

だから、俺は大人しく差し出されるプリンセススクレープ（二千円）を大きく頬張った。当然、芽衣が好きそうな苺の部分。

あからさまに避けられ残った苺は、おそらく最後に口にしようと思命に丁寧に食べ続けた努力の結晶だろう。だから俺は、誤魔化された事に対する、せめてもの意趣返しとして彼女の苺を頬張った。……別に「彼女の苺」つてのが比喻表現というわけじゃない。

「あつ、ああああアアア！ 苺のとこ食べたア！」

「うむ、美味かったぞ！」

「感想なんて聞いてませんツ！ いちごお〜！」

嘆くように苺のあつた部分を見つめる姿を見て、俺も少しは溜飲が下がる思いだ。我ながら小さい人間だと思いが、この場に杏が居るわけじゃないので気にしない。

「んな細かいこと言うなよ、ほら、こっちの苺あげるから」

「これ苺味の飴じゃないですか？、いったい何個持つてるんですか!? というか、本物の苺とまがい物を同列に扱わないでください！」

「まがい物とな!? この飴作った工場の人間に謝れ」

「幸希さんのほかあ〜！」

子供じみた言い合いが、この後しばらく続いた。それから芽衣が機嫌を直す為に、結局、プリンセスなクレープ（税別二千円）をもう一つ買い与える羽目になってしまった。とんだ散財だ。

デートと一口に言っても定義は人によってそれぞれで、何を持ってデートと言うべきなのか、そこらへんの知識を雑誌と少女コミックでしか知らない俺は……つまるところネタが尽きてしまった。

「なあ、何したい？」

「もはや考える事すら放棄しましたね。それ、わたし以外の人相手に絶対言わないほうがいいですよ。減点対象です」

「いつからテスト化したんだデートは」

世の男共が尚更苦悶に喘ぐ事になるじゃねえか。何、デートって赤点とかあるの？

クレープも食べ尽くし、プリントシールが取れる機械のあるゲームセンターに言っただけ遊んだりしたら、遊びつくした感で一杯になり徒然となってしまった。正直な所、ちよつと飽きてきた。

「そうですねー、結構いろんな所も回りましたし、ここらへんでする事って後何がありま

す?」

「そうさな、あと残ってるのでデートっばい場所って言ったたら」

言いさして俺は先行する。奔放に歩き回る俺を芽衣は何も言わずについてくる。このデートを通じて、俺がそういう人間であると理解したのだろう。気を使う必要がなくて大変楽である。将来良い女になるかもしれない。

その頃には俺も杏と仲睦まじい町で一番のカップルとか噂されたい。というか噂を流して、事実婚みたいな状況を作れば或いは……

「街から離れていきますけど、どこに行くつもりなんですか?」

「デートのシメって言ったたら、二人つきりで楽しめる景色な綺麗な場所って相場が決まってるだろ。安心しろ、この街ただ一つのラブホに連れて行くわけじゃない」

「ラブホって、なんですか?　なんか有名な場所だったりするんですかそこ」

きよとんとした顔で小首を傾げる芽衣は、どうやらラブホを知らないらしい。マジかよ、そんな田舎に住んでんの?　田舎じゃやる事ないから毎日やりまくりって、本に書いてあったけど、まさか実家でやるのか!?

「あー、いや有名っちゃ有名だけど。そりやある意味好き合う男と女の終着点って場所だが、お前にはまだ早いな。それは何年か経ってからのしとけ」

「それじゃあ、何年たっても幸希さんが独り身だったら一緒に行きましょう」

「今のは聞かなかつた事にしといてやるよ。後々になつて、絶対後悔するから」
「……………」

小さな繁華街を離れて歩く事数十分。街から遠く離れ、簡素な住宅街ばかりの道を歩き続け、記憶の中に残つてる場所を懸命に思い出しながら進む。

これから行こうとしている場所は、俺がかつてまだ毛も生えてない子供だった頃、また父親が生きていた頃になんども通つた場所だ。怒られて殴られて、泣きながらいつもそこに一人で居た憩いの場所だ。

民家もまばらになつた道は、やがて舗装された道じゃなく大地が剥き出しになつたけもの道のようになつていた。小高い丘を登り続け、後ろで追隨する芽衣の呼吸が乱れてきた頃。よこはようやくやく開けた場所に繋がつた。

「わあ……………すごい綺麗、緑でいっぱい」

辺りを深緑で囲まれた丘の上は、あの頃と変わらぬ景色がそのまま残つており、柄にもなく感傷的な気分が湧き上がりそうになる。

全景に広がる景色に、芽衣は息を呑んで呆然と眺めていた。その瞳は、間違いなく輝いていた。

「どうだ、すごいだろ。ここらへんはな、なかなか人も来ないから結構穴場なんだよ。実際、俺はここで自分以外の誰かを見た覚えがない」

あるとしたら、それは俺と同じぐらいの苦痛や悲哀を懐いた奴だろう。街から離れたここは、逃げ逃れたい、何かに縋りたい。奇跡にも似たものを追い縋るために詭えたような場所にたっている。

事実、少なくとも俺はそれで救われた。我慢しようって気持ちで蘇って、程なく親父は死んだ。あの時は心底安堵したのを今でも覚えている。ただ……それだけで終わらなかった時のショックはもう思い出せないけど。

「いつもここには来るんですか？」

「いや、最近はずつと来てなかった。ここは、俺にとって要塞みたいな場所だな、逃げたい気持ちで昂つたらいつも来る場所だった。

いまじゃ逃げる前にぶん殴る方が早いから、ここに来る回数もめつきり無くなったよ」

そう、もうあの頃の弱い自分はいない。たとえ何があろうと、俺は耐える自信がある。少なくとも、今はまだ……

「昔の……、幸希さんの昔って、どんな感じだったんですか？」

「そんなの聞いたって、何も面白くないぞ」

口くな人生じゃなかった。口にするのも嫌になる程、思い出したくもない思い出でいっぱいだった。

言葉を濁したにもかかわず、芽衣は俺の内に秘める暗澹たる思いに気付く事もなく、さらに詰め寄った。

「え、良いじゃないですか。どんな男の子だったんですか？ その頃の好きな人とか、いたりしなかったですか？」

「好きな人ねえ……」

俺が初めて恋したのは杏だと自負している。だからって、それをそのまま言うのは、悟られてるとはいえ気恥ずかしい。

だから俺は、一番恋に近い話しをすることにした。

「そうだなしいて言うなら、あの頃の俺はマザコンだったから、お袋が一番好きだったかな」

「お母さんですか、なんか小学生の男の子らしいですねそれ」

「そうか？ 周りがどうだったかなんてもう覚えてねえよ」

「どんな人なんですか、幸希さんのお母さんって」

興味深く訪ねて来る芽衣は、純然とした興味のみでの問いなのだろう。母さんの話しをするのは、今の俺にはちよつとキツイ。

言い逃れようと画策し、俺は彼女の脇下に手を突っ込み思いつきり抱き上げた。

「わっ、わわっ！ な、急に何をするんですかっ!？」

「辛気臭い話するぐらいなら、ここからの眺めをもっと楽しめ！　話なんてどこでだって出来るだろ」

「言いたい事はわかりますけど、だからって、これわわっ……！」

四肢をじたばたさせる芽衣をそのまま持ち上げたまま肩車する。背も小さければ体も小さい彼女は、担いだ所で重さなんて感じられなかった。

これが逃げだという事はわかつてる。だが、ここは逃げる為の場所で、それなら逃げたつていいと思った。企図せず本来の目的として訪れた事になった場所で、俺たちは童心に返ったようにはしやぎまわった。

走り回り疲れた俺たちはそのまま草むらに仰臥し、暮れなずむ空の色を見上げていた。夕焼け色に染まりつつ空模様は、どこまでも雄大に広がり俺たちを見下ろしている。

「そーいや、今日で実家に帰るんだよな」

「はい。幸希さんに騙されるままに来ちゃいましたけど、兄が元気そうにやってる姿も見れましたから、結果オーライですね」

「まさかあそこまで見事に騙されるとは、思ってもみなかったからな。そんなに似てたか春原の声と」

「そっくりです。だからいまこうしてここにわたしが居るんですよ」

隣に並んで寝転がる芽衣が、ふいにこちらに視線を向けてきた。悪童のような稚気を窺わせる笑顔で。

「あの時の声って、本当に幸希さんだったんですか？　ちよつと信じられないぐらい似てたので、いまもう一回やってみてくれませんか？」

「なんだよ芽衣、僕の言ってることが信じられないってのか？」

春原の声でそう言うと、芽衣は驚いたように目を見開いて大きく笑った。

「うわっそつくり！　あははは、本当なんですね。なんか地味ですけど、凄い特技ですね」

「地味って言うなよっ！　これで何回も僕を騙したんだからな！」

「あはははは、幸希さんの顔で声が兄だと、なんか変な感じがします」

この特技は初見こそ彼女のように腹を抱えて笑うが、なんだか披露するとあつという間にウケが悪くなるので、芽衣が此処までおウケするのが気分が良くなった。

だから俺は、他のレパートリーも披露することにした。喉を軽く揉みほぐし、声を整える。

「——あ、あのトランプ占いってご存知ですか？　よかつたらわたし、占いましょうか？」

「掠さんの声も!?　えっ、どうやって出してるんですか？」

「なんてこたあない、ちよいと声帯をいじってるだけだ」

「その声で男口調はやめてください。なんか掠さんが穢された感じがしますから」

目を眇めて批難され、俺は大人しく声を元に戻す事にした。しかし、酷い言いようだな。男口調の掠つても新鮮で良いじゃんか、岡崎はバカウケしてたぞ。

「ちなみに、この掠の声で春原を騙した事もある。手紙を書いて呼び出して、物陰に隠れて告白したら、あいつは涎を垂らしながら迫ってきた」

「うわあ、騙す方も最悪ですけど……お兄ちゃん」

呆れたように額に手を当て苦悶する芽衣。笑い話にするには身内相手は流石に無理だったか。スマン春原、お前の妹の中で、いま大きく株が大暴落したわ。

頬を撫でる風が冷えてきたし、そろそろ時間的にも厳しくなってきた。今のうちに帰らないと、日が暮れてしまう。立ち上がり背中に付いた草を掃い落とす。

「帰ろう。今夜中に実家まで帰るんだろ。日が暮れないうちに学生寮まで戻るぞ」

「そうですね、もうこんな時間です。今日は一日ありがとうございました」

「またいつでも遊びに来い。どうせする事なんて殆どない暇な毎日を送ってるんだ、少なくとも卒業まで暇だろうし」

無事に卒業できる保証もないけどな。いまだって停学中だし、このまま素行不良と出席日数が足りないとか幸村の爺さんに言われたらどうしよう。ま、俺も危ないけど、そ

れは春原もか。岡崎はなんだかんだで最近学校もちゃんと行ってるし、あいつは多分大丈夫だろ。

夕焼け空を背に向け芽衣と一緒に丘を降りる。次はいつこの場所に來ることやら、出來ればそんな事態にはなりたくないな。

※

日も翳り肌寒い風が肌を撫でる中、芽衣は幸希の背を見ながら共に丘を降りていた。次はいつ、彼とこのようにして共に歩く日が訪れるのかもわからない。これから帰らなきゃいけない実家は、この街とは物理的に距離が開きすぎている為に、そうそう簡単には再訪することは敵わないかもしれない。

兄の様子を見るために、学校も随分とズル休みをしてしまった。もともと芽衣自身が望んで訪れたので、それに後悔はないが、成績に反映してしまうかは心配だった。

それでも、来た価値はあったと自信を持って断言出来る。前を歩く彼が騙さなければ、こんなに多くの人たちと知り合う事も無かった。兄の生活環境が心配だった彼女としては、傲慢すぎるぐらいに自由奔放の快樂主義者みたいな幸希が友人だと知って、少しだけ不安にもなった。しかし実際にこうして彼と会話を交わし、その為人を知った今

では、そんな気持ちも消えてしまった。

不器用なまでの愚直さを持つ彼は、藤林杏に恋をしている。それは芽衣の目で見て一目瞭然だった。だからこそ、今日のデートで交わした言葉の端々に杏の姿が見え隠れした時には、思わず目を逸らしてしまった。

彼が好きな女性には、既に岡崎朋也というであろうことか彼の親友の事が好きだった。

なんて理不尽な偶然だろうか。無駄な恋でしかないと教えれば、彼は諦めるのだろうか。でも、それは出来ない。こうも芽衣を良くしてくれた幸希を、失意の底に突き落とすような真似は、この背中を突き落すような事は彼女には出来ない。

「面白いや、杏の家に泊まったんだってな。その……どんな感じの部屋だった？」

「変態みたいですよそれ。普通の女の子らしい部屋でしたよ、それがどうかしましたか？」

「いや、別に。ちよいといま興味がふと湧き上がったんでな。それだけだ」

なんでもないように努めた口調で、幸希はわかりやすいぐらいに肩を揺らしていた。また一つ、彼女の事を知れたことを喜んでいられるだろう。

そう思い知らされるたびに、芽衣の胸中には暗澹とした思念が広がる。また一つ、彼の叶わぬ未来を生み出してしまった。わかってしまう度に、芽衣の表情が翳る。

「別に、お前が後ろめたいと思う必要はないと思うぞ芽衣」

「えっ——?」

いつの間にか幸希は前を歩いているのではなく、俯く芽衣の隣を肩を並べて歩いていった。悠然と言い切つて、子供みたいな笑顔を向ける彼が芽衣には理解できない。

「今日一日、俺があいつの話題になるとそうやって暗い顔してたろ。ちゃんと見てたぞ」「それは、そのちよつと疲れたりしてたと思えますよ」

咄嗟に口に出た言い訳は苦しく、それがさらに芽衣の内心を言い当てられた証左となつてしまう。

そんなにもわかりやすかつただろうかと、彼女は内心で己の表情のあけすけのなさを嘆いた。もう少し大人であれば、或いは彼を欺き続ける事も出来たかもしれないのに。

「その顔、やつぱり岡崎の事知ってるんだなお前も。なかなか鋭いな。春原の妹とは思えないよ」

「……………知つてたんですか? その、杏さんの好きな人の事」

「こちとら一年間ずつとあいつの事を見て、あいつの事を考えて来たんだ。わからないわけないだろ。ま、最近になって言質を耳にしたんだがな」

「それじゃあ、どうして……………どうしてそこまで」

届かぬと、叶わぬとわかつていてなお、想い続けるのか芽衣には理解出来ない。堰きたてられるように言葉が出て、でも彼女が本当に聞きたい言葉がなかなか出てこない。

喘ぐように溢れ出る言葉をいったん抑え込み、芽衣は大きく深呼吸をした。喉を閉じて、口で息を吸い、吐き出す。その間、幸希は静かに呼吸が整うのを待っていてくれた。呼吸が整い、夜気の気配を感じつつ芽衣は喉を開いた。

「なんで……叶わないってわかって、そんなに自身いつぱいなんですか？ わたしが言うのも酷いとはわかりますけど、杏さん岡崎さんにべた惚れな感じでしたよ!」

猛然と疑問を巻き散して、それが自然と語気が荒くなつていくのを芽衣は止められなかった。

脳裏を過ぎるのはどれも疑問ばかりだった。我ながら子供だというのはわかっている。きつと彼は、自分なんかが想像もつかない大人な考えを持っているのかもしれない。でも、子供のように笑って怒る今日一日の顔が思い浮かぶたびに、そんな考えが思い過ぎしなのかもしれないと、止まらなかつた。

「幸希さんの事なんて、ただの友達ぐらいにしか見てないとか、わたしには見えませんでした! それもわかってるんですか!」

「わかつてるよ、あんまり打ちのめすな死にたくなるだろ」

「嘘つきつ、全然そんな顔には見せませんッ!」

「凄いだろ？ これが榊原流の隠匿術だ。覚えておいて損は無いです」

あくまで子供扱いする幸希は笑みを絶やさない。こんなにも芽衣が責めるように質

問攻めしているのに、泰然としたままで少しも同様を見せない。だから、芽衣は口を開くたびに自己嫌悪の嵐に曝されている気分だった。

本当は彼を打ちのめしたいわけじゃない。彼女の言葉で本当に傷つかれたら、きっと己も同じだけの傷を負うかもしれない。支離滅裂なのはわかってるけど、それでも彼女は口を噤むわけにはいかなかった。

榊原幸希が藤林杏を想い続けるという事は、妹である藤林涼の失恋を意味するからだ。

何故こんなにも身近で、こんなややこしい恋愛をしているのだろう。偶然にしては惨酷すぎる。

「諦めようって思ったことは無いんですか？」

「シヨックな時はあったさ、でもまあ、仕方ない何とかなるこれからだ」

「どうして……どうしてそんなに」

この一途さが姉でなく妹に向いていたら……

だがそれは考えるだけ益体の話だ。もう彼らは思いを止められない。

〝どうしてこの人は、こんなにも真っ直ぐに想い続けられるのだろう〟

冷静になってきた思考でふと思ったのは、彼のこの愚直さが、どこから燃料を得ているのかという事。杏が朋也を想うという事は、永遠に車線の違う列車で追いかけるに等

しい行為。徒勞にしか終わらない筈。なのに……

「相手は違う人が好きなのに……なんで幸希さんは、諦めようって思わないで、自身満々なんですか？」

「決まってるだろそんなの」

ふいに幸希の眉が真つ直ぐになり、不敵に傲然と口元を歪め微笑した。答えるまでもないと、全身がそう語っているようだった。

「——俺が杏を好きだからだ。それだけあれば十分だろ」

「それだけ、って。それだけ……？」

「当たり前だ。俺は俺の想いの強さを疑わない。あいつの為なら地球だって真つ二つに割る自信がある！」

“なんて単純な”

思わずおかしくなつて芽衣は失笑した。それほどに彼女はいま当たり前の事を思い知った。一十一は？ 問いかけ続けて二以外の答えを求め続けたに過ぎない。哲学とか数学とか関係なしに、それはわかりきった答えなのだ。問うまでもなく、幸希は杏が好きだから、ただそれだけの純然たる想いがあるから、彼は諦めないのだ。

「あははつ、馬鹿みたいです幸希さん。それだけで本当に女性が口説けると思ってるんですか？」

「俺なら何とかする。どんな手を使つても杏をものにする。——岡崎を物理的に消すつてのはしないから安心しろ」

「はあ、兄の友人は変な人ばかりです……」

これまでの陽平の友人遍歴を振り返り、大きく溜息を吐いた。そして、芽衣は何よりも言わなくちやいけない言葉と共に、頭を下げた。

「すみませんでした。勝手な事ばかり言つて」

「あ？ 何が？」

「わからないなら良いです、とにかくわたしはやっぱり子供だつてわかりました。それだけでも、来たかいがあります」

「いやどう見ても子供じゃんお前。何言つてるの？ 飴ちゃん食うか？」

「そういう意味じゃなくて……つて！ これ千歳飴じゃないですか！ どうして持つてるんです!」

「いや、もし生意気な事言つたりムカついたら、これでズブツといこうかと……」

「いやあ〜！ もう最低です!」

丘を下り終わる頃には、二人は登った時よりも晴れやかな心持ちで笑顔を振りまいていた。学生寮に戻った頃には、きつと芽衣を見送る為に見ただけじゃなく、その友人の朋也や藤林姉妹も現れるだろう。

その時、彼らが仲睦まじく歩く二人を見た時、一体どんな反応を示すのか。それはそれで芽衣には面白そうだと、気になった。

椋を前にしたら、きつと後ろめたくて燦然とした笑顔を向ける事は出来ないだろう。彼の思いの深さを思い知った今となっては、彼女には説得など不可能だとさとした。世話になるばかりで何も返せないのは心残りだが、仕方ない。いまは清々しくそう思える。

子供でしかないと気付いたから、自分が割って入れる関係じゃないと理解したから。少女はただ、次に会う時もこうして笑顔のままにいる彼らを願い、兄の待つ学生寮へと足を速めた。

空に広がる夕焼けは、朝と夜の合間に訪れる変化の最中にある空模様だ。そんな無窮の夕空を見上げて、芽衣は己もまた変化をし続ける途中でしかない子供だと心地よく思い知った。

少女の時間が終わる頃、もし幸希が誰とも一緒に居なければ、今日のような空模様の下を共に歩みたいと——そんな自嘲すら湧き上がる思いを抱きつつ。

第十九回：露見と告解

人が生きていく上で重要なものは何か——言うまでもない水と食料だ。

この時代、日本で水を手入するのは容易くプライドを捨て去れば公園の水でも十分だが、食糧はそうもいかない。野草や木の実やきのこ等、自然界には多数の食糧が生息し今か今かと俺の胃袋にノーロープバンジーをするのを楽しみにしている食物もあるだろう。しかし、人間まともな社会生活を送るには金銭を対価に食糧を得なくてはいけない。

金銭を手にするには相応の時間を対価に、それ以上の労働という隷属に甘んじてようやく手に入れる事が出来る。もつとも、他人から強引に借りるといふ手もあるのだが、男を下げたくないの俺はやらない。もうやらない。

というわけで労働である。隷属である。

いまの俺は一己の奴隷であり、道具である。

雇用主という名のジジイにこき使われる金の奴隷なのだ。

「時に幸希、酒というのは何故生まれたのだと思う」

「酔っ払ってなきややってらんねえ世界だからだろ」

総白髪の頭髪を後ろに流した壮年のジジイは、時折こうして突発的に抽象的な質問を投げかけてくる。だから俺も突発的に思いついた答えを適当に口にした。

問答自体を重要視しているわけでもなく、ジジイは「ふむ」と小さく声を漏らした。グラスをトーションで拭く音だけがやけに大きく聞こえる。

時間は深夜に差し掛かり日にちを跨ぐようとしている頃。実家に帰った芽衣はここを都会と言っていたが、都会はこの時間でも活気がある。しかし、いま店内には俺とジジイしか——つまりはスタッフしか居ないのだ。

これが都会なら飲んだくれの一人や二人ぐらいカウンターに突っ伏していてもおかしくない。

暇なら俺の仕事も少ないので大歓迎なんだが、これが毎日続くと店の存続にかかわる。つまりはバイト代が入らなくなってしまうということ。これはいただけない。取入がガクツと下がってしまうのはマズい……が、だからといって俺に客を呼び寄せる術などあるはずも無く、仮にあったとしても行動に移す意欲が無い。

洗い終わったグラスを全て磨き終わると、ジジイが顎鬚を撫でながら視線を向けてきた。

「酔わなければ生きられない世界……それがお前の世界という事か」

「……は？　なんで俺個人に限定なんだよ」

そりやたまに酒を飲んでしまふ事もあるが、春原や岡崎の証言曰く俺は酒に弱く、しかも悪酔いする性質らしい。だから滅多に呑まないし、そもそも飲んでいい歳ではないと言われてしまったらそれまでだ。声高に主張するつもりもない。

なのにジジイはまるで俺が酔っ払いを対象にした答えを、さも本人の主観から発せられたように語る。

「違うのか？」

「違う」

「だがこれっぽっちも思っていないわけではないだろう。でなければそんな言葉が出るわけがない」

反論する言葉が見つからずつい視線を逸らしてしまった。

ちようどそのとき来客があった。——俺にとってそれはある意味で救いの来訪者だった。

「いらつしや……んだよ、またジジイかよ」

反射的に扉へ顔を向け嘆息する。直後、後頭部に衝撃が奔った。

鈍痛に眉を蹙め振りかえれば、ジジイがアイスピックを逆手に持っていた。なるほど俺はこれで頭をドツかれたのか。

「口が悪いぞ幸希。幸村様はウチの常連だ、ちゃんとした態度で接客をしろ」

「わあつてるよ。いらつしやいませ、コンバンワ」

「ふむ、なるほど……よく続いているようじやな榊原。関心関心」

「そりやあな、アンタが保証人になつてくれた仕事だ、流石にバックレかます程に落ちぶれちやいねえよ」

淀みなくいつものように奥のカウンター席に、歳で曲がつた腰を下ろした幸村のジジイは満足げに——ただでさえ皺だらけの顔を——皺くちやにして微笑んだ。

おしほりを手渡しながらジジイが昔を懐かしむように口を開く。

「懐かしいな、ここに来た時のお前の顔。まるで昨日のように鮮明に思い出せる」
「長い人生を振り返る前に酒を頼めよ」

学校内でいつも交わすような口調で催促すると、隣のマスターの視線が再び厳しくなる。だけどそれだけで特に言及はされなかった。もう何度も繰り返したやり取りだから、呆れたのか諦めたのか……どっちにしる後でまたくどくど説教されること間違いないだろう。

「そうだったな、それではスコッチをロックで頂こうか」

「種類はいかがいたしますか？」

「アイラで頼む」

マスターの短い質問に、これまた簡潔な答えを返し幸村は手に持っていたおしほりを

綺麗な筒状に丸めカウンターの脇に置いた。

もう棺桶に入ってもおかしくない歳のくせして相変わらず癖の強い酒を好んで飲む幸村は、カクテルなどは頼まずいつも決まってウイスキーを注文する。それもバーボンやブレンデッドではなく、シングルモルトばかりだ。

注文を聞いたマスターは慣れた動作で背後に陳列するボトルを眺め、逡巡の後に一本のボトルを手に取った。

「こちらの、ブルイックラディ『スコティッシュバーレイ』というアイラ島原産のシングルモルトをお勧めしますが、よろしいですか？」

「初めて見るボトルじゃのう、まるで青空のような色をしとる。一見するとウイスキーのボトルとは思えんデザインじゃ」

興味を示した幸村はしげしげとマスターが目の前に置いたボトルを眺めている。それが嬉しかったのか、マスターはそのウイスキーに関する知識や雑学、そしてこのボトルが生まれるまでの出来事などを掻い摘んで説明——ではなく、あくまで会話として成立するように朗々と語り始めた。

手持無沙汰な俺は二人の酒談義を尻目に酒の並んだ棚に視線を向け、改めてその量と種類の豊富さに思わずため息を吐きそうになった。

これらの酒全てを覚え理解しているマスターは、それがバーテンダーとして当然の基

礎と言つてのけるが、ハツキリ言つてこんな興味が無けりや……いやあつたとしてもこの量の前には戸惑うだろう。そりや今はバイトとしてこのカウンター内に立つからには俺もバーテンダーとして、カウンターの向こう側に座る奴には認識される。どんなに未熟だろうと、客からしたら俺はプロだと思われる。だから新人だから分からないの出来ないだのと客に暴露するのはもつての外……らしい。

生来勉強なんでものに興味も無く、机は枕だと言つてはばからぬ俺は当然ながら酒に関する知識はほぼ皆無といつても良いだろう。そもそも勉強する気がないのだから仕方ない。

だからこうしてマスターがロックグラスに削り出した丸氷を入れ、酒をキツチリとワシヨット注ぎ、その後で少し注ぎ足すのを横目で見てゐるしかない。これで給料を貰うのは、流石に忍びない。俺でも悪いと思つてしまふ。よつて——いまの俺に出来る仕事をすることにした。

「にしても珍しいな、あんたがこんな夜更けに来るなんて。いつもならもう寝てもおかしくない時間じゃないのか？」

ただ酒を作るだけなら客と向き合う必要はない。だがバーテンダーの仕事には会話も含まれる。会話の端々からその人物の特徴を捉え、趣味趣向から好みの味まで聞きだし記憶する。とジジイならそう片つ苦しく言うが、要は話し相手になるのも仕事の内つ

てことなんだろう。

幸村は顔見知り所か同じ学校の教師と生徒。本来ならあつてはならない場所でのありえない邂逅ではあるものの、気にする事もない。

俺が此処に立てるように手助けしたのがこの爺さんなんだから、気負う必要もない。

「お前の言うとおり、寝る寸前まで準備しておつたのだが……少々お前の事が気になつてな。こうして顔を見に来たんじゃよ」

グラスを傾け喉を鳴らすと、丸氷が当たつて僅かに湿つた髭が静かに揺れた。

「サボつてるとでも思つたのか？」

「まさか。学校での生活態度には呆れる先生方もおるが、普段の生活に置いてならお前ほど想いやりがあつて勤勉な生徒を儂は知らん」

「……なにか悪いモンでも食べたのか？ それとも余命でも先刻され——いでっ！」

無言で頭を叩かれた。勿論下手人はマスターだ。

「お前と幸村さんの仲はよく知つてているが、あまり過ぎた口を利くもんじやない」

「わかつたから、気をつけるよ」

「なに気にすることはない。こいつの愛想のない口調には慣れたもんじや、これもまた個性だろう」

「それはそれは、過ぎた口を利いたのは私の方でしたな」

なにが面白かったのか、二人は静かに笑い合つた。ジジイ二人が向かい合つて笑い合うという構図は、俺からしたらむしろこっちの方が笑える。

俺の顔を見に来たと、そう言つてこんな遅い時間に訪れた幸村は再びグラスを傾けゆつくりと味わうように酒を飲んでいた。学校内の教師の中で、唯一俺とまともに接するのは彼だけで、だからこそさっきの言葉には不意を突かれた。

嫌われ拒絶されるのに慣れ切つて冷え切つたこの心には、彼の言葉は熱過ぎる。火傷しそうなぐらいの熱を孕んだ言葉は、反射的に俺を遠ざける。熱したやかに誤つて触れてしまった時のように、感慨を懐く間も無く遠ざかつてしまう。それは驚愕であり、またある種の憧憬がそうさせるのかもしれない。

既に妻に他界されたにせよ子宝に恵まれ、真つ当に育ち孫まで居るといふ幸村の歩んできた人生の旅路。それは俺がいくら願つても手に入らなかつた家庭という暖かなものを持つ者の道。いわば彼はその成功者なのだ。きつとこのまま、穏やかな目つきと同様に安息の死をいつか迎えるのだろう。——それが、たまらなく羨ましい。

「なあ……爺さんには無いのか？ どうにもならない事に、憧れる事は」
「こりやまた唐突だな。そうさなあ、そりや六十年近い人生を歩んできたんだ、それなりに上手く行かない事など沢山あつたさ」

「そんなとき、どうしたんだ？ 諦めるのか？ それとも——」

それとも、周囲の何かを憎むことで、その感情を閉ざしたのか。

継ごうとした言葉の隙間を埋めるように、幸村が口を開いた。

「——忘れてしまったよ」

「……わすれただけあ？」

「人間の一生は存外長く思えてのう、歳を取ると些細な事を思い出すのも一苦勞だ」

還曆を前にした老人は此処ではない、どこか遠くを眺めるような目でそう呟いた。それは俺が良く知る感情を瞳に湛えていた。父親を亡くしてから母親がよくしていた、回顧の瞳だ。

あんな父親でも、母さんにとっては必要で……大切だったのだろう。それがたとえ一方的であつても。

「浮かない顔をしているな。何を考えている？」

間の抜けた幸村の声が、思索の海へと沈みかけていた俺を引き上げた。

「別に、今夜の飯は何にしようか考えてただけだよ。そろそろ上がりの時間だからな」

「そうか、あの方は今日も変わらぬ様子かの」

「変わってくれたらどんだけ救われるか、俺が此処にいる時点でそれがありえない事だつてわかるだろ、あんたなら」

そう、ありえないんだ。どんなに願つてもあの人は変わつて……いや、戻ってくれな

い。壊れた時計の針を巻き戻しても、秒針が時を刻むことは決してないのだ。時間は、逆行しない。

教師という立場と、保護者代理という役割を果たしてくれている幸村は俺の「事情」をよく知っている。だからこうして時折、暇を見ては俺にこんな質問をしてくる。本人としては善意から心配してくれているのだろうというのはわかる。けど、それでもあまり掘り返して欲しくない話題だ。

誰だつて暗い話は好きじゃない。物語として、架空の出来事としてなら別かもしてないが。

だから俺は誤魔化す様にわざとらしいため息を挟んで言葉を発する。

「もう良いだろ。あの人の事は俺がこの先一生背負うべきものなんだ、だから爺さんは気にしないでくれ」

なるべく棘のないように気をつけながら言った言葉を受けて、しかし幸村の表情は寂しげに、それこそ今すぐにでも棺桶に入ってもおかしくないような顔をしていた。

マスターは何も言わずに氷をアイスピックで砕いて球体を作っていた。彼もまた事情を知る一人、その職業に相応しく感情の機微を悟ったかのように我関せずを貫いている。

丸氷を作る為に不必要な部分をこそぎ落とす作業を見ていると、削り落とされる氷の

破片がまるで、自分にとって不必要なものを捨てているようにも思えた。無情にも溶け消えていく破片を見捨てるには、それこそ氷のような冷たさが必要なのかもしれぬ。

愛の尊さをこの世の何処かで誰かが口にした。

曰く不滅だと。はたまた美しいものだ。それは決して朽ちる事ない赤々と実った果実のようだ。この世のどこかで誰かが口にした途端、瞬く間に伝播し今では定番となり様々な美辞麗句で飾り立てられ奉られている。

不満があるわけじゃない。むしろ自分もまた一人の少女に恋し愛すことを目的に生きていくような人間だ。恋愛感情に関して否定的になるつもりは一切ない。

恋は素晴らしい。こんな何も無い人間にさえ生きる糧と目的を与えてくれるんだから。

一歩一歩と前へ踏み出す毎に陰鬱な気分になりつつある身体が、彼女の事を考えるだけで羽が生えたような軽い浮遊感を覚える。

今夜もまた始まる——けれど、投げ出すわけにはいかない。

幸村にも言ったが、これは俺が背負うべき、いや拒否権も選択権も始めからありはしない当たり前の負債なんだから。

アパートの前は俺以外の人通りは無かった。この時間、こんな何も無い住宅街に用の

ある人間なんか居やしない。そんなのは当たり前でわかっている事なんだが、どうにも警戒心が強く軽く周囲を見渡してしまう。

闇夜の先を見つめてもなにも映るわけもなく、ただ寿命の近そうな街灯が点々と建ち並んでいだけ。

「……………ふう」

口から漏れ出た吐息は人影が無かった事に対する安堵か、それともこれから受ける仕打ちへの憂鬱さから出た溜息か。確かめるにはもう時間も経験も足りなかった。

「絶対にかか企んでいる」

確信を持って内心でそう断言した杏はその日、幸希の本心を探るべく放課後から彼の動向を観察——否、監視していた。あの未遂に終わった交通事故から数日、杏の頭の中ではそれだけで埋め尽くされていた。

不可解な動向の幸希のおかげで彼女は隠れ蓑を失い、想い人が——元より近いとも思っていないが——遠ざかりつつあり焦っていた。

このままでは自分の周りには何もなくなってしまう。孤独にも等しい孤立への恐れが原動力となり彼女を行動へと急き立てた。その根源の理由すら曖昧なままに……。

幸希を見つけるのはそれなりに苦労したが、以前陽平や朋也の口から彼がバイト三昧の生活をしているのを耳にしていたのを思い出し、その中で常に変わらず働き続ける店があるのも思い出した。基本的に高給で日雇いの肉体労働から工業高付近の工場でのライン工と範囲は広いが、その店は商店街にほど近い場所に建った小さなBarらしい。

Barという店がどのような店であるのか概要だけではあるが知っている杏は、始め耳にしたとき眉を蹙めた。お酒を主に扱う飲食店など、未成年である幸希が働いていいような場所ではない。クラス委員を務める杏がそれを易々と呑み込むはずも無く当然一度は注意しようとも思った。——が、朋也と陽平の二人に真面目な顔で止められたので未遂に終わったのが懐かしい。

太陽も完全に身を潜め月が煌々と街を照らす下で待つこと数時間。我ながら忍耐強いものだと関心しながら待つっていると、目的の人物が重々しい扉を開けて姿を現した。

“やつと出てきた。つたく、どんだけ待たせるつもりなのよあいつは。年頃の女の子が歩いている時間じゃないんだから、サッサとあがりなさいっての”

暴論を展開しながら睨む姿は、巡回する警察が目によれば職務質問をせざるを得ない妖しさだった。ちなみに家族には友達の家で勉強を教えに泊まると、前もって連絡済んだ。ここで用が済んでしまえば自宅に帰るしかないが、その時は架空の友人に風邪でも

拗らせて貰おう。

杏の存在など露知らず、幸希は真っ直ぐに歩き始めた。

——と、ここで当たり前の疑問が彼女の足をその場に縫い付けた。

「……そういえば、尾行した所でわかるようなモンじゃないじゃない」

そう、通常なら本心……つまりは他人の思考など外見をいくら注視したところでわかるはずもないのだ。

ドラマや映画では都合よく尾行していた人物の謎を視覚化した「何か」を運よく見つけられるが、現実そんな都合はそう易々と発生しない。だからこそ彼女はこうして意味もない尾行という選択肢を執ってしまう程に追い詰められてしまったのだ。

こと自分のみに関してはアドリブの効かない杏は、しかしそれでも今更尾行を止めて家に帰るなんて選択は出来ない。

「——ああもうッ」

こうなったらやけくそだ。せめて幸希の自宅だけでも割り出して帰るとしよう。そうして後日、彼の家に訊ねて直接問いただせばいい。

短い煩悶の後に下された決定に従い顔をあげると、既に幸希の姿は小さくなっていた。

このまま足踏みしていたら妥協案すら達成出来ぬまま終わってしまう。杏は慌てて

速足で彼の背中を追いかけた。感の良い幸希の事だ、少しでもあからさまな足音を立てようものなら忽ち自分の姿を見つけてしまうかもしれない。と不安に思ったものの、思つたよりも尾行は楽だった。

なにか考え事をしているのか俯きがちなのか頭が下がったまま歩く姿は、学校で見る榊原幸希とは重ならず違和感を覚える程だ。少なくとも杏は一度だつてこんなふうに弱い幸希を見るのは初めてだった。

そう、見た事が無かった。あんな風に悩む姿なんか。

だから相談してもらえないならそうして欲しかった。少なくとも彼女にとつては恩のある人。そうでなくても長い付き合いなのだから一言ぐらいあつても良いのでは、と思つてしまう。

たつた一言。たつた一言聞けばいい。

でも普段見せる姿が、たとえまやかしの作られた顔だとしても、それは相手が見せた顔として選んだ結果。ただ不自然だから、いつもと違うからという理由で日常の裏に潜むモノを覗き込むような事はしちやいけない。だから彼女はそのまま幸希の後ろ姿を黙つて追い続けるだけだった。

無音の尾行もやがて終わりを迎える。商店街から離れたある一角のアパートの前で立ち止まった幸希。

その瞬間、突然周囲を見渡し始めた彼に先んじて身を潜められたのは天啓とも言うべき反応だった。それまで案山子のように一点しか見ていなかった視線が、忙しなく警戒心を露わに見渡していた。

「この反応、やっぱり何か隠してるのね」

確信が更に真実味を帯びてきた。やはり幸希はなにかを企んでいる。でなければ人目を気にする素振りなど見せるわけがない。性格的にもありえない行動だ。

「……………ふう」

しばらくして誰も居ないと思ったのか、深いため息を幸希が吐いた。

ここにきてようやく彼の声を聞いた杏は、なんだか酷く懐かしく思えた。

停学期間という空白の時間。しかし幸希とは本来自宅謹慎していなきやならないのに出歩いているせいとか、何度か顔を合わせている。陽平の妹である芽衣がこの街にやってきた時だって、満足げな表情で帰った時だって。なのに一息ついた声だけで、なんとも言えない喉になにかが詰まったような感覚がして酷く居心地が悪かった。

言語化できない感情に渋い表情をする杏を余所に幸希はアパートへと近づき、一室の扉の前で立ち止まった。

細心の注意を払いギリギリまで近づき見れば、彼の背中がやけに小さく見えた。まるで叱られるのをわかつて家の扉を開ける事に躊躇する子供のように。

正直に言つてその姿に魅入られてしまった。この夜の間だけで自分の知らない一面を幾つも見せてしまったが、これは極めつけだった。これまで彼女が描いていた榊原幸希の像を砕くには十分な破壊力をもっていた。だから――

――だから、紫陽花のような髪の彼女は聞く事にした。

――声が出なかった。

扉に手を掛けノブを回した瞬間だった。覚悟を決めて、心を閉じ込め、感情を凍らせる準備を終えた所でそれは唐突に訪れた。

一定のリズムで鳴り響く電子音。

夜の静寂を切り裂く悲鳴のようにも聞こえた音に、俺は驚いて振り返った。

アパートの廊下に設置された蛍光灯の明かりがその姿を朧気に、けど確かな人相を照らしていた。

「……なんで」

口を衝いた疑問の言葉は何に対するものか本人にもわからなかった。次々と湧き上がる疑問が脳内を圧迫し、冷静な思考を許してくれない。

なんでここに？　なんで杏が？　どうして？　よりにもよって今、この場所に……。聞きたい事は山ほどあった。今ばかりは彼女との出会いに歓迎出来ない自分がいて、それに気づいて嫌になる。否定など、拒絶などもつての外なのに、本能的に忌避している自分がいた。

俺の言葉は正しく届いたのか、杏自身も予想していなかったのか電子音をまき散らす携帯を取り出すのに手間取りながら、だけでも視線は交わったまま。

「いやっ、その……さ……っ！　ごめんっちよつと待つてー！」

しどろもどろになりながらこうなった原因の携帯電話をようやく取り出すと同時に、始めから無かったかのように音が鳴りやんだ。

発信者が誰なのか確認するために開くと、それまで狼狽を見せていた杏の表情が冷めていった。いや、凍りついていた。

「嘘でしょ？　なんだっていまなのよ……」

どう形容すればいいのか、杏の顔は固まりながらも横一文字に引き締まった口がやりきれない怒りにも似た何かを微かに潜めているように見えた。

何かあったのだろう事は明確に見取れる、けどそんなことが瑣末に思えるこの状況にいい加減口を噤んでもいられない。幸いにも、彼女が狼狽えてくれたお陰で幾分かは冷静になってきた。

動悸が激しい心臓を右手で抑えながら、いつものような表情で質問する。あくまでも、悟られないように。

「で？　なんだって杏がこんな辺鄙な場所に、しかもこんな深夜に居るんだ？　いくら辞典があるからって危ないぞ」

「それは、その……」

バツの悪い顔。後ろめたい気持ちが見え見えの杏は、足元に視線を落として歯切れが悪い返答しかしなかった。と思いきや、数秒の後には気丈な面持ちで顔を上げ俺を一直線に見据えた。

凜とした彼女の表情は、やはり見ていて気持ちが良い。

「あたしは、最近のあんたがツ……!」

見惚れていたんだろう。だから気が付かなかったし失念していた。

着信音に驚いてノブを回したまま振り返ってしまったのを。僅かに扉を開けながら振り返ってしまったのを――

「いつまでそこに突っ立ってるつもりだテメエ！　さっさと飯の用意でもしねエか!」

半開きになった扉の奥から飛んできた怒声に、杏の表情は再度固まってしまった。

信じられない者でも見たかのような、思考停止に陥った人間の表情。防衛本能が働き一切の情報を遮断するような反射的反応。

「聞こえてんのか!? オイ、お前に言ってるんだよ——幸希ッ!」
無理もない。こんな「歪な光景」をみたら誰だってそう思うだろう。

反射的に俺は扉を乱暴に閉め、呆然とする杏の腕を掴んで走り出した。手を握らなかつたのは、こんな時に握つた所でもなにも楽しくないし、何より彼女との思い出に「アレ」を紛れ込ませたくなかつたから。

「ちよつ……と、こうき? どこ行くつもりよつ」

「とにかく、いまはここから離れた方が良く。それだけだ」

「でも、いまのつて!」

「いいから! 黙ってついてこい!」

思いがけず声を荒げてしまった。ああ、俺も相当にパニックってるらしい。まさか杏を相手にいまさら怒鳴るなんて思いもよらなかつた。時間をやり直せるなら今すぐ自分を殴り飛ばしたい。

思いやりに掛けた言葉に驚いたのか、杏もこれ以上の追求はしてこなかつた。それがさらに俺を苛んでしまう。

近所の公園まで走った所で立ち止まった。お互いに大した距離でもないのに息が荒いのは、ペースも考えずに走ったせいだろう。

「いい加減、手離してくんない?」

「あつ……悪い」

名残惜しく離れる腕を呆然と見ながら、黙ってしまった。どう切り出したらいいのかわからなかった。

なんかもう一度に殆どを見られてしまったから、なにかから誤魔化せばいいのか手をこまねいてしまう。まずは尾行してた事をネタにコメディ方面のギャグを飛ばして——
「で、なんだったのアレ?」

考えていた策は、しかし杏の初手によって一気に詰んでしまった。

顔をあげればそこには冗談を許さないという鋭い瞳。選択を誤れば誤魔化すどころか杏の俺に対する好感度すら地の底に落ちかねない、そんな緊迫感のある状況。

それでも……知らない方が良い事は、この世に腐るほどあるんだ。

「勝手に人のことストーリーカーしといて、随分な言いぐさだな杏」

「……それは悪かったわ、謝る」

だから彼女の人の好きに付け込むしかない。

「しかもこんな深夜に出歩いて。いくら高校生つつたつて親が心配するだろ、椋だつて」

「っ……っ！」

椋の名前を出したのは駄目押しだ。妹を何よりも大事に思っている杏だからこそ初めて効果がある言葉。それを噛み締めて……なのに杏の表情は逆に好戦的な色を帯び始めた。

「もとはと言えばあんたがっ……っ！」

「俺が、なんだっっていうんだ」

「いまはいい！ とにかくあたしが今聞きたいのは一つの事に関してだけ。これまでの全部が吹っ飛びかねない出来事に、正直頭がついてけてないし、こんな事聞くのは卑怯だつて……酷い事だと思ふよ。でも——」

熱が上がつたようにまくし立てる杏が聞きたい事。そんなのは言われるまでもなく理解出来た。

言葉尻が地を離れ浮き始めると同時に、どんどんと悲痛に歪む表情は、杏が心底人が良いのだと思える何よりの証拠だ。それでも、目の当たりにしたからには見て見ぬふりは出来ないのだろう。彼女の性格的にも、それは出来ないんだ。

そうして、決定的な質問がぶつけられる。

「——あの人は、幸希のお母さんなの？」

お母さん。母親。母ちゃん。ママ。

呼び方は様々だが意味するのは同じ、産みの親だ。

けど……。

「いや……あそこに居たのは『親父』だよ」

間違いないくそうだ。『母さん』はあんな言葉を俺に言ったりはしない。絶対に。だからあそこに居たのは、姿こそ見てないが間違いないく『親父』なんだ。

「嘘っ！ 幸希嘘ついてる。だって……だってあれは、どう見たって」

俺の言葉を否定しながらどこか決定づけられないのは、見てしまったからだろう。あの人の歪な姿を。その一人遊びの延長でしかない逃避を。

もう、誤魔化せない。

「でも『着ていた服』が男物だったろ、つまりはそう言うことだ」

「……っ!? それって……」

話すしかない。そう思いながら、これを告げたら俺はもうまともに杏とは交友を持ってなくなる。そんな悪寒めいた予感を感じていた。

だとしたら、恨むべくはあの瞬間に杏へ電話をしてきた者だろうか。投げやりになりながらも、俺は真実を告げた。

「そうだよ、おかしいだろ女なのに男物の服を着て、親父みたいな言動を振る舞って罵声を浴びせてたべらんめえ口調のあれが俺の“母さん”なんだよ」

それは、告解だった。

これまでの人生を懺悔する告白に違いなかった。

第二十回：君が好きだから

始まりはもう思い出せない。

気が付いた時にはもう俺は親父のストレスのはけ口でサンドバッグだった。

俺が産まれてある程度、小学生ぐらいまで育った頃、勤めていた会社が倒産し、再就職も儘ならず無職の期間が積み重なった時にはもう手遅れだった。手に職を持っていたわけでもなく専門的な免許も持っていなかった親父は、卒業して直ぐに就職した会社しか知らない男で、取り柄なんかなかった。だから無職の期間が長くなるほどに採用の可能性は減り、最後には就職を諦めてしまった。

無職になった親父は日々を酒を飲んで過ごしていた。ごく一般的家庭に生まれ育った親父は、人並みに臆病で人並みの精神力しか持ち合わせていなかった故に、生活への不安と周囲の視線に怯え逃避するように酒に逃げ込んだ。不安定な時間帯に目が覚めては、特に目的があるわけでもないのに徐にテレビをつけて安酒の飲んで潰れるまで続け、再び眠る。そんな毎日を通り過ぎていた。これだけでも最悪な奴なんだが、ギャンブルに手を出さなかったただけまだマシだろう。

とはいえ働き手を失った家計は崩壊の一途を辿り始めていた。人間一人分の水道ガ

又光熱費が増え——仕事をしていた時は忙しくてあまり家に帰らなかつた——酒代も馬鹿にならない。生活は苦しくなる一方だ。

案の定、一家の大黒柱が傾き収入がなくなり生活は一気に激変した。始めは失業保険も出ていたが、それもずつと貰えるわけもなくあつという間に苦しくなつていった。

人は水と食料が無いと生きていけないと、この時になつて初めて幼い俺は実感したのをよく覚えている。食べないと餓えるのだと、餓えたくないのなら金が必要なんだと。

母さんが働き始めたのはこの頃だ。家賃すら払えなくなつたら俺たちは雨風すら凌がなくなる。そうなればもう人並みの生活とは呼べない。だから母さんが働き始めた時、正直いつて俺は安堵していた。

これで元に戻ると——。

幼いながらに光明を見出していた俺は……しかし親父によつて絶望の底にまで、文字通り叩き落された。

「いいか？ 誰にも言うんじゃねえぞ」

これまで一度だつて聞いたことも無い様な声色で恫喝されて——地獄が始まつた。

「いつ、痛い……痛いようお父さん、止めてよ」

「黙れクソ餓鬼が。誰が喋つていいつて言つた、誰が泣いていいつて言つた。いつから大人に意見するような生意気な子供になつたんだお前は」

初めての暴行は頬を引つ叩く程度で済んだ。とはいえ小学生の子供が、本気になった大人の張り手をくらって平然としていられるわけもなく、太いゴムが千切れたような鈍い音と共に俺の身体は吹っ飛ばされた。

壁に打ち付けられ痛む身体を抱きしめて、わけもわからないまま顔を見上げて熱を持つた瞳で前を見ると、知らない他人が立っていた。そうだ、こんな表情をした父親を俺は知らなかった。頬はこけて目の周りは赤紫色に変色して、ボサボサの髪に無精髭を蓄えた顔は、見たことが無かった。

だからその時の俺は思った。

ああ、お父さんは悪魔に憑りつかれてるんだと。

子供にとって世界とは自己の知識の広さと同義だ。知っている範囲が世界の全てで、知らないものは存在しない。一般常識以前の、形成中の頭では悪魔の存在を否定していなかった。絵本で見た事がある、テレビで見た事がある、だからきつと存在すると。そう考える子供の世界は驚くほどに狭い。だから稀に、唐突に冒険へと飛び出す子がいたりする。未だ知らない、頭の中にある地図の外側を求めて。

同じように俺もまた飛び出そうとした。未知への好奇心からではなく、恐怖からの逃避を求めて。——母の存在が無ければ。

「こんなに腫れて、ごめんね幸くん、お母さんが一緒じゃなかったばっかりに、ごめんね

……」

涙声混じりの謝罪が耳元で繰り返される。

仕事から帰って来た母が俺を見るなり顔を青くして抱きしめてきたのだ。母親が大好きだった俺としては嬉しくもあったが、それでも身体の痛みが治まる事は無かった。

けど、味方になってくれる人がここに居ると理解して、俺はもう少し頑張ってみようと、耐え続けようと決意した。自分が居なくなったら、こんどはこの暖かな温もりを与えてくれる母が悪魔の標的になってしまいかもしれないから。

だから耐えた。耐えて耐えて耐え続けた。

皮膚が紫から滲んだ黒に変色しようと、何度も腹部を殴られ蹴られて血尿が止まらなくても、涙ながらに抱きしめてくれる母が居るから耐えられた——なのに。

身体中に残された暴行の痕を隠すのが難しくなってきた頃だ。いつものようにサンドバッグになっていると、たまたま仕事が早あがりだったのか想像よりも早く母親が帰って来たんだ。

家の鍵を持ちながら玄関を跨いで真っ直ぐに伸びる廊下の奥、その突き当りの居間で俺は蹲っていた。

この頃の親父のやり口は簡略化というかパターン化されていて、自分も余計な体力を

使つてストレスを溜めたくないから簡単な手段に訴えてた。まず腹部を二、三度殴つて蹲る俺の背中に回り込んで服をめくりあげ、剥き出しになつた背中に煙草の火を押し付ける。それも揉み消す様にはなく、優しく火種の部分が無くならないよう触れるように当てて。

じりじりと焼け付く音が、まさか自分から出ているとは思えずに絶叫を上げそうになる。が、ここで声を出すと親父は煙草をもう一本取り出してしまふ。だからいつもは我慢していたんだが、この日は出来なかつた。

母親が帰つて来た。玄関が開いて閉じる音を耳にした俺は、それが母の帰宅を意味すると分かつた。だからあわよくば今日の地獄はこれでお終いになるのではないだろうか、と希望的観測が頭を巡つていた。故に、俺は声を上げた……上げてしまった。

「ア——ツ!!」

大きく、けれど高音で。変声期前の子供が出せる限界の、超音波紛いの高音で叫びをあげた。

それはSOSの信号。救助を求める弱者の雄叫び。扉一枚を隔てた所でこちらを凝視して立ち尽くす母への救難信号。

でも——助けは来なかつた。

「声、出したな。じゃあもう一本だ。ツ何度言えばわかんんだお前は」

「……………え、あ？」

そんな馬鹿な嘘に決まってる。どうしてそんなことが……わからない。

当手を振り返って改めると、やっぱり混乱した。いつも味方で、傷だらけの俺を抱きしめてくれるのは母だけだったのに。もうあの慰撫が訪れる事はないのか、と再び熱くなつていく背中とは裏腹に意識が冷たくなつていった。

薄れゆく視界には、扉の向こう側で俺から目を逸らす母親の姿がやけに鮮明に映つていた。

母は確かに味方だった——ただし自分の。

今考えればそれも当然だ。あの家で父親はまさに絶対者として君臨していて、逆らうものなら手痛い仕打ちを受けるのは明らかだったんだから。母はただ自衛の行動をとつたに過ぎないし、そこに恨みなんかはない。でも、それでもあの頃の俺にそのシヨックは計り知れなかった。

その夜、焼けるような背中への痛みを耐えながら俺は家を出た。父も母も寝静まった深夜の街並みは怖いくらいに静まり返っていたのに、どうしてだか自分を受け入れてくれているような気がしてならなかった。

がむしやらに走つた。目的地なんてなかった。一步でも多く、あの父親から、あの家から、そしてそれを取り巻く環境、この街から遠ざかりたかつた。

何もかもが嫌で、そんな自分が情けなくて涙が溢れて、呼吸が乱れながらそれでも走り続けた。こんな街……大嫌いだと呪詛を吐きながら。

「つはあ……はつ、んくつ……はあ」

溜まった唾液をなんとか飲み干して、体全体を呼吸の安定に費やして、ようやく足を止めると視界は一面の緑に囲まれていた。

街の外れにある小高い山——いや、丘程度の高さだろうか。緑以外には何も無い殺風景なそこは、人の営みとは無縁のような神聖とも思える場所だった。

鼻腔を通り抜ける青々とした植物の香りに、木々の隙間を縫う風と梢の擦れ合う音。湿っぽいながらも暖かな空気が肌に触れ、万感の思いが溢れやり場を失って見上げた空には、眼下に広がる街の灯りよりも盛大な数ある星々の煌めき。人間の居ない世界は、しかし人間が居るよりも豊かさに満ちているのではないか、と思える程に目を奪われた。

「は、はは、ははははははッ……!」

笑える。本当におかしくて笑える。こうして大声をあげ人目も憚らず大笑したのは久しぶり……初めてかもしれない。

どんなに大声を上げようと所詮子供一人だ、周囲に林立する木々の葉擦れには遠く及ばない。だからこそ、俺は笑いが止まらなかった。

小さい。この小さな丘よりも小さい。なんて小さいんだ。

笑い過ぎておかしくなったのかそれとも疲労かはわからないが、気が付けば俺の身体は横になって星空を仰いでいた。視界に広がる満天の星空は一枚の絵画のようで、時間を忘れて見入ってしまう。もう、俺には時間とか親にばれるとかまた痛い目に遭うとか、そんなものはどうでもよくなっていた。

大丈夫だ、まだやれる。この丘がある限り、俺はまだ耐えられる。痛みも悲しみも、それによつて生まれる憎しみも、とても小さく——とても瑣末な事に過ぎないんだから。中天に輝く月の光を、俺はいつまでも浴びながら笑いの余韻に浸り続けた。

※

闇夜を頼りなく照らす街灯の、命をすり減らすように明滅し続ける音がやけに大きく聞こえる。

夏にはまだ早い夜の公園は少し肌寒く、そうでなくてもいまの彼女は身が震える思いでいっぱいだった。改めて思い知ったのだ、自分がどれだけ酷い仕打ちを彼にしたのか。その軽率な罪深さを。

「……………」

何か言葉を紡ごうとして口が開くも、音とも旋律とも取れないどつちつかずな空気が漏れ出るだけではつきりしない中途半端な行為。まるでいまの自分のようだ。

杏は隣に沈鬱な面持ちで座る幸希に何を言えば良いのかわからなかった。否、この場に置いて彼女の言葉は何を言おうと空々しく聞こえてしまう。無かったことに、逃げたくなるような状況を作り出した張本人がなにを言っても、虚しい旋律しか奏でない。枯れ木を打つような音は、残響も無くただ消え去ってしまう。

事の重大さ、彼がひた隠しにしていたものを暴いてしまった罪悪感に打ちのめされる。掠の為だとか、何を思って幸希は朋也をけしかけているのかとか、そんな「個人的事情」を免罪符にして掘り起こしていい墓ではなかった。

杏の心中にはもう幸希の企み事に関する猜疑心も関心も無くなってしまった。無くすことで少しでも報いようと、この関心こそが原因なのだからと、本心から突き放した。友達のこんな表情を作る要因をいつまでも持ち続ける程の恥知らずには、これ以上なりたくなかったから。

「それからは唯の消化試合みたいなものだ。殴られ蹴られ、酔っては蕙蓄垂れ流して説教して、捻じ曲がった人生観を語りながら殴る」

いつまでも沈黙していた杏の心中を知らぬ幸希は、それを促しているように受け取ったのか一息吐くと再び語り始める。

「ま、それも中学には親父が死んで終わったけどな。終わって、解放されて変わった環境は、母さんには毒だったらしい」

母親が話題に上り、幸希の顔が砂を噛むように歪む。彼にとって母親は唯一の支柱なのだろう、だからこそ平静ではいられない。——だからこそ、杏には不思議でしょうがなかった。

それほどまでに大切な話を、なぜ墓荒らし染みた行為で踏みにじった自分に語ってくれるのか理解出来なかった。藤林杏は彼に真摯な対応をさせる程の人間ではない、それは傍目に見ても明確だ。なのに、幸希の口は止まらない。まるで命令された事に忠実で、それ以外の行動を与えられない機械仕掛けの代物のように。

「俺にとって地獄からの解放は、あの人にとって樂園からの追放だったんだ。アレでも生涯の伴侶として寄り添うと覚悟を決めた相手だ、その伴侶の死は、心を壊すには十分な惨酷さを持つてた。」

後は、お前が見た通りさ。始めは親父を探して彷徨う程度だったんだが、日に日にエスカレートしていった気が付けばアレだ。生前の親父をトレースする事で親父を見出してるんだろ、丁寧に生活をなぞって自分は何も失ってないと、失った心で思い込ませてるんだ」

憐れ過ぎて欠伸がでらあな。そう鼻で笑いながら言い切った幸希の顔は、しかしやは

り苦々しく歪んだ、継ぎ接ぎの笑顔だった。

一つ頬を叩けば一人父親が蘇り、その父親相手に話しかける独り芝居が始まると、他人事のように朗々と語る幸希が、ますます杏の不鮮明な心をざわつかせる。

どうして彼はこんなにもなんでもない風を装って語るのだろうか。

だつて幸希は、榊原幸希という人間は誰よりも何処までも自分勝手に、自分さえ楽しければ他は割とどうでもいいと本気で思つてる人で、自身もそう言つて憚らない快樂主義者染みているのに——だつたらなんで。

なんであたしには、こんなに……。

今度こそ杏は絶えられなかった。罪悪感だけでも泣きそうになつてしまつた弱い少女は、押し付けられた誠意の重みに耐えられなくなつた。苦しくて、鳩尾の辺りを強く掴むが、掌が握りしめたのは衣服だけで他にはなにもない。心までは、掴めなかった。この結果を招いた杏には、むしろそれは当然だつたのだろう。

欲しかったのは純粹な質問に対する律儀な返答じゃなかった。彼女が真に欲していたのは恨み言。

自分を悪口雑言の限りを尽くして打ちのめして欲しかった。そうでなくてはつり合いが取れない。少し怖いのが、手を出されても文句一つ言うつもりも、根に持つことだつて絶対にしない覚悟もある。なのにそれらの悪意が自身に剥き出されることは無

かった。矛は、その威光を出すことなく奥へと押しやられてしまった。

榊原幸希は藤林杏を罰さない。まるで初めからそれらの感情を持ち合わせていないかの如く。

「そこまで考えが至って、杏は気が付いた。」

「ああ、そつか……あたし、甘えてたんだ。こいつに」

罰せられることで対等になりたかった。改めて友人として並び立ちたいのだ。負い目などなく、気の置けない友人として他愛ない話に花を咲かせ心にもない辛辣な言葉を浴びせられる、そんな居心地の良い関係を取り戻したいのだ。

それが他でもない幸希によって作られていた事を認識して、頼りきりだった自分に気が付いた。

「つまんねえ話しちまったな、忘れてくれ。ありえないと思うが、ちなみに岡崎や春原には言うなよ？」 面倒だし、あつちもそんなもん知りたくもないだろうしな」

「それは約束する。……絶対に言わない」

「絶対だぞ、言ったら……」

「——言ったら？」

意味深に言葉を溜めて、どういいうわけだか頬を染める幸希に向き直る。

ワザとらしい下種な笑みを携えて、彼は両手を上げ眼前で何かを摘まむような仕草を

した。

「す、すすすすかつ、スカートをめくるからなっ！」

「……………」

いつもなら即座に殴り飛ばす所だが、いまとなつては本気とも冗談とも取れる発言に杏は何の反応も示すことが出来ない。一言一言が何らかの意図を持つてるのだと思ひ始め、それが自分と彼を遠く隔てる「壁」のように思えてなにも出来ない。

ワザと場を盛り上げようとしているのだろう、と好意的解釈をした杏を不審がつたのか、拍子抜けした幸希は両手を下げ火の消えた顔で眉を顰めた。

「んだよ、怒るなり殴るなり凄むなりなんかしろよな。これじゃ俺が単なる変質者になるだろが」

面白くなさそうに唇を突き出す幸希は、次第に調子を取り戻したようにあつけらかなとし佇まいを直した。

両腕を組んでブツブツと独り言を呟く彼を横目に杏は考える。

思えば彼は昔から——いや、昔はもつと荒んでいた。少なくとも、初めて出会った屋上では。思い返せば、あの頃はまだ家庭環境の影響が大きく作用していたのだろうと考えられる。これだけの来歴を耳にした今となつてはそれも否定できない。

自分に置き換えても同じだけ荒れるだろうし、それ以上に、耐えきれることが出来な

いかもしれない。なのに、今ではその牙の影すら見えない。あるはずの牙を見せない。無くしたわけではないのは、今回の乱闘事件で停学となつた事実が証明しているが、少なくとも杏の前ではそういった素振りを見せる事は一切ない。

だから聞きたかつた。純粹に、他人の意思を介在させず、それを護りにすることもなく自分だけの想いを杏は口にした。

或いは対等になりたかつたが故に、避けられぬ“壁”を。

「……ねえ」

「ん？ どうした、そんな重つ苦しい顔してからに。生理か？」

「……どうして……あたしの前で、そんなに笑っていられるの？」

男としておよそ女にかける言葉としては最低の部類に入る発言を聞き流して、彼女は問うた。

斟酌など一切しない、直截な問いかけは彼女らしく真つ直ぐで、だからこそ鋭利な鋭さを持つていた。

※

「……どうして……あたしの前で、そんなに笑っていられるの？」

唐突に突きつけられた問いかけに、俺は一度言葉を失った。

息が詰まる。正面から向かい合っている筈なのに、背中を見られているような杏の瞳に、なにかこの質問には大きな意味があるに違いないと、本能がけたたましく告げている。

杏の顔はいつもと変わらず綺麗で、その表情はいつもよりも真剣味を帯びていた。それもそうだろう、さっきまで俺は彼女に問われるがままほとんどの事情を明かしてしまっただから。とはいえ、多くを語ったつもりは無い。あくまで掻い摘んで、本当に不味い話や、言いたくない事は言わなかった。云いたくなかった。

同情などされては今後、彼女の恋愛対象に上る事などほぼ不可能になってしまうからだ。

憐憫は感情を、価値観を固定化させる。枕詞のようにく〇〇だからくなどについて回り、いつまでもその領域から脱する事が出来なくなる。もし仮に同情から恋愛感情に発展しようものなら、俺は彼女への罪悪感でいっぱいになるだろう。

負い目を持たれたままの交際なんて、未来が無い。そんな鎖に縛るぐらいなら、俺は彼女の前から姿を消す。

だとしたら、この質問の意図はなんなんだろうか。

普通に考えれば——読み倒した漫画では——ここで告白、というのが理想のシチュ

エーションなんだろうが、如何せん岡崎朋也という越えられない壁が屹立している限り俺に勝算の芽はないだろう。いま告白しても杏は混乱するだろう。負い目から岡崎への想いを封印するかもしれない。だとしても、彼女自身を当惑させるような事はしたくない。

岡崎に古河渚という女をあてがおうとしている俺がなにを、と矛盾を抱えているかもしれないが、それでも彼女に要らぬ不安を与えたくはない。

だから誤魔化すように、けれど本心で答えよう。

言葉を紡ごうとした端に思い起こされるのは資料室に佇む少女の微笑み。全てを包み込む慈母のような少女の語った一つの自論。

『わたしは、わたしが大切に思う方の笑顔を望みます』

年下の彼女に教えられたそれは、確かに俺を導いてくれた掛け替えのない言葉だ。だから――。

「――君に、笑っていて欲しいから」

それだけは絶対と言い切れる。真っ直ぐに目を見つめてそう伝える。

俺は、あの杏に惚れたんだから。

「……………!!? あ、え……………ッ!」

陸に上げられた魚のように口を開けては閉めてを繰り返す杏の顔は、熟れたリンゴの

ように朱く色づいていた。おかしい、怒らせるような事を言つたつもりは無いのだが、それにしても辞典が飛んでこない。さつきもスカートを云々のときに辞典が来るかと思つたのになかった。

何度かして口が締まつた彼女は、そのまま狼狽えた様子で勢いよくベンチから立ち上がった。

「か、帰るつ……あたしも帰るからッ！」

「あ？　おう、送つてこうか？　夜ももう遅いし、危ねえだろ」

いくら女としては強いとしても、それは女止まりだ。悪漢にでも出会つちまつたら忽ち襲われるかもしれない。そうなったら、俺は犯人を生かしておくことが出来ない自信がある。

「いらないッ帰る！　じゃあね！」

「いらなっ!?!　……はい」

同行を拒否されては追い縋る事も出来ない。いらない人認定された俺は両肩に重い何かのしかかったかのように上半身が下を向いてしまう。いらない……俺はいらない子……。

彼女が踵を返し砂の擦れる音がした。止める権利を持ちえない俺はそのまま遠ざかつていく音をせめて聴き送ろうと耳をすませるが、二、三歩歩いた所で音が途切れた。

「今日は本当にごめんなさい。この事は、誰にも話さないから」

「気にすんな。それに端からから疑ってもない。お前がそんな奴じゃないのは知っている」

「……そう」

簡素な響きが帰ってきて、再び歩を進める音が聞こえ始める。遠ざかるのを耳で感じて、ようやく面を上げると杏の背中が夜の闇に埋もれはじめていた。その背中は、これまで見た何よりも小さく俺の眼には映っていた。

止めたかった。名前を呼んで、その背中を追いかけて、振り返った瞬間に抱きしめてこの思いを口にしたい。

自己満足だとわかっているけど、そうしたくてしようがなかった。だから俺は、せめてと思い、彼女に聞こえないまでの距離が開いた所で言葉を紡ぐ。

「どうしてって、決まってるだろ。そんなの……お前に心底惚れてるからだ」

決然と語る真実は、しかし杏の耳に届く事はなく遠くなる背中をさらに名残惜しく感じさせるだけだった。

※

「……………どうして」

少女の言葉は相手への問いかけであり、しかしそうではなかった。問いかける相手に決して聞こえぬ問いを問いだと言えるのならそうなのだろうが、少女のそれは問いというよりも自問に近い。

理解出来ない事実を目の当たりにして硬直した心は繰り返す。どうして、と。どうして自分でないのか、どうして……。続きを言葉にしては、さっきの彼の発言が真実味を増してしまう気がして、彼女は何も言えなくなつた。

そもそもどうしてこんな事になつてしまつたのか。

思い返せば始まりはあの人電話に出なかつたのが発端となるだろう。この深夜にも拘らず一向に帰る気配のない彼女を案じて、最近は滅法悩む姿が板についていた事もあつて電話を掛けたのに、声を聞く事は叶わなかつた。

もしかしたら何か事件に巻き込まれたのかもしれない。心配性の少女は彼女の身を案じる一身で、知る限りの知人に連絡をした。女性関係の知人行方を知る人は居らず諦めかけた。最後に駄目元で連絡した相手は、これまで掛けた事のない相手で期待は薄かつたが、その分信憑性は高かつた。祈るような気持ちで学生寮に電話を回すと、聞きなれた寮母の声が聞こえ、その後寮生の友人である岡崎朋也が出た。

率直に訊ねて帰つて来た言葉には、幸希の名前が挙がつていた。彼女が朋也に幸希の

事を訊いてきたと、そう耳にして少女は幸希の自宅を訪ねた。が、朋也も陽平も知らず唯一の情報も近所に公園がある、という頼りない一本の糸のような情報だけだった。

だがこうなつては少女の予感がそれしかないと告げていた。教えてくれた二人に感謝の意を述べて電話を切り、そのまま少女は家を飛び出した。心配する両親の声が聞こえたが、それよりも大事なことがある。女の勘とはよくいって、彼女はそれを乙女のインスピレーションと称してランプを用いた占いをよく教室でしていた。そのインスピレーションが語るのだ。『何かが変わる』と。

公園という情報だけを頼りに走り続け、自宅から遠ざかる不安も余所に辿り着いた一つの公園で、ようやく少女は求めていた姿を見つけた。

人影は二人分。肌が粟立つ感触が、やけに鮮烈に感じられた。

「どうして」

仲睦まじく語らう二人の姿は、少なくとも少女の目から見てとても入り込めるようなものではなかった。もとより引つ込み思案な性格もあつてか、一度持つてしまったネガティブな価値観は、少女を打ちのめしその場に釘付けにするには十分だった。

彼が笑う。少女ではなく彼女に向けて。その光景を見るたび、胸が張り裂けそうになるほど痛んだ。

なにやらセクハラまがいの台詞まで聞こえてきているのに、少女は一步も前に進めな

い。そう、少女は進めないのだ。自分から前に進むことなく、いつだって隣に立っていた彼女に背中を押されていたが故に進み方を忘れてしまった。果てには彼の方から自分へと歩み寄ってくれないか、などと幻想を懐いてしまう始末だ。

彼女の前で「もう頼らない」と決意したのは意思だけで、その実なにも実らせていなかった。行動を起こすには遅かったのだ。朝の挨拶を積極的に行つたからって、なにも変わりはない。その罰がこれだというのなら、死罪よりも強烈だと漠然とした意識が悲鳴を上げた。

逃げてしまいたい。いつそ、何も無かつたことにして今すぐ家に帰つて眠つてしまいたい。

後ろ向きな衝動が総身を駆け巡るが、体は言うことを聞いてくれない。そうして……そのまま少女は聞いてしまう。

「——君に、笑つていて欲しいから」

「あ……」

溶ける。反射的に少女は他人事のようにそう感じた。

自分が溶ける。心という曖昧な価値観が溶ける。感情という感覚器官が融解してしまふ。

自分が欲しかった言葉。自分が欲した相手の欲した言葉。欲したその両者共を少女

の目の前で——他でもない彼女が掠め取った。

「……………どうして」

どうしてあなたがその言葉を、他の人が好きな癖に、わたしの好きな人も奪うというのか。

狼狽える彼女を見送り、ようやく静止の呪縛から解かれた少女の耳に、またも惨酷な言葉が襲い掛かった。

「どうしてって、決まってるだろ。そんなの……………お前に心底惚れてるからだ」

どうして？ ああ、彼のこの答えが自分の問いに対しての返答なら、それは天にも昇る気持ちだろう。溢れ出る涙もそのままに、その熱い胸板に全てを預けるだろう。彼の為に、彼を思い、彼だけを愛して、彼の生活を支えたかった。そんな未来が、自分にもきつとあるかもしれないのだと……………夢想だと思い知った。

歓喜とは対極の感慨が溢れ、熱い涙が頬を流れた。

もはや問うまでもない。だから……………これは自問だ。遅すぎた自分に対する、叱責にも似た自問だ。

「……………お姉ちゃんなの……………」

いつだったか、彼女が語った彼の思い人の存在を仄めかす言葉が脳裏を過ぎった。な

るほど、お笑い草だ。こんな顛末が用意されているなんて、仮定した相手が、まさか的中してしまうなんて。趣味のトランプ占いよりも高い中率に、藤林椋は自身の勘の良さを呪った。

気が付けば椋の足は自宅の玄関を跨いでいた。

前後不覚のまま、先に帰宅していた姉の杏の声も両親の声も無視して、ベッドへと身を投げ込んだ。

今はただ……無感な眠りにつきたかった。

第二十一回：停学明けの午睡

創立者祭が近づき始め、岡崎朋也はとある心無い男の手によつて押し付けられた面倒事に従事する時間が増えていた。

始めは時間つぶしの一貫としてなあなあで手伝っていた木彫り作業も堂に入り、どう彫刻刀を立てれば巧く削れるのかといった感覚的なものまで習得しつつあった。まったく誇れる要素が見当たらない技能を習得してしまったと、ため息混じりに星形の……いや、ヒトデの彫刻をまた一つ完成させる。

出来栄えを改めて見返すと——なかなかどうして悪くない。

「ふっ、俺もここまで来たか」

自己陶醉がありありと覗える意味ありげで実質空っぽな眩きを残して、再び朋也は作業を再開しようと手をつけられていない四角形の木材を手練り寄せた。と同時に、視界の端から小さな頭部が映りこんだ。

「岡崎さん、やり直しです」

「なんでだっ!？」

自身があつただけに駄目出しをされた朋也は動揺を隠せなかった。

ありえない……こいつの目には俺が作り上げた傑作が映ってないのか？ 朋也はわりと本気で疑惑の目を向けるも、風子は彼の会心の作品を鼻で笑った。――殴りたいと思っってしまった。

「ヒトデという愛らしい存在を理解出来てないです。いいですか、まずは目を閉じて最高のヒトデをイメージします。そしたら……」

「そしたら、なんだっていうんだ？」

「……………」

駄目だ、トリップしやがった。

風子はいつの間にか朋也の作ったヒトデを胸に、毎度の如く恍惚に浸りヒトデ時空へと意識を昇華させていた。

ということとは、別に自分が作った物でも不備は無いじゃないか。朋也は粘り気のある飲み下せない思いを口に含みながら、ある仕返しを思いついた。口端が思わず歪んだ気がした。

「なあ、金払うから下の店からジュース貰っていいか？」

視線を渚に向けて呼びかける朋也は、悪戯気な表情を隠さずにそう言った。

「良いですけど、喉が渴いてるのでしたらお茶を淹れましょうか？」

「いや、それじゃ意味が無い」

「……意味？」

意味深な笑みを浮かべて朋也は腰を上げる。

そう、意味が無い。湯呑みに入ったお茶では目的の行為を達成する事は出来ない。いま自分が欲しいのはパック容器の、それも飲み口がストローになっているやつが最適。

夢想している風子が現実へと帰らない内に出なければ意味が無い。朋也は素早く階下へと降りる。店には煙草を啜えた秋生が客の訪れない入口を退屈そうに眺めながらレジに座っていた。嘘だった。とうるか座ってるだけで仕事はしていない。目線は手元に落ち、一心不乱に彫刻を彫っている。——仕事をしろと言いたいのをどうにか呑み込む。

「なんだ小僧、もう音を上げたのか？」

「あんたこそ音を上げた方がいいぞ、いやマジで」

「けッ、その手に乗るかよ！ テメエの安い演技に騙されてやるもんか、俺の方がお前よりも多く作ってやるからな！」

「このオッサンは……」

いや、止そう。それよりも今は風子だ。朋也は勝手に対抗心を燃やす秋生を無視して、店内の一角にある四面ガラスの冷蔵ショーケースの扉を開いた。

中にはお茶類やミルクなど王道から、少し店主の趣向に天秤が傾いた品まで置いてあ

る。

「さて、どれにしようか」

無難では朋也が面白くない。だからといって変化球を利かせすぎれば途中でバレる可能性がある。

あまり長い事考えていては、そもそもその企てが水泡に帰すかもしれない。朋也は逡巡し柵から「ブルーベリー&アサイーミックスジュース」を取り、彫刻に被りついている秋生の柵にお金を置いて二階へと戻った。

そんなに時間をかけたつもりはなく、案の定風子は未だ夢の世界へと放蕩していた。

「あつ、おかえりなさい岡崎さん」

「おう、悪いがこれからちよつと静かにしててくれないか。繊細な作業をしなきゃならないんだ」

「え？ あ、はい、わかりました」

戻つてくるなり唐突に黙れと言われたにも拘らず、渚は微塵も腹を立てず、疑う事もなく朋也の要求を鵜呑みにする。

素直で良い子なのか、それとも頭の弱いアホの子なのか……。口を噤むだけでなく何故か目も閉じている渚を尻目に、やはりアホかもしれないと評しながら朋也は風子の許へと近寄る。恍惚な面持ちで顔が若干上向きな為、彼女の鼻への狙いが定めやすい。好

都合だ。

思つたより成功率が高そうなことにほくそ笑み、手にあるパツクのジューズにストローを差し込む。突き出たストローの飲み口が、朋也の目には拳銃の銃身にも見えた。ブルーベリー&アサイーミックスの暗い筒先が風子の小さな鼻の穴へと向けられる。残弾は充分。しかし発砲は一度限り。失敗は許されない。狙いを定める手が震える。緊張で喉が渇く。ああ、それならコレを飲んでしまえばいいのでは……

などという葛藤も無く、朋也は風子の穴目掛けて棒を突き刺した。

「はあ〜……〜ツツ!? んぐツ、ツくシヨン！」

「ぐあああああッ！」

盛大に噴出したジューズとそれ以外の風子から生成された液体が朋也の顔面に直撃した。運悪く目に入って染みる。悶絶して顔を抑えて床を転げ回る。

甘かった！ もっと刺した後のパツクを潰す力を強くすれば——こいつ相手に躊躇つたのが間違いだった！

「けほっ、けほっ……な、なんですか今のか？　なんか、甘酸っぱいのが鼻に、えほっ」

「お、岡崎さん大丈夫ですかっ!？」

「くそっ！　しくじったか……ッ」

朋也の身を案ずる渚に渡された手ぬぐいで顔を拭き、失態に己を叱咤する。

鼻からジュースを飲ませる芸当はまだ早かったらしい。風子は原因不明の異変に考える余裕も無く咳き込んでいる。どうにかして堰きを止めようとして手を抑えるが、今度は勢いを抑えられずに鼻から不思議なハッピーマテリアルが飛び出した。

「ああ、風ちゃんこれで鼻かんでください。ちーん、ですちーんっ」

「ちーんっ!」

鼻汁を垂らしたのを見逃さなかった渚がティッシュを手渡し促した。目を瞑って鼻をかむ辺り、風子はまだ子供だ、とべた付く顔を洗おうと立ち上がった朋也は先の敗北を上塗りしようと隠れて憫笑した。——憐れなのはどっちなのか、考えたくはなかった。

※

——さて、待たせたな……杏。

「なあ岡崎……榊原の奴、なんかさつきからおかしくね?」

「いつもどこかおかしいだろ。お前には負けるけどな」

「僕を貶さないと気が済まない奇病にでもかかっているんですかねえあんたッ!」

外野が喧しいな。いまちようど良い所なんだから、少し黙っててくれないか。俺は明

日からようやく学校で会える杏に卒倒しないように、こうして瞑想してるんだから。やはり座禅は良い。明鏡止水の境地が見えてきそうだ。

「ヤバいって、胡坐かきながらイカれたみたいなきつい笑い声が漏れてんだけど」

「これをヤバいと思うのか。意外だ……」

「意外って、普通にそう思うでしょこれ見たら」

「普通の人間のつもりだったのかお前。意外だ……」

「チクショー！ しまいには僕だってキレるんだかんナツ」

見える。禅の極地が、悟りの境地がすぐそこまで——という所で現実の肉体に衝撃が走った。

瞬時に実体のある世界へと引き戻された俺は、目と鼻の先まで近づいたあの世界にもうたどり着けない事を直観的に感じた。というか、あのまま行ってしまうたら帰って来れない気がする。

戻って来れたのはありがたいが、それとこれとは別である。誰が俺を攻撃したのか、それを確認して報復しなくてはならない。よって、

「良い所で邪魔しやがって！」

「せめて確認ぐらいは——ぶへっ！」

ピンタによる簡易制裁を行った。

頬を張られた春原は勢いもそのままに横に倒れ、性格通り片付けになつてない雑誌のタワーが崩れて生き埋めになつた。室内に埃が舞い上がる。

「げほつ、少しは掃除ぐらいしたらどうだ？　せつかく芽衣が丹念に掃除したのに、あつという間に元通りじゃねえか。ある意味才能あるな」

「ぐつ、ぼ、僕だつて初めはそう思つて、物を増やさないようにしたさ……だけど」

崩れ落ちて山になつた雑誌から起き上がり、忌々しげに呟く春原は肩を震わせている。

さつきまで小競り合いをしていただろ。岡崎は、もう興味が無くなつたのか崩れたおかげで下の方に積んであつた雑誌を抜き取つて読み始めている。こいつのマイペースさは時々、俺より性質が悪いのでは、と思うほど清々しい。

「どうしたそんなに震えて、寒いのか？　まだ冬には早いぞ。むしろ夏前だ」

「どうみても怒りに震えてるでしょうが、あのさ……考えてみなよ、ここに住んでるのは僕一人だ。だからどう頑張つても数日そこらでこんな物が増えるわけないでしょ。原因は他にあるんだよ」

「……他に？」

「春原、これ別冊だぞ。確認しないで買ったろ」

撃鉄の落ちる音が聞こえた気がした。間違ひなく、それは目の前にいる春原から発せ

られた。

茶番が、そして始まった。

「どう考えてもてめーらが入り浸つて出したゴミをそのままにして帰るのが原因だろうが！ あと岡崎、それ分かつてて買ったんだよっ」

それから数分、春原は普段の鬱憤を晴らすかの如く怒涛の勢いで俺と岡崎にまくし立てた。

その後、隣のラグビー部の部屋まで怒声は届いていたらしく、今度は筋骨隆々な男共の怒りに触れ春原が廊下まで引きずられ、美佐枝さんが出てくるまでがセットになつて終わった。久し振りに笑える日常が戻ってきた気がして、俺はどこか安心していた。あと、俺たちが出したゴミは分かる限りで纏めてみたが、全体の二割にも満たなかった。

男だらけのスクラムから解放された春原は身体の節々が痛むのか、覚束ない足取りで部屋に戻つてくるとそのままベッドへと身を投げた。すすり泣く声が聞こえる気がするが、流石に可哀相なので聞かなかつた振りをしてやろう。

小腹が空いたので懐を弄り何かないか探していると、岡崎が半眼でこちらを見ていた。

「ん、なんだ？ 食い物が欲しいならやらんぞ、自分で買つてきてくれ」

「これが物欲しそうにしている奴の目だと思うか？」

想像以上になにかを根に持っているらしく、遊び心のない問いかけの声は一段とトーンが低い。とは言われても、最近は特にこれと言った事件を起こした覚えもない。岡崎にここまで責めるように言われるような、とんでもない事をしたのだろうか。

「悪いが覚えがないな、気のせいじゃないのか？」

「察しがいいのは良い事だが、致命的なまでに無責任な男なお前」

呆れたように深い溜息をつくると纏っていた雰囲気が弛緩し、いつものゆるふわ平穩空間に立ち戻った。しかし無責任？ よく言われる言葉だが、本当に覚えがない。

岡崎は首を傾げる俺を見て察したのか、読んでいた別冊雑誌をテーブルに置いて身体を向ける。

「風子だよ、伊吹風子。今日も古河の家で彫刻を作らされてたんだ。おかげで……俺は顔面にジュースを浴びて目を痛めた」

「どんな因果関係があつてそうなるんだよ、完全に言いがかりだろソレ」

「正直、後半は私怨だ。だけど前にも言った気がするが、風子を押し付けたお前のせいで最近の俺は毎日のように彫刻を彫っては配る風子の手伝いばかりだ」

熱弁する岡崎は興が乗ったのか握り拳を作った。その手には所々、絆創膏を張っており言っていることが本当なのだという説得力が内包されている。とは言っても、絵面は

非常にシユールだ。こみ上げる笑いをこらえるのに大変だった。

確かに、言うとおりに風子をけしかけたのは俺だ。しかし、それにしても岡崎に選択の余地がなかったわけではない。見捨てることだって出来た筈だ。なのにこいつはそれをせず、律儀にも付き合っているらしい。

誰の為に？ 風子の為、とは思えない。なあなあで付き合ってるならそろそろ飽きて放り出す頃だ。なら残っているのは……

「古河の家に通う理由が出来て良いじゃんか、都合の良い口実だろ」

「……お前には俺がそんな風に見えるのか？」

「今のところ」

というかそうなつてくれなきゃ困る。杏はこいつが好きなんだから、俺の恋路の為にさっさと進路を決めてもらいたい。罷り間違つて杏に惚れてしまった日には、瞬殺されてしまう。勿論、俺がそのショックで。

返答に納得が行かなかつたのか、岡崎はやや落胆気味に溜息をつく。

「忘れてないか？ 俺はあいつの、演劇部復興の為に手伝ってるだけだ」

「ああ……」

そういえばそんな目的があつたな。最近色々と横道にそれまくつて、挙句に杏に俺の家までバレたショックですっかり忘れていた。あ、思い出したらへこんできた。あれの

せいで間違いなく引かれたら俺。好感度とかそう言うレベルじゃなく、友達付き合いを考え直されるレベルだろあれ。明日からようやく停学が明けるつてのに……会わず顔がない。

「ちよつとまで、そんなに落ち込む話じゃないだろ。なんでそこまで落ち込む？」

「いや、完全に別件だ。もう明日から学校行きたくない」

今になって怖くなってきた。そうだよ、教室に引きこもっても妹の椋が居る限り杏は顔出さだろ。そこであからさまに無視……とまではいかなくとも余所余所しかつたら死ぬる自身ある。教室の窓から飛んで、頭から着地すれば死ぬるよな。

「明日から行きたくないっていうか、明日から行けるんだろ、お前の場合」

「だから行きたくないんだよ……ああ、どうしよう、きつと校門に入って会ったりでもしたら無視されたり、教室でも無視されたり逃げられたりしたら」

「いじめられっ子か。校内で最もその存在から遠いお前が、なにをそんなに怯えてんだよ」

言えるわけないだろ。というかそもそも、言っても信じてくれないかもしれない。

「決めた、明日から俺……資料室で授業受けるわ」

「よっほど特別待遇なあんた。資料室でどうやって授業受けるつもりだよ。ことみじやあるまいっ」

……ことみ？ 誰だそれ。まあいいや。

「その点は抜かりない、有紀寧が教えてくれる筈だ。あいつならきつと」

「後輩になにを期待してんだ、三年の勉強を二年が出来るわけないだろ。どう考えても無理があるだろ」

「それでも有紀寧なら、彼女ならきつとやり遂げる」

「ないだろ……」

荒唐無稽過ぎたのだろうか、岡崎は額に手を当てて項垂れている。

結局、どうあがいても時は刻まれ続ける。明日からが憂鬱になって逃避の気持ちから窓の外に視線を投げると、空の色合いはすっかり夜闇に塗りつぶされていた。それだけの時間があつという間に過ぎてしまったらしい。

今日はバイトもないから、家に帰ってあの人の日課に付き合つて食事を作らなくちゃならない。杏の件とは違った意味で考えると憂鬱な気分になってくる。

「なあ岡崎」

「……なんだよ、もう好きに資料室にでも入り浸ればいいだろ。どうせ学校じゃ不良扱いされてるんだ、今更気にする事も無いだろ」

「じゃなくて、お前……家に帰りたいて、思う事あるか？」

「……………」

狭い室内に沈黙が広がった。春原も、あのまま眠ってしまったのか何も言わない。なんて返すのか気になって岡崎の顔を見ると、名状し難い色々な感情が絢交ぜになった面持ちで、読み取ることは出来ない。

思えば岡崎にこういった話を持ちかけたのは初めてのことだった。これまでも冗談交じりに色々と言ったりやったりしてきたが、この一線を越える事だけは無かった。そして、その事に対する戒めが緩んでしまう程に、どうやら俺は杏にバレた事が堪えていたらしい。

長い沈黙がどれだけ続いただろうか。数分、いやもしかしたら数十秒も経っていないかもしれない。刹那が永遠まで間延びした中で、岡崎はようやく重たい口を開いた。

「さあな、考えた事ないから分からねえ」

「そっか……悪いな、変な事訊いたわ。もう二度と言わねえから安心してくれ」

俺にしては珍しく男相手に頭を下げて、暗澹たる思いが澱のように沈殿して重くなつた腰を上げた。こんな事で、この心地よい空間を台無しにはしたくなかつたから。三歩歩いたら忘れたいぐらいに。

手荷物なんてあるわけもなく手ぶらで扉まで向かうと、背中から俺を呼ぶ声が投げられた。

「仕返してわけじゃないが、俺も訊いていいか？ それであいこにしてやるから」

「いいぞ、なんだ？」

一拍、岡崎が息を呑んだ。予感めいた、或いは必然なのかもしれない未来を幻視して、脊髄に氷水を流し込まれるような感覚が奔る。

「お前が毎日作ってるその怪我、本当に喧嘩の傷か？」

「——言ったら、俺には敵が居るんだよ」

どんなに蹴つても殴つても、決して死ぬことも消える事もない敵が……

「そつか、じゃこれであいこな」

「ああ、そんなじゃ明日、学校で昼頃に会おう」

いつも通りに答えた筈の返答に、なぜだか岡崎は吹き出した。

「変なこと言つたか俺」

「昼になってようやく来るのは、こっちの怪奇布団の方だろ」

「言うに事欠いて、誰が歩く怪奇現象だつて!？」

やっぱ起きてたのか春原。

笑いながら指差す岡崎に、毛布に包まったまま飛び上がった春原が不満げな顔を向けている。いつものアホみたいな光景だ。

「な、この顔は間違いなく複雑怪奇だろ」

「確かに……目が二つ付いてる」

「それ当たり前つすよねえ!? 逆に二つ無かつたら化けモンだから、化けモンの皮被つた人だよッ!」

「最後、人に戻つてるぞ」

途端、冷静に岡崎がツッコんだ。

このある意味で芯が通つてるブレなさだけは、見習う所があると思う。ホント、ある意味で。

ひとしきり春原で笑つたり、春原に間違つた英語知識を植え付けたりして帰路についた。芽衣曰く都会の夜空は、それでも星々が煌々と自己顕示欲全開で輝くぐらいには田舎くさかった。

※

ついに来た。そう、言うまでもなく一週間ぶりの登校である。

一週間もあれば生活習慣も慣らすのに苦労するかと思つていたのだが、体が覚えてしまったらしい。俺は登校中の生徒たちに混じつていた。

学校内で学校外の間と学校の備品を壊す程の大喧嘩をしたせいだろう。真面目が褒め言葉の生徒共は俺の横を通るまでもなく、四方八方から異端者を見るような冷視が

容赦なく浴びせられる。しかし問題はない。慣れてるし。

岡崎も春原の姿も当然ではあるがない。岡崎はともかく春原がこの時間から通学路を歩いていたら、何かしら企んでるんじゃないかと疑ってしまう。

声を潜めて会話している奴らを見上げて、散り始めている桜並木を昇り始める。梢に咲いた花弁はもう残り少ない。以前ここを見上げた時から、たった数日でこれなんだから花の人生というのは非常に短いんだと思わされる。

坂道も中ほどまで歩いた所で、その以前見上げた時を彷彿とさせる、焼回しのような光景が目に入った。思わず俺の顔がしかめっ面になるのは仕方がないだろう。ある意味、杏よりも会いたくない人物が桜の木の下に立ち尽くしていた。ただ立っているだけだというのに、嫌味のように背筋が真っ直ぐに姿勢正しい。別に睨んだりして凄んでもないし、微笑んでるわけでもないで自然体にも拘らず、何というか絵になっていた。

「どうやらちゃんと登校時間は間に合ったようだな。よかった、遅刻されたら会えなかった」

「……ストーカーかてめえは」

「失礼だな。ただ教員の方に、お前の停学がいつ明けるのかを訊いて、その日に待ち伏せしてただけだ。ストーカーなんて呼び方は不愉快だ、よしてくれ」

それをストーカーと呼ばずしてなんとと言う。言ってみる。

少し肌寒い春風が靡く。彼女の——坂上智代の銀髪が陽光を乱反射しながら、風に任せて波打っている。この女の本質、というより昔の正体を知ってる奴なら近寄らないだろう外見だけは良い女は、俺にとつては最悪に苦手な女にランクインしている。なんつたつてこいつは、過去を運んでくるから。

だから俺は付き合つてられないとばかりに無視して、坂上の横を通り過ぎる。

「おい待て、わたしはお前に話があるんだ。少しだけでも——」

「今日は日直でな、花瓶の水を入れ替えないとお花が死んじゃう。お前、俺に花殺しの罪を押し付けるつもりか？」

「そ、そうか日直なら仕方ないな、うん。しかし意外だ、まさか榊原がそこまで花を好きとは……」

「じゃあな」

立ち話をした所でどうせ碌な話じゃないのは分かつてる。

神妙な面持ちで数回頷き己に言い聞かせているのだろうか、口に手を当てて視線を落とす坂上に気がつかれないよう足早に坂道を登りきった。なんなんだあの女は。ちよつとイラついてしまったじゃないか。

昇降口を抜けて自分の教室に到着し、中に這入る。どいつもこいつも真面目一辺倒なのか、既に教室の席は殆どが埋まっていた。その中で、岡崎と春原の机だけぼっかりと

空いていたのを見て、日常を垣間見た気がした。

さっさと鞆だけ置いて資料室にでも行こう。

自分の席に勉強以外の物ばかりが入った鞆を置いてそのまま踵を返そうとし、振り返った所で誰かにつかつた。

「おっと」

「あ、ごめんなさい……」

数歩後ずさつて相手が誰なのか確認すると、ぶつかった相手は反射的に頭を下げた。

顔は下を向いて見えない。けれど見るまでもなく誰だか分かった。紫陽花の花のような髪色の肩口で切りそろえられた長さとなれば、藤林椋において他に居ない。

「いや、俺が不注意だった。怪我はないか？」

「はい大丈夫です、心配してくれてありがとうございます」

はて、この少女はこうもハキハキとものを喋るような性質だったろうか。よく見れば表情も明るく澆刺としている。まるで杏の性格が丸くなったような感じになっている。

何か心境の変化でもあったんだらう。そう判じて俺は椋から視線を外して廊下へ出ようとする。

「ちよつと待つて下さい榊原くんっ」

「ん、どうした？ 今日には遅刻してないだろ」

「お説教をするつもりはないです。そうじゃなくて、こ、これを渡そうと思って」

そう言つて棕は自分の席にある鞆から包みを取り出し、俺に手渡してきた。所々で言葉が詰まるあたり、やはり彼女は棕なのだと言確認させられる。

渡された物を引つ込めたら泣いてしまうかもしれないので、遠慮なく受け取る。小奇麗な布で包まれたそれは、どう見ても弁当箱だった。どうにも今日は色々以前の出来事が重なる日らしい。前に棕から弁当を貰った時も、坂上と別れた後だった。あの時の弁当箱は後日、芽衣の見送りの際に洗つて返却した。触つて形を確かめると、どうやら前と同じ形状だ。

「今日から榊原くんが来ると思つて、作つてきました。よかつたら、食べて下さい」

「くれるなら貰つとくよ。あんがとな、これで昼飯代が浮く」

「あの、もし良かったらですけど……これからも作つてきてもいいですか？」

「それじゃあ棕が大変だろ、お前にそんな苦勞を掛けるわけにはいかない。遠慮しとくよ」

なんてつたつて杏の双子の妹なんだ。毎朝毎朝、俺の弁当を詰めてるなんて知られたら、あいつの事だから在らぬ疑いをかけてくる可能性がある。というか目に見えてい

ハッキリと断つたので椋も引き下がるだろう、と思つていた俺が甘かつたのだろうか。椋は引き下がる事も顔を俯かせる事もなく、寧ろ一步前に出て俺との距離を詰めてきた。こんな事、今までの彼女からはありえない事だった。

「大丈夫ですつ、いえ、お願いします。わたしの料理の練習に付き合つてくれると思つてくだされば、苦労にはなりません」

「で、でもなあ……」

杏の顔が鮮明に網膜再生される。これで杏に勘違いでもされたら泥沼は必至。どうにかして椋の提案を断ろうかと思案している間も、椋がらしくない積極性を見せている。

「……最近はお姉ちゃんと一緒に作つてるので、*〃間違えて* オカズが *〃混じっちゃう* 事があるかもしれないですが——」

「——そこまで言うなら毎日食べよう」

「はい、それでは明日からも毎日持つてきますね」

「ああ、バッチコイだ」

杏の手料理を再び味わえるなら何でもいい。快く受け入れた俺は、柔らかな笑みを咲かせる椋と別れて廊下に出た。手には先程渡された弁当箱がぶら下がっている。

HR開始時間まで時間はある為、廊下には登校中の生徒や時間を潰して駄弁を垂れ流

す奴らで溢れ返っている。教室へと向かう人の流れに逆らい、人気の少ない方へと進んでいく。次第に雑音が遠のき薄れて、静寂が漂い始めた。閑散とし始めた廊下は資料室へと続いている。

扉に手をかけ引く。

——鍵が掛かっていた。

「あれっ、開かない……マジかよ有紀寧」

愕然となるが、よく考えれば当たり前か。もう間もなく始業のチャイムが鳴る頃だし、有紀寧は優等生だから教室にでも居るんだろ。今日は生憎と合鍵を持ってくるのを忘れてしまった。仕方ない……

「……使うか」

懐からいつも持ち歩いているピッキングツールを取り出す。形状については様々で、それを鍵穴に差し込んで数秒。あたりを付けた俺は手首を返した。

錠の開いた音が聞こえて再び開けようとして引くと、すんなりと抵抗も無く扉は開いた。

資料室の中は最後に来た時と違って片付いていた。破られて風が吹き放題だった割れた窓も、いまではすっかり新品に変わっている。

いつもの指定席へと、有紀寧は居ないが座る。寂寥感漂う資料室は朝の陽ざしが窓か

ら差し込み、良い具合に室内も温まっている。

「……………眠い」

椅子に凭れたまま顎を引いて俯くと、自然に瞼が重くなつて次第に落ちてくる。久しぶりに朝早く起きたのが原因だろう。足りない睡眠を身体が補おうとしている。

意識が薄れていく。視界が霞み、心地よい微睡に抱擁され、俺は眠りに落ちた。

夢を見た気がした。

けど内容は覚えていない。

うすぼんやりとした意識がゆっくりと鮮明に色づいていくと、違和感を感じた。記憶が確かなら俺の身体は縦に座っていた筈。なのに、今は横になっていた。

「おはようございませす、幸希さん」

「……………有紀寧か」

頭上から降ってきた声に顔を向けると、宮沢有紀寧の垂れ目が見下ろしていた。

後頭部が暖かい……………というか柔らかい。

「……………あれっ?」

それがなんなのか、空いた手を後頭部の下に持って行って、輪郭を確認しようとする。と跳ねるように動いた。

「ひうつ……あの、幸希さん……いけません、くすぐりたいです」

ああ、なるほど。どうやら一生のうちに限られた回数しか遭遇出来ないという、ラッキーを堪能してしまつたらしい。俺の手は有紀寧の太腿辺りを撫でていた。

これで残りのラッキーは何回だろうか。杏の尻を触つた事も含めて、もしかしたらもう残されてないのかもしれない。

いつまでも年下の少女の膝枕を堪能するわけにもいかない。俺は起き上がつて制服の着心地を確かめるように佇まいを直した。

「スマン、ちよつと寝ぼけてたらしい」

「構いません、わたしが勝手にしたことですから。謝るべきはわたしの方です」

そうもいかなだろ、仮にも嫁入り前の女の太腿を撫でたんだ、こいつの他校の友達が居たら袋叩きにあつている所だ。そうなつたら逃げるけど。居なくて良かった。

「詫びと言つちやなんだが、俺に出来る事はないか？ 金の相談以外なら大抵のことは受けるから」

「そんな、悪いです。こんな事で幸希さんが責任を感じる事は」

「いいから言つてみる。後輩が先輩に甘えないでどうする」

「……………でしたら……………お返しを頂いても良いですか？」

身を縮みこませ僅かに視線を落として有紀寧は呟くように問うた。

「お返し?」

「……わたしに、膝枕をしてもらっても良いですか?」

そう言つて有紀寧は卵のように丸くなった。

膝枕か。普通なら断るんだが、大抵のことは受けると言つた手前これを拒否する事は出来ない。いい男の条件は二言を吐かず潔いのだ。だから俺は椅子を引いて自分の太腿を引つ叩いた。思つたより景気よく叩いてしまい、高音が鳴り響きじんじんと痛むが気にしない。

「よし、来いっ有紀寧」

徐に自分の太腿を引つ叩く俺に驚いた様子を見せた有紀寧の顔が、みるみる内に花開いて行く。開花の季節に喜び咲き誇る蒲公英のようだった。一見何処にだつて咲いてそんな蒲公英の花。それは有紀寧によく似合っている気が、俺にはした。

「——っはい、失礼します」

この子には、日向が良く似合う。

ただ頭を乗せるだけなのに、有紀寧は髪を整えて膝を揃え姿勢を正してから、ゆつくりと過程を堪能するように頭の位置が降りてきた。

ふわりと髪が広がり香りが立った。気のせいか、彼女からは日向の香りがしていた。

横向きに寝転ぶ有紀寧は聞こえるか聞こえないかの大ききで小さく、けれど長い息を

ついた。手元がどこを定位置にしようかと彷徨っていたのが、なんだか面白かった。

「硬いだろ、あまり無理しなくてもいいぞ」

「いいえ、とても……本当にとても、落ち着きます。……兄にしてもらったのを、思い出します」

「……そうか」

有紀寧の兄貴で、名前は宮沢和人。一年ぐらい前に自分の仲間を庇って死んだ男。

気がつけば有紀寧は眠っていた。顔の前に落ちた髪を退かそうとして、見えてしまった。彼女の閉じられた瞼から一筋の涙が流れているのを。兄貴を思い出してしまったのだらうか。寝る直前の言葉が俺の脳みそを直接殴ったような衝撃が襲った。

「兄貴なら、死んでも妹泣かせてるんじゃないやねえよ……和人」

有紀寧には聞こえないように声を落として、呟いた。

あれから一年が経った。その頃の俺は、ギリギリ杏に夢中になる前、つまり駄目人間な頃だったから葬式にも出ていない。もともと、仲が良かったわけでもない。その妹が、まさかこの学校に入学するとは思わなかった。先週の「外客」が見知った顔だったらどうなってたか……一週間じゃ済まなかったかもしれない。

しばらくの間、有紀寧が目覚めるまで俺は彼女の頭を撫で続けた。